

安曇野市版

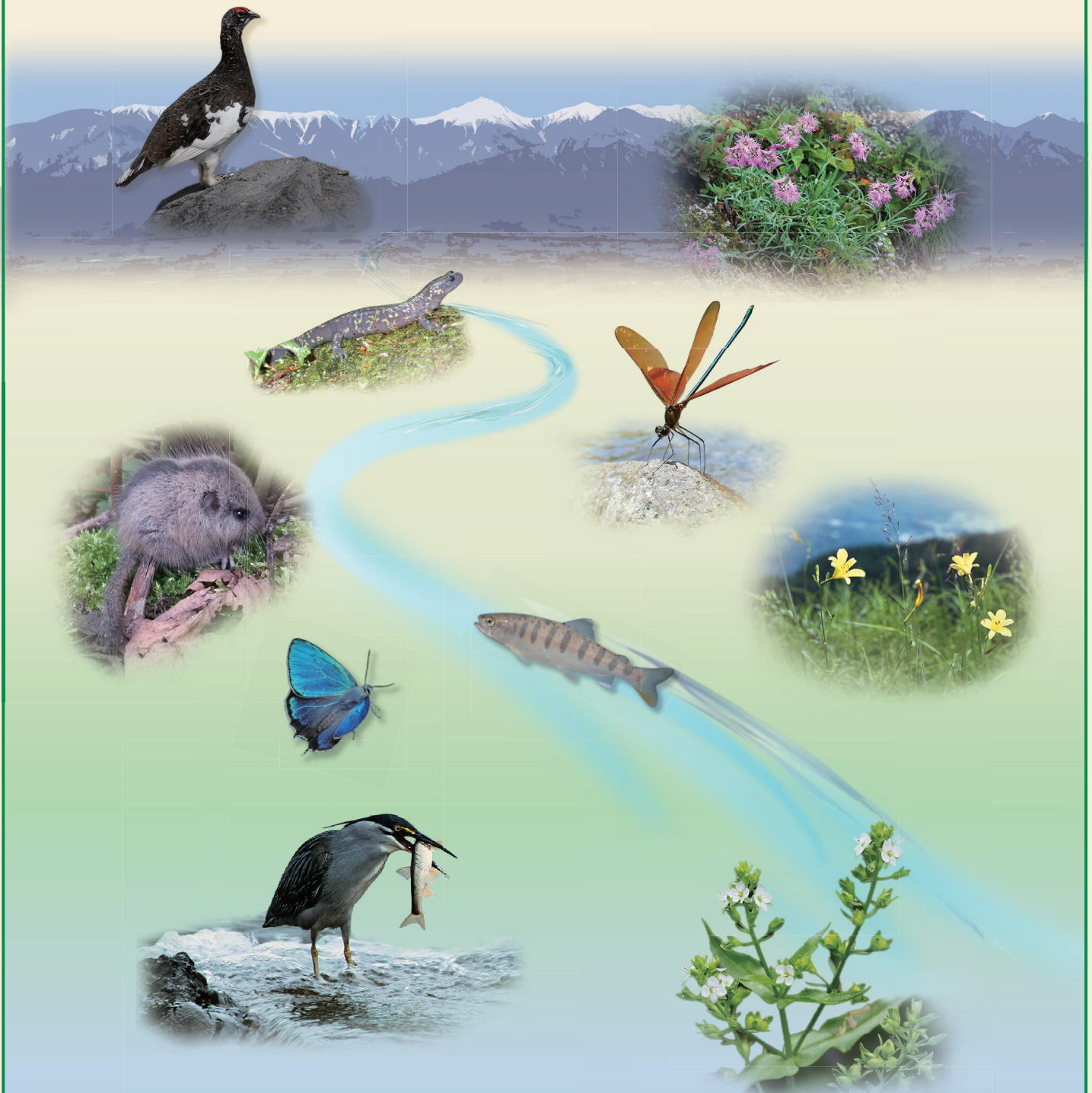
レッドデータブック

改訂版

AZUMINO CITY RED DATA BOOK 2024

安曇野市の絶滅のおそれのある野生生物と重要な自然環境

Threatened Wildlife Species and Significant Natural Environments in Azumino City



はじめに

安曇野市長
太田 寛



安曇野市では、2014年に市内に生息・生育する希少な野生生物や重要な自然環境を『安曇野市版レッドデータブック2014』としてまとめ、自然環境を大切にしまちづくりを進めていく上での基礎資料としてきました。

これまで、このレッドデータブックは、市内で行われる開発行為での環境配慮の検討や環境教育の現場など様々な場面で活用されているだけでなく、多くの市民が安曇野の大切な自然環境への理解を深める手引書としても役立っています。

しかし、ここ10年の間に、地球規模での気候変動のほか、松枯れや土地利用の変化、さらには外来生物の増加など、安曇野市の自然環境には変化が生じており、生息・生育する動植物にも影響が見られるようになってきました。

そこでこの度、2014年以降の市内における動植物の生息・生育の様子などを調べ、希少な野生生物や注意すべき生物（外来生物など）、動植物を取り巻く環境の変化について最新の動向を『安曇野市版レッドデータブック改訂版2024』としてまとめました。

本書には、希少な生物などを保全していくための考え方や環境に関わる法令等も掲載しており、安曇野市に生息・生育する多くの野生生物を育む豊かな自然環境を保全し、次世代に引き継いでいくために、2014年版とともに広く使われることを願っております。

本書の発刊にあたり、調査や執筆等にご尽力くださいました安曇野市生物多様性アドバイザーの皆さまをはじめ、ご協力くださいました皆さまに心より感謝を申し上げます。

2024年（令和6年）3月

■表紙



- ①ライチョウ
- ②タカネナデシコ
- ③ヒダサンショウウオ
- ④ミヤマカワトンボ
- ⑤ユウスゲ
- ⑥ヤマネ
- ⑦ハヤシミドリシジミ
- ⑧ヤマメ
- ⑨ササゴイ
- ⑩カワヂシャ

目次

● はじめに	1
1 安曇野市版レッドデータブックの改訂について	
1.1 安曇野市版レッドデータブックとは	6
1.2 レッドデータブック改訂の背景と目的	8
1.3 レッドデータブック改訂体制と作業内容	9
2 安曇野市の自然環境の変化	
2.1 安曇野市の自然環境	14
2.2 土地利用の変遷	20
2.3 気候変動	26
2.4 植生の変化	33
3 安曇野市の絶滅のおそれのある野生生物	
3.1 レッドリスト種とは	44
3.2 レッドリスト種	48
1 植物	79
2 哺乳類	97
3 鳥類	101
4 爬虫類	105
5 両生類	107
6 魚類	109
7 昆虫類	111
8 その他無脊椎動物	135
4 注意すべき生物	
4.1 注意すべき生物とは	156
4.2 注意すべき生物	158
1 植物	163
2 動物	167
5 自然豊かな安曇野市を次世代に引き継ぐために	
5.1 絶滅のおそれのある野生生物の現状	174
5.2 安曇野市の重要な自然環境	177
5.3 自然環境を守り、回復させるための方策	183
● おわりに	195
資料編	
資料 1：安曇野市生物多様性アドバイザー設置要綱	198
資料 2：レッドリスト及び注意すべき生物の文献	199
資料 3：本書の引用・参考文献、ウェブサイト	206
資料 4：環境省及び長野県のレッドリスト該当種	208
資料 5：安曇野市内の天然記念物・希少野生動植物	214
資料 6：協力者	218
和名索引（レッドリスト種）	220
和名索引（注意すべき生物）	238

コラム目次

1 果樹園とアカモズ	25
2 高山蝶のミヤマモンキチョウに及ぼすモンキチョウの影響	32
3 安曇野市周辺が分布の境界となる種① ヒダサンショウウオ類	138
4 安曇野市周辺が分布の境界となる種② ツチガエル類	154
5 動植物の移入に伴って侵入してくる外来生物	162
6 貴重な生物多様性の宝庫の危機	176
7 市民による自然環境を守る取り組み	188
8 将軍に献上された鳥 ハイタカ	194

1

安曇野市版レッドデータブックの 改訂について



1.1 安曇野市版レッドデータブックとは

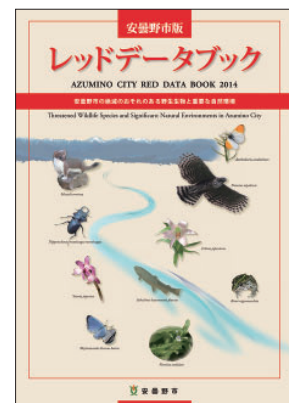
(1) レッドデータブックとは

レッドリストとは、絶滅のおそれのある野生生物の種のリストです。1966年に国際自然保護連合（IUCN）が『IUCN絶滅危惧種レッド・リストTM』（The IUCN Red List of Threatened SpeciesTM）を発表しました。これをうけ、日本では、環境庁（現在の環境省）が1991年にレッドリストを公表しており、これ以降は定期的な改訂を行っています。最新のレッドリストは環境省レッドリスト2020です。さらに、次期レッドリスト公表に向けた作業も進められており、2024年度以降に公表される予定です。

レッドデータブックとは、レッドリストに掲載された種について、それらの生息状況や存続を脅かしている原因等を解説した本のことです。1966年に国際自然保護連合（IUCN）が発行したレッドリストの表紙が赤色であったことから、レッドデータブックと呼ばれるようになりました。

長野県内では、2002～2005年に長野県がレッドデータブックを公表しました。この後、2014年に植物編、2015年に動物編の改訂を行っており、現在は新たな改訂作業に取り掛かっています。

長野県内の市町村では、これまでに安曇野市のほか長野市、塩尻市、千曲市、白馬村、阿智村が独自にレッドデータブックやレッドリスト（名称や内容は各市町村により異なる）を作成しており、長野市、千曲市は改訂を行っています。



安曇野市版レッドデータブック 2014

(2) 安曇野市版レッドデータブック作成の目的

安曇野市版のレッドデータブックは、2014年に発行され、安曇野市版レッドリストに加え、レッドリスト掲載種の解説、市の重要な自然環境、注意すべき生物、自然豊かな安曇野市を次世代に引き継ぐために、といった内容で構成されています。

環境省のレッドリストは、対象とする種の日本国内全体での生息状況をもとに評価が行われています。同様に、長野県版レッドリストは、対象とする種の長野県内全体での生息状況をもとに評価が行われています。

これらの考え方と同様に、安曇野市が独自に作成するレッドリストでは、安曇野市域における対象種のこれまでの生息記録や現在の生息状況の情報をまとめたうえで、絶滅が危惧される程度（カテゴリー）を評価し公表しています。安曇野市版レッドリストは、市内の状況をきめ細かく調査し、評価できる点で、環境省・長野県のレッドリストよりも安曇野市の現状に即した評価と記述ができるという特性があり、安曇野市が独自にレッドリストを作成することの重要な意義となっています。

『第2次安曇野市環境基本計画（2023改定版）』では、安曇野市の特徴として「豊かな自然」をあげています。この「豊かな自然」を維持・創出していくためには、まずは自然の仕組みの微妙なバランスや自然に対して起きていることを知り、共存・共生を図っていく必要があります。そこで『第2次安曇野市環境基本計画（2023改定版）』では、基本目標①として「共存・共生をはかるべきもの」を掲げ、個別目標5として「生きものをまもる」を設定しました。安曇野市としては、「生きもの

調査の実施と貴重な動植物の保護」「生きものの生息・生育環境の確保」「外来生物への対策」といった施策を推進していくため、これら全ての基礎資料となるレッドリスト及びレッドデータブックの改訂と活用は、施策の根幹をなすものといえます。

(3) 安曇野市版レッドデータブック 2014 について

2014年に発行した『安曇野市版レッドデータブック 2014』は、北アルプスの高山帯から平野部の湧水地にいたる多様な安曇野市の自然環境と、そこに生育・生息する様々な野生生物を適切に守っていくのに必要な基礎資料とする目的で作成されました。『安曇野市版レッドデータブック 2014』ができるまでは、安曇野市の野生生物や自然環境に関する包括的な基礎データはありませんでした。

『安曇野市版レッドデータブック 2014』では、第Ⅰ～Ⅲ章で安曇野市版レッドデータブック及び市の自然環境などについて記載した後、第Ⅳ章で絶滅のおそれのある野生生物（レッドリスト種）、第Ⅴ章で重要な自然環境、第Ⅵ章で注意すべき生物についてリストと写真解説を掲載し、第Ⅶ・Ⅷ章で自然豊かな安曇野市を次世代に引き継ぐための方策などをまとめました。

このようにして作成された『安曇野市版レッドデータブック 2014』の活用については、2018年に策定し、2023年に改定した「第2次安曇野市環境基本計画（2023改定版）」で基本目標の一つである「共存・共生をはかるべきもの」に明記され、実際に自然環境の保全についての市民への普及啓発や、自然環境へ影響が大きい工事等に際しての環境調査に活用されています。

安曇野市では、レッドデータブック活用の具体的な取り組みとして、市民への普及啓発活動を進めています。毎年、複数回開催される自然観察会は、専門的知識をもつ講師から安曇野市の自然環境や動植物の特徴について実体験を通して学ぶ機会となっています。また、工事等への対応としては、2017年に生物多様性アドバイザー制度を創設し、個別の事案に対して対応できる体制を確立してきました。

1.2 レッドデータブック改訂の背景と目的

(1) 改訂の背景と目的

この度、『安曇野市版レッドデータブック2014』発行から約10年を経る中で、環境省や長野県のレッドリストの見直しなどの社会的状況の変化や、安曇野市における自然環境・野生生物の変化に対応する必要性が生じてきました。これは、レッドデータブックを活用している自治体としては当然の状況といえます。このような背景のもと、2022～2023年に最新の状況を反映させるための現地調査・文献調査を行い、今後も安曇野市の自然環境・野生生物を適切に守り続けていくために、レッドデータブックの改訂を実施しました。

(2) 安曇野市版レッドデータブック改訂版 2024 について

本書は、2014年に発刊された『安曇野市版レッドデータブック2014』を改訂したものです。安曇野市内に生息・生育している絶滅のおそれのある野生生物や、安曇野市の自然環境、注意すべき生物（外来種など）についての情報を掲載しています。そのほか、安曇野市の自然環境の変化や、今後、その自然環境を次世代に引き継いでいくために必要な取り組みなどを記載しました。

本書の第3章に掲載した絶滅のおそれのある野生生物のリスト（レッドリスト）及び第4章に掲載した注意すべき生物は、2012年以降の市内の動植物の確認記録や標本を整理するとともに、補足的な現地調査を行って、市内における動植物の生育・生息状況を整理し、リストを見直しました。レッドリスト及び注意すべき種の写真及び解説については、本書改訂時に新たに追加された種のみを掲載しました。2014年版から継続して掲載している種の写真及び解説は、『安曇野市版レッドデータブック2014』を参照してください。

安曇野市生物多様性アドバイザー設置要綱、引用・参考文献・ウェブサイト、環境省及び長野県のレッドリスト該当種、安曇野市の天然記念物・希少野生動植物、協力者は、資料編として掲載しました。また、レッドリスト種、注意すべき生物の和名索引を巻末に掲載しました。

表 1-1 2014 年版と 2024 年版の主な掲載内容

安曇野市版レッドデータブック 2014 主な掲載内容		安曇野市版レッドデータブック改訂版 2024 主な掲載内容
Ⅲ. 安曇野市の自然環境	⇒	2. 安曇野市の自然環境の変化 ※近年の土地利用、気候変動、植生の変化などを記載
Ⅳ. 安曇野市の絶滅のおそれのある野生生物（レッドリスト） ※リストと掲載種の説明	⇒	3. 安曇野市の絶滅のおそれのある野生生物（レッドリスト） ※2014年版から改訂したリストとその内容 ※種の説明は、新規追加種のみ掲載
Ⅴ. 安曇野市の重要な自然環境 ※市内における重要な自然環境を紹介	⇒	第5章のなかで、重要な自然環境について概要を紹介
Ⅵ. 注意すべき生物（安曇野市の自然環境に影響を及ぼす可能性がある生物） ※リストと掲載種の説明	⇒	4. 注意すべき生物 ※2014年版から改訂したリストとその内容 ※種の説明は、新規追加種のみ掲載
Ⅶ. 自然豊かな安曇野市を次世代に引き継ぐために	⇒	5. 自然豊かな安曇野市を次世代に引き継ぐために ※2014年版の刊行以降、取り組まれてきたことも踏まえ内容を改訂

1.3 レッドデータブック改訂体制と作業内容

(1) 改訂の体制と流れ

安曇野市版レッドデータブックの改訂にあたっては、特別に委員会を設置することなく、野生生物に詳しい専門者で構成される安曇野市生物多様性アドバイザー連絡会議が中心となり、全12回の検討を行いました。また、この検討と並行して、さらに詳細な内容を検討するため専門分野ごとの専門家の協力を得て、生物情報の収集整理、カテゴリーの検討等も行いました。

こうして、レッドリストや見直しを進める中で、高山帯での生物情報の不足などの課題が見えてきたため、必要に応じて現地調査も行いました。

安曇野市の自然環境保護の基礎資料であるレッドデータブックの改訂は、安曇野市環境基本計画推進のための重要な事項であるため、2023年度第5回安曇野市環境審議会での協議も経ています。

本書の編集については、安曇野市市民生活部環境課を事務局とし、株式会社環境アセスメントセンター北信越支社に業務委託して実施しました。本文及びコラムの執筆・監修は、安曇野市生物多様性アドバイザー、事務局のほか、一部のコラムを中村寛志信州大学名誉教授に執筆していただきました。

その他、多くの方に情報提供や写真収集にご協力いただきました（資料編の協力者に記載）。

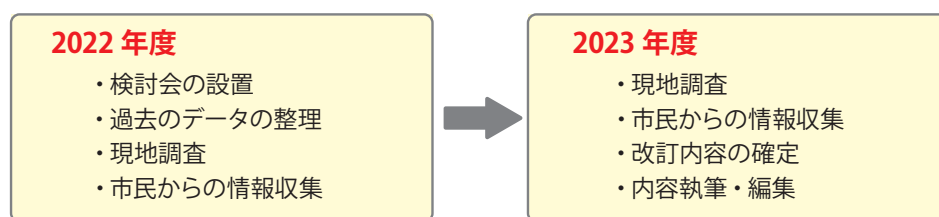


図 1-1 改訂の流れ

表 1-2 安曇野市生物多様性アドバイザー（五十音順）

氏名	所属	担当分類群
浅川 行雄	地域環境研究室	全般、植物（現地調査）
植松 晃岳	野生生物資料情報室	鳥類
岸元 良輔（2022年7月～）	NPO 法人信州ツキノワグマ研究会	哺乳類
北野 聡	長野県環境保全研究所	魚類
東城 幸治	信州大学理学部	昆虫類、その他無脊椎動物
那須野 雅好	安曇野市教育委員会	昆虫類
松田 貴子	安曇野市教育委員会 （安曇野市豊科郷土博物館）	植物
吉田 利男（～2022年4月）	信州大学名誉教授（故人）	哺乳類、爬虫類、両生類

表 1-3 改訂作業の協力者一覧（順不同・敬称略）

区分	担当分野等	氏名	所属等
協力者	植物	大塚 孝一	長野県植物研究会 副会長
		尾関 雅章	長野県環境保全研究所
		橋渡 勝也	安曇野市教育委員会 教育長
		藤田 淳一	長野県植物研究会
		横内 文人	長野県植物研究会
	鳥類	丸山 隆	信州野鳥の会顧問
		堀田 昌伸	長野県環境保全研究所
		楯石 明雄	信州野鳥の会事務局長
	昆虫類	四方 圭一郎	飯田市立美術博物館
		中村 寛志	信州大学名誉教授
		中田 信好	田淵行男記念館 館長
		降旗 進一郎	松本むしの会
		丸山 潔	松本むしの会
		小野寺 宏文	生きもの調査研究所
		田島 尚	日本蛾類学会
		安池 恭	日本甲虫学会

表 1-4 検討会の開催状況

年度	委員会	開催日	内容
2022年度 (令和4年度)	第1回	2022年5月13日	・作業の体制、スケジュールの確認 ・レッドリスト種見直し方法 ・現状把握調査の計画 ・レッドデータブック記載内容の検討
	第2回	2022年7月19日	
	第3回	2022年9月29日	
	第4回	2022年11月21日	
	第5回	2023年1月19日	
	第6回	2023年3月10日	・情報収集、現地調査結果の確認 ・レッドリスト記載種の確認 ・レッドデータブック記載内容の確認
2023年度 (令和5年度)	第7回	2023年5月23日	
	第8回	2023年8月24日	
	第9回	2023年10月26日	・レッドリスト種等の最終調整・確定 ・レッドデータブック記載内容の確認 ・レッドデータブック内容の承認
	第10回	2023年12月18日	
	第11回	2024年2月9日	
	第12回	2024年3月11日	



レッドデータブック検討会の様子（第7回）

(2) 改訂作業の内容

レッドリストや注意すべき生物の見直しにあたっては、市内の野生生物の最新の生息情報を収集するため、資料調査や現地調査を実施しました。

また、市民参加型の調査である「第4回安曇野市生きもの調査2023」では希少な生物や外来生物（計66種）を調査対象種として、市民からの情報収集を行いました。

1) 文献収集

安曇野市内で記録のある野生生物の最新情報を把握するため、『安曇野市版レッドデータブック 2014』公開後に出版された書籍、学術報告書など約30の資料を収集し、その後の生息情報を整理しました。

収集した資料一覧は、2014年版作成時に収集された文献と合わせて資料編に示しました。

2) 現況把握調査

資料調査の結果だけでは情報に乏しく、生息状況を判断できない分類群や、特に最新の生息状況を把握することが望ましい種などを対象として現地調査を行いました。調査項目及び調査方法は表1-5及び表1-6に示しました。

国立公園内や国有林内での調査は、必要な許可を得て実施しました。

表 1-5 現地調査項目一覧

分類群	調査項目	場所	調査時期
植物	生育状況調査	市内各所	2022年8～10月 2023年4～9月
哺乳類	コウモリ類調査	中房川流域、黒沢流域	2023年7月
	トガリネズミ類調査	烏川流域、黒沢流域	2023年8月
鳥類	ライチョウの生息数調査	燕岳～常念岳	2023年6月
	夜行性鳥類調査	市内各所	2023年5月
爬虫・両生類	生息状況調査	市内各所	2023年4、6、9月
魚類	生息状況調査	豊科、明科	2023年9月
昆虫類	ベイトトラップ	中房温泉	2023年9月



ライチョウ調査



魚類調査



昆虫類調査

表 1-6 現地調査内容

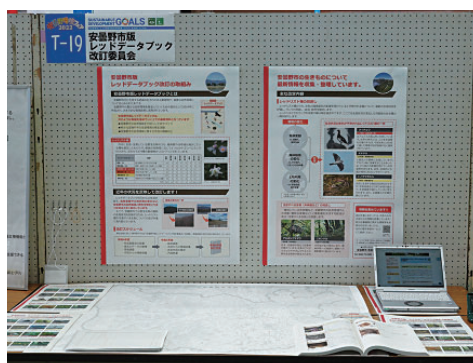
分類群	調査項目	内容
植物	生育状況調査	市内に自生している植物の調査や証拠となる標本を収集しました。
哺乳類	コウモリ類調査	かすみ網とハーブトラップを用いた、コウモリ類の捕獲を行いました。
	トガリネズミ類調査	ピットホールトラップを用いた調査を行いました。また、山岳関係者に協力いただき、山小屋で拾得された死体を収集しました。
鳥類	ライチョウの生息数調査	北アルプスの高山帯においてライチョウの生息数を調査しました。
	夜行性鳥類調査	フクロウ類やヨタカを対象に、日没後の鳴き声の確認を行いました。
爬虫・両生類	生息状況調査	ツチガエル、モリアオガエル、ヒダサンショウウオについて、過去に記録のある場所や市民から情報提供があった場所での調査を行い、最新の生息状況を把握しました。
魚類	生息状況調査	複数の水域を対象に採捕調査を行い、希少種を中心とする生息状況を把握しました。
昆虫類	ベイトトラップ	地上性昆虫を対象に、トラップを用いた採集調査を行いました。

3) 市民への情報提供の呼びかけ

市のホームページにて市民からの情報を随時収集したほか、2023年3～10月にかけて実施した「第4回安曇野市生きもの調査2023」において、レッドリスト種の候補となる希少な生物や注意すべき生物の候補となる外来生物などについて、情報を収集しました。

また、2022～2023年度の秋季に開催された「安曇野環境フェア」では、レッドリスト改訂についてのブースを設置し、情報収集を行いました。

収集した情報は、レッドリスト種の選定や注意すべき生物の掲載の参考としました。



環境フェアの設置ブース



来場者からの情報収集

2

安曇野市の 自然環境の変化



2.1 安曇野市の自然環境

(1) 安曇野市の自然環境の概要

1) 地形

安曇野市は、長野県の中央西側に位置し、その面積は331.78km²です。

西側には、北アルプスの大滝山、蝶ヶ岳、常念岳、大天井岳、燕岳、東沢岳の標高2,500~2,900mの山々が位置し、これらの山域は中部山岳国立公園に指定されています。東側には、なだらかな山容の筑摩山地が位置します。

北アルプスと筑摩山地に囲まれた中央部は、「安曇野」と呼ばれる標高500~700mのなだらかな平坦地となっており、安曇野市は松本盆地のほぼ中央に位置します。

安曇野市の最高標高地点は大天井岳の2,922m、最低標高地点は、明科地域と生坂村との境界にある犀川の497mで、標高差は約2,400mになります。

安曇野市の環境は、標高で区分する高山帯、亜高山帯、山地帯、山麓・平野部、それに河川・水辺の5つに分けることができ、それぞれの区分の中に森林、草原、市街地、河川など様々な環境要素が見られます(表2-1及び図2-1)。



長峰山から見た安曇野の景観

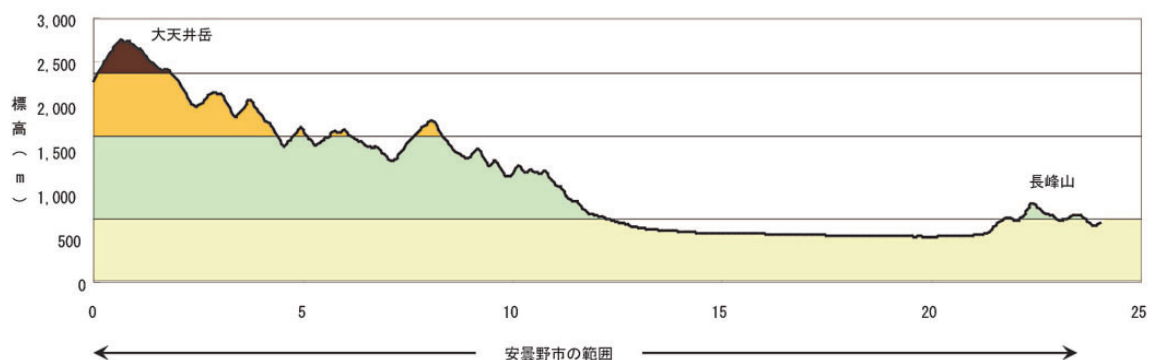
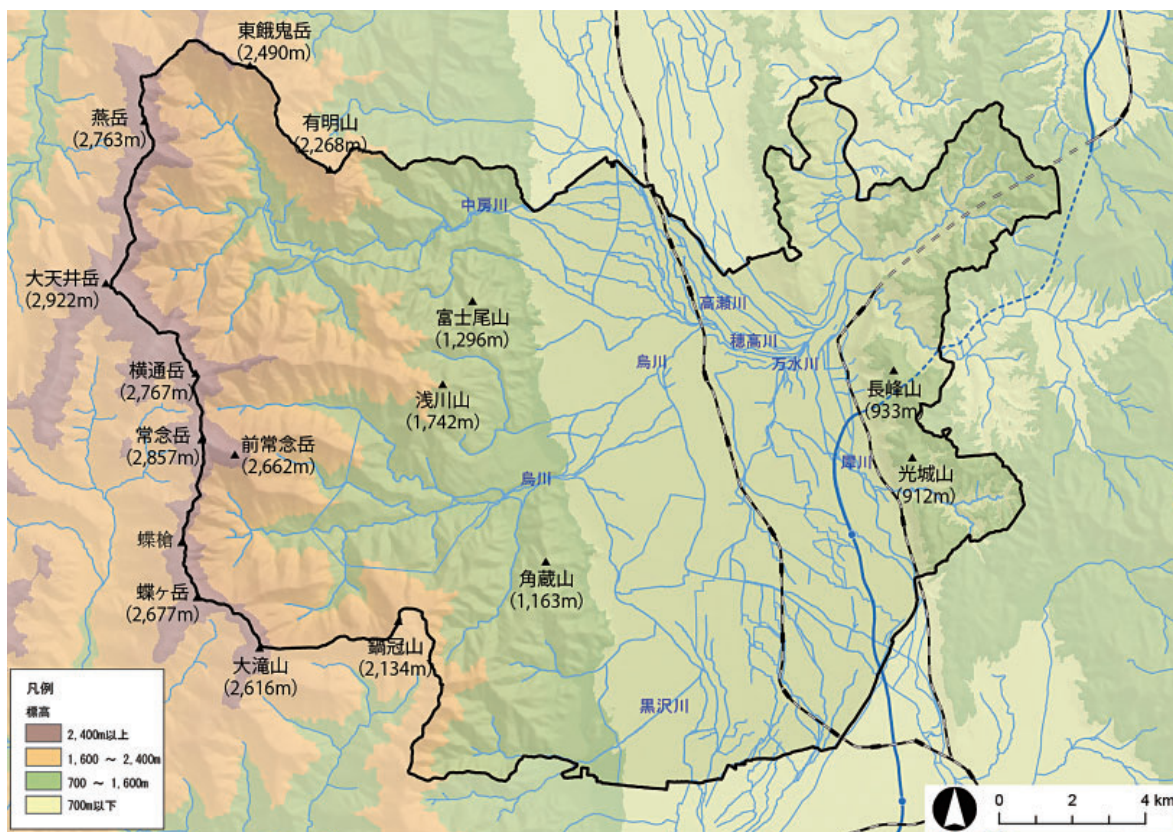


図 2-1 安曇野市の環境区分図

[出典：安曇野市版レッドデータブック 2014]

表 2-1 安曇野市の主な環境区分と環境要素

環境区分	標高区分	環境要素
高山帯	2,400m 以上	森林、草原、裸地、湿地、耕作地、造成地、市街地、社寺林、屋敷林等
亜高山帯	1,600 ~ 2,400m	
山地帯	700 ~ 1,600m	
山麓・平野部	700m 未満	
河川・水辺	標高では区分しない	河川、ダム湖、池沼（湿地を含む）、用水路（堰）、湧水地（ワサビ田・養魚場を含む）

(2) 気候

安曇野市は、北アルプスの標高の高い山岳地域を除いて、中央高地式気候（内陸性気候）になります。この気候の特徴は、日較差（1日の気温差）や年較差（年間の気温差）が大きいこと、年間を通して湿度が低く、降水量が少ないことが挙げられます（図2-2）。

しかしながら、近年の気候変動の影響を受けて、安曇野市の平均気温は上昇し、降水量は増加する傾向が見られます。

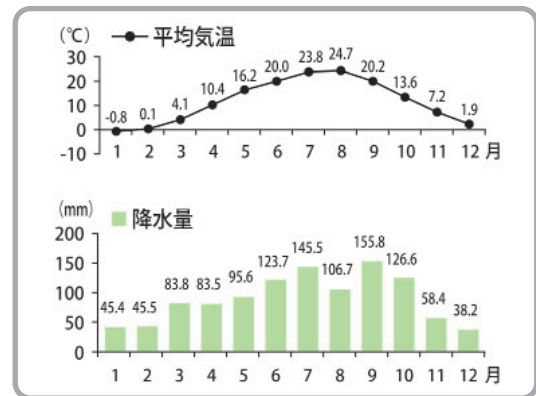


図 2-2 月別の平均気温と降水量の平年値

[1991～2020年：穂高アメダス観測所]

1) 陸水

① 水系

市内を流れる河川は、北アルプスを源流とする、梓川（犀川）、黒沢川、烏川、中房川、高瀬川などと、筑摩山地を源流とする会田川、潮沢川などに大きく分けられ、北アルプス源流の河川に比べて筑摩山地源流の河川は小規模です。これらの河川は明科地域で犀川と合流し、日本海へ向かって流れていきます。

北アルプスから流れる河川の多くは、扇状地の途中で伏流してしまうため、河川の中流から下流にかけては、水不足のため稲作に適さない土地でした。昔の人は、^{やばらせぎ}矢原堰、^{かんざえもんせぎ}勘左衛門堰、^{じっかせぎ}拾ヶ堰などいくつもの農業用水路を造り、稲作ができるようにしてきました。その結果、現在も見られる水田地帯が形成されました。

② 地下水

安曇野市は地下水が豊富なことで有名です。

安曇野市が位置する松本盆地の最低標高地点にあたる明科や穂高、豊科地域には、北アルプスを源流とする高瀬川、穂高川などが犀川に合流しています（三川合流）。三川合流付近の地下には、河川が運んできた土砂や石からなる厚い砂礫層^{されきそう}が分布しており、この砂礫層のすき間に地下水が豊富に貯えられています。

このような地下水が湧き出る場所は湧水地帯と呼ばれ、貴重な動植物の生息・生育場所となっているほか、ワサビの生産やニジマスの養殖などに利用されています。

(3) 安曇野市の生物相

1) 植物

① 植物の分布と環境区分

植物は、種により生育するのに適した環境条件があります。同じ環境条件に生育する植物の種類の組み合わせを植物群落と呼びます。植物群落の分布は、主に気温と降水量で決まります。

安曇野市の植物の分布は、標高により高山帯、亜高山帯、山地帯、山麓部・平野部に分けられます（表2-1）。この植物群落の分布は、多くの生物の生息・生育基盤となり、動物の分布にも影響を与えています。

②環境区分ごとの生育種

a. 高山帯

高山帯は、北アルプスの標高2,400mより高い範囲となります。低温、多雪及び強風により、背の高い森林は成立することができず、背の低いハイマツを中心とした群落が見られます。背の高い森林が見られなくなる境界を森林限界と呼びます。

高山帯にはハイマツ群落のほか、ミヤマキンポウゲ、シナノキンバイなどが生育するお花畑と呼ばれる群落や、窪地や谷筋など雪解けが遅い場所ではチングルマ、アオノツガザクラ、稜線付近の乾燥した場所には、ガンコウランやコケモモなどが生育しています。

b. 亜高山帯

亜高山帯は、標高1,600～2,400mの範囲となります。シラビソ、オオシラビソ、トウヒ、コメツガなどのうっそうとした針葉樹林が中心です。林縁や林内にはゴゼンタチバナ、シナノザサ、シノブカグマなどが生育していますが、種類は多くありません。

森林限界付近には、ダケカンバ、タカネナナカマドを中心とした背の低い落葉広葉樹林が見られます。林内は明るいいため、生育する植物は多く、ミヤマハンノキ、ウラジロナナカマド、オオカメノキなどが見られます。

c. 山地帯

山地帯は、標高700～1,600mの範囲となります。かつてはブナを中心とした落葉広葉樹林が広がっていたと考えられていますが、長年にわたって人々が利用してきた結果、ブナの森林はほとんど見られなくなり、現在はカラムツ、アカマツ、スギ、ヒノキの植林地やクリ、コナラ、ミズナラなどの落葉広葉樹の二次林が広がっています。明科地域には植林したケヤキ林が見られます。

林内が明るいクリやコナラの二次林の林床には、カタクリやニリンソウ、ショウジョウバカマ、タチツボスミレなどが生育していますが、近年は二次林も利用されなくなり、放置されたことにより、これらの植物の生育に適さなくなった場所が増えています（2.4（4）参照）。

d. 山麓・平野部

山麓・平野部は、標高700mより低い範囲となります。ほとんどが人の生活域に含まれるため、その多くが水田や畑地、果樹園等の農耕地や住宅地・市街地になっています。

農耕地や住宅地では、水田の畔や畑地の土手、あるいは道路脇にセイヨウタンポポやオオイヌノフグリ、ヒメオドリコソウ、ナヨクサフジなどが生育しています。これらの多くは外国から移入された植物（外来生物）です。水田では、イヌビエ、オモダカ、ホタルイなどが生育しています。アゼナ、サワトウガラシなどは、今では圃場整備がされていない昔ながらの水田にわずかに見られるだけになりました。

平野部にはまとまった森林は見られませんが、社寺林や屋敷林が点在しています。どちらも人の手によって植えられたものですが、ケヤキのようなかつてはその場所に自生していたと考えられる植物も見られます。社寺林の中には、今では周辺にはほとんど見られなくなったチゴユリ、ツリフネソウ、ヤブランなどが生育しているところもあります。

e. 河川・水辺

本書で扱う河川・水辺は、標高に関係なく、市内を流れる河川、湧水地、堰、池沼などの水辺環境を指します。

河川では、山地の溪流沿いにサワグルミ、カツラ、トチノキなど湿った場所を好む落葉樹の林が見られます。山麓・平野部の中流域には、コゴメヤナギ、タチヤナギなどを中心としたヤナギ類の林や外来種のハリエンジュ林が見られるほか、広々とした砂礫地にはカワラヨモギ、カワラハハコなどが生育しています。湧水地や池沼には、バイカモ、カワヂシャ、エビモ、ガマなどの水生植物が生育しています。

河川も農耕地や住宅地と同様に外来種が多く生育しています。その中でもハリエンジュ、アレチウリ、オオキンケイギク、オオカワヂシャは在来の植物へ影響が懸念されている種であり、駆除活動が行われています。

2) 動物

① 哺乳類

山地帯から亜高山帯の森林にはヤマネ、ムササビ、ニホンモモンガ、ニホンリス、カモシカ、ツキノワグマ、ニホンザルなどが生息しています。北アルプスの高山帯にはオコジョが生息しているほか、カモシカやツキノワグマ、ニホンザルも高山帯を利用します。また、主に高山帯に生息すると考えられていたアズミトガリネズミは山地帯にも生息していることが明らかになりました。

平野部では、キツネ、タヌキ、アブラコウモリなどが生息しています。河川では水中に潜って魚などを捕まえるカワネズミが生息しています。

最近では、ニホンジカ、イノシシ等、安曇野市では一度姿を消した種が分布を拡大しているほか、外来種のハクビシンの分布も拡大しています。2023年には同じく外来種のアライグマが住宅地で確認されています。

② 鳥類

高山帯から山麓部・平野部にかけて森林や草原、農耕地と多様な環境が存在することから、特に森林性の種を中心にそれぞれの環境に適応した鳥類が生息しています。北アルプスの高山帯には、日本が分布の南限であるライチョウが生息しています。

河川・水辺では、サギ類やカワセミ類、セキレイ類、カモ類などが生息します。

安曇野市は、内陸部に位置するため、海岸や海洋に生息するカモメ類やミズナギドリ類などはまれに記録される程度ですが、キアシシギやムナグロなど、少数のシギ・チドリ類が春と秋の渡り時期に平野部の水田地帯に飛来します。

最近では、外来種であるガビチョウやソウシチョウが山地帯の森林などで確認されています。

③ 爬虫類

平野部から山地帯にかけての広い範囲では、ヤマカガシ、アオダイショウなどのヘビ類やニホントカゲ、ニホンカナヘビなどが生息しています。また、北アルプス側の山地では市内での生息状況がほとんど分かっていないシロマダラや、今まで生息情報がなかったタカチホヘビが生息していることが確認されました。

カメ類については、イシガメなどの在来種が生息する確実な情報はなく、ペット用に輸入された

外来種であるアカミミガメ（ミドリガメ）の放された個体が生息しています。

④ 両生類

平野部では水田を中心にアマガエル、トノサマガエル、トウキョウダルマガエル、ツチガエル類、アカハライモリが生息しています。山麓部の水田にはシュレーゲルアオガエルが生息しています。溪流にはカジカガエルが生息しています。

山地帯から亜高山帯にかけての森林には、アズマヒキガエル、タゴガエル、ヤマアカガエル、ハコネサンショウウオ、ヒダサンショウウオが生息しています。また明科地域では2022年にモリアオガエルの生息が確認されました。

亜高山帯から高山帯にかけての湿地周辺にはクロサンショウウオが生息しています。

⑤ 魚類

三川合流付近を中心とした平野部を流れる河川中流域では、ウグイ、オイカワ、アブラハヤなどが広い範囲に生息し、瀬にはカジカ、アカザなどが生息します。山麓部から山地帯などの河川上流域や溪流には、ニッコウイワナ、ヤマメが生息しています。

^{よろずいがわ}万水川などの湧水が流れる河川には、水温の低い場所を好むホトケドジョウやスナヤツメが生息しています。堰や用水路にはギンブナやドジョウなどが生息しています。

安曇野市内では、通称ブラックバスと呼ばれるオオクチバスやコクチバスのほか、ブルーギルやブラントラウトなどの外来種が確認されていますが、最近では新たにカラドジョウの生息が確認されるようになりました。

⑥ 昆虫類

高山帯では、高山蝶と呼ばれるタカネヒカゲ、ベニヒカゲ、クモマベニヒカゲ、ミヤマモンキチョウ、それにバッタの仲間のクモマヒナバッタが生息しています。

山麓部では、全国的にも分布が限られ、安曇野市の天然記念物であるオオルリシジミが地域の保護団体によって守られています。また明科地域にちなんで命名されたアカシナナガゴミムシのような固有種も生息しています。

平野部の農耕地、そして湧水地や河川敷では、カワラバッタ、コオイムシ、アカガネオサムシなどが生息しています。

最近では、2017年に在来種のナナフシモドキが大発生し、農作物に被害を与えたことが確認されたほか、2022年にはアカボシゴマダラという外来種のチョウ類が確認されています。

⑦ その他無脊椎動物

安曇野市では、昆虫類以外にも多くの無脊椎動物が確認されています。代表的なものとして、サワガニなどのエビやカニの仲間、コガネグモなどのクモの仲間、タニシ、カワニナのような貝の仲間などが挙げられます。貝の仲間は、水辺に生息する種だけではなく、カタツムリの仲間のような平地から亜高山帯の森林にかけての陸域に生息する種もいます。

河川や堰には、コモチカワツボやウチダザリガニ、アメリカザリガニのような外来種が生息しています。

2.2 土地利用の変遷

(1) 土地利用の現状

1) 水田面積の変化

安曇野市は松本盆地のほぼ中央に位置し、米どころとして稲作が盛んです。しかし、現在は休耕田や畑作に転換した水田が多く見られるようになってきました。田に張った水に北アルプスが映り田植え作業をする様子は、安曇野を代表する風景ですが、この風景が安曇野のどこでも見られる時代ではなくなってきています。

図2-3は、農林水産省が5年おきに行っている農林業センサスのデータを元に作成した安曇野市の水田面積の変化です。2020年では2010年に比べて水田面積は約10%減少しています。水田面積の内、実際に水稻が栽培されているのは7割ほどなので、水が張られる水田は確実に減少していることが分かります。

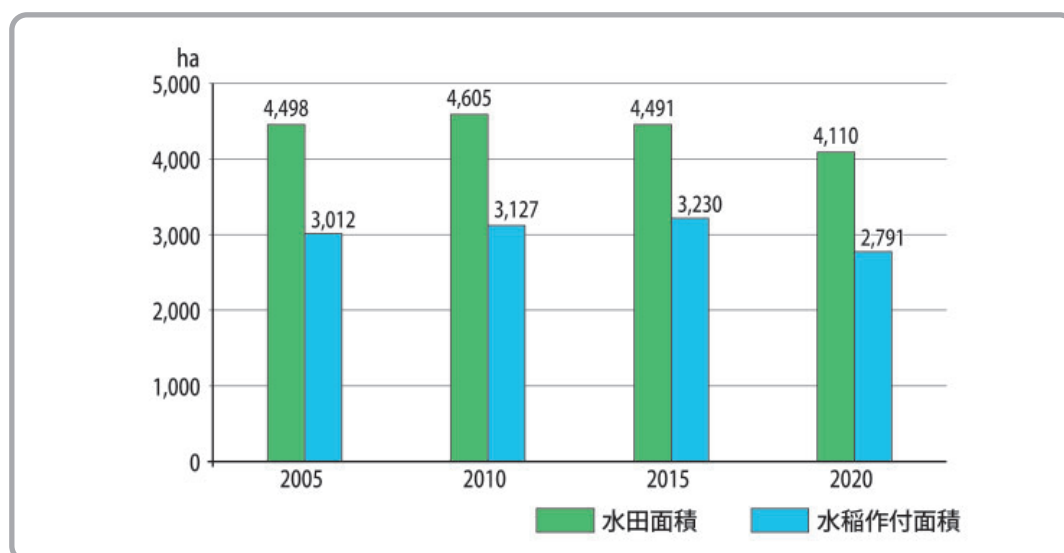


図 2-3 安曇野市の水田面積の変化

[農林業センサスデータを元に作成]

図2-4は欧州宇宙機関（ESA）の地球観測衛星sentinelの画像データを元に作成した安曇野市及びその周辺の土地利用分類図です。画像データの取得日は2022年7月29日で、水田をわかりやすく強調するために着色してあります。水田地帯がモザイク状に畑に転換されている様子が読み取れます。

水田は地下水の涵養源であるばかりでなく、水生生物のすみかでもあります。食物連鎖を通じて生物多様性を保全しています。水田からの水分の蒸発や稲からの水分蒸散は空気を冷やす効果があります。水田の減少はこれらの機能を弱めてしまいます。

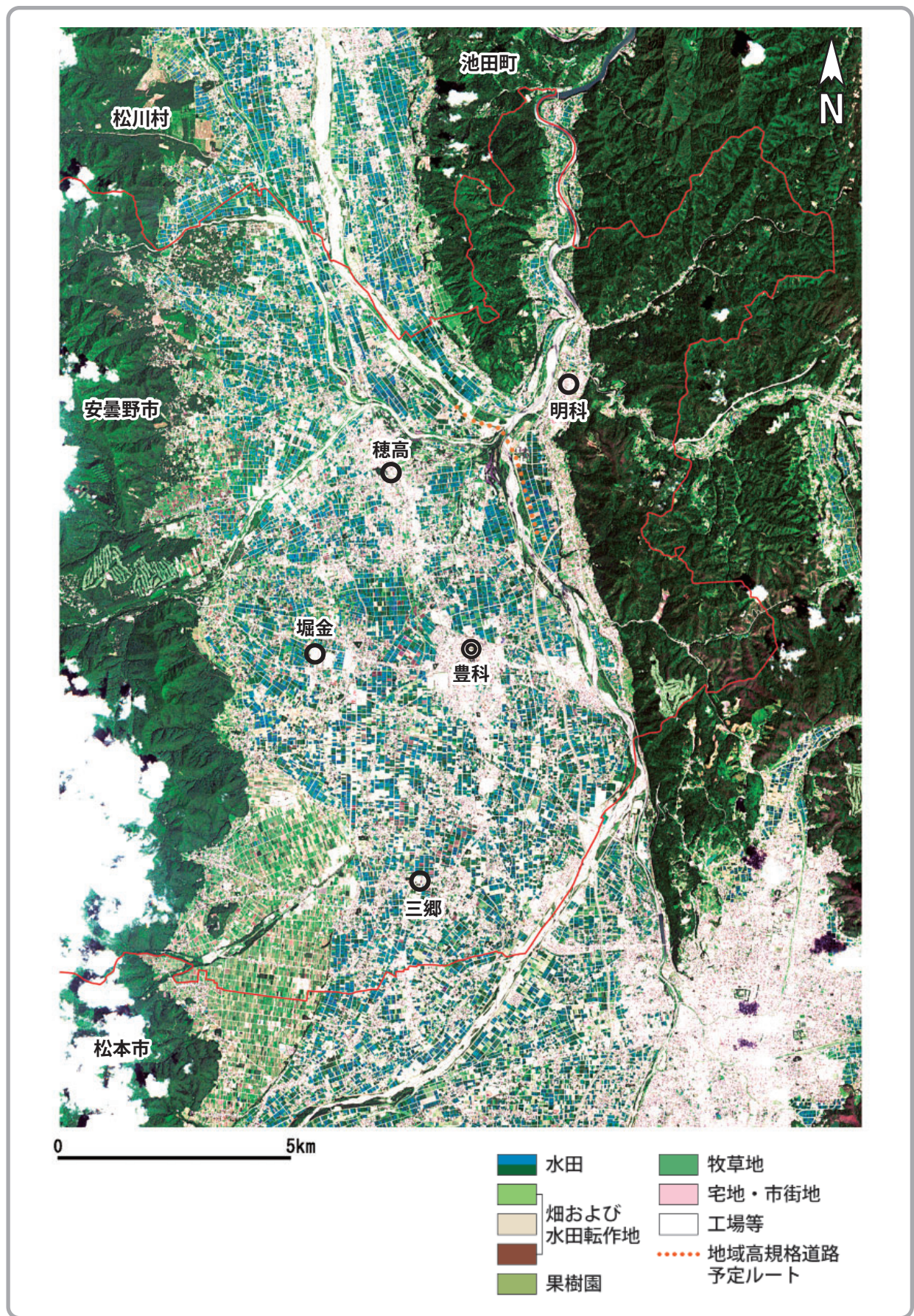


図 2-4 安曇野市の土地利用分類

[Copernicus esa の sentinel 2B 衛星画像を元に作成]

2) 耕作地面積の変化

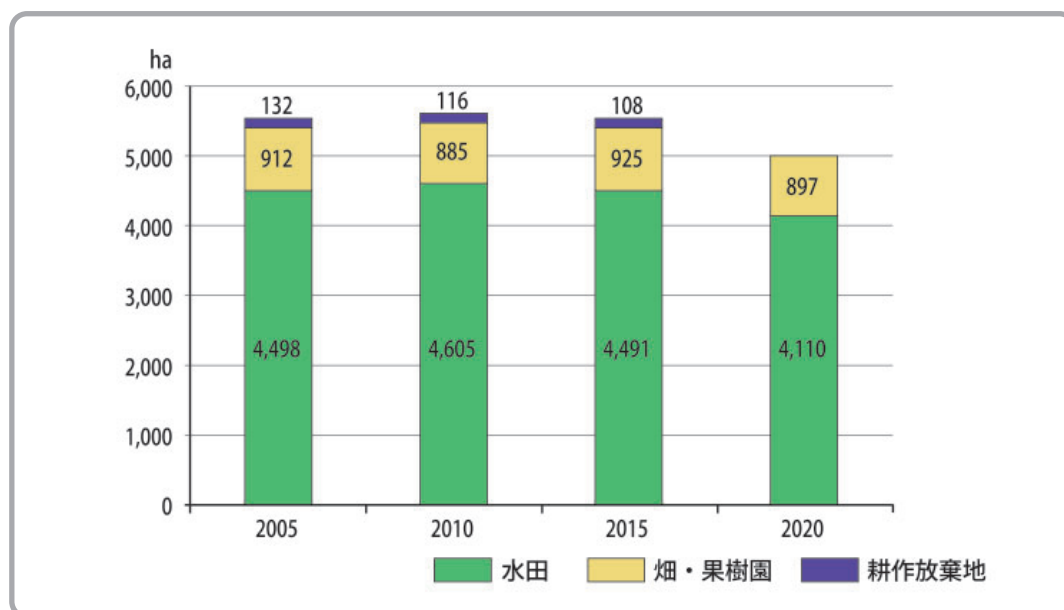


図 2-5 安曇野市の耕作地の変化

[農林業センサスデータを元に作成]

注1) 2020年度の農業センサスより耕作放棄地の統計は廃止されました。

注2) 耕作放棄地とは、「農林業センサス」において「以前耕地であったもので、過去1年以上作付けせず、しかもこの数年の間に再び作付けする考えのない土地」と定義される統計用語です。

図2-5は農林水産省の農業センサスデータを元にして、安曇野市の耕作地面積の変化を示したものです。1) で述べたとおり水田の面積は減少していますが、畑・果樹園の面積は微増・微減を繰り返していて、大きな減少は見られません。耕作放棄地は2020年度のデータはありませんが、減少傾向が認められます。

里山に連続する耕作放棄地は、ニホンジカやイノシシなどの生息場所となりやすく、周辺地域の植生が被害を受け、植生が単純化するおそれが高くなります。単純化した植生は、生態系の多様性を失ってゆきます。被害がひどくなると植生が失われ、土砂流出などの災害を引き起こします。

(2) 農業の多面的機能維持と人口減少・生態系への影響

1) 農業の多面的機能

農業の機能に環境への貢献があげられます。それは次のようにまとめられています。

①農業が物質の循環系を形成している

- i 水循環を制御して地域社会に貢献する機能：洪水防止、土砂崩壊防止、土壌浸食防止、河川流況の安定、地下水涵養
- ii 環境に対する負荷を除去・緩和する機能：水質浄化、有機性廃棄物分解、大気調節、資源の過剰な集積（・略奪）防止

②農業が二次的生態系を形成・維持している

- i 生物生態系保全（植物遺伝資源保全、野生動物保護）
- ii 土地空間を保全する機能：優良農地の動態保全、みどり空間の提供、（日本の）原風景の保全、人工の自然景観形成

引用 佐藤晃一、農業土木学会誌、第70巻、第1号（2002）

また、食料・農業・農村基本法第3条は次のように記されています。

（多面的機能の発揮）

第3条 国土の保全、水源のかん養、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承等農村で農業生産活動が行われることにより生ずる食料その他の農産物の供給の機能以外の多面にわたる機能（以下「多面的機能」という）については、国民生活及び国民経済の安定に果たす役割にかんがみ、将来にわたって、適切かつ十分に発揮されなければならない。

日本は既に人口減少の時代に入っています。人口減少は、近い将来の日本社会に様々なマイナス要素をもたらすとされています。

図2-6は安曇野市の人口動態と農業就労者数の変化をまとめたものです。市の人口は2020年10月1日の時点で97,297人、2045年の推計値は76,479人で、今後25年間で安曇野市の人口は20%以上減少すると想定されています。

2) 就農者数の減少

第3次安曇野市農業・農村振興基本計画（2022年）の農業の担い手の状況データによれば、基幹的農業従事者は2010年から2020年の10年間で約36.7%減少したことが示されています。仮にこの割合で2045年まで減少が続いたとすれば、2045年の農業従事者は870人に激減してしまいます（図2-7）。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、2045年の64歳以下の働き手の人口は、総人口の57%（2020年は69%）に減少していますので、現在の農業・農地が将来維持され続けるのか危惧されます。

先に示した農業が生態系を形成・維持している機能が失われると、最終的にその付けは私たちの生活に跳ね返ってきます。

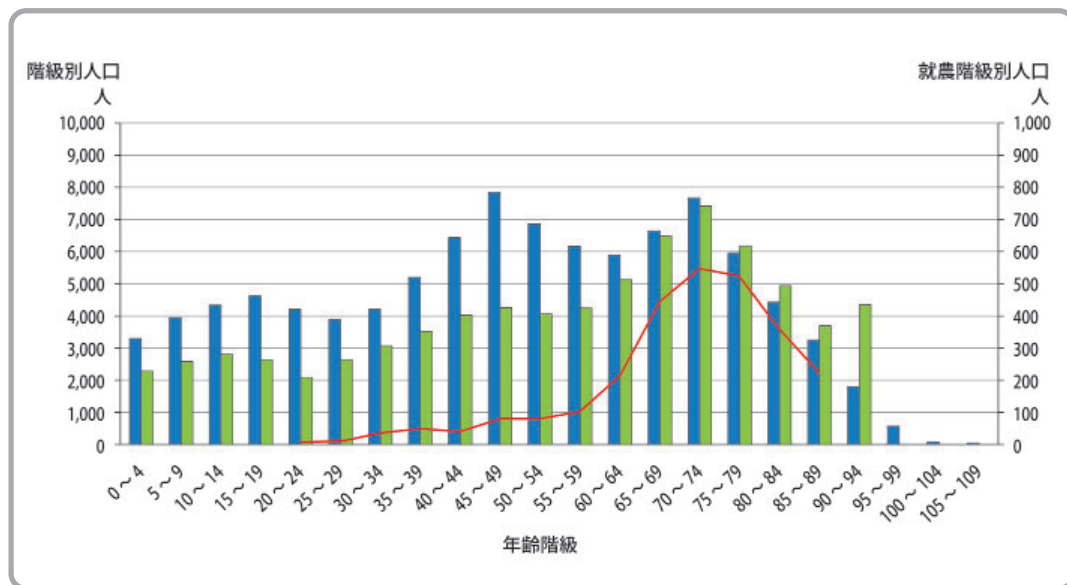


図 2-6 安曇野市の人口動態と年齢階級別就農数

青色棒は2020年10月1日時点の安曇野市の年齢階級別人口、黄緑色棒は国立社会保障・人口問題研究所による2045年の安曇野市の推計人口です。ここで90～94歳の人口が多くなっているのは、推計人口では90歳以上の人口を一括してあるためです。

赤線は農林業センサス2020年データによる安曇野市の就農者数の年齢階級別人口です。

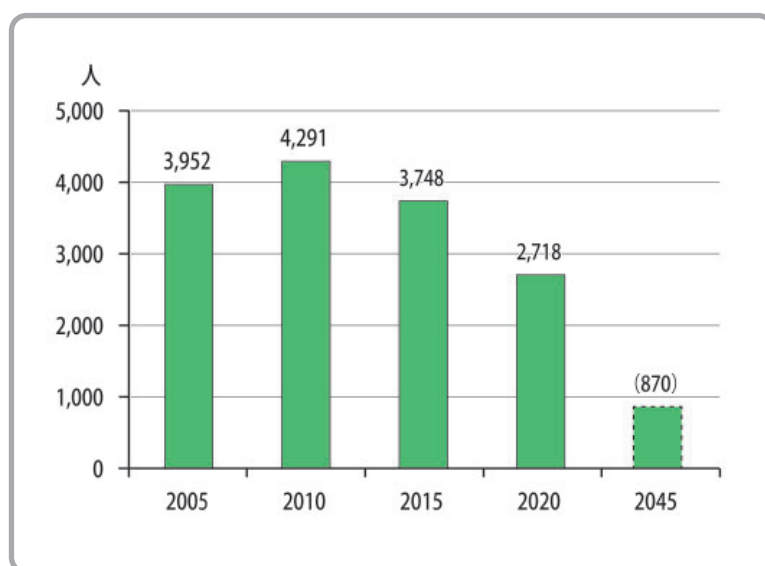


図 2-7 安曇野市の就農者数の変化

2005年から2020年は第3次安曇野市農業・農村振興基本計画（2022年）のデータによる
2045年は2010年から2020年までの減少率が将来も同様に続いたと仮定したときの推計値

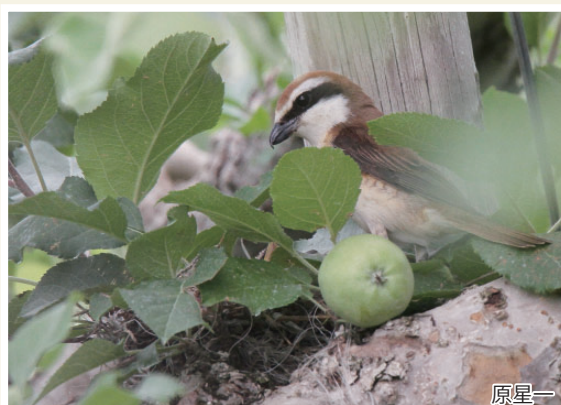
果樹園は安曇野を特徴づける景観の一つで、特にリンゴは県内有数の生産量を誇ります。人の手で整備された果樹園は、一見するとあまり生きものが多い環境には見えませんが、実は一年を通して多くの野鳥に利用されています。その中でも、特筆すべき鳥がアカモズです。

アカモズは繁殖のために日本に渡ってくる渡り鳥（夏鳥）で、かつては本州中部から北海道にかけての広い範囲に分布していました。安曇野市を含む松本盆地では民家の庭木に営巣していたという話もあるほど身近な鳥だったようです。しかしながら、現在の分布域はかつての1割以下にまで縮小し、国内全体で300羽程度しか確認されていません。そんな絶滅寸前のアカモズですが、残された数少ない生息地の一つが中信地方の果樹園地帯です。



松宮裕秋

果樹園に生息するアカモズ



原星一

リンゴの木に作られた巣と親鳥

リンゴの花が咲き終わる5月中旬になると、アカモズが果樹園へ飛来します。巣の多くはリンゴやナシの木で見られ、5～8月にかけて、葉が茂ったところに巣を作り、子育てをします。狩りは果樹園の中でも開けたところで行うことが多く、支柱や電線から飛び降りて、下草にいるガの幼虫やバッタ類、アブなどの様々な昆虫を捕えます。

アカモズの本来の生息地は草原に低木や灌木の生えた環境でしたが、そのような環境は開発や里山環境の変化で今ではほとんど残っ

ていません。果樹園は本来の生息地とは異なりますが、巣を造る低木、餌をとりやすい丈の低い草地、餌を探すための豊富な止まり場（支柱など）といったアカモズに必要な環境を兼ね備えているため、代替の生息地として選ばれていると考えられます。

個体数の減少の理由については、国内の生息環境の悪化のほかにも、渡り経路にある中国や東南アジアでの環境破壊など様々な要因が絡んでいると考えられています。近年では、数が少なくなりすぎたことによって、自然の状態では個体数を維持できなくなっていることが危惧されています。そのため、保全団体や関係者が連携しながら、繁殖成功を高める保全活動が進められています。

アカモズは果樹園の果実をつつくことはなく、昆虫や小動物を食べるため、益鳥ともいえる存在です。これから先も果樹園とアカモズの共生関係が続いていくよう、農作業やアカモズの繁殖を妨げないよう気を付けながら、地域全体で見守っていききたいものです。

（植松 晃岳・松宮 裕秋）

2.3 気候変動

(1) 気候変動とは

気候変動とは「『気温および気象パターンの長期的な変化』を指します。これらの変化は太陽周期の変化によるものなど、自然現象の場合もありますが、1800年代以降は主に人間活動が気候変動を引き起こしており、その主な原因は、化石燃料（石炭、石油、ガスなど）の燃焼です。化石燃料を燃やすと温室効果ガスが発生し、地球を覆う毛布のように太陽の熱を閉じ込め、気温が上昇します」と、国際連合広報センターのホームページで説明されています。

地球の気候は長期間で眺めれば変動しています。私たちは地質時代の第四紀・完新世という時代に生きています。完新世は最終氷期が終了して後氷期と呼ばれる温暖な時代です。

約80万年前から地球は約10万年周期で氷期と間氷期を繰り返してきました。これは海洋中に含まれる酸素同位体の研究から明らかになりました。一方氷床コアに含まれるガスから過去の大気中の二酸化炭素濃度の研究も進展してきました。これらをまとめたものを図2-8に示します。

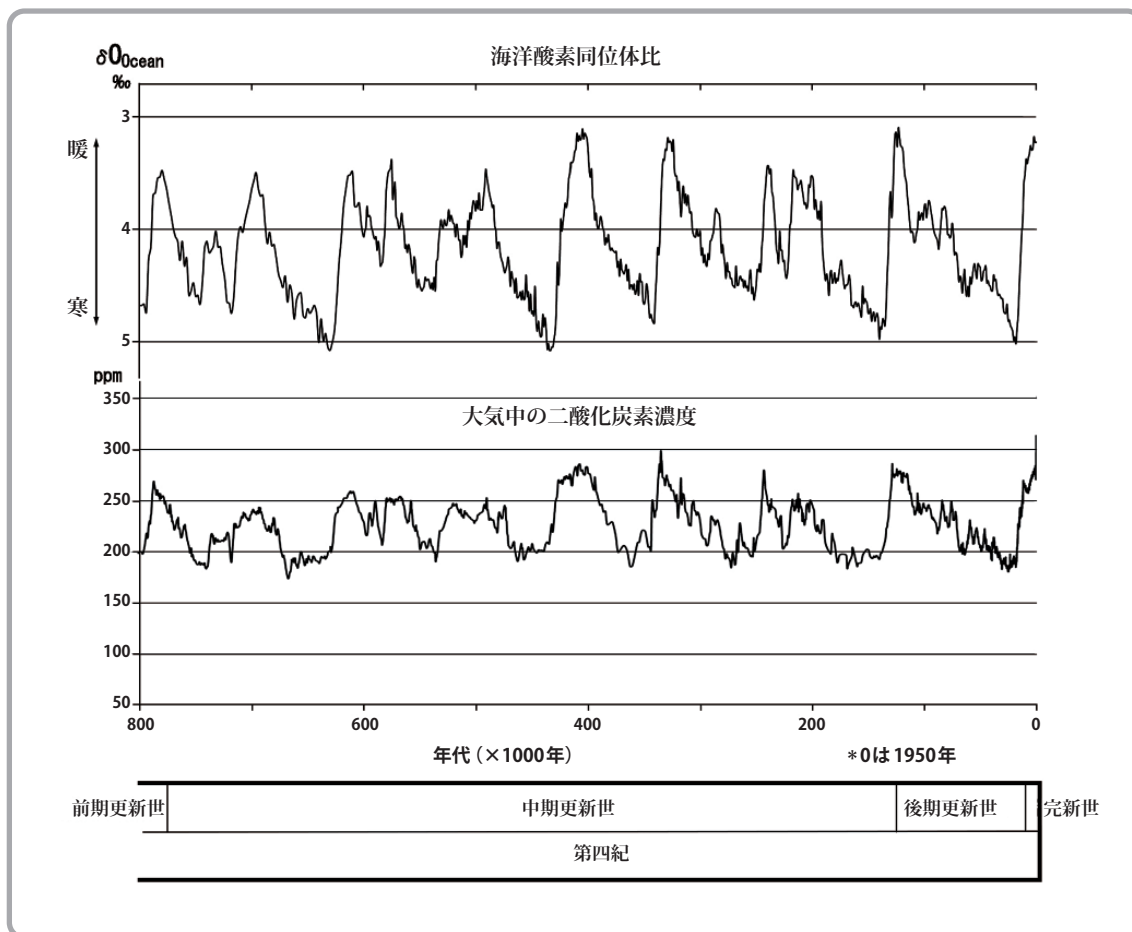


図 2-8 第四紀中期更新世から完新世の海洋酸素同位対比と大気中の二酸化炭素濃度

「以下のデータを元に作成」

〔海洋酸素同位対比〕 Lisiecki, L.E., and M. E. Raymo (2005), A Pliocene-Pleistocene stack of 57 globally distributed benthic $\delta^{18}\text{O}$ records, *Paleoceanography*, 20]

〔大気中の二酸化炭素濃度〕 Antarctic Ice Cores Revised 800KYr CO_2 Data World Data Center for Paleoclimatology, Boulder and NOAA Paleoclimatology Program]

図2-8から分かるように大気中の二酸化炭素濃度と海洋酸素同位対比（相対的な気温に対応）の変化は、周期にずれが認められるもののよく対応しています。中期更新世から後期更新世（約78万年前から11400年前）の期間で二酸化炭素濃度の最大値は約300ppmで、この値を超えたことはありませんでした。ところが、18世紀半ばの産業革命以降大気中の二酸化炭素濃度は増加し始め、1912年頃に300ppmを越えました。その割合は近年急激に大きくなってきています。それに伴い、平均気温も緩やかに上昇を続けています。

(2) 近年の気象傾向

1) 温室効果ガス

図2-9は岩手県大船渡市綾里^{りょうり}にある気象庁大気環境観測所の大気中二酸化炭素・メタン濃度のグラフです。二酸化炭素は2014年頃に400ppmを越え、その後も速いペースで上昇を続けています。二酸化炭素より強い温室効果を持つメタンも大気中の濃度が緩やかに上昇しています。

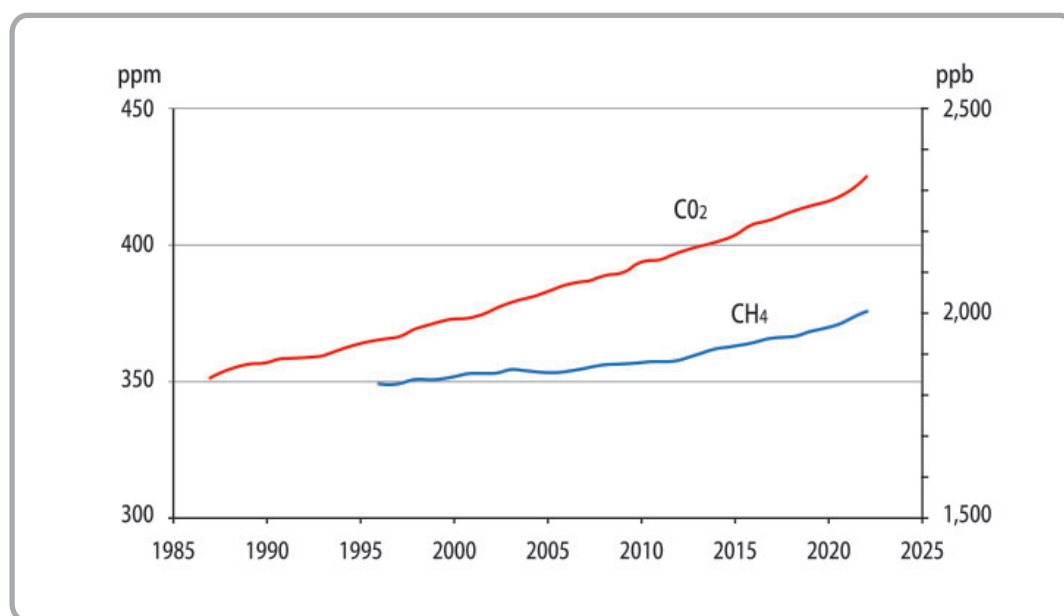


図 2-9 気象庁大気環境観測所（綾里）の二酸化炭素（CO₂）とメタン（CH₄）濃度観測データ

2) 気温

大気中の二酸化炭素濃度が上昇するにつれ、地球全体として気温が上昇しています。図2-10は関東甲信地域の平均気温の平年差の変化（観測値から平年値を差し引いた値）を示したグラフで、年ごとに変動を繰り返しながら緩やかに右肩上がりになっていることが分かります。これは私たちが住む地域でも平均気温が上昇していることを示します。

また図2-11は穂高アメダス地点における猛暑日（日最高気温が35℃以上の日）と真冬日（日最高気温が0℃未満の日）の発生日数をあらわしたグラフです。近年、猛暑日が増加し、真冬日は減少していることが分かります。

気温の上昇は動植物全てに影響を与えます。ある生物にはプラスに作用し、別の生物にはマイナスに作用します。生態系全体でどのような影響が現れるのか定期的にモニタリングを行う必要があります。

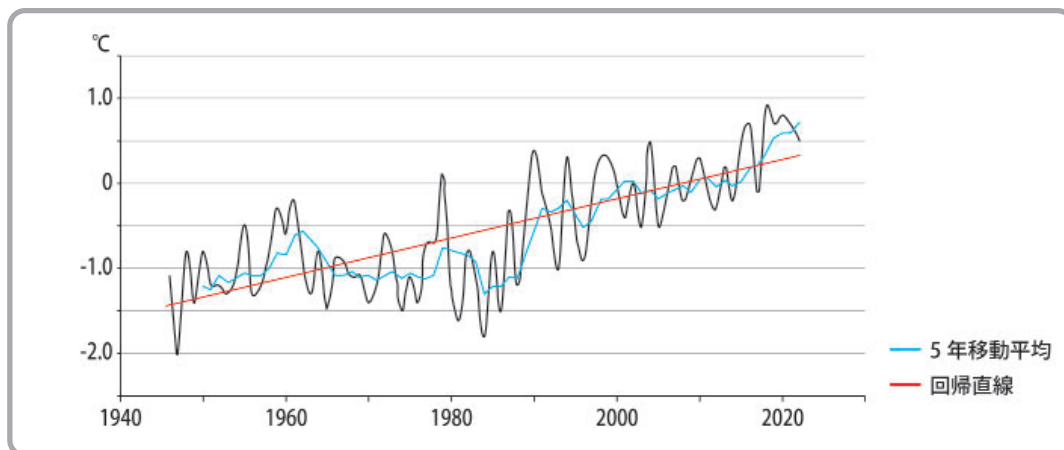


図 2-10 関東甲信地域の平均気温の平年差変化

[気象庁アメダスデータを元に作成]

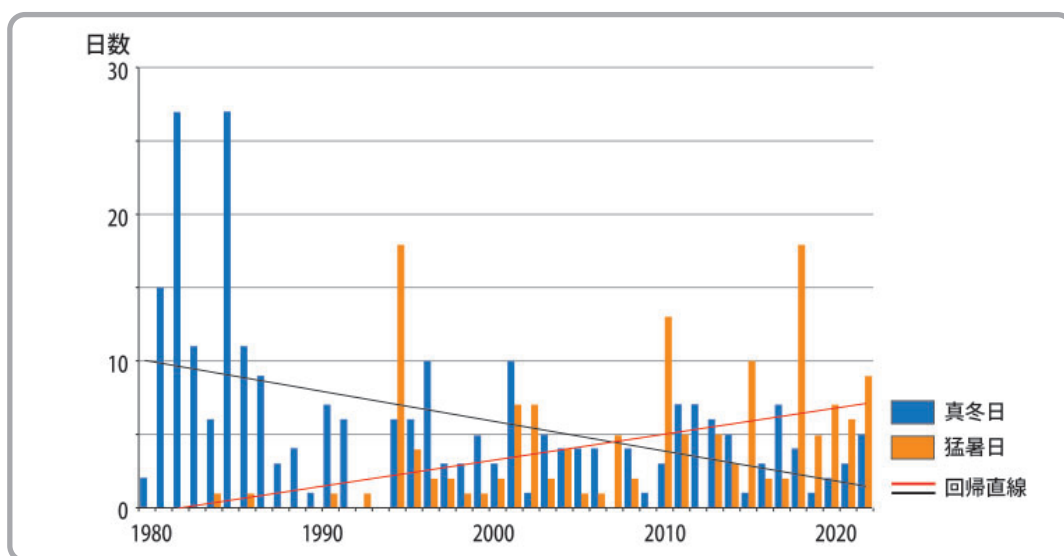


図 2-11 アメダス穂高観測所における猛暑日・真冬日の日数差変化

[気象庁アメダス穂高観測所のデータを元に作成]

3) 降水量

気象庁の気候変動監視レポート2021では、降水量について、「日本の年降水量には長期変化傾向は見られませんが、1898年の統計開始から1920年代半ばまでと1950年代、2010年代以降に多雨期が見られます。また、1970年代から2000年代までは年ごとの変動が比較的大きくなっていました」と述べられています。しかし、全国の1時間降水量（毎正時における前1時間降水量）50mm以上の年間発生回数は増加していることが示されています。

このことは降水のパターンが変化してきていることをあらわします。図2-12は先に述べた全国の1時間降水量50mm以上の年間発生回数をあらわしたグラフです。先のレポートでは、「最近10年間（2012～2021年）の平均年間発生回数（約327回）は、統計期間の最初の10年間（1976～1985年）の平均年間発生回数（約226回）と比べて約1.4倍に増加し、2022年1月から11月までの1,300地点あたりの発生回数は379回」とまとめています。

これからはゲリラ豪雨が多く発生することが予測され、自然災害も発生回数は現在よりも多くなるでしょう。水辺の生態系が被害を受ける確率が高くなることが予測されます。

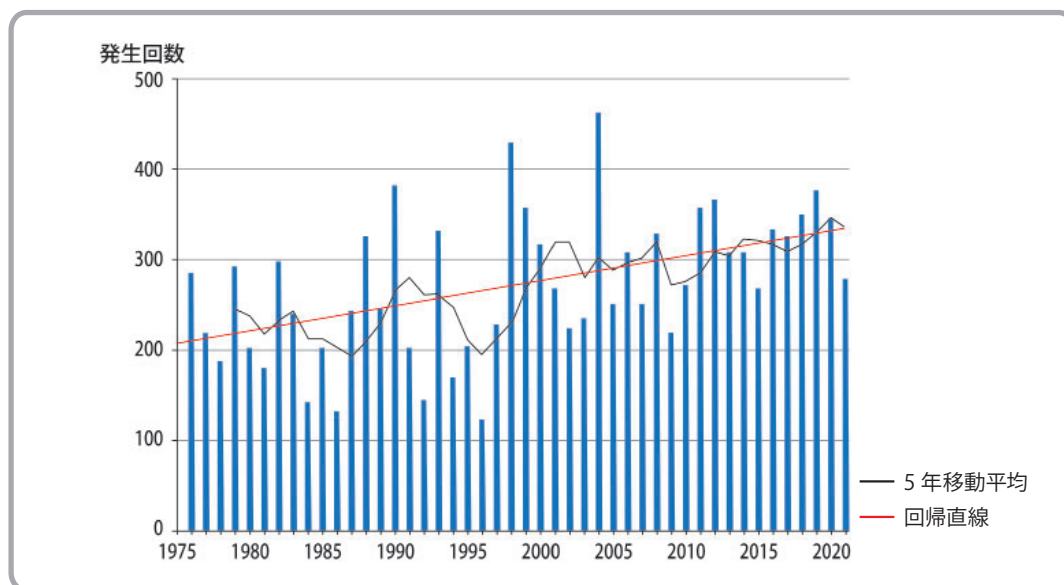


図 2-12 全国の 1 時間降水量（毎正時における前 1 時間降水量）50mm 以上の年間発生回数

4) 降雪量

安曇野市では北アルプス側を除いて降雪量は多くありません。多雪となるのは、南岸低気圧によるいわゆるカミユキの時です。このカミユキは気まぐれの現象で、統計で傾向を判断するのは難点があります。そこで安曇野市に近い、気圧配置が冬型の時に多雪となる白馬村のアメダスデータを使って冬季の降雪量の変化を調べてみました。図2-13に1980年から2022年までの11月（NOV）から3月（MAR）までのデータをグラフ化したものを示します。

このグラフからこの40年間で降雪量が徐々に減少していることが読み取れます。特に2月（FEB）・3月（MAR）の減少傾向は12月（DEC）・1月（JAN）に比べて顕著です。これは気象庁の積雪・降雪の将来予測（気候変動監視レポート2021）とも合っています。

野生動物のニホンジカやイノシシは降雪量が少なくなることによって分布範囲を北方へ拡大したと言われています。安曇野市でも北アルプス側の山地にニホンジカが深く侵入しています。ニホンジカの食害による植物への影響、ひいては生態系全体への悪影響が懸念されます。



降雪後の安曇野市

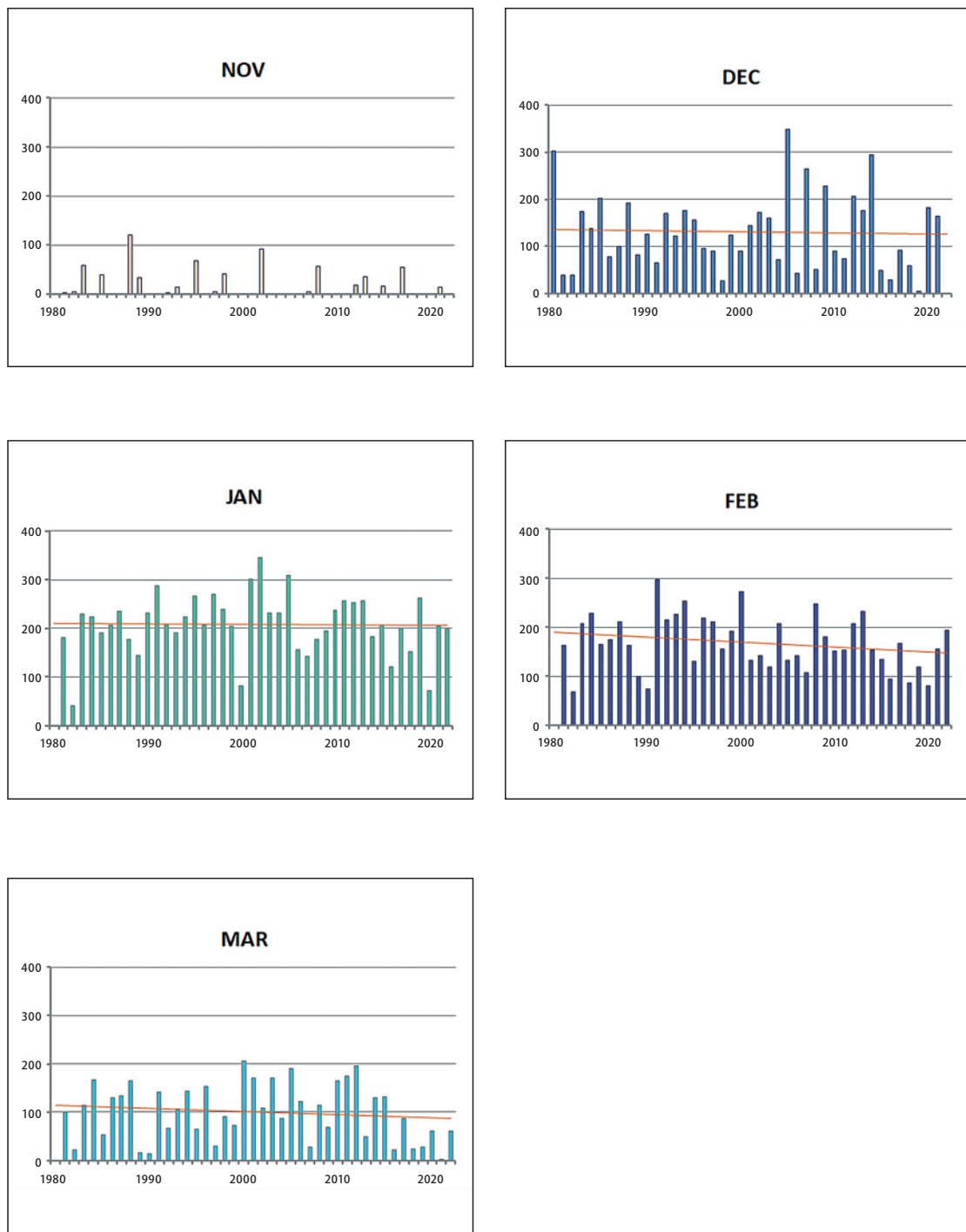


図 2-13 白馬村における降雪量の変化

[気象庁アメダス白馬観測所のデータを元に作成]

(3) 生態系への影響

現在見られる気候変動の影響には、干ばつ、熱波、海面上昇、洪水、氷河・氷床の融解、強大な暴風雨、生物多様性の減少などが挙げられます。私たちは気候変動を主に地球温暖化のことで捉えがちですが、地球温暖化は気候変動の一つの側面に過ぎません。大気・海洋・生物圏は互いに密接に絡み合っています。ある領域での変化は他の領域へ影響を及ぼします。そして私たちの健康、社会インフラ、安全などにも影響を及ぼします。

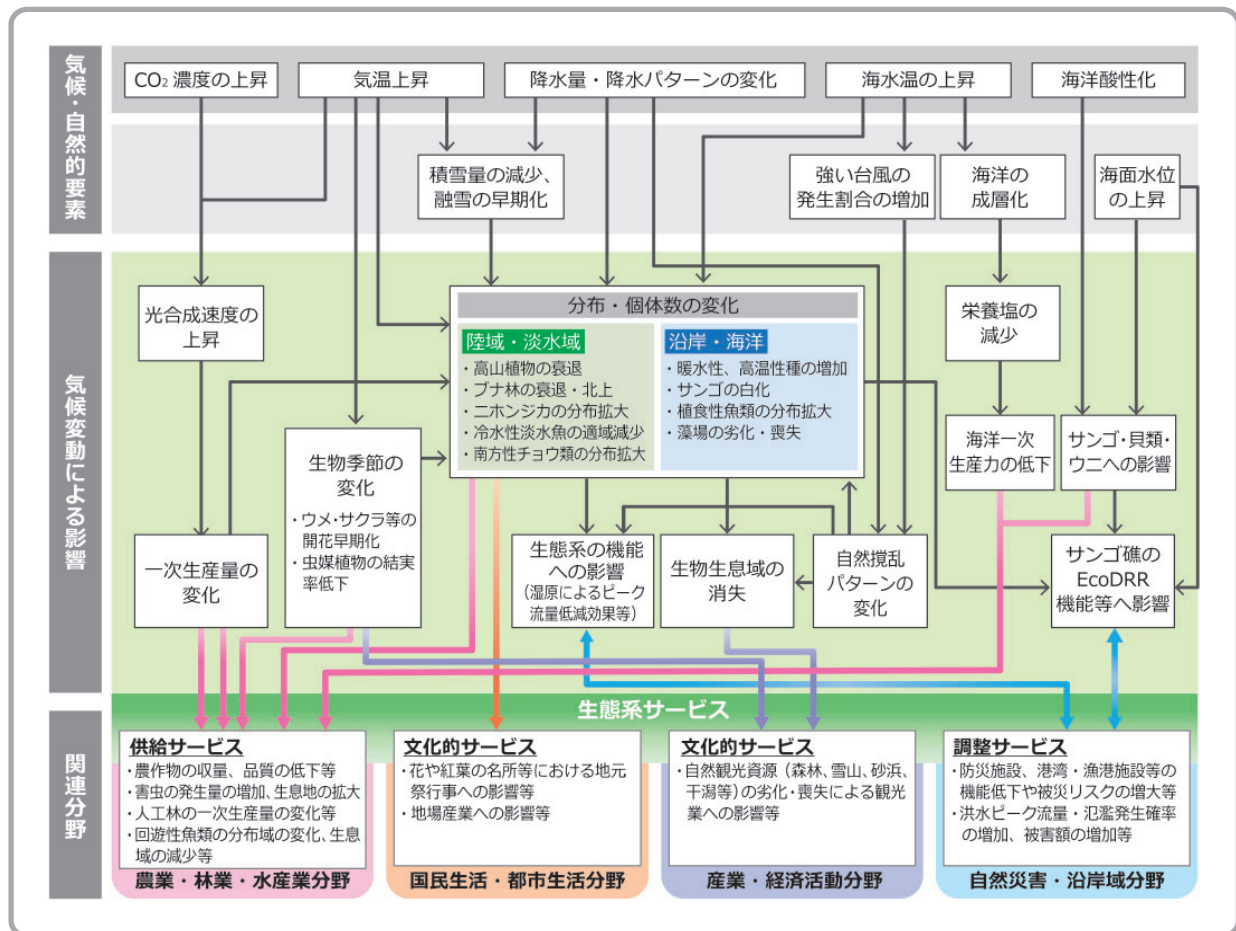


図 2-14 気候変動により想定される自然生態系への影響

[環境省 気候変動影響評価報告書総説 2020年12月 を元に作成]

ミヤマモンキチョウ（以下、ミヤマモンキ）は全北区の寒冷地に分布するチョウで、わが国では飛騨山脈と浅間山系の標高 1,700m 以上に生息しています。食草はクロマメノキです。安曇野市版レッドリストでは準絶滅危惧（NT）で、また長野県天然記念物に指定されています。一方、モンキチョウ（以下、モンキ）は平地に広く普通に見られる種で、シロツメクサなどマメ科植物を食草としています。以前からこのモンキが高山帯でミヤマモンキと混飛や種間交尾の事例が知られていました（福田ほか 1982）。

● 蝶ヶ岳の高山帯に進出したモンキチョウ

蝶ヶ岳から常念岳の稜線とお花畑一帯は、環境省のモニタリングサイト 1000 の高山帯サイトとして 2010 年からチョウ類の調査が実施されてきました。ミヤマモンキ（写真 1）は毎年確認されているのに対して、モンキは 2017 年までに 2 個体がみつかったのみでした。ところが 2018 年に、蝶ヶ岳山頂手前にある大滝山分岐の標識付近のお花畑で、モンキが 9 個体も確認されました。その後 2020 年にも確認され、2023 年の調査でもモンキ（写真 2）が複数確認され、ここ最近お花畑で見られるモンキの数が増えてきているようです。平地では幼虫態で食草の近くに越冬するモンキは、冬に食草が枯れてしまう高山帯では幼虫越冬できないといわれていることから、蝶ヶ岳のお花畑に来るモンキは、毎年標高の低いところで発生した個体が飛翔してきているのではないかと考えられます。



写真 1：ミヤマモンキチョウ雌
（蝶ヶ岳、2010 年 7 月 19 日）



写真 2：お花畑の上を飛翔するモンキ
チョウ雄（蝶ヶ岳、2023 年 7 月 17 日）

● モンキチョウがミヤマモンキチョウ個体群に及ぼす影響

北原（2022）は、湯ノ丸山に生息する両種の交配実験から、ミヤマモンキ雌×モンキ雄の組合せの種間交尾でミヤマモンキ雌が産んだ卵は全て孵化しないこと、またモンキ雌×ミヤマモンキ雄の組合せは野外ではほとんど起きないことから、両種間に遺伝子浸透は起こりにくいとしています。しかし、モンキ雄と種間交配したミヤマモンキ雌は次世代を生産できないため、ミヤマ個体群の繁殖阻害が起こる可能性があるとして指摘しています。

2023 年の蝶ヶ岳の調査で興味ある写真が撮影されました（写真 3）。写真上の白いミヤマモンキ雌を下のモンキ雄（翅の黒帯の中に黄色の斑点がある）が追い回しているところです。モンキ雄が高山帯で増えてくると、このようにミヤマモンキ雌に対して激しい求愛行動を取り、ミヤマモンキ個体群への影響が懸念されます。そのため両種の間関係をさらに詳細に調査するとともに、林道などに沿って山奥まで侵入してくるシロツメクサ対策が必要です。



写真 3：ミヤマモンキチョウ雌を追う
モンキチョウ雄（蝶ヶ岳、2023 年 7 月 17 日）

（中村 寛志）

- 【引用文献】・北原 曜（2022）ミヤマモンキチョウ浅間連山亜種（*Colias palaeno aias* Fruhstorfer）に及ぼすモンキチョウ（*Colias erate poligraphus* Motschulsky）の交尾干渉. Lepidoptera Science 73: 53-66.
・福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健・高橋 昭・高橋真弓・田中 蕃・田中 洋・若林守男・渡辺康之（1982）原色日本蝶類生態図鑑 I. 277 p. 保育社、大阪。

2.4 植生の変化

(1) マツ枯れによるアカマツ林の消失

この10年間で安曇野市及びその周辺市町村のアカマツ林に大きな変化が見られました。マツ材線虫病（いわゆるマツ枯れ）が進行し、アカマツ林が消え始めました。

安曇野市では2000年にマツ枯れが確認されてからしばらくは被害は拡大していなかったのですが、2006年以降急速に被害が拡大し始めました。特に被害が目立つのは通称東山と呼ばれている地域で、犀川東の豊科・明科地域から松本市の四賀地区にかけての山地です。

図2-16のグラフから、安曇野市では2013年をピークにしてマツ枯れ被害は減少傾向にあることが読み取れます。

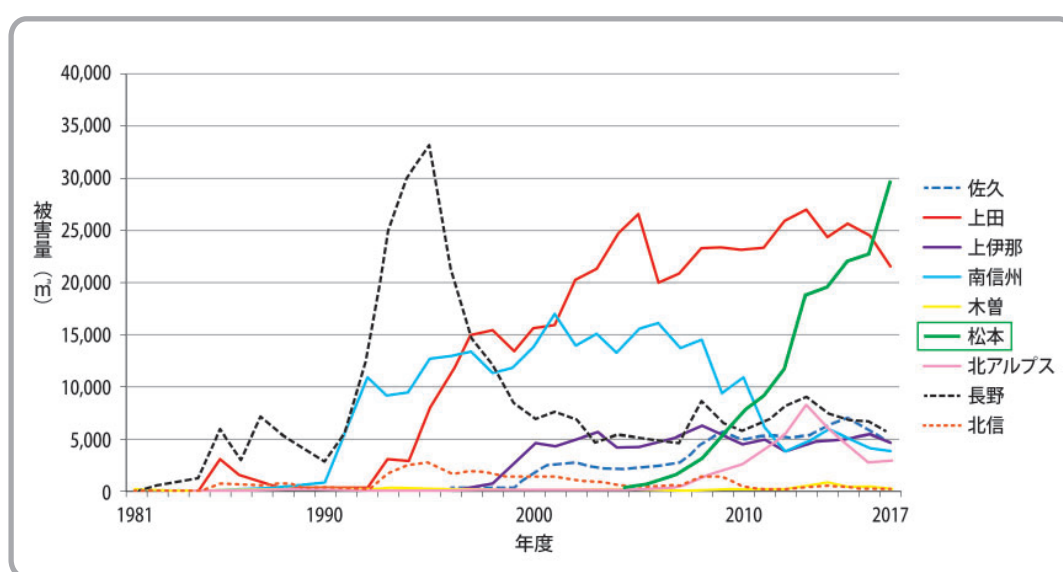


図 2-15 長野県地域振興局別松くい虫被害量の推移

[長野県林務部 森林づくり推進課 2018 年を元に作成]

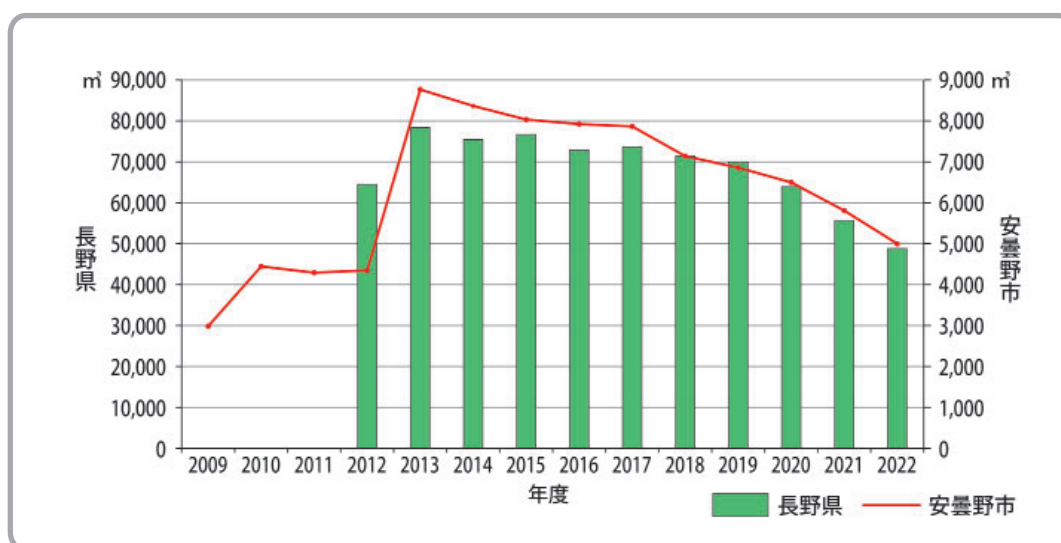


図 2-16 安曇野市のマツ枯れ被害量の推移

[安曇野市耕地林務課 「2021（令和3）年度の松くい虫被害と対策の実施状況について」を元に作成]

マツ枯れ被害の状況を把握するために、欧州宇宙機関（European Space Agency：ESA）が運用しているSentinel衛星のデータを利用してマツ枯れの状況を視覚的にわかりやすく解析してみました。解像度は10mで、使用した画像データは2016年4月6日、2021年8月28日、2022年4月5日のものです。

図2-17に示す2021年8月28日の画像から、盆地を挟んで西側と東側ではマツ枯れの状況が異なることが一目瞭然です。筑北村～松本市四賀地区～松本市街地の北部・東部・南部地域のゾーンが、マツ枯れの著しい区域であることが読み取れます。

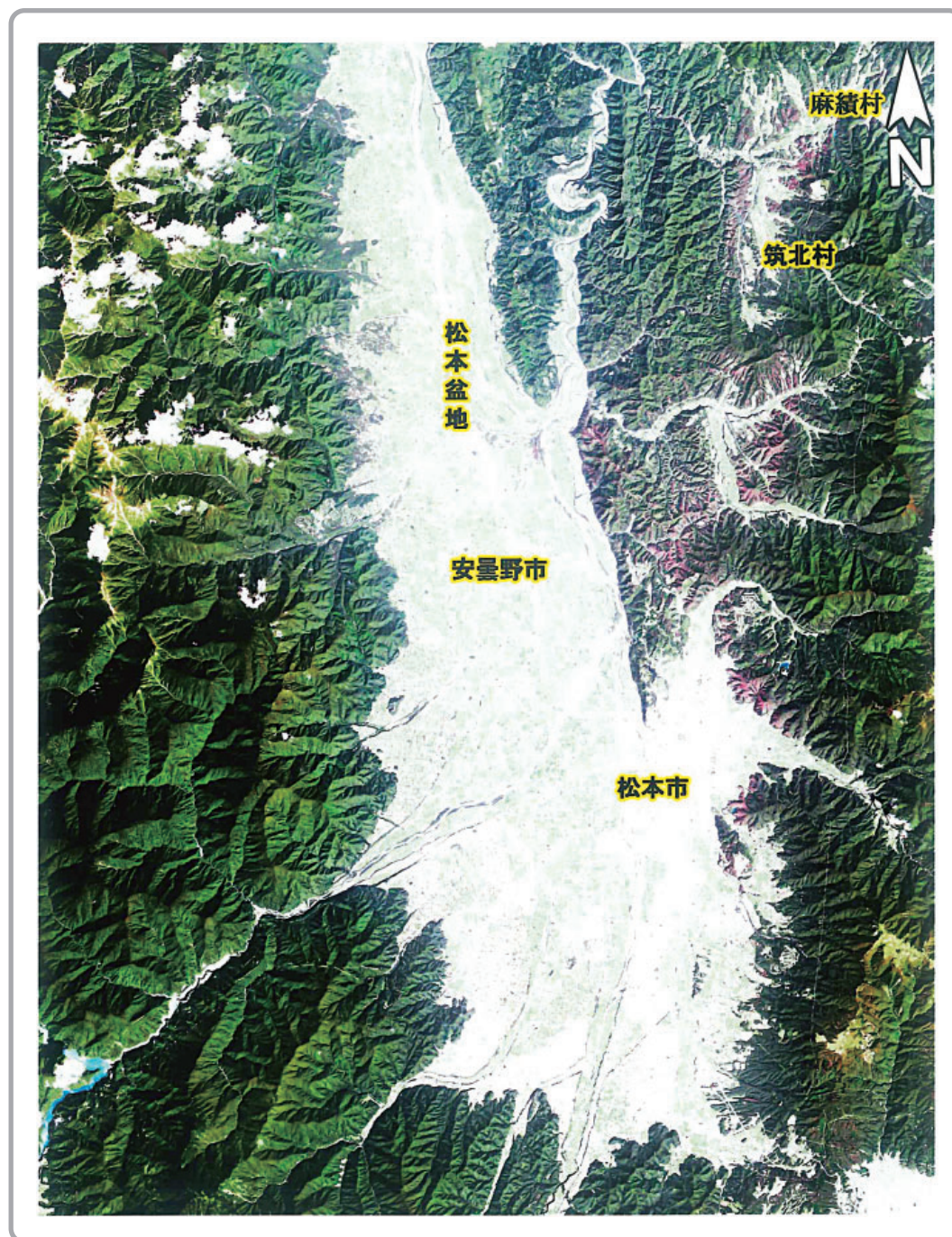


図 2-17 中信地域のマツ枯れ状況

2021年8月28日 暗赤色が深刻なマツ枯れ被害区域
[衛星画像Copernicus esaのsentinel 2A band2,3,4を画像処理]

犀川の東側の領域が広範囲に着色されています。この区域でマツ枯れ被害が著しいことを示しています。一方、松本盆地西側の松川村神戸原、安曇野市穂高有明から穂高牧にかけての着色区域は、未被害材利用のための伐採が広範囲で行われた結果です。

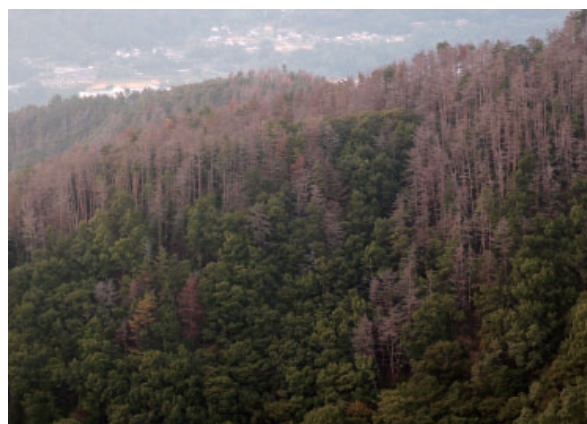
(2) マツ枯れ対策による森林の変化

(1)で述べましたが、この10年間で植生変化が一番大きな区域は、マツ枯れ及び広範囲なアカマツ林伐採地域です。

アカマツ林は二次林や植林による人工林で、やがてコナラなどの広葉樹に遷移して行くと考えられますが、それまでには長い時間がかかります。しかし現在起きている現象は自然遷移ではなく、マツ枯れに伴うアカマツの伐採と植林という人為的な変化です。

豊科・明科地域の犀川より東側では枯れたアカマツの伐採が進んでいます。その跡地には抵抗性アカマツが植林されたり、広葉樹に樹種転換を行っています。穂高有明から穂高牧にかけての伐採跡にはヒノキ等が植林されています。

このような急激なアカマツ林の減少は、そこを繁殖地と利用している猛禽類などに影響を与えるだろうと推測されます。さらに東山では次に述べるニホンジカによる影響が大きく、特に伐採されたアカマツ林の下層の植生はシカの不嗜好植物（ニワウルシ、ハリエンジュ、ヨウシュヤマゴボウなど）が増加しています。こうした植生の変化が生態系にどのような結果として現れるのか、息の長いモニタリングを行っていくことが必要と考えられます。



マツ枯れの様子



長峰山山頂に広がるニワウルシと
ヨウシュヤマゴボウが優占する植生

(3) ニホンジカによる植生の衰退や変化

松本盆地を挟んだ東側の筑摩山地と西側の北アルプス山麓とでは、ニホンジカの生息密度に違いがあり、植生への影響も異なります。

図2-20は長野県による2019年度のニホンジカによる植生への影響調査の植生衰退度図を、安曇野市の区域について拡大編集したものです。松本盆地東側の筑摩山地でニホンジカの生息密度が高く、食圧が強いことが分かります。また、2021年3月策定の長野県第二種特定鳥獣管理計画（第5期ニホンジカ管理）によれば、安曇野市が含まれる北アルプス北部管理ユニットの2019年度の生息密度（中央値）は4.94頭/km²と推定されています。

今回のレッドデータブック改訂に伴う植物調査のときに、北アルプス山麓のニホンジカによる下層植生の食痕状況を調査しました。その結果、安曇野市の北アルプス側では、現在のところニホンジカの食圧により植生が大きく変化した区域は確認できませんでしたが、林道沿い・沢沿いにシカ道があり、食痕を確認しました。5・6月頃には、若芽が成長するところをみはからって食べられている植物が目につきました。ただし、ニホンジカばかりでなく、ニホンザルや他の野生動物も植物を食べるので、本当にニホンジカの食痕かどうかは注意深い観察が必要です。

安曇野市は西側に北アルプスを控えています。高山帯の生態系は脆弱です。南アルプスではニホンジカの進出で高山植生が衰退しましたが、北アルプスでも同様の変化が懸念されます。

また長峰山においても近年、多くの草本植物でニホンジカの食痕が見られるようになり、草原性植物の調査では開花数の減少が確認されています。例えば長峰山山頂草原ではニホンジカの嗜好植物であるユウスゲが生育してはいるものの、開花数は大きく減少しました。その代わりにシカの不嗜好植物（ニワウルシ、ハリエンジュ、ヨウシュヤマゴボウなど）がアカマツ伐採地を中心に増加しています。

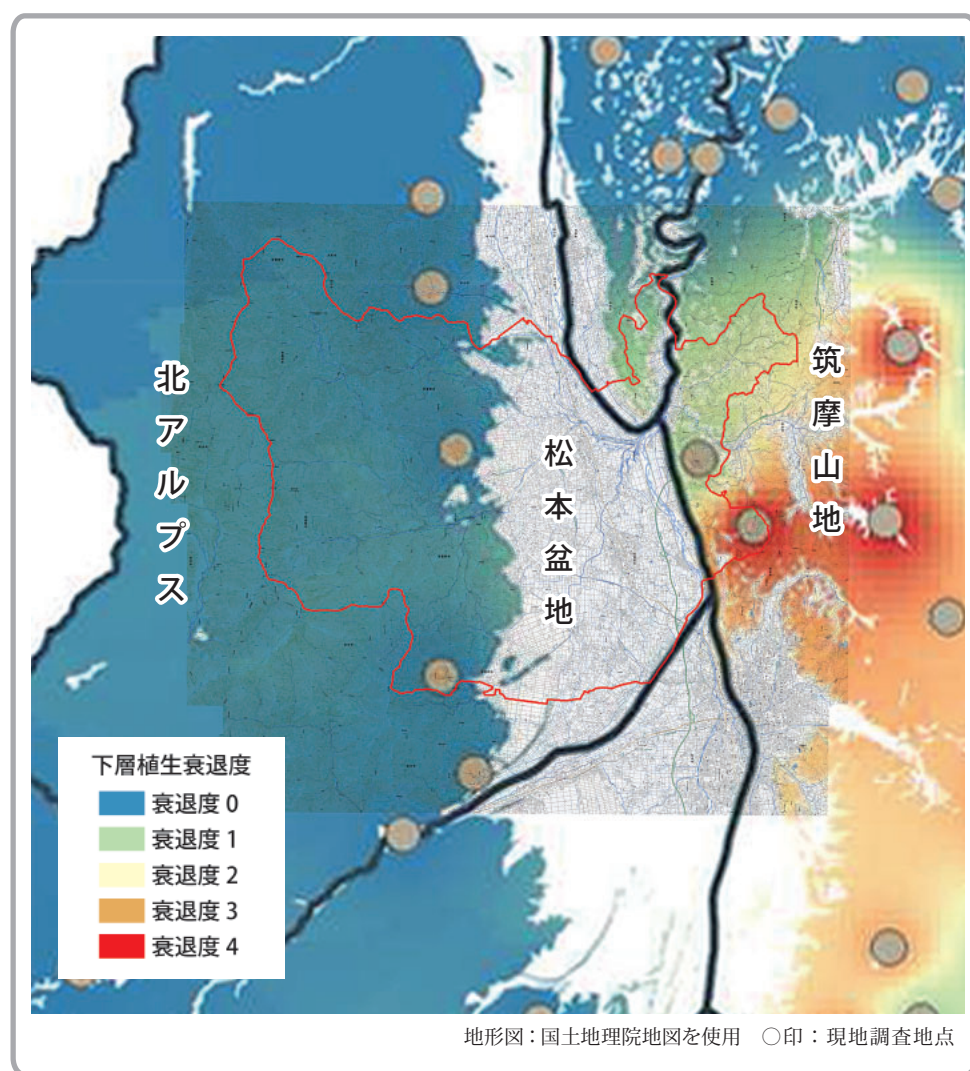


図 2-20 2019 年度の安曇野市におけるニホンジカによる植生衰退度

2021年3月 長野県第二種特定鳥獣管理計画（第5期ニホンジカ管理）

p10. 図4 森林下層植生の衰退度調査 空間補完図（2019年度）を元に作成

衰退度0は植生にほとんど影響はなく、衰退度4はササ類や草本類がほとんど生育していない状態



ソヨゴの幹の食痕
堀金地域大平原 標高1,100m



ハンノキの幹の角研ぎ跡
一ノ沢常念登山口 標高1,210m

(4) 里山の減少と動物相の変化

動物相に大きな変化をもたらしているのが「里山」の荒廃です。一昔前まで人々は森林から燃料や肥料、資材など多くの資源を得て暮らしてきました。雑木は10～20年ほどで伐採され、萌芽更新により再生を繰り返してきたのです。こうした里山の営みは数百年にわたって続き、人々の暮らしを支え自然を育ててきました。それが化石燃料の出現や農業経営の変化、農村の高齢化などにより、持続可能であった里山再生のシステムは立ちいかなくなり、手の入らない耕作地や雑木林は森林化が加速していきました。それと共に野生動物が人里に降りて来るようになり、人間との軋轢^{あつれき}が生じているのは周知のとおりです。今や山裾には電気柵が張り巡らされ、山と里の分断が一層進んでいます。緩衝帯としての里山はすでに機能しなくなっているのです。

また、長峰山山頂に代表される「草原」は、人間が野焼きや草刈りで維持しなければ遷移が進んで森林に戻ってしまいます。かつては牛馬の飼料や刈敷（田畑の堆肥）として草原は人々の暮らしに欠かせない場所でしたが、広範囲にわたる構造改善事業や生活様式の変化と共に衰退していきました。表2-2は安曇野市に生息する希少なチョウ類の一覧です。田中（1988）に基づき区分すると、実に約70%が草原種で、しかも最も危機に瀕している「絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）」と「絶滅（EX）」（表中に色付きで表示）の80%以上が草原種となっていて、草原衰退の影響が色濃く出ています。

表 2-2 安曇野市に分布する絶滅危惧のチョウ類

科 名	種 名	環境省 RL2020	長野県 RL2015	安曇野市 RL2024	生息環境	
					草原	森林
セセリチョウ科	ホソバセセリ			DD	○	
	ホシチャバネセセリ	EN	EN	EX	○	
	タカネキマダラセセリ	NT	NT	VU	○	
	アカセセリ	EN	NT	CR+EN	○	
	ギンイチモンジセセリ	NT	NT	CR+EN	○	
	ミヤマチャバネセセリ		EN	CR+EN	○	
	キマダラセセリ			NT	○	
	コキマダラセセリ			VU	○	
	スジグロチャバネセセリ	NT	NT	NT	○	
	ヘリグロチャバネセセリ		NT	VU	○	
アゲハチョウ科	ヒメギフチョウ	NT	NT	NT		○
	ジャコウアゲハ			NT	○	
シロチョウ科	クモマツマキチョウ	NT	NT	VU	○	
	ミヤマモンキチョウ	NT	NT	NT	○	
	ツマグロキチョウ	EN	EN	CR+EN	○	
	ヤマキチョウ	EN	EN	CR+EN	○	
	ヒメシロチョウ	EN	VU	CR+EN	○	
シジミチョウ科	ウラキンシジミ			NT		○
	ウスイロオナガシジミ			NT		○
	ウラジロミドリシジミ		NT	VU		○
	クロミドリシジミ			NT		○
	ハヤシミドリシジミ			NT		○
	カラスシジミ			NT		○
	ウラナミアカシジミ		NT	NT		○
	ミヤマシジミ	EN	VU	VU	○	
	アサマシジミ中部低地帯亜種	EN	VU	EX	○	
	アサマシジミ中部高地帯亜種	VU	VU	CR+EN	○	
	オオゴマシジミ	NT	NT	CR+EN	○	
	クロシジミ	EN	EN	EX	○	
	ヒメシジミ	NT	N	NT	○	
	オオルリシジミ	CR	EN	CR+EN	○	
	ムモンアカシジミ		NT	NT		○
	クロツバメシジミ	NT	N	NT	○	
タテハチョウ科	コヒオドシ		NT	VU	○	
	ウラギンスジヒョウモン	VU	NT	NT	○	
	ヒョウモンチョウ	VU	NT	CR+EN	○	
	コヒョウモン			NT	○	
	オオウラギンヒョウモン	CR	CR	EX	○	
	ギンボシヒョウモン			NT	○	
	オオイチモンジ	VU	NT	VU		○
	コヒョウモンモドキ	EN	VU	CR+EN	○	
	ヒョウモンモドキ	CR	CR	EX	○	
	フタスジチョウ			CR+EN		○
	オオムラサキ	NT	N	NT		○
	ヒメヒカゲ	CR	EN	CR+EN	○	
	クモマベニヒカゲ	NT	N	NT	○	
	ベニヒカゲ	NT	N	NT	○	
	キマダラモドキ	NT	NT	CR+EN		○
	クロヒカゲモドキ	EN	EN	CR+EN		○
	ツマジロウラジャノメ			VU	○	
	オオヒカゲ		NT	CR+EN		○
	タカネヒカゲ	NT	NT	NT	○	

EX：絶滅 CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類（CR：ⅠA類、EN：ⅠB類） VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 N：留意種

(5) 外来生物の影響

1) 外来種による植物相の変化

外来種が河川敷や人工造成地など人為的影響の大きい場所で密度高く生育する状況は従来から変わりません。現代社会において、河川改修、土地改良、(大規模)開発など土壌を改変する営みは日常的に行われていますが、外来種はこうしたかく乱に強い生態特性をもっており定着しやすい傾向があります。その一方で在来種の生育地は減少しています。

また外来種の種子は、土壌の移動によって拡がり、海外から入ってきた飼料や肥料の中に非意図的に混入している例や緑肥や緑化のために播種されたものが逸出する例も多く、現在進行形で供給されているといえます。このように複層的な要因によって外来種の分布は拡大しています。

なかには昔から「雑草」として認識され普通種として自生していた在来種にかわって、近縁の外来種が増加している例も少なくありません。表2-3では近年市内でも急速に増加していると考えられる外来種の例を示しました。

例えば茎に腺毛のないノミノツヅリは土手などに見られる普通種でしたが、現在は数十年間土地の改変が行われていないような限られた場所でしか確認することができません。近年、乾燥した道端などに多く見られるのはほとんどが外来系統と思われる変種関係のネバリノミノツヅリです。同じく普通種であったクサフジも近年大きく減少傾向にあると考えられ、ノミノツヅリとクサフジは今回の改訂において情報不足(DD)と評価されました。シラホシムグラは2015年に長野県内で生育が新たに報告された外来種ですが、認識されないまま既に市内の多くの場所に広がっていることが分かってきました。イネ科のエノコログサ属の仲間は海外から入ってきたと思われる同種・近縁種と交雑が進み、これまでの在来種の形質とは異なる形質のものが多く見られるようになりました。

生物多様性を保全していくためには、こうした外来種の侵入や拡がりをできる限り把握し、生態やふるまいについて注意深く観察していくことが重要です。同時に、自然度が高く在来種による植生が残っているエリアでは、土壌の改変や外来種の持ち込みなどに対して十分な配慮が求められます。

表 2-3 近年急速に広がっている外来種の例

科	かつて普通に見られた 在来種	近年増加している 近縁の外来種	原産地
マメ科	クサフジ <i>Vicia cracca</i>	ナヨクサフジ <i>Vicia villosa</i> subsp. <i>varia</i>	ヨーロッパ、北アフリカ、 西南アジア
カタバミ科	カタバミ <i>Oxalis corniculata</i>	オッタチカタバミ <i>Oxalis dillenii</i>	北アメリカ
ナデシコ科	ノミノツヅリ <i>Arenaria serpyllifolia</i> var. <i>serpyllifolia</i>	ネバリノミノツヅリ <i>Arenaria serpyllifolia</i> var. <i>viscida</i>	アジア、アフリカ、 ヨーロッパ
アカネ科	ヤエムグラ <i>Galium spurium</i> var. <i>echinospermon</i>	シラホシムグラ <i>Galium aparine</i>	西ユーラシア、地中海 沿岸
イネ科	アキノエノコログサ <i>Setaria faberi</i>	大型のアキノエノコログサ	アメリカ
	コツブキンエノコロ <i>Setaria pallidefusca</i>	『日本イネ科図譜』では左の2種は別種として区別されているが、近年、外来系統の近縁種との交雑が進み、2種の形態が連続し区別が困難になっていると考えられる。	
	キンエノコロ <i>Setaria pumila</i>		



シラホシムグラ（アカネ科）



オッタチカタバミ（カタバミ科）



エノコログサ属の植生

エノコログサ属の仲間は海外から入ってきた同種・近縁種と交雑が進んでいると考えられる

2) 様変わりする安曇野の動物相

物流網の発達や飼育動物などの安易な放棄により、安曇野市内へ外国産の生きものが侵入・定着することが珍しくなくなりました。

哺乳類の代表格はハクビシン（中国原産）で、社寺や民家の屋根裏などで繁殖し農作物にも被害が出ています。また、約20年前から明科東川手周辺でアライグマ（北アメリカ原産）の目撃情報がありましたが、2023年には三郷、堀金の集落域でも相次いで確認されるようになってきました。野鳥ではガビチョウとソウシチョウ（どちらも中国原産）が目新しいところです。ガビチョウは東山や押野山で度々目撃されていて、今後も生息域が広がる可能性があります。これらの種はいわゆる「かご脱け」したものが繁殖したと言われています。

普段覗くことの少ない川や湖沼では驚くほどに外来種が増加しています。例えば小河川ではコモチカワツボ（ニュージーランド原産）が川底の石にびっしりと付着しているのを見かけますし、シジミ貝（マシジミ）によく似た、中国などから輸入されたタイワンシジミがコンクリート製の水路の中でも繁殖し、全市に広がっています。安曇野湧水群のわさび田ではおびただしい数のフロリダマミズヨコエビ（北アメリカ原産）が見られます。また、明科のため池ではウシガエル（北アメリカ原産）が繁殖しており、オタマジャクシは大人の手のひらほどもあり大食漢です。ウシガエルは明科から南進し、豊科南穂高の湧水池まで生息域を広げています。ブルーギルや、オオクチバスなどの北アメリカ原産の肉食魚類も、湖沼や河川での確認例が増えています。

昆虫などの小生物は枚挙に暇がありません。サシガメの最大種であるヨコヅナサシガメ（中国原産）は、公園のサクラなどで越冬する集団をよく目にしますし、輸入マツ材に紛れて侵入したといわれるマツヘリカメムシ（北アメリカ原産）も、民家の庭先で見つかるようになりました。マツノザイセンチュウ（北アメリカ原産）は100年以上も前に国内に侵入した外来種です。この種が引き起こすマツ枯れ被害は北海道を除く全国に及び、現在も終息の見通しは立っていません。時として外来種の移入が私たちの生活に甚大な影響をもたらす典型と言えるでしょう。近年、注目された外来種としてはアカボシゴマダラ（中国原産）やアメリカピンクノメイガ（北アメリカ原産、p.162参照）があります。このうちアカボシゴマダラは関東地方で人為的に放蝶されたものが繁殖し、中部や北陸地方へと分布を広げています。安曇野市でも2021年に確認され、定着がほぼ確実となっています。

外来種と相まって増えているのが、温暖な地域の種が近年の地球温暖化で生息域が広がり定着するケースです。その代表種がツマグロヒョウモンです。1995年に長野県で初めて三郷小学校の庭で越冬幼虫が発見されました。幼虫はスミレ類で育ちますが、特に園芸種として持ち込まれ雑草化した帰化植物のアメリカスミレサイシンを足掛かりに生息域を広げました。今やチョウ類の中では普通種の一つとなっていて、11月を過ぎても庭先を飛んでいます。また、成虫越冬のウラギンシジミは、これまで寒い安曇野の冬を乗り切ることができませんでしたが、近年の暖冬下で春先に越冬した成虫が見られるようになりました。大型のキリギリスの仲間で、茶の害虫として知られるサトクダマキモドキは、2004年に松本市の「ラーラ松本」付近で発見されて以降、犀川沿いに生息域を広げ、押野山一帯でも見かけるようになりました。

また、在来植生や農作物に被害が広がるニホンジカの生息域拡大の背景にも温暖化の影響があるとされています。



ガビチョウ



ソウシチョウ



ヨコヅナサシガメ



ツマグロヒョウモンの幼虫

3

安曇野市の
絶滅のおそれのある野生生物



3.1 レッドリスト種とは

レッドリスト種は、安曇野市に生息・生育している野生生物のうち、なんらかの要因で個体数や分布域が減少し、絶滅のおそれが高まっている種です。

レッドリスト種に選定された種は、このままの状態が続くと将来的には個体数や分布域が更に減少するだけでなく、安曇野市から絶滅してしまう可能性があります。それは、安曇野市の自然環境が悪化していくことを意味します。

これらのレッドリスト種の減少を防ぐことは、安曇野市の自然環境を守っていくことにつながります。

【レッドリスト種の選定基準】

2014年版のレッドリストでは、定性的要件での評価を基本とし、各種調査記録や委員・協力者の長年の調査データから掲載種が選定されました。本改訂において掲載種の再評価及び新規追加の検討を行うにあたっては、現状では定量的な評価が可能な種が少ないことから、定性的要件での評価を踏襲しました。ただし、植物については、標本資料が一定数集積されたことから、可能な限り定量的な評価を行いました。

また、安曇野市で記録がある種のうち、環境省や長野県のレッドリストに該当する種は、巻末に一覧を掲載しました。

選定時の観点

- 絶滅が危惧される程度(カテゴリー)は、表3-1に示す区分を用いました。このカテゴリーは、環境省の第4次レッドリストと長野県のレッドリスト(植物編2014年、動物編2015年)に準拠しました。
 - 選定の対象は、原則として安曇野市内において文献や現地調査などで確認記録のある野生生物としました。ただし、選定作業にあたっては、安曇野市だけでなく周辺地域や県内及び国内の生息状況や記録も考慮しました。
 - 鳥類では、シギ類など、移動の際に安曇野市を中継地として利用する鳥は除きました。
 - 前回のレッドリストに選定されている種であっても、記録が古い文献情報のみである等、市内での記録に確実性のない種は、評価対象から除外しました。
 - 評価は2023年時点での情報を基に行いました。
-

表 3-1 安曇野市版レッドリストのカテゴリー評価基準

カテゴリー	評価基準
絶滅 EX (Extinct) 安曇野市内において既に絶滅したと考えられる種	過去に安曇野市に生息・生育したことが確認されており、国内での生息・生育状況のいかんを問わず、市内においては飼育・栽培下を含め、既に絶滅したと考えられる種。
野生絶滅 EW (Extinct in the Wild) 安曇野市内において飼育・栽培下でのみ存続している種	過去に安曇野市に生息・生育したことが確認されており、国内での生息・生育状況のいかんを問わず、市内において飼育・栽培下では存続しているが、野生では既に絶滅したと考えられる種。 【確実な情報があるもの】 ① 信頼できる調査や記録により、既に野生で絶滅したことが確認されている。 ② 信頼できる複数の調査によっても、生息・生育が確認できなかった。 【情報が少ないもの】 ③ 過去約50年間に、信頼できる生息・生育の情報が得られていない。
絶滅危惧Ⅰ類 CR+EN (Critically Endangered and Endangered) 安曇野市内において絶滅の危機に瀕している種	次のいずれかに該当する種。 【確実な情報があるもの】 ① 既知の全ての個体群で、危機的水準にまで減少している。 ② 既知の全ての生息・生育地で、生息・生育条件が著しく悪化している。 ③ 既知の全ての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。 【情報が少ないもの】 ⑤ それほど遠くない過去(30～50年)の生息・生育記録がないものの、その間信頼すべき調査が行われておらず、現在も生息している可能性のある種。
絶滅危惧Ⅱ類 VU (Vulnerable) 安曇野市内において絶滅の危険が増大している種	次のいずれかに該当する種。 【確実な情報があるもの】 ① 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ② 大部分の生息・生育地で生息・生育条件が明らかに悪化しつつある。 ③ 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。
準絶滅危惧 NT (Near Threatened) 安曇野市内において存続基盤が脆弱な種	生息・生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断される種。具体的には、分布域の一部において次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがある種。 ① 個体数が減少している。 ② 生息・生育条件が悪化している。 ③ 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 ④ 交雑可能な別種が侵入している。
情報不足 DD (Data Deficient) 安曇野市内において評価するだけの情報が不足している種	環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行しうる次のいずれかの要素を有しているが、生息・生育状況をはじめとして、カテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ① どの生息・生育地においても生息密度が低く希少である。 ② 生息・生育地が局限されている。 ③ 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。 ④ 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。

①植物の選定基準

植物については、レッドリスト見直しにあたり、可能な限り定量的な評価を行うこととし、その評価基準を設けました。

評価基準は、個体数、集団数、生育環境の減少傾向、人為的圧力の程度、県内分布の5項目をそれぞれ表3-2に示す基準により4段階で評価し、更に地域固有性や外来種による悪影響のリスクに関する補正を加えて、その合計点をもとに判定しました(表3-2、表3-3)。なお、本評価基準は「名古屋市版レッドリスト2020」の維管束植物で用いられた内容を参考に設定しました。

表 3-2 安曇野市版レッドリストで用いる評価基準 (植物)

評価点	4	3	2	1
個体数	1～2	10 未満	100 未満	100 以上
集団数*1 (標本メッシュ数)	1	2～3	4～6	7 以上
生育環境の減少傾向	著しく減少 ・低層湿原(自然湿地) ・ため池 ・二次草原(里草地、堤防の草地) ・管理履歴の長い農耕地(湿田)	やや減少 ・湧水地および周辺の水路 ・河川氾濫原 ・やせ山、岩場 ・亜高山帯～高山帯	増減なし ・中間的環境	増減なし ・かく乱地 ・過栄養水域など
人為的圧力等の程度	極めて強い ・極度に強い開発圧または採集圧がある ・開発圧も採集圧もあり、少なくともどちらかが強い ・ニホンジカによる食圧が極めて強い	強い ・強い開発圧または採集圧がある ・開発圧も採集圧もある ・ニホンジカによる食圧が強い	あり ・開発圧(採取を含む)または採集圧(可能性を含む)がある ・ニホンジカによる食圧がある	なし
県内分布*2 (標本メッシュ数)	安曇野市以外の確認区画0～2	3～9	10～29	30 以上
補正項目	・固有種、著しい隔離分布 +2 ・全国的に少なく、長野県が分布の限界、準固有種 +1 ・同種や近縁の外来種の置き換わりや交雑による減少 +1			

*1) 現時点における標本点数・分布から勘案した。安曇野市のメッシュの大きさは1km²。

*2) 長野県植物誌における標本点数・分布から勘案した。長野県植物誌のメッシュの大きさはおよそ東西5km×南北4.6kmで、全574メッシュ。

表 3-3 植物におけるカテゴリーの基準

カテゴリー	安曇野市の基準（評価点）
EX	安曇野市内において、本来の生育地では既に絶滅したと考えられる種
CR+EN	表3-2の評価点の合計が14以上
VU	表3-2の評価点の合計が12～13
NT	表3-2の評価点の合計が11
DD	評価するだけの情報が不足している種（今後、生育条件の変化に伴い個体数の減少が懸念されるため留意を要する種を含む）

②動物の選定基準

動物については、レッドリスト見直しにあたり定性的な評価を行うこととしました。2014年以降の文献や現地調査の結果に加え、委員及び協力者の観察経験等をもとに、個体数、個体数の増減、生息地の数、生息環境の減少傾向、近隣地域での確認状況を考慮して評価しました。

③分類や和名について

本書に用いる分類や和名については、原則として以下の文献に準拠しました。

植物：「長野県植物目録」（長野県植物研究会, 2017）

哺乳類：「世界哺乳類標準和名目録」（日本哺乳類学会分類群名・標本検討委員会, 2018）

鳥類：「日本鳥類目録改訂第7版」（日本鳥学会, 2012）

爬虫類：「日本産爬虫両生類標準和名リスト」（日本爬虫両棲類学会, 2023）

両生類：「日本産爬虫両生類標準和名リスト」（日本爬虫両棲類学会, 2023）

魚類：「日本産魚類全種目録」（本村浩之, 2020）

昆虫類：「日本昆虫目録第1巻～第9巻」（日本昆虫目録編集委員会, 2016～2022）

「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省, 2023）

その他無脊椎動物（※貝類）：「長野県陸産・淡水産貝類誌」（飯島國昭, 2018）

国内に複数の亜種が存在する昆虫類について、市内に一つの亜種しか生息していない場合は、和名から亜種名を省略して掲載しました。アサマシジミのように、市内に複数の亜種が生息する種については、種和名の後ろに亜種名を記載しました。また、一つの亜種しか生息していない種でも、亜種に固有の和名がある場合（シナノエゾハイイロハナカミキリなど）は、その名称を使用しました。

また、上記の分類に従うことで、2014年版から和名に変更が生じた種は、2014年版での和名を併記しました。

④記録の根拠となる参考文献

参考文献の一覧は資料編に示しました。リストには2014年以降の記録の文献No.を掲載しました。2014年以前の記録については、『安曇野市版レッドデータブック2014』を併せて参照ください。

3.2 レッドリスト種

(1) レッドリストの選定状況

安曇野市に生息・生育している野生生物のうち、個体数や分布域が減少している種(レッドリスト種)として、植物320種、動物397種の計717種を選定しました。

選定した安曇野市版レッドリスト2024を次ページ以降に示します。リストには、絶滅のおそれが高くなった、もしくは絶滅した理由として考えられる要因(以下、「減少要因」とする。)を併せて示しました。

表 3-4 安曇野市版レッドリストの選定状況

分類群		カテゴリー												合計	
		絶滅 EX		野生絶滅 EW		絶滅危 惧Ⅰ類 CR+EN		絶滅危惧 Ⅱ類 VU		準絶滅 危惧 NT		情報不足 DD			
		2014	2024	2014	2024	2014	2024	2014	2024	2014	2024	2014	2024		
植物		32	11	0	0	95	94	92	83	104	69	19	63	342	320
動物		8	17	3	3	42	53	72	83	178	182	29	59	332	397
	哺乳類	1	1	0	0	0	3	2	2	8	10	3	3	14	19
	鳥類	0	0	0	0	9	14	5	5	10	8	9	8	33	35
	爬虫類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	2	3
	両生類	0	0	0	0	0	0	1	2	5	4	0	1	6	7
	魚類	0	0	3	3	1	1	2	2	4	5	1	1	11	12
	昆虫類	7	16	0	0	31	32	61	71	140	144	13	41	252	304
	その他無脊椎動物	0	0	0	0	1	3	1	1	11	11	1	2	14	17
合計		40	28	3	3	137	147	164	166	282	251	48	122	674	717

【安曇野市版レッドリストにおける絶滅のおそれが高まった要因(減少要因)】

第1の危機(人間活動や開発による危機)

1.森林伐採、2.河川開発、3.池沼開発、4.湿地・湧水地開発、5.土地開発、
6.土地改良(圃場整備など、農地の整備を含む)、7.道路工事、8.ダム建設、9.園芸採取、
10.乱獲・密猟・不法採取、11.踏みつけ

第2の危機(人間活動の縮小による危機)

12.農業・森林管理停止、13.動物食害

第3の危機(人間により持ち込まれたものによる危機)

14.水質や土壌の汚濁・汚染(農薬等の過剰利用も含む)、15.外来生物、16.遺伝子交雑

その他の要因等

17.気候変化、18.産地局限、19.その他、20.不明

(2) 安曇野市版レッドリスト 2024

1 植物

・カテゴリーの変動
 ↑：ランクアップ ◇：DDから移行 ○：新規追加
 ↓：ランクダウン ◆：DDへ移行

■絶滅 (EX)

・2014年以降の記録
 ●：あり ○：あり

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
サトイモ	ヒンジモ		VU	CR	2,3,4,14				86	
ラン	アリドオシラン			NT	12				87	
イネ	セトガヤ			EN	5,6,7				85	
キンポウゲ	ノカラマツ		VU	VU	5,9,12				77	
アリノトウグサ	フサモ			NT	2,5,6				81	
アブラナ	ハナハタザオ		CR	EX	5,12				79	
サクラソウ	ユキワリソウ			EN	1,5,12,18				82	
リンドウ	イヌセンブリ		VU	EX	5,6,12				83	
タヌキモ	ホザキノミミカキグサ			EN	4,5,6,12,14				84	
セリ	イブキボウフウ				5,12				82	
	イブキゼリ				1,12,18				82	

■絶滅危惧I類 (CR+EN)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
ヒカゲノカズラ	ミズスギ			CR	18				87	
サンショウモ	オオアカウキクサ	↑	EN	EN	2,4,6,14	●		○	122	
ヒメシダ	ヒメワラビ				1,12,18				88	
ウラボシ	オオクボシダ			NT	1,12,18				88	
サトイモ	イナヒロハテンナンショウ		CR	CR	1,12,18				112	
	カミコウチテンナンショウ	○	VU	EN	9,10,18	●	190			81
オモダカ	アズミノヘラオモダカ		EN	CR	6,14,18	●	169	○	107	
トチカガミ	トチカガミ		NT	EX	6,14,18				108	
	セキシウモ			EN	2,4,14				108	
ヒルムシロ	イトモ	↑	NT	VU	2,12,14,15				147	
	フトヒルムシロ				2,3,6,12	●	164,169		109	
	ホソバミズヒキモ	↑		NT	2,14				171	
ユリ	ササユリ			NT	1,5,9,12,18	●	170		109	

■ 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
ラン	アケボノシュスラン			NT	1,5,12	●		○	117	
	ヒメミヤマウズラ			NT	1,5,9,12				118	
	ホザキイチヨウラン			NT	1,5,9,12				118	
	コケイラン			NT	1,5,9,12	●	157	○	118	
	ヤマサギソウ	○			5,12	●		○		81
	タカネサギソウ			VU	7,11	●			119	
	ノヤマトンボ (2014版: オオバノトンボソウ)	↓		NT	1,4,5,12	●		○	87	
	ヤマトキソウ	○		EN	9,19	●		○		81
アヤメ	ノハナショウブ	↑			1,5,9,12	●			174	
ススキノキ	ユウスゲ	○		NT	5,6,12,13	●	170,177	○		82
ホシクサ	イトイヌノヒゲ				5,12,18				110	
	シロイヌノヒゲ				5,12				110	
カヤツリグサ	オニスゲ				1,4,12,18	●		○	113	
	アゼナルコ			EN	4,5,11	●		○	114	
	ヤチカワズスゲ				1,4,12	●			114	
	アブラシバ				1,12				115	
	ヌマガヤツリ	↑		EN	2,4,6	●	157,159	○	181	
	ヌマハリイ				2,3,4,14				116	
	ヒンジガヤツリ	↓			5,6,14	●		○	86	
	イトイヌノハナヒゲ				4,5,12				116	
	コイヌノハナヒゲ				4,5,12				117	
	エゾアブラガヤ	○			3,4	●		○		82
イネ	ヒロハノコヌカグサ			EN	1,13				111	
	オガルカヤ	↑			1,5,12				175	
	スズメガヤ	○			2,4,11	●	159	○		82
	ミサヤマチャヒキ				5,12,18	●		○	111	
	エゾノサヤヌカグサ	↓			4,5,6	●		○	85	
	オオヒゲナガカリヤス モドキ				4,12,18				111	
	ヒエガエリ	○		EN	2,5,12	●		○		83
	ウシクサ			EN	4,5,6,12				112	
	メガルカヤ	○			5,12	●		○		83

■ 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
キンボウゲ	アズミトリカブト			CR	5,12,18				90	
	シロウマレイジンソウ				5,12,18				91	
	フクジュソウ			NT	9,11,12,18	●		○	91	
	セツブンソウ		NT	VU	1,9,10,12,18	●		○	92	
	オキナグサ		VU	EN	9,12	●	170,177		92	
	キンバイソウ			NT	12,18				92	
ボタン	ヤマシャクヤク		NT	VU	1,9,10,11,18	●		○	93	
マンサク	マルバノキ				1,9,18	●			94	
スグリ	エゾスグリ			CR	1,2,7,18				95	
ユキノシタ	シコタンソウ				7,11,18				95	
アリノトウグサ	アリノトウグサ				1,12,18	●	157,169		99	
	ホザキノフサモ	↑			2,14	●		○	162	
マメ	モメンヅル	↑		NT	1,5,12	●			129	
	イワオウギ				11,18				96	
	マキエハギ				5	●	164,169	○	97	
	ミヤコグサ	↑			2,5,15	●		○	159	
バラ	イワキンバイ				1,18				96	
クロウメモドキ	クロカンバ				1,12				98	
イラクサ	ヤマトキホコリ				1,2,12,18				89	
ヤナギ	エゾヤナギ			EN	2,8,18	●		○	89	
ミソハギ	ヒメミソハギ			DD	6,12,14,15	●		○	99	
	ミズキカシグサ		VU	DD	6,12,14				99	
タデ	ギンギン	○			4,15,16	●	159	○		83
	ノダイオウ	↑	VU	N	2,4	●	159	○	123	
モウセンゴケ	モウセンゴケ	↓			5,12	●			78	
ツツジ	ジムカデ				11	●			101	
アカネ	オオアカネ				6,12	●		○	101	
オオバコ	アワゴケ	○			5,12					84
	サワトウガラシ	○		NT	6,12	●	169	○		84
	ヒヨクソウ	↑		NT	1,5	●		○	168	
	イヌノフグリ		VU	VU	6,12,14,15				104	
	カワヂシャ		NT	NT	2,4,15,18	●	170,171	○	104	
ゴマノハグサ	オオヒナノウスツボ			NT	1,12				103	

■ 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
アゼナ	アゼナ	○			6,12	●		○		84
シソ	ムシャリンドウ		VU	VU	5,9,10,13	●		○	102	
ハマウツボ	オカウツボ				2,18				104	
タヌキモ	ミミカキグサ			VU	1,4,5				105	
キツネノマゴ	ハグロソウ	↑		VU	1,5,12	●		○	141	
モチノキ	フウリンウメモドキ				1,12				98	
キキョウ	フクシマシャジン	↑			1,5,10	●	177		143	
	ミゾカクシ				6,14	●		○	105	
	キキョウ	↑	VU	NT	5,9,12	●	177	○	143	
キク	ヒメヨモギ(在来)	○			5,12,15,16	●		○		85
	ヤチアザミ	○			6,12	●		○		85
	ヤナギタンポポ	↑			12	●		○	170	
	カセンソウ				2,4,6	●	173	○	106	
	タカサゴソウ		VU	VU	5,12	●		○	106	
	キクアザミ	↓			5,12	●		○	85	
スイカズラ	マツムシソウ	↑			5,9	●		○	142	
セリ	ムカゴニンジン	↑			4,5,12,18	●		○	136	

■ 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
ヒカゲノカズラ	ヒメスギラン				1,5,12				119	
ハナヤスリ	ヤマハナワラビ				1,5,12				120	
トクサ	イヌスギナ			NT	5,11	●		○	119	
コバノイシカグマ	フジシダ				1,2,5,12	●			120	
イワデンダ	ウスヒメワラビモドキ	○			1,5,7,8	●	157	○		85
	オオヒメワラビ				1,2,7,12				121	
ウラボシ	カラクサシダ				1,5,12				121	
	エゾデンダ				1,5,12	●			121	
	ビロードシダ				1,5,12				122	
ウマノスズクサ	ウマノスズクサ			VU	2,4,5,7,8,15	●	184		125	
サトイモ	ヒトツバテンナンショウ	○		NT	1	●	157	○		86
	ザゼンソウ	↓			1,4,12,18	●	157	○	113	

■ 絶滅危惧II類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
オモダカ	ウリカワ			VU	6,12,14				146	
ヒルムシロ	ヒルムシロ				2,6,12,14,15				147	
	ヤナギモ	↑		VU	2,14	●		○	172	
ラン	イチヨウラン	↑		NT	1,5,12	●			183	
	カモメラン		NT	EN	9				149	
イグサ	ヒロハノコウガイゼキ ショウ				2,12	●		○	148	
カヤツリグサ	ヒナガヤツリ	↓			6,12,14	●		○	115	
	シズイ			VU	4				149	
イネ	スズメノテッポウ(水 田型)	○			6,12	●	159	○		86
	コウボウ	○			6,12	●		○		86
	カズノコグサ				2,4,6,12,14	●		○	148	
	スズメノカタビラ	○			6,12,15,16	●	159,177,178, 189	○		87
	カニツリグサ(在来)	○			5,12,15,16	●	157,159,177, 178,179,183	○		87
ヤマグルマ	ヤマグルマ				1,10,12	●			124	
スグリ	ザリコミ				1,5	●	177		127	
ユキノシタ	ハナネコノメ			VU	1,2,5	●	157	○	127	
	ボタンネコノメソウ	↓		NT	1,9	●		○	94	
ベンケイソウ	ツメレンゲ		NT	NT	2,8,15	●	170,179,184	○	126	
マメ	クサネム				2,4,6,12	●	159	○	128	
	ホドイモ				1,5,12	●	157	○	129	
	カワラケツメイ	○			2,5,12	●		○		87
	イヌハギ	↑	VU	N	2				158	
	オヤマノエンドウ				11	●			130	
	ツルフジバカマ	○			5,6,7,12	●	177	○		88
	ヨツバハギ	○			5,6,7,12	●	177	○		88
	ヤブツルアズキ				5,12	●		○	130	
カバノキ	チョウセンミネバリ	○			1,7,8	●	157	○		88
ドクウツギ	ドクウツギ				2,4,15	●		○	131	
ウリ	ゴキヅル				2,4,14	●	159	○	135	
カタバミ	オオヤマカタバミ		VU	NT	1,12	●		○	130	
トウダイグサ	ニシキソウ			VU	5,7,14,15				131	

■ 絶滅危惧II類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
ヤナギ	オオタチヤナギ	↓			2	●	157,173	○	77	
スマレ	サクラスマレ				1,5,12				133	
	コスミレ				1,5,12				134	
	マルバスマレ				1,5,12				134	
	アケボノスマレ				1,5,12	●		○	135	
	マキノスマレ			NT	1,5,12	●	157	○	134	
オトギリソウ	ミズオトギリ	↑			4,5	●		○	156	
アカバナ	ウスゲヤナギラン	○			13	●		○		89
	ヒメアカバナ				1,2,4,5	●		○	135	
	オオアカバナ	○	VU	CR	4	●		○		89
ムクロジ	メグスリノキ				1,5,10,12	●	178		132	
アオイ	カラスノゴマ	↑		NT	5,7	●		○	161	
アブラナ	エゾハタザオ				1,5,6				125	
	キバナハタザオ	↑			5	●	177		157	
ナデシコ	ノミノツヅリ(狭義)	○			6,12,15,16	●	157,159,178	○		89
	シナノナデシコ				1,7,12,15	●	177		123	
アカネ	ヒメヨツバムグラ				1,5,9,12	●		○	137	
リンドウ	ハナイカリ	↑			5,12	●		○	165	
	アケボノソウ				1,4,5,9,12	●	179		136	
	センブリ			NT	1,5,10,12	●	170,177		137	
キョウチクトウ	スズサイコ	↑	NT	NT	6,12,14	●	177,184	○	165	
アゼナ	アゼトウガラシ			NT	6,12,14	●		○	141	
シソ	メハジキ			NT	2,4,5	●		○	137	
	キセワタ		VU	N	2,5,12				138	
	シロネ				2,3,4,5	●	177		138	
	ヒメシロネ				2,3,4,5	●		○	139	
	エゾシロネ				2,3,4,5	●		○	139	
	キバナアキギリ				1,5,12				140	
	ニガクサ				6,12,14	●	159	○	140	
ハマウツボ	ケヤマウツボ	○		EN	1,7	●	178	○		90
	ヒキヨモギ			NT	2,5	●	173	○	141	
キキョウ	サワギキョウ	↑			1,5,12	●		○	169	
キク	ムカシヨモギ				1,2,5				143	

■ 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
キク	サワヒヨドリ				2,4,6	●		○	144	
	カワラニガナ		NT	VU	2,8,18	●	159,170,173, 178,184	○	144	
	シラネアザミ				1,5,12				144	
	タムラソウ				5,9,12	●	164,169,177	○	145	
	コウリンカ		VU	N	5,9,12	●	177	○	145	
スイカズラ	ナバナ				1,5,9	●		○	142	
	オミナエシ				1,4,5,9	●	177	○	142	

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
ヒカゲノカズラ	コスギラン				11	●			150	
ハナヤスリ	アカハナワラビ	↓			1,5,12	●		○	120	
チャセンシダ	チャセンシダ				5				151	
イワデンダ	テバコワラビ		VU	N	4	●		○	151	
サトイモ	ヒメザゼンソウ	↓			1,4,12,18	●	157		113	
チシマゼキショウ	イワショウブ				1,11	●			173	
ヒルムシロ	エビモ	○			4,14	●		○		90
ユリ	アマナ			VU	5,6,12	●	161,169,170, 177,184	○	174	
	カタクリ				1,5,9,12	●	169,170,177, 184	○	172	
ラン	ギンラン	↓		NT	1,5,12	●	157,159,162, 169,170,177, 178,179	○	117	
	ササバギンラン				1,5,9,12	●	177,179	○	182	
	エゾスズラン				1,5,12				183	
	ジンバイソウ				1,5,12	●		○	183	
	ネジバナ				1,5,9,12	●	170,179,184	○	184	
	ショウキラン			VU	1,5,12				184	
アヤメ	アヤメ				9,12	●	169	○	174	
ツユクサ	イボクサ				6,18				175	
ガマ	ナガエミクリ	○	NT	EN	2,14	●	170	○		90
	コガマ				2	●		○	178	
イグサ	イトイ				1				175	

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
カヤツリグサ	ウキヤガラ				2,3,4,18	●	159		182	
	マツバスゲ				4				179	
	ハリガネスゲ				4	●	169		179	
	ミヤマジユズスゲ				1,5,12	●		○	179	
	コタヌキラン				5				180	
	アズマスゲ	○			1,5,7	●		○		91
	オタルスゲ				6,7,11	●	157	○	180	
	タカネマスクサ				2,4	●	169	○	180	
	オオカワズスゲ	↓			5,12	●	157,159	○	149	
	アオガヤツリ	↓		NT	4	●		○	115	
	ハリイ				2,4,6	●		○	181	
	アゼテンツキ				6,7,14	●		○	181	
	クロアブラガヤ				1,4,5,12	●	157	○	182	
イネ	カラフトドジョウツナギ				5				176	
	ヌマガヤ				12	●		○	177	
	アワガエリ			CR	6,14				177	
ケシ	ツルケマン		EN	EN	1,5				156	
	ヤマキケマン				4,5				156	
キンポウゲ	キクザキイチゲ	↓			1,5,9,12	●	169,178	○	124	
	アズマイチゲ				1,5,9,12	●	169,170,178	○	154	
	センニンソウ	↓			2,4,5	●	159	○	124	
	バイカモ				2,4,6,15	●	159,169,170,171,181,184	○	155	
ユキノシタ	チシマネコノメソウ				4				157	
マメ	サイカチ			NT	2	●	157,177	○	158	
	オオバクサフジ	○			5,6,7,12	●	177,183	○		91
クロウメモドキ	ケンボナシ				1,5,12				161	
ブナ	イヌブナ	↓			1	●		○	122	
ニシキギ	オオシラヒゲソウ	○			9,10	●	162			91
ヤナギ	ケショウヤナギ			NT	2,8,15,18	●	172		152	
ミソハギ	ミソハギ				4,6,9	●	169	○	162	
ムクロジ	ホソエカエデ				1,5,12	●	169	○	159	
	オオイタヤメイゲツ	↓			1,5,12	●		○	132	

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
ニガキ	ニガキ				1,5,12				159	
アブラナ	マルバコンロンソウ	↓			1,2,5	●		○	126	
ナデシコ	タガソデソウ		VU	NT	1,5,9,12	●	157,169,173	○	152	
	タカネナデシコ				11	●			153	
	ワダソウ				1,5,12	●	157,170	○	153	
ヒユ	カワラアカザ				2,8,15	●	157,171	○	154	
ツツジ	ハダカシャクジョウバナ (2014版:ハダカシャク ジョウソウ)				1,5,12				164	
	ホンシャクナゲ				1,5,9,12	●	162,171,179, 181		164	
	ヒカゲツツジ				1,9	●	173,179,181	○	165	
リンドウ	ホソバノツルリンドウ	○	VU	NT	19	●	162	○		92
ムラサキ	エゾムラサキ			VU	1,5,12				166	
シソ	コシロネ				4	●			167	
	ツルニガクサ				1,5,12	●		○	168	
ハマウツボ	タチコゴメグサ				12	●		○	168	
モチノキ	ウメモドキ				1,5,9,12	●		○	160	
キキョウ	シデシヤジン				1,5,12				169	
キク	コヤブタバコ				1,5,12	●		○	169	

■ 情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
ショウブ	ショウブ	◆			4,6,12	●	157,169		177	
サトイモ	ヒメウキクサ	○		CR	4,14	●	157	○		92
	ムラサキコウキクサ	◆		CR	2,3,6				86	
オモダカ	アギナシ	◆	NT	EN	6,14				171	
トチカガミ	クロモ	◆		CR	2,3,4,6,14,15	●	179		147	
ヒルムシロ	コバノヒルムシロ	◆	VU	VU	2,4,14				108	
ラン	カキラン			NT	5,6				188	
	マツラン (2014版:ベニカヤラン)		VU	CR	5,9,12				190	
	ミズトンボ		VU	VU	4,5,12				188	
	ミズチドリ			NT	4,5,12				189	

■ 情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
ラン	マンシュウヤマサギソウ			VU	4,5,12				189	
	ミヤマチドリ			EN	1,5,12				189	
	ガッサンチドリ		EN	EN	5,12				190	
	トキソウ		NT	VU	5,9,12				190	
キジカクシ	ヒメヤブラン	◆			5,12,18				110	
	ワニグチソウ	◆			1,5,9,12				173	
	コワニグチソウ	◆			1,5,9,12				173	
イグサ	ハリコウガイゼキショウ				4,5,6,12,14	●		○	186	
カヤツリグサ	ホスゲ	○			-	●	157	○		92
	ニイタカスゲ	○			-	●		○		93
	ミセンアオスゲ	○		VU	-	●		○		93
	ヒメゴウソ				4,5,6				187	
	シカクイ				4,5,6				188	
	ヒメヒラテンツキ	○		NT	2,4,6	●		○		93
イネ	エゾカモジグサ				5,6,7				186	
	イワタケソウ			VU	5,6,7				187	
	オオイチゴツナギ				5,6,7	●		○	187	
	ヌメリグサ	◆		NT	2,4,14				112	
ケシ	ジロボウエンゴサク	○		CR	-	●		○		94
メギ	キバナイカリソウ	◆			1,5,9,12				77	
キンポウゲ	サンリンソウ				1,5,12				184	
	カザグルマ		NT	CR	5,6,9	●			185	
スグリ	スグリ	◆			2,8,18				95	
ベンケイソウ	ホソバナキリンソウ	◆			1,5,12				79	
	マルバマンネングサ	◆		VU	1,5,12				126	
マメ	クサフジ	○			5,6,7,12	●	157,171,177,178	○		94
バラ	マメザクラ			NT	1,5,12	●			185	
	カンオザクラ	◆		CR	1,18				96	
	ノウゴウイチゴ	◆			1,5,12				80	
	サナギイチゴ	◆	VU	N	1,5,12				128	
イラクサ	コバノイラクサ	◆			1,2,7				152	
ウリ	スズメウリ	◆			2,6	●	159		81	

■ 情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2014	減少要因	2014年以降の 情報		標本	掲載ページ	
						記録	参考文献		2014	2024
ニシキギ	オオツリバナ	◆			1,5,12				133	
ヤナギ	シロヤナギ	◆			2,4,8,18	●		○	89	
スマレ	アイヌタチツボスミレ	◆		CR	1,5,12				81	
アマ	マツバニンジン	◆	CR	EN	1,5,12				80	
オトギリソウ	タコアシオトギリ	◆			6			○	155	
	シナノヤマオトギリ	◆			5,12			○	78	
	オオシナノオトギリ	◆		EN	5,11,12				78	
ミカン	キハダ	◆			1,5,12	●	173,178		131	
ナデシコ	ワチガイソウ	◆			1,12,18				90	
アカネ	ヤエムグラ	○			2,5,15	●	157,159,177, 178	○		94
アゼナ	ウリクサ	◆		VU	6,14				103	
シソ	ツルカコソウ	◆	VU	NT	5,6,12,14				83	
	ジャコウソウ	◆			1,5,12				84	
	ヤマジソ	◆	NT	NT	5,6,12				84	
ミツガシワ	アサザ	◆	NT	VU	2,3,6				83	
キク	カントウヨメナ	◆		VU	5,7	●		○	105	
	キソアザミ	○		NT	7,8,16	●		○		95
	ウスギタンポポ	◆		VU	5,7,18				107	
	オナモミ	◆	VU	VU	2,8,15				146	
セリ	セントウソウ	◆			1,12,18				100	
	ハナウド	◆			5,7	●		○	163	

2 哺乳類

・カテゴリーの変動

↑：ランクアップ ◇：DDから移行 ○：新規追加

↓：ランクダウン ◆：DDへ移行

・2014年以降の記録

●：あり

■絶滅 (EX)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
イヌ	ニホンオオカミ		EX	EX	1,10,19			193	

■絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ヒナコウモリ	ヤマコウモリ	↑	VU	VU	1	●	190	195	
	クロホオヒゲコウモリ	○	VU	CR	1	●			99
	テングコウモリ (2014版：ニホンテングコウモリ)	↑			1,19			197	

■絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
トガリネズミ	アズミトガリネズミ		NT	VU	1	●	190	193	
モグラ	ミズラモグラ		NT	VU	1	●		193	

■準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
トガリネズミ	シントウトガリネズミ (2014版：ホンシュウトガリネズミ)			NT	1	●	164,190	194	
	カワネズミ			NT	2,8	●	164,179	194	
キクガシラコウモリ	キクガシラコウモリ	○			19	●	183,190		99
ヒナコウモリ	ニホンウサギコウモリ			VU	1	●		195	
	ヒメホオヒゲコウモリ (2014版：シナノホオヒゲコウモリ)	◇		EN	1	●	190	196	
	モモジロコウモリ				2	●	190	194	
	ユビナガコウモリ	○		CR	18	●			99
ヤマネ	ヤマネ			NT	1	●	170	196	

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
リス	ニホンモモンガ			NT	1	●	190	195	
イタチ	オコジョ		NT	NT	1	●		196	

■ 情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ヒナコウモリ	モリアブラコウモリ	○	VU	DD	1				100
	ヒナコウモリ	○		EN	1,19	●	190		100
	コテングコウモリ (2014版：ニホンコテング コウモリ)			EN	1	●	190	197	

3 鳥類

・カテゴリーの変動

↑：ランクアップ ◇：DDから移行 ○：新規追加

↓：ランクダウン ◆：DDへ移行

・2014年以降の記録

●：あり

■絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
キジ	ライチョウ		EN	EN	13,17,18	●	177,190	201	
	ウズラ		VU	CR	2,5,6	●	190	201	
サギ	ヨシゴイ		NT	EN	2,6	●	186,190	201	
	ササゴイ	↑		VU	1,2,3,4,6	●	190	204	
クイナ	ヒクイナ		NT	CR	2,6	●	170,186	202	
カモメ	コアジサシ		VU	CR	2,8			202	
タカ	イヌワシ		EN	CR	1,5,7,8,10,12			202	
	クマタカ		EN	EN	1,5,7,8,10,12	●	178,179,182,186	203	
フクロウ	コノハズク	◇		VU	1,5,7,8,12	●	190	210	
	アオバズク	◇		EN	1,5,12	●	159,182,190	211	
カワセミ	ヤマセミ	↑		VU	2,5,8	●	186	205	
ブッポウソウ	ブッポウソウ	○	EN	CR	1,5,19	●	190		103
モズ	アカモズ		EN	EN	5,6,19	●		203	
セッカ	セッカ			CR	2,3,4,6	●	186	203	

■絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
サギ	ミゾゴイ		VU	EN	1,5,12	●	170,190	204	
	コサギ	○		NT	2,3,19	●	182,186		103
ヨタカ	ヨタカ		NT	VU	1,5,6,7,19	●	164,169,170,179,186,190	204	
タカ	ハイタカ	↑	NT	VU	1,5,7,8,12	●	164,169,173,181,186	207	
ハヤブサ	ハヤブサ		VU	EN	1,5,7	●	164,169,178,179,186	205	

■準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
サギ	チュウサギ		NT	NT	2,3,4,6,12	●	186	205	
チドリ	イカルチドリ			NT	2,8	●	181,182,186	206	

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
チドリ	コチドリ				2,8	●	182,186	206	
タカ	ハチクマ		NT	VU	1,5,7,8,12	●	164,169,178, 179,182,186	206	
	オオタカ		NT	VU	1,5,7,8,10,12	●	164,169,173, 181,182,186	207	
カササギヒタキ	サンコウチョウ			VU	1,5,12,19	●	182,186	208	
ホオジロ	ホオアカ			NT	5,6,12	●	186	208	
	ノジコ		NT	NT	1,5	●	186	208	

■ 情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
クイナ	クイナ			DD	2,3,4,5,6	●	186	209	
チドリ	ケリ		DD	VU	2,3,4,5,6	●	186	209	
シギ	ヤマシギ			DD	1,2,3,4,5,6	●	164,190	209	
タマシギ	タマシギ		VU	CR	2,6			210	
フクロウ	オオコノハズク			DD	1,5,12			210	
	トラフズク			EN	1,5,12			211	
	コミミズク			EN	1,5,12	●	186	211	
モズ	チゴモズ	○	CR	CR	5,11,19	●	169		103

4 爬虫類

・カテゴリーの変動

↑：ランクアップ ◇：DDから移行 ○：新規追加

↓：ランクダウン ◆：DDへ移行

・2014年以降の記録

●：あり

■情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
タカチホヘビ	タカチホヘビ	○		DD	1	●	178,190		106
ナミヘビ	シロマダラ			DD	1	●	190	215	
	ヒバカリ			DD	1,12	●	164,169,170, 190	215	

5 両生類

■絶滅危惧II類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
アカガエル	ツチガエル類 ※			VU	2,6,12	●	162,190	219	
	トウキョウダルマガエル	↑	NT	VU	2,6,16	●	170,174	219	

※近年の研究から、松本盆地のツチガエル類には、ツチガエルとムカシツチガエルの2種が含まれていることが明らかになったが、安曇野市内での両種の分布については不明な点が多いため、本レッドリストでは両者を区別せず「ツチガエル類」として扱った。

■準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
サンショウウオ	クロサンショウウオ		NT	NT	17	●	190	220	
	ヒダサンショウウオ		NT	NT	1,8	●	190	220	
イモリ	アカハライモリ		NT	NT	2	●	164,169,170	220	
アカガエル	トノサマガエル		NT	NT	2,5,6	●	170,171,173, 174	219	

■情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
アオガエル	モリアオガエル	○		NT	1,3,4,18	●	190		108

6 魚類

・カテゴリーの変動

↑：ランクアップ ◇：DDから移行 ○：新規追加

↓：ランクダウン ◆：DDへ移行

・2014年以降の記録

●：あり

■野生絶滅 (EW)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ウナギ	ニホンウナギ		EN	EW	2,8			223	
アユ	アユ			CR	2,8,14			223	
サケ	サケ			EW	2,8,14			223	

■絶滅危惧I類 (CR+EN)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
メダカ	ミナミメダカ		VU	VU	2,3,6,12,14,15,16	●	165	224	

■絶滅危惧II類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の報知		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ドジョウ	ホトケドジョウ		EN	VU	2,4,6,14	●	170,190	224	
アカザ	アカザ		VU	NT	2,14	●		224	

■準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ヤツメウナギ	スナヤツメ北方種 ※		VU	VU	2,4,8,14	●	190	225	
	スナヤツメ南方種 ※		VU	VU	2,4,8,14	●	190	225	
サケ	ニッコウイワナ		DD	NT	1,2,8,15,16,17	●	178,179,181	225	
	ヤマメ		NT	NT	1,2,8,15,16	●	179	225	
カジカ	カジカ		NT	NT	2,8,14	●	165,170,173,190	226	

※ 2014年版では「スナヤツメ」として掲載されていたものを、最新の分類に従って2種に分けて掲載した。

■情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ドジョウ	ドジョウ		NT	DD	2,6,15,16	●	165,170,173,190	226	

7 昆虫類

・カテゴリーの変動

↑：ランクアップ ◇：DDから移行 ○：新規追加

↓：ランクダウン ◆：DDへ移行

・2014年以降の記録

●：あり

■絶滅 (EX)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
トンボ	ハッチョウトンボ	↑			3,4,12,14,18			232	
バッタ	ヒゲナガヒナバッタ			CR+EN	2,8			229	
	アカハネバッタ		CR	CR+EN	5,6,12			229	
カメムシ	タガメ		VU	EX	3,4,6,12,14			229	
コウチュウ	カワラハンミョウ		EN	CR+EN	2,8,14,18			230	
セセリチョウ	ホシチャバネセセリ	↑	EN	EN	5,6,12			236	
シジミチョウ	クロシジミ		EN	EN	20			230	
	アサマシジミ中部低地 帯亜種 ※ (2014版：アサマシジミ)		EN	VU	20			238	
タテハチョウ	オオウラギンヒョウモン		CR	CR	5,12,18			230	
	ヒョウモンモドキ		CR	CR	5,12,18			231	
カレハガ	ヒロバカレハ	↑	VU	NT	5,12			239	
ドクガ	ウスジロドクガ	↑	NT	NT	5,12			240	
ヒトリガ	ゴマベニシタヒトリ	↑	NT	NT	5,12			240	
ヤガ	マダラムラサキヨトウ	↑			20			240	
	ヘリグロヒメヨトウ	↑	EN	CR+EN	20			241	
	ハイマダラクチバ	↑		CR+EN	20			241	

※2014年版では亜種区分せずに掲載されていたものを、市内に分布する2亜種それぞれについて評価した。

■絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ヤンマ	カトリヤンマ	↑		VU	2,3,4,14			243	
エゾトンボ	ハネヒロエゾトンボ		VU	EN	2,6,14,18			231	
バッタ	セグロイナゴ			VU	4,6,12,14			232	
サシガメ	ハリサシガメ		NT	VU	2,5,14	●	171,184	233	
	ゴミアシナガサシガメ		VU	VU	5,12,14			232	
ツノカメムシ	キオビツノカメムシ			CR+EN	1,5,12,14	●		233	
オサムシ	チビアオゴミムシ	↑	EN	CR+EN	1,5,12,14			246	
	ツヤキベリアオゴミムシ		VU	DD	2,4,14			233	
ゲンゴロウ	シマゲンゴロウ		NT	VU	2,3,4,6,14	●		234	

■ 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
クワガタムシ	オオクワガタ		VU	CR+EN	1,10,12,14,16			234	
コガネムシ	クロモンマグソコガネ		NT	CR+EN	5,12,14			235	
ジョウカイボン	シマシマクビボソジョウカイ	○			1,18	●	183		113
カミキリムシ	シナノエゾハイイロハナカミキリ	↑		CR+EN	1,17,19			253	
	シララカハナカミキリ			CR+EN	1,17,19			235	
	スミイロハナカミキリ			CR+EN	1,17,19			235	
	ムモンベニカミキリ	↑		VU	1,14,19			295	
セセリチョウ	ギンイチモンジセセリ		NT	NT	5,12			236	
	アカセセリ	↑	EN	NT	5,12			257	
	ミヤマチャバネセセリ			EN	5,12	●		236	
シロチョウ	ヒメシロチョウ		EN	VU	6			237	
	ツマグロキチョウ		EN	EN	5,12			237	
	ヤマキチョウ		EN	EN	6			237	
シジミチョウ	オオルリシジミ		CR	EN	6,10	●	169,170	238	
	オオゴマシジミ	↑	NT	NT	17,18			259	
	アサマシジミ中部高地帯亜種 ※ (2014 版：アサマシジミ)		VU	VU	17,18			238	
タテハチョウ	ヒョウモンチョウ	↑	VU	NT	6,12	●		259	
	フタスジチョウ	↑			12	●	175	260	
	コヒョウモンモドキ		EN	VU	5,7,12			238	
	クロヒカゲモドキ		EN	EN	12			239	
	オオヒカゲ	↑		NT	4	●		261	
	キマダラモドキ	↑	NT	NT	4	●		260	
	ヒメヒカゲ		CR	EN	2,12			239	

※ 2014 年版では亜種区分せずに掲載されていたものを、市内に分布する 2 亜種それぞれについて評価した。

■ 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
イトトンボ	キイトトンボ				3,4,6,14	●		241	
	オゼイトトンボ			NT	3,4,6,14			242	
ムカシヤンマ	ムカシヤンマ				2,8	●	178,179	242	

■ 絶滅危惧II類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ヤンマ	マルタンヤンマ	○		NT	3,4,14	●	189		113
	マダラヤンマ	○	NT	NT	3,4,14		164,170		113
トンボ	マイコアカネ	○			3,4,14				114
コオロギ	エゾエンマコオロギ			VU	2,14,18			243	
バッタ	イナゴモドキ				6,12,14	●	179	243	
	ハネナガイナゴ	↑			6,12,14			267	
	ツماغロバッタ				6,12,14	●		244	
アブラムシ	オニグルミクチナガオオ アブラムシ			DD	18,19			244	
タイコウチ	ヒメミズカマキリ				2,3,4,6,14	●		271	
カスミカメムシ	ハヤシオオカスミカメ	○			1	●			114
オサムシ	アカガネオサムシ		VU	VU	2,4,10,18			244	
	セアカオサムシ		NT	NT	5,6,14,18	●	160,169	245	
	チョウセンマルクビゴミ ムシ			VU	2,14			245	
	キベリマルクビゴミムシ		EN	VU	2,14			245	
	シンシュウマルガタゴミ ムシ			VU	2,14			246	
ゲンゴロウ	ケシゲンゴロウ	↑	NT	NT	2,3,4,6,14			279	
	マルガタゲンゴロウ	○	VU	VU	2,3,4,6,14	●			114
	クロゲンゴロウ	↓	NT	NT	2,3,4,6,14	●		234	
	ゲンゴロウ	↑	VU	NT	2,3,4,6,14	●		280	
ミズスマシ	オオミズスマシ	↑	NT	NT	2,3,4,6,14			280	
	ヒメミズスマシ		EN	VU	2,3,4,6,14			246	
	ミズスマシ		VU	VU	2,3,4,6,14			247	
ハネカクシ	ヤマトモンシデムシ		NT	VU	1,5,6,14	●		247	
コブスジコガネ	コブナシコブスジコガネ			NT	1,5,6			248	
コガネムシ	ミヤマダイコクコガネ			NT	1,12,14			248	
	ウエダエンマコガネ			NT	6,12	●	191	248	
	マルエンマコガネ			VU	5,6,12,14			249	
	オオクロツヤマグソコガネ			VU	19			249	
	ヒメカンショコガネ			NT	2,5,7,14	●	167	249	
	オオチャイロハナムグリ		NT	VU	1,5,8	●		250	
	トラハナムグリ			VU	1,7,19			250	
	シラホシハナムグリ			VU	1,5,14,19			250	

■ 絶滅危惧II類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ホタル	ゲンジボタル			NT	2,4,5,6,14	●	170	251	
ジョウカイボン	トウカイクビボソジョウカイ	○			1	●	183		115
テントウムシ	ダイモンテントウ			NT	17,18	●	190	251	
ハナノミ	ヤクハナノミ			VU	1,5,14			251	
オオハナノミ	クロオオハナノミ			VU	1,6,10			252	
ツチハンミョウ	マメハンミョウ				6,12,14	●	170	252	
	マルクビツチハンミョウ			NT	1,5,12,14	●		252	
	オオツチハンミョウ			NT	1,5,12,14			253	
カミキリムシ	ケブカマルクビカミキリ	↑			1,5,12,14			292	
	オトメクビアカハナカミキリ			VU	17,18			253	
	チャイロヒメコブハナカミキリ			NT	1,19			254	
	ヨツボシカミキリ		EN	VU	1,5,14			254	
	オニホソコバネカミキリ	↑		NT	1,5,14			293	
	トラフカミキリ	↑		NT	6,12,14			295	
ハムシ	スジグロオオハムシ			DD	4,5,6,14			254	
コマユバチ	ウマノオバチ		NT	NT	1,5,12,14	●	169, 170	255	
アリ	トゲアリ		VU	NT	1,5,12,14			255	
スズメバチ	ヤマトアシナガバチ		DD		1,5,12,14			256	
	モンスズメバチ		DD	DD	1,5,12,14	●	167,169,179	256	
	ヤドリホオナガスズメバチ		DD		1,5,14			255	
ギングチバチ	ニッポンハナダカバチ	○	VU	DD	2,5,8	●			115
クサアブ	ネグロクサアブ		DD		20	●		256	
マダラガ	ベニモンマダラ	↑	NT	NT	5,6,12	●	170	302	
セセリチョウ	ヘリグロチャバネセセリ			NT	5,12	●		258	
	コキマダラセセリ	○			5,12	●			115
	タカネキマダラセセリ		NT	NT	17,18			257	
シロチョウ	クモマツマキチョウ		NT	NT	2,8,10,17	●	162,173,184	258	
シジミチョウ	ウラジロミドリシジミ			NT	12			258	
	ミヤマシジミ	↑	EN	VU	2,8	●	170,171,181, 184	305	
タテハチョウ	オオイチモンジ		VU	NT	2,8,10,17	●	173	259	
	コヒオドシ	↑		NT	2,8,17	●	162,181	306	
	ツマジロウラジャノメ				2,7,8	●	171	260	

■ 絶滅危惧II類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
シャクガ	フタスジギンエダシャク			VU	12,20	●		261	
スズメガ	ヒメスズメ		NT	NT	5,12,18	●		261	
コブガ	ヒラノコブガ	○		NT	18		154		116
ヤガ	ニセタバコガ	○		DD	12,20	●	168		116

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ヒラタカゲロウ	オビカゲロウ			NT	2,7			262	
イトトンボ	モートンイトトンボ		NT	N	3,4,6,14	●	190	262	
カワトンボ	アオハダトンボ		NT	NT	2,14	●	167,170,171,173	263	
	ミヤマカワトンボ				2,14	●	171	262	
ムカシトンボ	ムカシトンボ				2,8	●		263	
サナエトンボ	アオサナエ	↓		VU	2,14	●	185	242	
	ウチワヤンマ				3,4,6,14,15	●		263	
ヤンマ	サラサヤンマ			NT	4,5,14	●	190	264	
	ミルンヤンマ				2,14,18	●	164,166,169,179	264	
トンボ	ヒメアカネ	○			3,4,6,14				116
トワダカワゲラ	ミネトワダカワゲラ			N	2,7,18			264	
ヒロムネカワゲラ	ノギカワゲラ			NT	2,8	●	179	265	
	ミヤマノギカワゲラ			NT	2,7			265	
カマキリ	ウスバカマキリ		DD		2,6,12	●		265	
コオロギ	クマコオロギ				2,4,14			266	
マツムシ	スズムシ			LP	2,4,14	●		266	
バッタ	クルマバッタ				2,20	●		268	
	イボバッタ				6,12,14	●	170	268	
	カワラバッタ				2,8	●	167,170,171	268	
	クモマヒナバッタ				17,18			267	
	メスアカフキバッタ				1,6,12	●		266	
テングスケバ	クロテングスケバ			NT	1,5,12,14,19			269	
トゲアワフキムシ	タケウチトゲアワフキ				1,14,19	●	169	269	
ミズカメムシ	ミズカメムシ			NT	3,4,6,14			270	

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
タイコウチ	タイコウチ			NT	2,3,4,6,14	●	164,167,169, 170,176,185	271	
ツチカメムシ	シロヘリツチカメムシ		NT		5,12,14,19	●	167	272	
カメムシ	ヒメカメムシ			NT	5,12,14,19	●	164,167,169	272	
	ナカボシカメムシ			NT	1,5,12,14,19	●	164,169,178	272	
ツノカメムシ	フトハサミツノカメムシ			NT	1,5,12,14,19	●	164,169,183	273	
ヘビトンボ	ヤマトクロスジヘビトンボ				2,14	●	179	273	
	クロスジヘビトンボ (2014 版：タイリククロスジ ヘビトンボ)				2,14			273	
キスジラクダムシ	キスジラクダムシ				1,5,12,14			274	
ラクダムシ	ラクダムシ				1,5,12,14	●	166	274	
クサカゲロウ	オオフトヒゲクサカゲロウ			VU	1,5,12,20	●	183	274	
オサムシ	カワラゴミムシ			NT	2,8,14	●	160	275	
	エリザハンミョウ				2,8,14			275	
	コハンミョウ			NT	5,7,12,18	●	169,170	276	
	クロカタビロオサムシ			NT	1,5,6,12,14	●	169	276	
	エゾカタビロオサムシ				1,5,6,14			276	
	オサムシモドキ			NT	2,14			277	
	オオシンシュウナガゴミ ムシ			NT	1,7,8			277	
	ニセシンシュウナガゴミ ムシ			NT	1,7,8			277	
	ホソツヤゴモクムシ			NT	1,7,8			278	
	キノコゴミムシ	○		VU	1,7				117
	ダイミョウアトキリゴミムシ	○		NT	1,7				117
	オオホソクビゴミムシ				1,2,4,14			278	
コガシラミズムシ	コガシラミズムシ				3,4,14	●		279	
	クビボソコガシラミズムシ		DD	NT	2,3,4,14	●	160,171,184, 185	278	
ゲンゴロウ	キベリマメゲンゴロウ		NT	N	2,3,4,14	●	167,170,177, 185	279	
	クロマメゲンゴロウ				2,3,4,14	●	185	280	
	オオヒメゲンゴロウ	○		NT	3,4,14	●			117
ミズスマシ	コミズスマシ		EN	VU	2,3,4,14	●	167,170,185	281	
エンマムシモドキ	エンマムシモドキ			NT	1,5,12,14,19		178	281	

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
エンマムシ	ナミエンマムシ (2014 版：エンマムシ)				5,6,12,14	●	183	282	
ハネカクシ	ヒロオビモンシデムシ (2014 版：ホンドヒロオビ モンシデムシ)			NT	1,5,8			282	
	ツノグロモンシデムシ			NT	1,5,8			282	
	カバイロヒラタシデムシ	○		NT	1,7	●			118
	ビロウドヒラタシデムシ			NT	1,5,8	●	166	283	
	ベッコウヒラタシデムシ	○		NT	1,7	●	183		118
	オニヒラタシデムシ			NT	1,8,14			283	
	ヒメヒラタシデムシ			NT	1,8,14			283	
	コクシヒゲツヤムネハネ カクシ (2014 版：コクシヒゲハネ カクシ)				1,6,10,14			284	
クワガタムシ	トウカイコルリクワガタ			NT	1,7,10			284	
	ヒメオオクワガタ			NT	1,10			284	
センチコガネ	ムネアカセンチコガネ			NT	5,6,14	●		285	
ヒゲブトハナムグリ	ヒゲブトハナムグリ			NT	2,6,12,14,18	●	169	285	
コガネムシ	オオヒラタハナムグリ			NT	1,5,14,18			285	
	アオアシナガハナムグリ				1,7,19	●		286	
	アカマダラハナムグリ (アカマダラコガネ)		DD	NT	1,5,14,19	●	167,169,170	286	
	コカブトムシ	○		NT	1,7,12,20	●			118
タマムシ	ズミチビタマムシ	○		NT	1	●			119
コメツキムシ	オオクシヒゲコメツキ				1,14	●	169,183	286	
	ミヤマヒサゴコメツキ			NT	1,7,14			287	
	フタキボシカネコメツキ			NT	1,7,19			287	
	キンムネヒメカネコメツキ				1,7,19	●	183	287	
	ミヤジマコガネコメツキ	○			1,7	●			119
ホタル	ムネクリイロボタル				1,7,14	●	178,183	289	
	ヘイケボタル			NT	3,4,6	●	167,169,170, 173,183	288	
	ヒメボタル			NT	1,7			288	
ジョウカイボン	マサタカシリブトジョウ カイ			NT	1,7			288	
	サドクビボソジョウカイ	○			1,7	●	183		119

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ジョウカイモドキ	ナガサキアオジョウカイモドキ			NT	1,2,4,14	●	167	289	
ヒラタムシ	ルリヒラタムシ			NT	1			289	
オオキノコムシ	オオキノコムシ			NT	1,19			290	
テントウムシ	ジュウサンホシテントウ			NT	2,3,4,14	●		290	
	アイヌテントウ	○		NT	2	●	167		120
	ココノホシテントウ			NT	1,2,4,14			291	
	ジュウロクホシテントウ			NT	1,5,14			291	
	ヤマトアザミテントウ			NT	1,7			291	
アカハネムシ	ツチイロビロウドムシ (2014 版：ナカブサツチビ ロウドムシ)			NT	1			292	
カミキリムシ	アラメハナカミキリ			NT	1,19			293	
	トホシハナカミキリ			NT	1,19			292	
	ベニバハナカミキリ			NT	1,5,14			293	
	アカアシオオアオカミキリ			NT	1,5,14			294	
	アオカミキリ				1,14,19			294	
	コトラカミキリ		NT	NT	1,14,19			294	
	ホンドヒメシラオビカミ キリ	○			19				120
ハムシ	ヨツボシアカツツハムシ	○		DD	2	●			120
セイボウ	オオセイボウ (2014 版：オオセイボウ本 土亜種)		DD	DD	1,5,12,14	●	169,170	295	
スズメバチ	チャイロスズメバチ				1,5,12,14	●	169,179	297	
	クロスズメバチ				1,6,10,12,14	●	164,166,167, 169,178,179	296	
	キオビホオナガスズメバ チ (2014 版：キオビホオナガ スズメバチ本州亜種)		DD		1,5			296	
	シロオビホオナガスズメ バチ				1,5			296	
ハキリバチ	トモンハナバチ				4,6,12,14	●	169,178	297	
ミツバチ	ナガマルハナバチ		DD	DD	1,5,12,14,19	●	175	298	
	ホンシュウハイロマル ハナバチ			VU	17,18	●	178,183	298	
	クロマルハナバチ		NT	NT	4,6,14	●	170,183	297	

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
シリアゲムシ	オオハサミシリアゲ				17,18			298	
シリアゲモドキ	スカシシリアゲモドキ (2014 版：スカシシリアゲ モドキ(短翅型))			VU	1,18,19	●	179	299	
ガガンボ	ミカドガガンボ				2,3,4,6,14	●	169	299	
ヒメガガンボ	ニッポンクモガタガガンボ				2,8,14,18			300	
アミカ	ミヤマコマダアミカ				2,8,14,18			300	
アミカモドキ	ニホンアミカモドキ		VU	VU	2,8,14,18	●	179	300	
ニセヒメガガンボ	エサキニセヒメガガンボ		DD		2,5,14,18	●		299	
ハナアブ	オオコシボソハナアブ				1,12,14,19			301	
	タカネベッコウハナアブ				17,18			301	
	ツノヒゲハナアブ				1,19			301	
クロバエ	クモマトラフバエ				17,18	●		302	
ナガレトビケラ	オオナガレトビケラ		NT	NT	2	●	178,179	302	
セセリチョウ	スジグロチャバネセセリ		NT	NT	5,12	●		303	
	キマダラセセリ	↓			5,12	●	167,170,171	257	
アゲハチョウ	ヒメギフチョウ		NT	NT	12	●	162,170,178	303	
	ジャコウアゲハ				2,18	●		303	
シロチョウ	ミヤマモンキチョウ		NT	NT	17	●		304	
シジミチョウ	ウラキンシジミ	○			12	●			121
	ムモンアカシジミ			NT	12	●		305	
	ウラナミアカシジミ			NT	12	●	169,170	305	
	ウスイロオナガシジミ				18,19	●		304	
	クロミドリシジミ				12	●	169	304	
	ハヤシミドリシジミ	○			12	●			121
	カラスシジミ	○			12	●			121
	クロツバメシジミ		NT	N	2	●	173,184	306	
	ヒメシジミ	○	NT	N	5,12	●			122
タテハチョウ	コヒョウモン	○			2,12	●	164,175		122
	ウラギンスジヒョウモン		VU	NT	12	●		306	
	ギンボシヒョウモン	○			5,12	●	175		122
	オオムラサキ	○	NT	N	1,12	●	169,170		123
	ベニヒカゲ		NT	N	17,18	●		307	
	クモマベニヒカゲ		NT	N	17,18	●		307	

■ 準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
タテハチヨウ	タカネヒカゲ		NT	NT	11,17,18	●		307	
シャクガ	トビスジヤエナミシャク	○		DD	5,12	●	168		123
	フチグロトゲエダシャク				2,6	●		308	
ヤガ	ホシヒメセダカモクメ	○	NT	N	5,12	●			123
	ミスジキリガ	○	NT	N	1,12	●			124

■ 情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の 情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
サナエトンボ	オナガサナエ				2,14	●	170,185	309	
エゾトンボ	トラフトンボ	◆		NT	3,14			231	
トンボ	キトンボ	○			3,14	●			124
アミメカワゲラ	ヒメアミメカワゲラ			DD	2			309	
マツムシ	カヤコオロギ				4,6,14			310	
ヒバリモドキ	キアシヒバリモドキ	○			18	●	183		124
バッタ	マダラバッタ	○			20	●			125
ガロアムシ	オオガロアムシ			NT	20			310	
センブリ	フタオセンブリ			DD	20			310	
オサムシ	クロズジュウジアトキリ ゴミムシ	○		NT	20	●			125
ガムシ	シジミガムシ	◆	EN	DD	2,3,4,14			247	
テントウムシ	クリサキテントウ	○			19	●	166		125
カミキリムシ	ミセンヒメハナカミキリ	○			18	●			126
スズメバチ	キオビクロスズメバチ			DD	1,5,12,14	●	178,180	311	
アシナガバエ	タカネキアシナガレアシ ナガバエ		NT		20			311	
ミツバチ	ナミルリモンハナバチ	○	DD	DD	5	●			126
キタガミトビケラ	キタガミトビケラ			N	2,8	●	183	311	
マダラガ	ルリハダホソクロバ	○	NT	DD	5	●			126
セセリチョウ	ホソバセセリ	○			20	●			127
カギバガ	チョウセントガリバ	○		DD	20	●	168		127
シャクガ	フチグロシロヒメシャク	○			5,12		153		127
	ムツテンナミシャク	○			5,12		153		128
	タケウチエダシャク	○			20		155		128

■ 情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014 年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
シャクガ	フタオレウスグロエダ シャク				20	●	160	312	
スズメガ	メンガタスズメ			DD	20			312	
シャチホコガ	ギンボンシャチホコ	○		NT	5,12				128
ドクガ	スゲドクガ	○	NT	DD	2,4,5	●	167		129
ヒトリガ	ヒメキシタヒトリ	◆		DD	17,18			308	
コブガ	ミカボコブガ	○	NT	DD	5,12				129
ヤガ	ウスズミケンモン		NT	N	20	●		312	
	オオクロバヤガ	○			17	●			129
	ムラサキハガタヨトウ	○		DD	5,12	●	163		130
	ショウブオオヨトウ	○			2,4,5	●	168		130
	ヒメトガリヨトウ	○			5,12		151		130
	オオチャバネヨトウ	○	VU	DD	2,4,5		149,152		131
	キスジウスキヨトウ	○	VU	DD	2,4,5	●			131
	クマソオオヨトウ	○		DD	20		150		131
	フタホシヨトウ	○			20		168		132
	トガリヨトウ	○			5,12	●	168		132
	ミヤマキシタバ	○	NT	DD	1,4,12				132
	コシロシタバ	○	NT	DD	1,12	●	168		133

8 その他無脊椎動物

・カテゴリーの変動

↑：ランクアップ ◇：DDから移行 ○：新規追加

↓：ランクダウン ◆：DDへ移行

・2014年以降の記録

●：あり

■絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
イワガニ	モクズガニ				2,8			315	
オカモノアラガイ	コウフオカモノアラガイ	○	VU			●	167		137
ナンバンマイマイ	カタマメマイマイ	○	VU	CR+EN		●	167		137

■絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
タニシ	マルタニシ		VU	NT	3,4,6,12,14	●	167	315	

■準絶滅危惧 (NT)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
ゴマガイ	ヒダゴマガイ			VU	1			315	
モノアラガイ	モノアラガイ		NT	NT	2,4,6	●	167,184,186	316	
ヒラマキガイ	ヒラマキガイモドキ		NT	NT	2,6,12,14			316	
オカミミガイ	ケシガイ		NT	N	1			316	
シトラ	オオウエキビ		DD	N	1			318	
	ヒメハリマキビ		NT	N	1	●	167	317	
	ヒゼンキビ		NT	NT	1			317	
ベッコウマイマイ	スカシベッコウ		NT	N	1			317	
ナンバンマイマイ	コシタカコベソマイマイ		NT	NT	1			318	
	カワナビロウドマイマイ		NT	VU	1			318	
	クロイワマイマイ				1			319	

■情報不足 (DD)

科名	種名	カテゴリーの変動	環境省 RL 2020	長野県 RL 2015	減少要因	2014年以降の情報		掲載ページ	
						記録	参考文献	2014	2024
モノアラガイ	コシダカヒメモノアラガイ	○	DD	CR+EN	2,4		185		137
ヒラマキガイ	ヒラマキミズマイマイ		DD	N	2,6,14	●	167	319	

(3) 分類群ごとの改定内容と追加種の解説

【新規追加種の内容解説】

新規レッドリスト種は、分類群ごとにカテゴリーのランクが高い順に並べて以下の内容について解説しました。

■和名・学名

和名は標準和名を記載しました。
学名は属名、種小名、亜種小名を記載しました。

■分類群名

植物については科名、動物については目名と科名を記載しました。

■カテゴリー

安曇野市、長野県、環境省のレッドリストにおけるカテゴリーを記載しました。

○ カミコウチテンナンショウ (サトイモ科) *Arisaema nikoense* subsp. *brevicollum*



安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

長野県：絶滅危惧ⅠB類

EN

CR+EN

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

●特徴：高さ15～25cmの多年草。葉は5～7枚の狭楕円形の小葉に分裂し、小葉間に葉軸は発達しません。仏炎苞は高さ4～9cmで、赤紫褐色で細斑があります。花柄が葉柄よりも明らかに短いです。花期は5～6月です。

●生育環境：亜高山帯の林下に生育します。

●国内の分布：本州（中部地方）に分布します。県内では中部に分布しています。

●市内の分布：穂高、堀金の山地帯～亜高山帯の森林に自生しています。

●減少要因：分布、個体数が限られているうえ、園芸採取による減少が懸念されます。

参考文献 No. 190

生育環境



高山
亜高山
山地
山麓・平野



川河・水辺

■写真の撮影者

撮影者の氏名または写真の提供機関名を示しました。

■種の写真

写真は、できる限り安曇野市もしくは長野県で撮影された種の形態が分かるものを用いました。

ただし、長野県内の写真がない種は、他地域で撮影された写真や、標本の写真、イラストを用いました。

■特徴

種の形態や生態、食性や生活形態、繁殖などの特徴について記載しました。

■生息・生育環境

生息・生育する典型的な環境を記載しました。

■国内の分布

国内や県内における分布状況を記載しました。

■市内の分布と減少要因

安曇野市における生息・生育状況について記載しました。

■減少要因

安曇野市における減少の要因を記載しました。

■生息・生育環境のアイコン

生息・生育する標高区分や典型的な環境について示しました。

■参考文献 No.

安曇野市における生息・生育状況などを整理するために参考とした文献No.を示します。文献一覧は、巻末資料に掲載しました。

1 植物



■ レッドリスト改訂の概要（植物）

カテゴリーに変更があった植物は82種、新規追加は43種、除外種は65種で、植物のレッドリスト種は計320種になりました。表3-5にカテゴリーごとの種数・概要を示します。

カテゴリーが上昇した種、新規追加した種には、湿地、草地や水田の畔などに生育する種が多い傾向が見られました。また、カニツリグサやヒメヨモギなど、外来系統の集団は広く見られるものの、在来系統の集団の分布が非常に限られている種も選定されました。

市内での記録が不明確なものや、種同定等に関して統一見解が得られていない種を、除外または情報不足に移行したことで、全体としてはカテゴリーの内訳が大きく変わる結果となりました。

表 3-5 植物レッドリスト種の概要

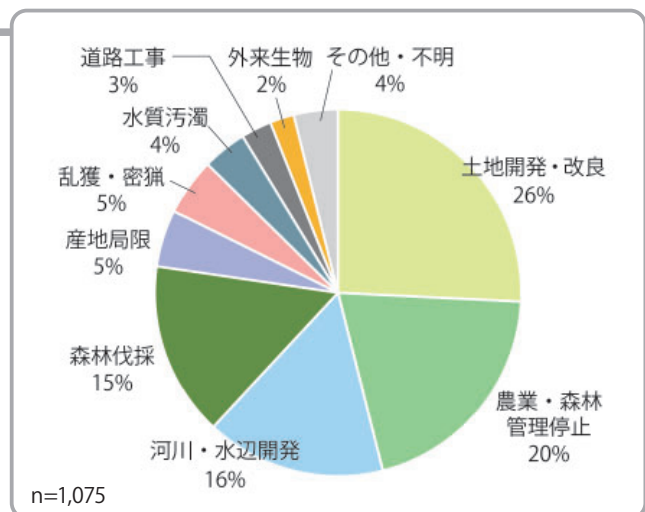
カテゴリー	種数		改訂内容
	2014	2024	
絶滅 (EX)	32	11	過去の記録を見直し、多くの種をDDへ移行しました。
野生絶滅 (EW)	0	0	野生絶滅に該当する種は選定されませんでした。
絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	95	94	水草のイトモなどのカテゴリーを上昇、草地性のユウスゲやアゼナなどを新規追加したほか、再発見されEXから移行した種もありました。
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	92	83	草地性のスズサイコ、湿地性のミズオトギリやサワギキョウなどのカテゴリーを上げたほか、ツルフジバカマなどを新規に選定しました。
準絶滅危惧 (NT)	104	69	草地性のオオバクサフジや、湿地性のエビモなどを新規追加したほか、森林性のギンランなどはカテゴリーを下げて選定しました。
情報不足 (DD)	19	63	市内での記録が不明確なものや、種同定等に関して統一見解が得られていない種は、情報不足として評価しました。

■ 危惧される減少要因

レッドリスト種に選定された植物の主な減少要因としては、開発に伴う生育環境の喪失と並んで、農林業の衰退が挙げられます。

今回の改訂では草地や水田に生育する種でカテゴリーの上昇や追加が多く、農業の形態の変化に伴う里山環境の変化が進行していると考えられます。

また、ニホンジカの嗜好植物にもカテゴリーの上昇や追加があり、食圧による影響が拡大していることが懸念されます。



植物レッドリスト種の減少要因の割合

■ 今回の改訂作業で分かったこと（植物）

植物の改訂においては、主に2016年から植物の分布調査や証拠標本採集を行い、全種ではありませんができる限り標本情報にもとづいてカテゴリーを判断しました。ここではその調査の概要を紹介します。

● 安曇野市豊科郷土博物館における調査及び標本収集

博物館では2016年から、『安曇野市版レッドデータブック2014』策定に関わった関係者にヒアリングを行いながら、対象種の分布把握や標本収集に努めてきました。その結果、スグリやイヌノフグリなど既知の自生地が消失が明らかになった種もあります。一方で2014年には絶滅とされていたヒンジガヤツリ、オオタチヤナギ、キクアザミなど複数種の自生が明らかになりました。

また2018年からは博物館友の会「植物調査部」が発足し、年ごとに対象区域を設定し、区域内のすべての維管束植物について標本を収集するという活動がスタートし、現在も市内各地の標本が蓄積されています。この調査によって絶滅危惧種の新たな産地が確認されたほか、スズメノテッポウやノミノツヅリなど、かつての普通種が大きく減少している可能性が高いことを明らかにしました。さらに普通種や外来種も含めてすべて採集することによって普通種の分布状況が明らかになり、相対的に絶滅危惧種の評価の基準を設定することが可能となりました。



博物館友の会「植物調査部」の調査

● 北アルプス山地帯、湧水地における調査及び標本採集

改訂にあたっては、特に市の西側山地帯を重点的に調査しました。その結果、ニイタカスゲ、ミセンアオスゲ、チョウセンミネバリ、キソアザミなど今回の新規追加種の記録を得ることができました。東山だけではなく、西山でもニホンジカによる食圧が大きくなっている現状も明らかになりました。

三川合流部の湧水地における調査を行ったところ、もともと個体数の少なかったホソバミズヒキモ、ホザキノフサモなどの水草類が以前と比較して大きく減少または、確認できないという結果となりました。さらに県内では他種との交雑等によりほとんどみられなくなったギシギシの生育が確認され、新たに絶滅危惧Ⅰ類（CR＋EN）として選定するとともに、県内でも重要な記録となりました。

また信州大学自然科学館に保管されている、安曇野市で採集された絶滅危惧種の標本調査を実施しました。並行して、誤同定の可能性がある種や、自生に疑問がある種についても再検討を行いました。同定については長野県植物研究会の藤田淳一氏に全面的にご協力いただきました。



烏川上流部の調査



湧水地の調査

新規追加種の解説

新規追加種以外の説明は、2014年版の77～190ページを参照してください。

カミコウチテンナンショウ (サトイモ科)

Arisaema nikoense subsp. *brevicollum*



生育環境



▶ 森林



安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：絶滅危惧ⅠB類

EN

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

●特徴：高さ15～25cmの多年草。葉は5～7枚の狭楕円形の小葉に分裂し、小葉間に葉軸は発達しません。仏炎苞は高さ4～9cmで、赤紫褐色で細斑があります。花柄が葉柄よりも明らかに短いです。花期は5～6月です。

●生育環境：亜高山帯の林下に生育します。

●国内の分布：本州（中部地方）に分布します。県内では中部に分布しています。

●市内の分布：穂高、堀金の山地帯から亜高山帯の森林に自生しています。

●減少要因：分布、個体数が限られているうえ、園芸採取による減少が懸念されます。

参考文献 No. 190

ヤマサギソウ (ラン科)

Platanthera mandarinorum subsp. *mandarinorum* var. *oreades*



生育環境



▶ 草原



安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：高さ20～40cmの多年草。葉は下部の1個が大きく、長さ5～11cmの線状長楕円形で、他に披針形の鱗片葉を2～5枚つけます。花は黄緑色で10個程度つけ、距が後方にやや下がって伸び、長さは7～12mmです。花期は5～7月です。

●生育環境：山地帯の日当たりのよい草地に生育します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。

●市内の分布：山地帯の日当たりの良い草地に自生します。

●減少要因：草原や森林の管理放棄や、それに伴う植生の遷移によって、生息に適した草地が減少していることが要因です。

参考文献 No. 1, 4, 52

ヤマトキシソウ (ラン科)

Pogonia minor



生育環境



▶ 草原
▶ 湿地



安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：絶滅危惧ⅠB類

EN

環境省：

—

—

●特徴：高さ10～20cmの多年草。茎中央より少し上に葉を1枚だけつけます。葉はやや厚く肉質で、長さ3～7cmの長楕円形です。花は淡紅色でほとんど開かず、茎頂に1花をつけます。花期は6～8月です。

●生育環境：山地帯から亜高山帯の日当たりのよい湿った草地に生育します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：穂高の山地帯で確認されています。

●減少要因：園芸採取や自然遷移が挙げられます。

参考文献 No. 4, 52

ユウスゲ (ススキノキ科)

Hemerocallis citrina var. *vespertina*



松岡貴子

生育環境



▶ 草原



安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：準絶滅危惧

NT

環境省：

—

—

●特徴：高さ100～150cmの多年草。葉は線形で長さ40～60cm、幅5～15mmです。花はレモン黄色でやや芳香があり、夕刻に咲いて翌日午前中には閉じます。花期は7～9月です。

●生育環境：山地帯の草原、林縁などのやや乾いたところに生育します。

●国内の分布：本州（関東地方以西）から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：明科と穂高の平野部と山地帯の草地に自生しています。

●減少要因：管理放棄による草原の遷移によって、生息に適した草地が減少していることが要因です。また、ニホンジカの嗜好植物であることから食圧を受けている可能性があります。

参考文献 No. 1, 4, 16, 18, 19, 36, 46, 52, 170, 177

エゾアブラガヤ (カヤツリグサ科)

Scirpus asiaticus



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 湿地



安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：高さ80～150cmの多年草。葉は幅5～15mmで長く、基部の鞘は密に有花茎を包みます。小穂は幅3～4mmの球形や楕円形で、赤褐色、枝先に2～4個ずつ集まってつきます。花期は8～10月です。

●生育環境：山麓部・平野部から山地帯の湿地に生育します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。

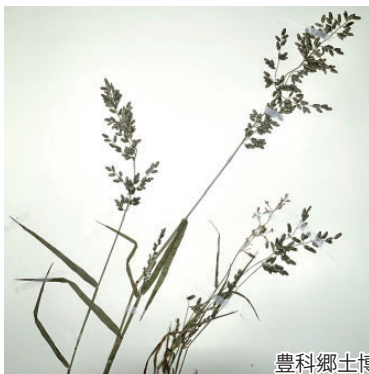
●市内の分布：平野部のため池に自生しています。

●減少要因：湿地や湧水地の開発が挙げられます。

参考文献 No. 4

スズメガヤ (イネ科)

Eragrostis cilianensis



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 耕作地



安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：高さ20～60cmの一年草。葉は幅2～7mmです。花序は7～20cmで枝は1～2本です。小穂は長さ5～15mmの扁平で、10～30小花からなります。コスズメガヤに比べ、花序が密に見えます。花期は8～10月です。

●生育環境：山麓部・平野部の路傍や農地、河原などの陽地に生育します。

●国内の分布：本州から南西諸島に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：穂高の平野部のかく乱地に自生しています。

●減少要因：河川や湿地の開発や、生育地に人が立ち入ることによる踏みつけが挙げられます。

参考文献 No. 19, 20, 52, 59, 159

ヒエガエリ (イネ科)

Polypogon fugax



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 草原
▶ 湿地
▶ 耕作地



▶ 河川

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：絶滅危惧ⅠB類

EN

環境省：

—

—

●特徴：高さ20～60cmの一年草。葉は幅3～8mmで、花序は長さ3～9cmの円錐状です。小穂は柄の長さが幅の2～3倍で、包穎のほぼ同長の芒が出ます。花期は6～8月です。

●生育環境：平野部の湿地や水田などに生育します。

●国内の分布：本州から南西諸島に分布します。県内では北部、南部に生育します。

●市内の分布：平野部の堤防草地に自生しています。

●減少要因：河川や草地の開発や、管理放棄による草原の遷移が挙げられます。

参考文献 No. 38

メガルカヤ (イネ科)

Themeda triandra var. *japonica*



松田貴子

生育環境



▶ 草原



安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：高さ70～100cmの多年草。総は扁平で上方の葉腋ごとに出た短い枝の上につき、枝上にはさらに2～5cmの葉状苞があります。それぞれの苞は6個の小穂を抱いていて、長さ約5mmの太い芒が小穂外に出ます。花期は9～10月です。

●生育環境：主に山麓部・平野部の河原や乾いた草地に生育します。

●国内の分布：本州から南西諸島に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：明科の山地帯の草地に自生しています。

●減少要因：草原や森林の管理放棄や、それに伴う植生の遷移によって、生息に適した草地が減少していることが要因です。

参考文献 No. 4, 59

ギシギシ (タデ科)

Rumex japonicus



松田貴子

生育環境



▶ 湿地



▶ 湧水地

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：高さ30～120cmの多年草。全体緑色で赤みを帯びません。葉は長さ10～35cmの長楕円形で、縁は波打ちます。円錐状の花序をつけ、雌雄同株です。花期は4～7月です。

●生育環境：山麓部・平野部の原野や道端、海岸に生育します。

●国内の分布：日本全国に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：穂高の平野部の湧水地に自生しています。県内ではほとんどがナガバギシギシ、エゾノギシギシとの雑種に置き換わっており、ギシギシが生育する場所は非常に限られています。

●減少要因：外来種ナガバギシギシ、エゾノギシギシとの交雑が挙げられます。

参考文献 No. 1, 4, 15, 16, 19, 24, 38, 52, 56, 57, 59, 159

アワゴケ (オオバコ科)
Callitriche japonica

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

長野県：

—

—

CR+EN

環境省：

—

—



橋渡勝也

●**特徴**：高さ約5cmの多年草。茎が下部で分岐して地面を覆います。葉は対生し無毛、倒卵形です。雌雄異花で、葉腋ごと1花をつけます。花は花弁が無く、2枚の苞に1本の雄ずいまたは雌ずいをつけます。花期は5～6月です。

●**生育環境**：山麓部・平野部の日影のやや湿気の多い地面や社寺林などに生育します。

●**国内の分布**：本州（宮城県以西）から南西諸島に分布します。県内では全域に分布します。

●**市内の分布**：山麓部の社寺林に自生しています。

●**減少要因**：土地開発や、農業の形態の変化が挙げられます。

生育環境



▶ 社寺林



参考文献 No. 16, 19, 52, 59

サウトウガラシ (オオバコ科)
Deinostema violaceum

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

長野県：準絶滅危惧

NT

CR+EN

環境省：

—

—



松岡貴子

●**特徴**：高さ5～20cmの一年草。葉は線状狭卵形でやわらかく、1本の主脈が顕著です。上部の葉腋に筒状の花をつけます。花は紅紫色で長さ5～6mmです。茎中部以下には閉鎖花をつけます。花期は8～10月です。

●**生育環境**：山麓部・平野部から山地帯の湿地に生育します。

●**国内の分布**：本州から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●**市内の分布**：穂高の山麓部・平野部の湿地に自生しています。

●**減少要因**：耕作履歴の長い湿地に生育するため、圃場整備や、農地の管理放棄で減少しました。

生育環境



▶ 耕作地



参考文献 No. 4, 52, 63, 169

アゼナ (アゼナ科)
Lindernia procumbens

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

長野県：

—

—

CR+EN

環境省：

—

—



松岡貴子

●**特徴**：高さ5～20cmの一年草。葉は長さ15～25mmの楕円形で無柄、全縁です。上部の葉腋から出た長さ5～20mmの花柄の先に、淡紅紫色の花をつけます。花期は8～10月です。

●**生育環境**：山麓部・平野部の湿気のある荒地や田畑に生育します。

●**国内の分布**：北海道から南西諸島に分布します。県内では全域に分布します。

●**市内の分布**：穂高の山麓部・平野部の湿地に自生しています。

●**減少要因**：耕作履歴の長い湿地に生育するため、圃場整備や、農地の管理放棄で減少しました。

生育環境



▶ 耕作地



参考文献 No. 4, 15, 16, 19, 20, 38, 39, 52, 56, 57, 59

ヒメヨモギ（在来）（キク科）

Artemisia lancea

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：

—

—

環境省：

—

—



松岡貴子

生育環境



▶ 草原



●特徴：高さ100～120cmの多年草。茎中部の葉は長さ3～7cmで羽状に深裂し、裂片は幅3mm以下、裏面に白綿毛があります。大きな円錐状の花序に小さな筒鐘状の花を多数つけます。花期は8～10月です。

●生育環境：山地帯の乾いた草原などに生育します。

●国内の分布：本州から九州に分布します。県内では北部、中部に分布します。

●市内の分布：明科の山地帯の草地に自生しています。緑化材として持ち込まれた外来系統のヒメヨモギは県内でもみられますが、本種は古い草地に生育し、分布が非常に限られます。

●減少要因：管理放棄による草原の遷移によって、生息に適した草地が減少していることが要因です。また、外来系統のヒメヨモギとの交雑が懸念されます。

参考文献 No. 19, 24, 48, 52, 57, 59

ヤチアザミ（キク科）

Cirsium shinanense

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：

—

—

環境省：

—

—



松岡貴子

生育環境



▶ 耕作地
▶ 湿地



●特徴：高さ30～150cmの多年草。根出葉はふつう花期にも残ります。葉の縁には長さ2～5mmの鋭いとげがあります。頭花は直立または斜上して咲き、花冠は淡紅紫色、鐘形～広筒形の総苞は少し粘る程度です。花期は8～10月です。

●生育環境：山麓部から山地帯の湿地や休耕田に生育します。

●国内の分布：群馬県と長野県に分布します。県内では北部と中部に分布します。

●市内の分布：穂高の山麓部の耕作地周辺に自生しています。

●減少要因：土地開発や、農業の形態の変化が挙げられます。

参考文献 No. 16, 24, 52, 57, 59

ウスヒメワラビモドキ（イワデンダ科）

Acystopteris taiwaniana

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：

—

—

環境省：

—

—



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 森林



●特徴：夏緑性のシダ類。葉は3～4回羽状複葉で長さ33～42cm、淡緑色です。葉柄は紫褐色で、白色や淡褐色の鱗片が密につきまします。ウスヒメワラビと比べて葉軸があまり赤褐色を帯びません。

●生育環境：低山帯の林床に生育します。

●国内の分布：本州（秋田県以南）、四国に分布します。

●市内の分布：三郷の山地帯の森林に自生しています。

●減少要因：森林伐採や、山地帯での道路工事といった開発の影響が挙げられます。

参考文献 No. 157

ヒトツバテンナンショウ (サトイモ科)

Arisaema monophyllum



●特徴：多年草で、子球による栄養繁殖はほとんどしません。葉は1個で卵形や楕円形の小葉が7～9個あります。小葉には細かな鋸歯があることが多いです。仏炎苞は黄緑色で上部に細長い紫斑があります。花期は5～6月です。

●生育環境：山地帯のやや暗い林中、林縁などの斜面に生育します。

●国内の分布：本州中北部に分布します。県内では中部、東部に分布します。

●市内の分布：主に穂高の山地帯の森林に生育しています。

●減少要因：森林伐採による減少が考えられます。

生育環境



▶ 森林



参考文献 No. 13, 52, 157

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

長野県：—

—

VU

環境省：—

—

スズメノテッポウ (イネ科)

Alopecurus aequalis var. *amurensis*



豊科郷土博物館

●特徴：高さ20～40cmの多年草。葉は幅1.5～5mm、花序は4～6cmで円柱状、小穂は長さ3～3.5mmで芒が小穂の外まで明らかに飛び出しています。花期は4～5月です。

●生育環境：山麓部・平野部の湿地、耕起前の水田に生育します。

●国内の分布：北海道から南西諸島に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：耕作履歴の長い水田に自生しています。水田型のスズメノテッポウは大きく減少しており、畑地型のノハラスズメノテッポウが増加しています。

●減少要因：耕作履歴の長い湿田に生育するため、圃場整備や、農地の管理放棄で減少しました。

生育環境



▶ 耕作地



参考文献 No. 1, 4, 15, 16, 19, 20, 24, 38, 39, 52, 57, 59, 159

コウボウ (イネ科)

Anthoxanthum nitens var. *sachalinense*



豊科郷土博物館

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

長野県：—

—

VU

環境省：—

—

●特徴：高さ20～50cmの多年草。根生葉は線形で長さ10～30cm、花序は長さ4～8cm、枝が2～3本ずつ出て先端に数個の小穂をつけます。小穂は淡黄褐色で光沢があり、長さ幅共に4～6mmで3小花からなります。芒はなく、内穎は護穎とほぼ同長です。花期は3～5月です。

●生育環境：山麓部・平野部から山地帯の草原に生育します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：穂高の山麓部の草地に自生しています。

●減少要因：草原や森林の管理放棄や、それに伴う植生の遷移によって、生息に適した草地が減少していることが要因です。

生育環境



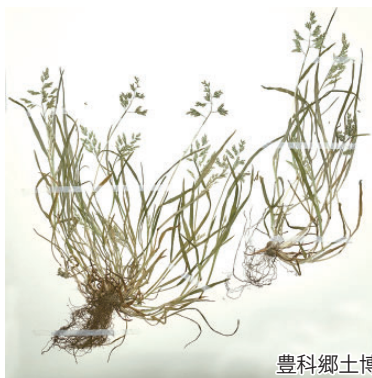
▶ 草原



参考文献 No. 4, 16, 18, 19, 24, 36, 52, 57, 59

スズメノカタビラ (イネ科)

Poa annua subsp.



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 耕作地



安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●**特徴**：高さ10～30cmの一年草または越年草。葉は幅1.5～4mmです。花序は長さ3～5cmで枝から2本ずつ出て、小穂は長さ3.5～5mmの長卵形または扁平で、3～5小花からなります。花期は2～11月です。スズメノカタビラは全体に黄色味があり、護穎の脈の基部に毛が多く、最下の花序側枝は下垂します。外来系統のアオスズメノカタビラは全体が緑色、葉は青味がかった緑色で、護穎の脈の基部の毛は少なめで、最下の花序側枝は下垂しません。

●**生育環境**：山麓部・平野部の水田に生育します。

●**国内の分布**：日本全国に分布します。県内では全域に分布します。

●**市内の分布**：穂高の農耕地に自生しています。外来系統のアオスズメノカタビラ、ツクシスズメノカタビラおよびその雑種が増加しており、大きく減少しています。

●**減少要因**：圃場整備や農地の管理放棄のほか、外来の近縁種との交雑が挙げられます。

参考文献 No. 18, 20, 24, 35, 36, 38, 48, 57, 159, 177, 178, 179 など

カニツリグサ (在来) (イネ科)

Trisetum bifidum



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 草原



安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●**特徴**：高さ40～70cmの多年草。花序は長さ約10～20cmでやや先が垂れます。小穂は長さ6～8mmで2～3小花からなり、長さ6～10mmの芒が出て下方に反り返ります。花期は5～6月です。在来系統は外来系統と比較して、丈が低めで上部まで茎葉が発達せず、花穂が太く、護穎が紫色を帯びてざらつくなどの特徴がみられます。

●**生育環境**：平野部から山地帯の草地に生育します。

●**国内の分布**：北海道から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●**市内の分布**：穂高、明科、豊科の山地帯から平野部の草地に自生しています。外来系統のカニツリグサ（ナガボカニツリ f. *contracta*）が多く、在来系統が残っているのは古い草地に限られます。

●**減少要因**：土地開発のほか、外来の近縁種との交雑が挙げられます。

参考文献 No. 24, 36, 45, 56, 69, 157, 159, 177, 178, 179 など

カワラケツメイ (マメ科)

Chamaecrista nomame



EAC

生育環境



▶ 草原



安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●**特徴**：高さ30～60cmの一年草または多年草。葉は線形または狭卵形で長さ3～7cm、葉柄上部に蜜腺が1つつきます。花は黄色で倒卵形、1～2花をつける花序が葉腋のやや上につきます。花期は8～10月です。

●**生育環境**：山麓部・平野部の日当たりのよい河原、土手、草地に生育します。

●**国内の分布**：本州から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●**市内の分布**：穂高の乾いた草地に自生しています。

●**減少要因**：生育環境の開発や、農業の形態の変化が挙げられます。

参考文献 No. 1, 4, 16, 19, 24, 56, 57, 59

ツルフジバカマ (マメ科)

Vicia amoena



松岡貴子

生育環境



▶ 草原
▶ 耕作地



安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：つる性の多年草。葉は偶数羽状複葉で、10～16枚の小葉が互生します。小葉は狭卵形または長卵形で、長さ15～35mmです。花は紅紫色、密に一侧に偏って長さ4～15cmの総状花序につきます。花期は8～10月です。

●生育環境：山麓部・平野部の草原や道端に生育します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：穂高、堀金の山麓部・平野部の耕作地や草地に自生しています。

●減少要因：生育環境の開発や、農業の形態の変化が挙げられます。

参考文献 No. 4, 16, 18, 19, 20, 24, 36, 46, 48, 52, 57, 59, 177

ヨツバハギ (マメ科)

Vicia nipponica var. *nipponica*



藤田淳一

生育環境



▶ 草原
▶ 耕作地



安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：高さ30～80cmの多年草。葉は4～8枚の小葉が対生につき、葉軸先端はときに巻きひげになります。花序は2～8cmで密に5～15花をつけます。花は紅紫色または青紫色で、長さは10～12mmです。花期は7～10月です。

●生育環境：山麓部・平野部から山地帯の草地に生育します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：明科、穂高の山地帯・山麓部の耕作地や草地に自生しています。

●減少要因：生育環境の開発や、農業の形態の変化が挙げられます。

参考文献 No. 4, 15, 16, 19, 24, 36, 38, 48, 52, 57, 59, 177

チョウセンミネバリ (カバノキ科)

Betula costata



藤田淳一

生育環境



▶ 森林



安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：高さ約20mの落葉広葉樹。樹皮は帯赤褐色または灰白褐色でダケカンバに似ていますが、葉が三角状長卵形で、先端が鋭く長く伸び、果鱗の側裂片がわずかに開出します。雄花序は長枝の先に下垂し、雌花序は短枝の先に直立します。花期は5～6月です。

●生育環境：亜高山帯から高山帯の森林に生育します。

●国内の分布：本州中部（栃木県、群馬県、長野県、岐阜県）に分布します。

●市内の分布：三郷、堀金、穂高の山地帯の森林に自生しています。

●減少要因：森林伐採や、山地帯での道路工事といった開発の影響が挙げられます。

参考文献 No. 157

ウスゲヤナギラン (アカバナ科)

Chamaenerion angustifolium subsp. *circumvagum*



松田貴子

生育環境



▶ 草原



安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：—

環境省：—

●特徴：高さ100～150cmの多年草。葉は互生し長披針形、花序は10～45cmになります。花は紅紫色で4枚の倒卵形の花弁をつけます。花期は6～8月です。ヤナギランと比べて全体的に少し大きく、茎の上部や葉の裏面脈上にまばらに毛があります。

●生育環境：山地帯から亜高山帯の草地に生育します。

●国内の分布：本州（東北南部から中部）に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：穂高の亜高山帯の草地に自生しています。

●減少要因：ニホンジカの嗜好植物であるため、食圧による減少が懸念されます。

参考文献 No. 24, 52

オオアカバナ (アカバナ科)

Epilobium hirsutum



松田貴子

生育環境



▶ 湿地



▶ 湧水地

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：絶滅危惧ⅠA類

CR

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

●特徴：高さ約1.5mの多年草。葉は長楕円形で無柄、縁に鋸歯があります。花は紫紅色で腋生し、長さ8～20mmの花弁を4枚つけ、柱頭が4裂します。花期は6～8月です。

●生育環境：湿草原や川岸、谷間の湿地に生育します。

●国内の分布：本州（中部以北）に分布します。

●市内の分布：明科の平野部の湧水地に自生しています。

●減少要因：湿地や湧水地の開発が挙げられます。

参考文献 No. -

ノミノツヅリ (狭義) (ナデシコ科)

Arenaria serpyllifolia var. *serpyllifolia*



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 耕作地



安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：—

環境省：—

●特徴：高さ5cm程度の一年草または越年草。本種は茎に短毛が密生しますが腺毛はなく、茎は立たずに這い、茎や葉が紫色を帯び、葉は全体に厚く、丸みがあるなどの特徴があります。花は白色で上部の葉腋に数個つきます。花弁は5枚、長さ1～2mmで萼片よりも短いです。花期は3～8月です。

●生育環境：山麓部・平野部の耕作地、原野などに生育します。

●国内の分布：日本全国に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：穂高の山麓部の耕作地周辺に自生しています。市内では茎や葉に腺毛が多く、茎が立ち上がり、茎や葉が緑色をした外来系統のネバリノミノツヅリが広く分布しており、在来系統の分布は非常に限られています。

●減少要因：圃場整備や農地の管理放棄のほか、外来の近縁種との交雑が挙げられます。

参考文献 No. 24, 57, 157

ケヤマウツボ (ハマウツボ科)
Lathraea japonica var. *miqueliana*

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

長野県：絶滅危惧ⅠＢ類

EN

VU

環境省：

—

—



松岡貴子

●特徴：高さ6～30cmの寄生植物。ブナ科、カバノキ科、ニレ科などの樹木の根に寄生します。全草で葉緑素を欠き、やや褐紫色を帯びた白色です。やや赤紫色を帯びた花を密につけます。花期は5～7月です。ヤマウツボと比べて茎に軟毛があります。

●生育環境：山地帯の落葉樹林の林床に生育します。

●国内の分布：本州から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：堀金の山地帯の林床に自生しています。

●減少要因：森林伐採や、山地帯での道路工事といった開発の影響が挙げられます。

参考文献 No. 52, 178

生育環境



▶ 森林



エビモ (ヒルムシロ科)
Potamogeton crispus

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：

—

—

NT

環境省：

—

—



松岡貴子

●特徴：沈水葉の長さ3～10cmの沈水性の多年草。沈水葉は広線形で無柄、葉縁に鋸歯があり、波打ちます。托葉は葉身と独立して茎を抱くようにつきます。長さ2～6cmの花序をつけます。花期は7～8月です。

●生育環境：山麓部・平野部の湖沼やため池、河川、水路に生育します。

●国内の分布：北海道から南西諸島に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：穂高や明科の平野部の湧水路などに生育しています。

●減少要因：湧水路などの生育環境の変化で減少していると考えられます。

参考文献 No. 4, 16, 19, 20, 24, 52, 56, 57, 59

生育環境



▶ 湿地



▶ 用水路

▶ 湧水地

ナガエミクリ (ガマ科)
Sparganium japonicum

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：絶滅危惧ⅠＢ類

EN

NT

環境省：準絶滅危惧

NT



松岡貴子

●特徴：抽水性または浮葉性の多年草。茎上部の葉腋から枝を出し、枝の下部に雌性頭花、上部に雄性頭花をつけます。雌性頭花は2～6個、雄性頭花は5～10個になります。果実は紡錘形で約2mmの小柄が存在します。花期は6～9月です。

●生育環境：山麓部・平野部の水位の浅い池や湿地に生育します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。県内では北部、中部に分布します。

●市内の分布：豊科、穂高、明科の平野部の湧水路に生育しています。

●減少要因：河川開発による護岸や河床のコンクリート化は生育地を消失させる可能性があります。また、水質の悪化による個体数の減少が考えられます。

参考文献 No. 170

生育環境



▶ 湿地



▶ 河川

▶ 池沼

▶ 用水路

アズマスゲ (カヤツリグサ科)
Carex lasiolepis



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 森林



安曇野市：準絶滅危惧

NT

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：高さ5～15cmの多年草。叢生し、植物体全体に軟毛が密生します。葉は幅3～5mmで、基部の鞘は淡褐色です。頂小穂は雄性で棍棒形、側小穂は雌性で楕円形で、果胞は長楕円形です。花期は4～5月です。

●生育環境：山地帯の乾いた明るい樹林内や草地に生育します。

●国内の分布：北海道から九州北部（中国地方を除く）に分布します。県内では中・南信に分布します。

●市内の分布：明科の山地帯の林道沿いに自生しています。

●減少要因：生育環境の開発が挙げられます。

参考文献 No. 4

オオバクサフジ (マメ科)
Vicia pseudo-orobus



松田貴子

生育環境



▶ 草原

▶ 耕作地



安曇野市：準絶滅危惧

NT

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：長さ80～150cmのつる性の多年草。葉は卵形の小葉が4～10枚互生し、葉軸の先端は分枝する巻きひげになります。4～7cmの総状花序に、多数の青紫色の花をつけます。花期は8～10月です。

●生育環境：平野部から山地帯の草原に生育します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：三郷、明科、堀金の山地帯・山麓部・平野部の耕作地や草地に自生しています。

●減少要因：生育環境の開発や農林業の衰退が挙げられます。

参考文献 No. 1, 4, 16, 18, 24, 36, 38, 52, 57, 59, 177

オオシラヒゲソウ (ニシキギ科)
Parnassia foliosa var. *japonica*



松田貴子

生育環境



▶ 森林



安曇野市：準絶滅危惧

NT

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：高さ15～30cmの多年草。短い根茎に2～4個の花茎と数個の根出葉を束生します。花は白色、花弁は卵形で縁が糸状に深く切れ込み、ひげ状になります。仮雄ずいは先端が3裂します。花期は8～9月です。シラヒゲソウと比べて全体的に大型です。

●生育環境：山地帯の林縁の湿った草地や溪流沿いに生育します。

●国内の分布：本州（秋田県から兵庫県）の日本海側に分布します。県内では北部、中部に分布します。

●市内の分布：市内の山地帯の溪流沿いに生育しています。

●減少要因：園芸目的の採取が懸念されます。

参考文献 No. 24, 57, 162

ホソバノツルリンドウ (リンドウ科)

Pterygocalyx volubilis



藤岡淳一

生育環境



▶ 森林



安曇野市：準絶滅危惧

長野県：準絶滅危惧

NT

NT

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

●特徴：つる性の一年草。ツルリンドウに似ますが、葉が細く茎や葉裏が紫色を帯びません。花は淡紫色を帯びた白色で、長さ30～35mmの筒状、先が4裂します。花期は9～10月です。

●生育環境：山麓部から山地帯の林縁などに生育します。

●国内の分布：北海道から四国に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：堀金の山麓部の森林に自生しています。

●減少要因：自然遷移によって減少していると考えられます。

参考文献 No. 4, 24, 52, 57, 59, 162

ヒメウキクサ (サトイモ科)

Landoltia punctata



井浦和子

生育環境



▶ 湿地



▶ 湧水地

安曇野市：情報不足

長野県：絶滅危惧ⅠA類

CR

DD

環境省：—

—

●特徴：葉の長さ3～5mm浮遊植物。葉状体は左右不相称の長楕円形で、上面は光沢のある緑色、下面は赤色です。単独または2～6個の群体を作ります。花期は5～8月です。

●生育環境：平野部の池や溝に生育します。

●国内の分布：本州（関東地方以西）から九州に分布します。

●市内の分布：穂高のワサビ田跡に生育しています。

●減少要因：湿地の開発や水質の悪化が挙げられます。

参考文献 No. 157

ホスゲ (カヤツリグサ科)

Carex deweyana subsp. *senanensis*



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 森林
▶ 草原



安曇野市：情報不足

長野県：—

—

DD

環境省：—

—

●特徴：高さ25～70cmの多年草。叢生し、葉は幅2.5～4.5mmで、基部の鞘は淡褐色～褐色です。花序は円柱形の無柄小穂を、4～8個散生します。果胞は長卵形で、上部は長嘴になります。花期は7～8月です。

●生育環境：山地帯から亜高山帯の湿った林縁や草地に生育します。

●国内の分布：本州（兵庫県以北の日本海側）に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：三郷の山地帯の林道沿いに自生しています。

●減少要因：現時点での県内での確認は少ないですが、詳細な現状が把握されておらず、減少要因は不明です。

参考文献 No. 4, 16, 24, 57, 157

ニイタカスゲ (カヤツリグサ科)
Carex leucochlora var. *aphanandra*



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 森 林



安曇野市：情報不足

DD

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●**特徴**：高さ15～50cmの多年草。葉は大きさの割に幅が広く、幅2～4mmでやや横に展開します。頂小穂は雄性で小さく、側小穂は雌性で2～3個です。最下の小穂は根際に生じ、長柄があります。花期は4～6月です。

●**生育環境**：山地帯から亜高山帯の樹林内に生育します。

●**国内の分布**：本州、四国、九州に分布します。

●**市内の分布**：穂高と堀金の亜高山帯の林道沿いに自生しています。

●**減少要因**：現時点での県内での確認は少ないですが、詳細な現状が把握されておらず、減少要因は不明です。

参考文献 No.

-

ミセンアオスゲ (カヤツリグサ科)
Carex leucochlora var. *horikawae*



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 森 林



安曇野市：情報不足

DD

長野県：絶滅危惧Ⅱ類

VU

環境省：

—

—

●**特徴**：高さ15～40cmの多年草。葉は幅1～2mmで、基部の鞘は淡褐色です。頂小穂は雄性の線柱形、側小穂は雌性の短柱形で離れてつきます。果胞は長卵形で上部は短喙になります。花期は4～5月です。

●**生育環境**：主に山地帯の乾いた路傍や林床に生育します。

●**国内の分布**：本州（長野県、愛知県、瀬戸内海沿岸）、四国（香川県、愛媛県）、宮崎県に分布します。

●**市内の分布**：明科と豊科の山地帯の林道沿いに自生しています。

●**減少要因**：現時点での県内での確認は少ないですが、詳細な現状が把握されておらず、減少要因は不明です。

参考文献 No.

-

ヒメヒラテンツキ (カヤツリグサ科)
Fimbristylis autumnalis



豊科郷土博物館

生育環境



▶ 裸 地
▶ 湿 地
▶ 耕作 地



▶ 河 川

安曇野市：情報不足

DD

長野県：準絶滅危惧

NT

環境省：

—

—

●**特徴**：高さ15～30cmの一年草。匍匐根茎はなく、叢生します。葉は幅約2mmで、基部の鞘は褐色です。小穂は長さ3～6mmの披針形で、複散房状の花序に多数つきます。花期は7～10月です。

●**生育環境**：平野部の湿地や水田の畔などに生息します。

●**国内の分布**：北海道から九州（奄美大島、徳之島、対馬）、南西諸島に分布します。

●**市内の分布**：穂高の河川敷に自生しています。

●**減少要因**：生育環境の開発が挙げられます。

参考文献 No.

4, 16, 19, 24, 57

ジロボウエンゴサク (ケシ科)

Corydalis decumbens



松田貴子

生育環境



森林



安曇野市：情報不足

DD

長野県：絶滅危惧ⅠA類

CR

環境省：

—

—

●特徴：高さ10～20cmの多年草。根出葉は2～3回3出複葉で、小葉はふつう2～3裂し、裂片の長さは1～2cm。花序はやや少数の花をつけます。花は紅紫色から青紫色で、長さは12～22mmです。花期は4～5月です。

●生育環境：山麓部・平野部の川岸や林縁に生育します。

●国内の分布：本州（関東地方以西）から九州に分布します。県内では南部に分布します。

●市内の分布：穂高の山麓部の林縁に自生しています。県内では人為的移入によって分布している場所もあります。

●減少要因：現時点での県内での確認は少ないですが、詳細な現状が把握されておらず、減少要因は不明です。

参考文献 No.

—

クサフジ (マメ科)

Vicia cracca



松田貴子

生育環境



草原

耕作地



安曇野市：情報不足

DD

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：つる性の多年草。茎の長さは150cmに達します。葉は偶数羽状複葉で、18～24枚の狭卵形の小葉がつきます。花は青紫色で、密に一方にやや偏って長さ6～15cmの総状花序につきます。花期は5～9月です。まれに純白色の花をつける個体もあります。

●生育環境：山麓部・平野部から山地帯の草地や林縁に生育します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：山麓部・平野部の耕作地や草地に自生しています。

●減少要因：圃場整備など生育環境の改変や耕作、草刈り等の管理放棄によって個体数の減少率が高いと考えられます。現在は普通種ですが、今後、生育地や個体数に留意しモニタリングしていく必要があります。

参考文献 No.

24, 35, 36, 37, 39, 45, 46, 57, 157, 171, 177, 178 など

ヤエムグラ (アカネ科)

Galium spurium var. *echinospermon*



松田貴子

生育環境



森林

耕作地



安曇野市：情報不足

DD

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：つる状になる一年草または越年草。茎には4稜があり、稜上に下向きの刺状毛が生えて他物に引っかかります。葉は6～8枚が輪生します。葉腋や枝先に小さな黄緑色の花をつけます。花期は5～6月です。

●生育環境：山麓部・平野部の人家近くのやぶや荒地に生育します。

●国内の分布：北海道から南西諸島に分布します。県内では全域に分布します。

●市内の分布：山麓部・平野部の土手や林縁等に自生しています。

●減少要因：生育環境の改変や外来種シラホシムグラとの競合によって個体数の減少率が高いと考えられます。現在は普通種ですが、今後、生育地や個体数に留意しモニタリングしていく必要があります。

参考文献 No.

18, 20, 24, 38, 39, 48, 52, 56, 57, 69, 157 など

キソアザミ (キク科)

Cirsium fauriei



生育環境



▶ 森林



安曇野市：情報不足

長野県：準絶滅危惧

NT

DD

環境省：

—

—

●**特徴**：高さ40～100cmの多年草。根生葉と茎下部の葉は花期には枯れ、茎中部の葉は6～8対の羽状に中裂～深裂します。頭花は下向きに咲き、花冠は淡紅紫色、鐘形～碗形の総苞は著しく粘ります。花期は8～10月です。

●**生育環境**：主に亜高山帯から高山帯の草原や低木林の林縁に生育します。

●**国内の分布**：中部地方（北アルプス南半部、御嶽山、中央アルプス）に分布します。県内では中部と南部に分布します。

●**市内の分布**：穂高の山地帯から亜高山帯の林縁に自生しています。

●**減少要因**：森林伐採や、山地帯での道路工事といった開発の影響が挙げられます。

参考文献 No. 24, 57



2 哺乳類



■ レッドリスト改訂の概要（哺乳類）

カテゴリーに変更があった哺乳類は3種、新規追加は5種で、哺乳類のレッドリスト種は計19種になりました。表3-6にカテゴリーごとの種数・概要を示します。

カテゴリーが上昇した種、新規追加した種は、すべてコウモリの仲間でした。これは、近年の調査で新たに市内での生息が確認された種がいることや、その他の種でも生息情報が把握された種が増加したためです。

全体としては絶滅危惧Ⅰ類が増加し、絶滅のおそれの高い種が増加した結果となりました。

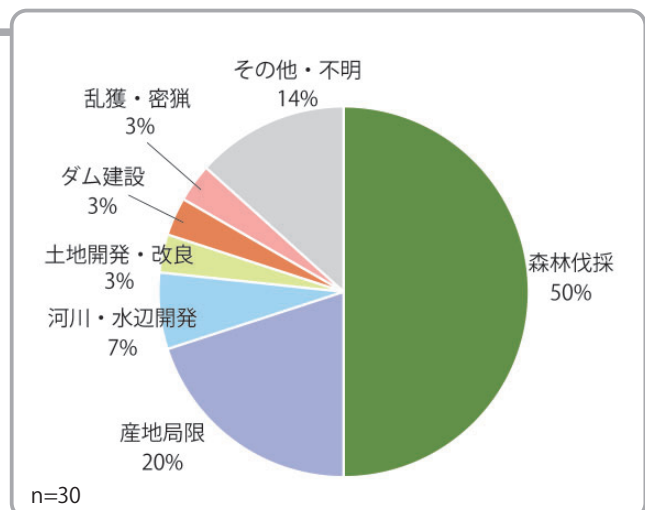
表 3-6 哺乳類レッドリスト種の概要

カテゴリー	種数		改訂内容
	2014	2024	
絶滅 (EX)	1	1	新たに絶滅種に選定された哺乳類はありませんでした。
野生絶滅 (EW)	0	0	野生絶滅に該当する種は選定されませんでした。
絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	0	3	ヤマコウモリのカテゴリーを上昇、クロホオヒゲコウモリを新規追加したほか、テングコウモリはDDから移行して選定しました。
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	2	2	変更の生じた種はありませんでした。
準絶滅危惧 (NT)	8	10	キクガシラコウモリとユビナガコウモリを新規追加しました。ヒメホオヒゲコウモリはDDから移行して選定しました。
情報不足 (DD)	3	3	モリアブラコウモリとヒナコウモリを新規追加しました。

■ 危惧される減少要因

レッドリスト種に選定された哺乳類の主な減少要因としては、森林伐採が多くを占めています。また、生息地が局限されている種が多いことも特徴です。

今回の改訂では、複数のコウモリ類で追加やカテゴリーの上昇がありました。これらの種の中には、市内のねぐらが局限されている種があり、数少ない生息地の開発が脅威となっています。



哺乳類レッドリスト種の減少要因の割合

■ 今回の改訂作業で分かったこと（哺乳類）

改訂にあたっては、市内で記録の少ない小型哺乳類の生息状況を把握するため、捕獲調査を実施しました。ここでは調査で分かったことの一部を紹介します。

●コウモリ類の捕獲調査

市内の山地帯を対象に、必要な許可を得た上でトラップを用いたコウモリ類の捕獲調査を行いました。その結果、中房川流域でヒメホオヒゲコウモリ4頭とコテングコウモリ1頭を捕獲しました。このうち、ヒメホオヒゲコウモリでは当歳獣が確認されたことや、雌の乳頭が発達していたことから、周辺で繁殖していることが明らかになりました。本種は安曇野市版レッドリスト2014では情報不足（DD）として選定*されていましたが、生息状況の一端が分かったことにより、準絶滅危惧（NT）へとカテゴリーを見直しました。また、コテングコウモリも当歳獣であったことから、周辺で繁殖していると考えられます。コテングコウモリは高山帯で見つかることもあるなど、分布について不明な点も多いことから引き続き情報不足としました。

*2014年版ではシナノホオヒゲコウモリとして掲載



コウモリ捕獲用のハープトラップ



捕獲されたヒメホオヒゲコウモリ

●トガリネズミ類の調査

烏川流域及び黒沢流域でトガリネズミ類の確認を目的としたトラップの設置を行いました。また、トガリネズミ類は山小屋などで見つかることもあることから、山小屋関係者に情報提供を呼びかけました。その結果、シントウトガリネズミとアズミトガリネズミの2種を確認しました。このうち、アズミトガリネズミは「安曇」の地域名を冠した種ですが、これまで市内での生息状況は分かっていませんでした。2014年版の選定時点では亜高山帯から高山帯にかけて分布すると考えられていましたが、今回の調査で標高1,300m程度の山地帯にも生息することが分かりました。



トガリネズミ類が確認された環境

●その他の確認種

記録の少ないレッドリスト種として、市内の複数の場所でニホンモモンガを確認したほか、これまで市内での報告がなかったヒナコウモリを確認しました。また、山小屋からの情報提供で、標高2,700mの高山帯に位置する山小屋でコテングコウモリの確認がありました。



捕獲されたシントウトガリネズミ

新規追加種の解説

新規追加種以外の説明は、2014年版の193～197ページを参照してください。

クロホオヒゲコウモリ (コウモリ目 ヒナコウモリ科)

Myotis pruinus



松宮裕秋

生息環境



森林



安曇野市：滅亡惧Ⅰ類

長野県：絶滅危惧ⅠA類

CR

CR+EN

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

●特徴：全長7～8cm。黒色で小型のコウモリの仲間です。夜行性で森林を飛びながら昆虫類を食べます。

●生育環境：山地帯の森林に生息しています。木のすき間や洞穴をねぐらにします。

●国内の分布：本州、四国、九州に分布します。

●市内の分布：一部地域の山地帯で生息が確認されています。

●減少要因：森林環境の悪化や餌となる昆虫類の減少が考えられます。

参考文献 No. 156

キクガシラコウモリ (コウモリ目 キクガシラコウモリ科)

Rhinolophus ferrumequinum



松宮裕秋

生息環境



森林



安曇野市：準絶滅危惧

長野県：

—

—

NT

環境省：

—

—

●特徴：全長9～12cm。特徴的な鼻を持つコウモリの仲間です。体色は淡い褐色です。夜行性で森林内を飛びながら昆虫類を食べます。

●生育環境：山麓・平野部から山地帯にかけての森林に生息しています。洞穴や廃トンネルをねぐらにします。

●国内の分布：北海道から九州、その他離島に分布します。

●市内の分布：市内の山麓部から山地帯にかけて分布していると考えられます。

●減少要因：まとまった生息地が限られるうえ、生息地の開発による減少が考えられます。

参考文献 No. 4, 15, 16, 59, 183, 190

ユビナガコウモリ (コウモリ目 ヒナコウモリ科)

Miniopterus fuliginosus



松宮裕秋

生息環境



森林



安曇野市：準絶滅危惧

長野県：絶滅危惧ⅠA類

CR

NT

環境省：

—

—

●特徴：全長10～13cm。黒っぽい体色のコウモリの仲間です。夜行性で開けた場所を飛びながら昆虫類を食べます。

●生育環境：山麓・平野部から山地帯にかけての森林に生息しています。洞穴や廃トンネルをねぐらにします。

●国内の分布：本州、四国、九州、その他離島に分布します。

●市内の分布：一部地域の山麓部から山地帯に少数が生息していると考えられます。

●減少要因：まとまった生息地が限られるうえ、生息地の開発による減少が考えられます。

参考文献 No. -

モリアブラコウモリ (コウモリ目 ヒナコウモリ科)

Pipistrellus endoi



H.Hashimoto 2023

橋本肇

生息環境



森林



●**特徴**：全長7～9cm。茶褐色のコウモリの仲間です。夜行性で森林を飛びながら昆虫類を食べます。

●**生育環境**：山地帯の森林に生息しています。木のすき間などをねぐらにします。

●**国内の分布**：本州、四国、九州に分布します。

●**市内の分布**：一部地域の山地帯に生息していると考えられます。

●**減少要因**：森林環境の悪化や餌となる昆虫類の減少が考えられます。

参考文献 No.

-

安曇野市：情報不足

長野県：情報不足

DD

DD

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

ヒナコウモリ (コウモリ目 ヒナコウモリ科)

Vespertilio sinensis



松宮裕秋

生息環境



森林

市街地



●**特徴**：全長9～13cm。中型のコウモリの仲間です。体色は黒褐色ですが、先端に白い毛が混じります。夜行性で開けた場所を飛びながら昆虫類を食べます。

●**生育環境**：山麓・平野部から亜高山帯にかけての森林に生息すると考えられます。木のすき間や人工構造物をねぐらにします。

●**国内の分布**：北海道から九州に分布します。四国や九州では記録が少ないです。

●**市内の分布**：市内の山麓部から亜高山帯にかけて分布していると考えられます。

●**減少要因**：森林環境の悪化や餌となる昆虫類の減少が考えられます。

参考文献 No.

190

安曇野市：情報不足

長野県：絶滅危惧ⅠB類

EN

DD

環境省：

—

—

3 鳥類



■ レッドリスト改訂の概要（鳥類）

カテゴリーに変更があった鳥類は6種、新規追加は3種、除外種は1種で、鳥類のレッドリスト種は計35種になりました。表3-7にカテゴリーごとの種数・概要を示します。

カテゴリーが上昇した種、新規追加した種には、コサギなどの小型の魚食性鳥類が多い傾向が見られました。また、昆虫食の小型フクロウ類（アオバズク、コノハズク）は生息数が少ないことが分かり、情報不足から絶滅危惧Ⅰ類へ変更しました。

全体としては絶滅危惧Ⅰ類が増加し、絶滅のおそれの高い種が増加した結果となりました。

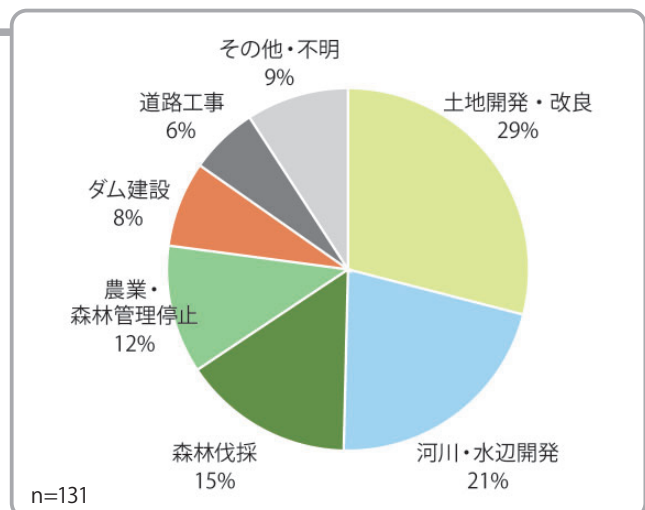
表 3-7 鳥類レッドリスト種の概要

カテゴリー	種数		改訂内容
	2014	2024	
絶滅 (EX)	0	0	絶滅に該当する種は選定されませんでした。
野生絶滅 (EW)	0	0	野生絶滅に該当する種は選定されませんでした。
絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	9	14	ササゴイのカテゴリーを上昇、アオバズクとコノハズクをDDから移行、コサギとブッポウソウを新規追加として選定しました。
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	5	5	山地帯に生息するハイタカをカテゴリーを上げて選定しました。河川・水辺に生息するコサギを新たに選定しました。
準絶滅危惧 (NT)	10	8	サンショウクイが除外されました。新たに加わった種はありませんでした。
情報不足 (DD)	9	8	山麓部・平野部に生息するチゴモズを新たに選定しました。

■ 危惧される減少要因

レッドリスト種に選定された鳥類の主な減少要因としては、開発に伴う生息環境の喪失が多くを占めるほか、里山の手入れ不足による環境の変化が挙げられます。

今回の改訂では複数の魚食性鳥類でカテゴリーの上昇や追加があったことから、河川環境の悪化とともに、餌となる魚の減少も懸念されます。また、チゴモズやアカモズといった渡り鳥の減少には、越冬地などの環境悪化も影響していると考えられます。



鳥類レッドリスト種の減少要因の割合

■ 今回の改訂作業で分かったこと（鳥類）

改訂にあたっては、高山帯に生息するライチョウや、情報の少ない夜行性鳥類の生息実態を把握するため、現地調査を実施しました。ここでは調査で分かったことの一部を紹介します。

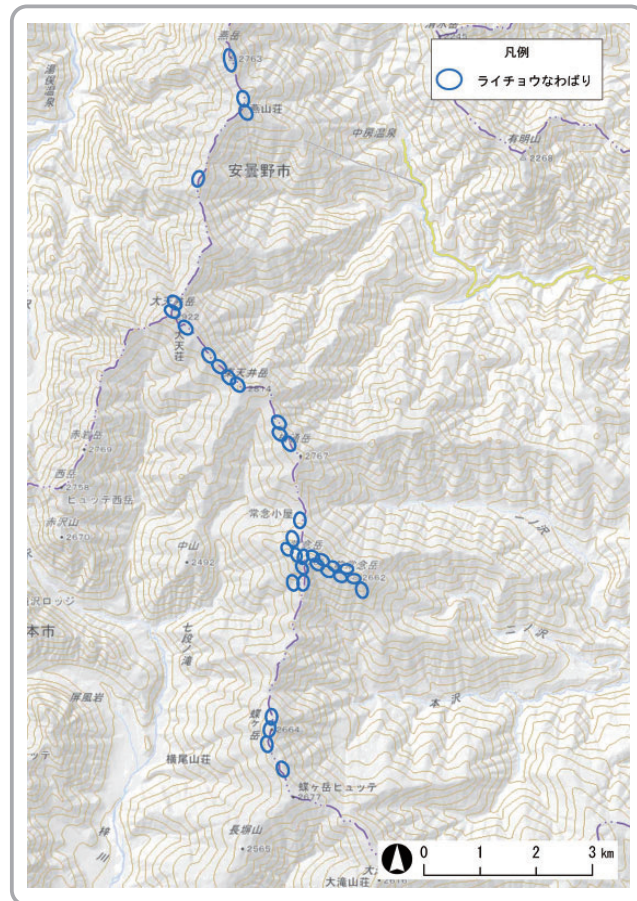
●ライチョウの生息数調査

2023年6月に、燕岳から蝶ヶ岳にかけての高山帯でライチョウ調査を実施しました。また、山小屋や登山者からも情報を収集しました。現地調査では、なわばり雄35羽とあぶれ雄5羽を確認したほか、情報からは蝶ヶ岳山頂周辺にも複数のなわばりが存在することが推測されました。

長野県が行った2015年の調査と比較すると、なわばり数に大きな変化はないことが分かりました。



ライチョウなわばり雄（大天井岳付近 6月8日）



ライチョウのなわばり分布（2023 年）

●夜行性鳥類調査

信州野鳥の会の協力のもと、市内に生息する夜行性鳥類を対象に生息状況を調査しました。夜行性鳥類はその確認が難しく、これまで生息の実態が分かっていませんでした。今回の調査で、コノハズクとアオバズクは市内でも非常に限られた場所にしか生息していないことが分かり、情報不足（DD）から絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）へとカテゴリーが移行しました。



個体数の少ないコノハズク

新規追加種の解説

新規追加種以外の説明は、2014年版の201～211ページを参照してください。

ブッポウソウ (ブッポウソウ目 ブッポウソウ科) *Eurystomus orientalis*

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

長野県：絶滅危惧ⅠA類

CR

CR+EN

環境省：絶滅危惧ⅠB類

EN



植松永至

生息環境



森林



●特徴：全長約30cm。頭部は黒褐色で、体は金属光沢のある青色をしています。飛翔時には翼の白斑が目立ちます。濁った声で「ゲェ ゲゲゲ」と鳴きます。空中を飛びながら昆虫を捕えて食べます。

●生育環境：山麓部から山地帯にかけての林に生息します。木の穴で繁殖します。

●国内の分布：夏鳥。主に本州、四国、九州に渡来します。

●市内の分布：近年、市内での複数の観察例があるほか、周辺地域での繁殖が確認されています。市内でも繁殖している可能性があります。

●減少要因：開発や森林伐採などで、繁殖に適した樹洞が減少したことが考えられます。

参考文献 No. 4, 190

コサギ (ペリカン目 サギ科) *Egretta garzetta*

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

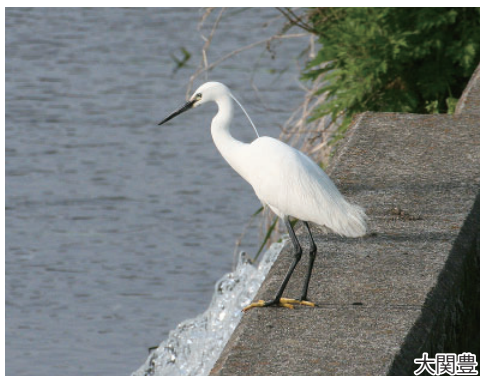
長野県：準絶滅危惧

NT

VU

環境省：—

—



大関豊

生息環境



河川
用水路

●特徴：全長約60cm。全身が白く、嘴は一年を通して黒色です。足は黒く、足指は黄色です。川の浅瀬や水路などで、魚類や甲殻類などを食べます。

●生育環境：河川や水路などの水辺に生息し、河畔林などに営巣します。

●国内の分布：留鳥。全国に分布します。

●市内の分布：市内の水辺で観察されますが、個体数が限られています。

●減少要因：河川環境の変化や餌となる小魚の減少が考えられます。

参考文献 No. 9, 14, 17, 32, 34, 41, 42, 43, 54, 66, 182, 186 など

チゴモズ (スズメ目 モズ科) *Lanius tigrinus*

安曇野市：情報不足

長野県：絶滅危惧ⅠA類

CR

DD

環境省：絶滅危惧ⅠA類

CR



松宮裕秋

生息環境



森林
耕作地



●特徴：全長約18cm。体の上面は頭から首が灰色で背中から尾は褐色で、下面は白色です。背や脇腹に横斑が入り、目の周りには黒い線があります。主に昆虫を食べます。

●生育環境：山麓部・平野部の明るくギャップのある疎林、河畔林などに生息します。

●国内の分布：夏鳥。主に本州中部地方と東北地方に渡来します。国内の生息数は160つがい程度と推測されています。

●市内の分布：2018年に市内での繁殖例があることや、周辺地域でも観察例があることから、ごく少数が生息している可能性があります。よく分かっていません。

●減少要因：生息地の開発や里山の手入れ不足による生息地の減少のほか、越冬地である東南アジアの生息地の悪化が考えられます。

参考文献 No. 4, 16, 25, 28, 32, 36, 169



4 爬虫類



■ レッドリスト改訂の概要（爬虫類）

カテゴリーに変更があった種はなく、新規追加は1種で、爬虫類のレッドリスト種は計3種になりました。表3-8にカテゴリーごとの種数・概要を示します。

新規追加した種は山地帯の森林に生息するタカチホヘビで、新たに市内での生息が確認されたことから情報不足として選定されました。

選定されたいずれの種も市内の生息情報に乏しく、引き続き生息情報の収集が求められます。

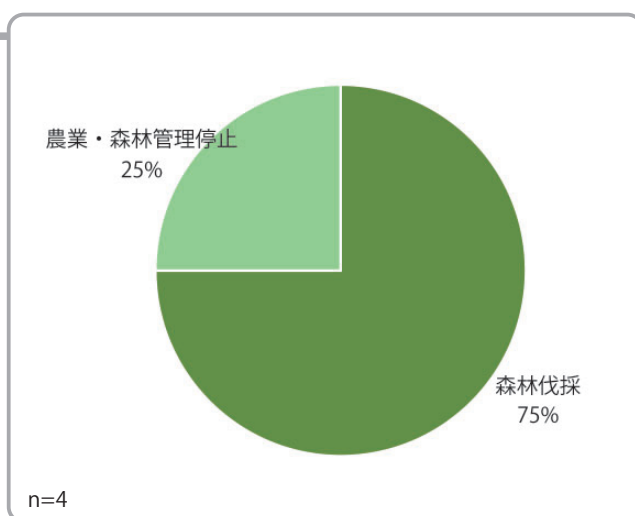
表 3-8 爬虫類レッドリスト種の概要

カテゴリー	種数		改訂内容
	2014	2024	
絶滅 (EX)	0	0	絶滅に該当する種は選定されませんでした。
野生絶滅 (EW)	0	0	野生絶滅に該当する種は選定されませんでした。
絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	0	0	絶滅危惧Ⅰ類に該当する種は選定されませんでした。
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	0	0	絶滅危惧Ⅱ類に該当する種は選定されませんでした。
準絶滅危惧 (NT)	0	0	準絶滅危惧に該当する種は選定されませんでした。
情報不足 (DD)	2	3	山地帯の森林に生息するタカチホヘビを新たに選定しました。

■ 危惧される減少要因

レッドリスト種に選定された爬虫類の主な減少要因としては、森林伐採が多くを占めるほか、農業形態の変化も挙げられます。

情報が少ないことから、市内における減少の程度を判断することが難しく、生息状況の実態把握が課題です。



爬虫類レッドリスト種の減少要因の割合

■ 今回の改訂作業で分かったこと（爬虫類）

改訂にあたっては、市内で記録の少ない爬虫類の生息状況を把握するため、情報収集や現地調査を実施しました。ここでは2種のヘビ類（タカチホヘビとシロマダラ）の確認状況について紹介します。

● タカチホヘビの確認

タカチホヘビは森林の林床に生息する小型のヘビの仲間です。夜行性であることや、日中は落ち葉や石の下に隠れることなどから、目にする機会が少なく、これまで安曇野市での記録はありませんでした。今回の改訂にあたっての文献調査で、2021年に烏川流域で確認されていることが分かりました。また、2023年の現地調査では黒沢流域で立て続けに2匹が確認されました。記録が少ないことから、個体数が多くないことが推察されますが、増減を判断できる情報が得られていないことから、情報不足（DD）として新たにレッドリストへ追加しました。



黒沢で確認されたタカチホヘビ

● シロマダラの情報

シロマダラは森林に生息するヘビで、夜行性であることから、タカチホヘビと同様に記録の少ない種です。しかし、一般の方にも分かりやすい特徴的な模様をしていることから、今回の改訂では市民への情報提供を呼びかけました。その結果、2022年に穂高で撮影された画像が寄せられました。近年の確認はこの1例のみで、個体数の増減は不明であるため、2014年版に引き続き、情報不足（DD）としました。



特徴的な模様のシロマダラ

■ 新規追加種の解説

新規追加種以外の説明は、2014年版の215ページを参照してください。

タカチホヘビ (トカゲ目 タカチホヘビ科) *Achalinus spinalis*



濱田竜輔

生息環境



森林



安曇野市：情報不足

DD

長野県：情報不足

DD

環境省：

—

—

●特徴：全長30～60cm。体は明るい褐色または暗い褐色で、背中に1本の筋があります。主にミミズを食べます。

●生育環境：山地帯の森林に生息します。夜行性で、日中は石や落ち葉の下に隠れています。

●国内の分布：本州、四国、九州に分布します。

●市内の分布：市内の山地帯に生息していると考えられます。

●減少要因：森林伐採などによる生息環境の悪化が考えられます。

参考文献 No. 178, 190

5 両生類



■ レッドリスト改訂の概要（両生類）

カテゴリーに変更があった両生類は1種、新規追加は1種で、両生類のレッドリスト種は計7種になりました。表3-9にカテゴリーごとの種数・概要を示します。

トウキョウダルマガエルは近縁種との交雑が進んでいることから、準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類へカテゴリーが上昇しました。また、市内での生息が新たに確認されたモリアオガエルを情報不足として新規追加しました。

全体としては絶滅危惧Ⅱ類が1種、情報不足が1種増加する結果となりました。

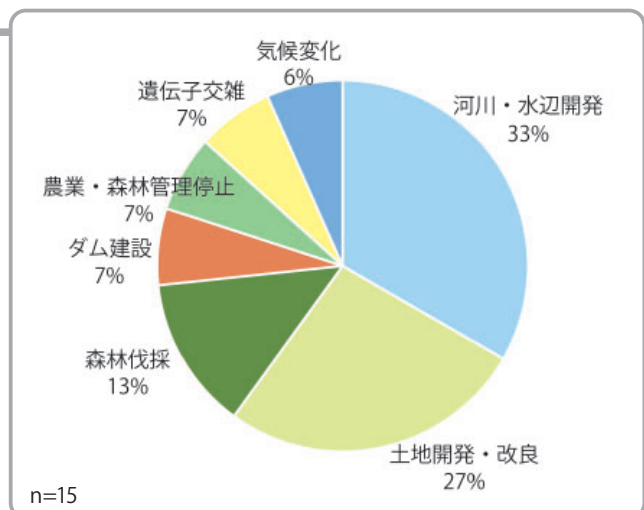
表 3-9 両生類レッドリスト種の概要

カテゴリー	種数		改訂内容
	2014	2024	
絶滅 (EX)	0	0	絶滅に該当する種は選定されませんでした。
野生絶滅 (EW)	0	0	野生絶滅に該当する種は選定されませんでした。
絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	0	0	絶滅危惧Ⅰ類に該当する種は選定されませんでした。
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	1	2	トウキョウダルマガエルをカテゴリーを上げて選定しました。
準絶滅危惧 (NT)	5	4	変更の生じた種はありませんでした。
情報不足 (DD)	0	1	山地帯に生息するモリアオガエルを新たに選定しました。

■ 危惧される減少要因

レッドリスト種に選定された両生類の主な減少要因としては、開発に伴う生息環境の喪失が多くを占めるほか、農業の形態の変化による里山環境の変化が挙げられます。

今回の改訂ではトウキョウダルマガエルのカテゴリーが上昇しましたが、これは近縁種トノサマガエルとの交雑が進んで、純系の個体が減少しているためです。



両生類レッドリスト種の減少要因の割合

■ 今回の改訂作業で分かったこと（両生類）

両生類では、市内での分布が初めて確認された種や、近年の研究によって2種に分けられた種が見られました。

●モリアオガエルの初確認

モリアオガエルは森林に生息するカエルです。安曇野市の近隣地域では、大町市や松本市奈川に生息地がありますが、これまで市内での確認例はありませんでした。

今回の改訂にあたって、市内の生きものの情報を集めていたところ、2022年の環境フェアの来場者から、モリアオガエルの卵塊と考えられる写真が寄せられました。そこで、2023年に現地を確認したところ、2か所の水場で複数の卵塊と成体を確認することができました。

南信地方では、近年の分布が拡大していることが報告されており、安曇野市でも近隣地域から広がってきた可能性があります。一方で、全国的には人為的に移入された事例もあることから、自然分布ではない可能性もあります。改訂版のレッドリスト2024では情報不足（DD）としましたが、今後の分布がどのように広がるかを調べることが重要です。



モリアオガエルの成体

●ツチガエルの分類の見直し

ツチガエルは水田や河川に生息するカエルで、安曇野市版レッドリスト2014では絶滅危惧Ⅱ類（VU）に選定されていました。近年の研究から、松本盆地のツチガエルはツチガエルとムカシツチガエルの2種に分けられました。改訂にあたり、市内で見つかった個体を遺伝子解析したところ、ムカシツチガエルであることが分かりました。しかし、市内の分布にはまだ不明な点が多いことから、レッドリストでは両種を区別せずにツチガエル類として扱いました（コラム4 p.154 参照）。

■新規追加種の解説

新規追加種以外の説明は、2014年版の219～220ページを参照してください。

モリアオガエル（カエル目 アオガエル科） *Zhangixalus arboreus*



生息環境



森林
湿地



池沼

安曇野市：情報不足

DD

長野県：準絶滅危惧

NT

環境省：

—

—

●特徴：全長4～8cm。体の色は緑色で、地域によっては赤褐色の斑紋が見られます。池や水たまりの上の枝に、白い泡状の卵塊を産みます。「コロロ、コロロ」と高い声で鳴きます。

●生育環境：山地帯の森林に生息します。

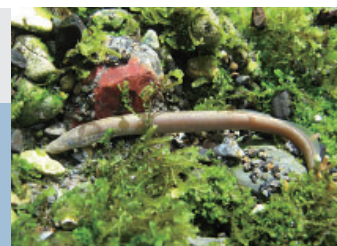
●国内の分布：本州に分布します。

●市内の分布：2022年に明科の山地で初めて確認されました。

●減少要因：繁殖場所となる湿地の開発が考えられます。

参考文献 No. 190

6 魚類



■ レッドリスト改訂の概要（魚類）

カテゴリーに変更、追加があった魚類はありませんでしたが、従来は1種として扱っていたスナヤツメを2種に分けて記載したため、魚類のレッドリスト種は計12種になりました。表3-10にカテゴリーごとの種数・概要を示します。

近年の分類では、スナヤツメは北方種と南方種の2種に分けられるため、カテゴリーは準絶滅危惧 (NT) のまま、それぞれを別の2種として扱いました。

全体としてはカテゴリーや種数にほとんど変化がない結果となりました。

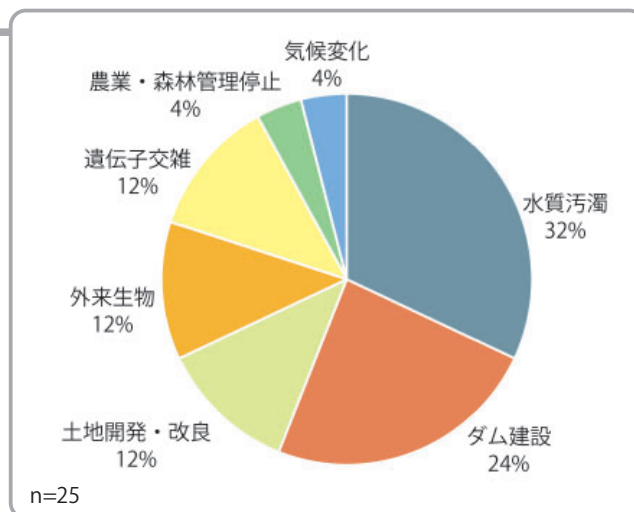
表 3-10 魚類レッドリスト種の概要

カテゴリー	種数		改訂内容
	2014	2024	
絶滅 (EX)	0	0	絶滅に該当する種は選定されませんでした。
野生絶滅 (EW)	3	3	変更の生じた種はありませんでした。
絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	1	1	変更の生じた種はありませんでした。
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	2	2	変更の生じた種はありませんでした。
準絶滅危惧 (NT)	4	5	最新の分類に従い、従来のスナヤツメを北方種と南方種の2種に分けて記載しました。
情報不足 (DD)	1	1	変更の生じた種はありませんでした。

■ 危惧される減少要因

レッドリスト種に選定された魚類の主な減少要因としては、水質汚濁やダム建設が大きな割合を占めますが、外来種による捕食や競合、遺伝子交雑による影響も挙げられます。

今回の改訂ではカテゴリーの上昇や追加はありませんでしたが、気候変動に伴う出水規模の増大などで河川環境の変化は続いているため、その動向を注視していく必要があります。



魚類レッドリスト種の減少要因の割合

■ 今回の改訂作業で分かったこと（魚類）

今回の改訂にあたり、魚類の捕獲調査を市内の5か所（犀川本川、御宝田遊水池、会田川など）で実施しました。調査により、確認された魚類は16種類で、安曇野市版レッドリスト2014に掲載されているスナヤツメ類やアカザ、カジカ、ホトケドジョウなども確認されました。一方で外来種のブラウントラウトも確認されました。

この現地調査の結果や、近年の調査記録をもとに、レッドリストの改訂を行いました。

● 湧水環境に生息する魚類

安曇野市内における特徴的な環境として、湧水環境が挙げられます。

湧水の環境に生息する魚類として、ホトケドジョウ、スナヤツメ類を確認しました。

しかしながら、近年の土地利用の変化や水路の改修工事などの環境改変により、両種が生息できる場所、環境は、年々減少していると思われ、保全のための取り組みも必要であると考えられます。

また、湧水の環境には、ブラウントラウト、ウチダザリガニ、カワリヌマエビといった外来生物の生息もみられており、それらの生息動向にも留意していくことが大切になります。

● 種の分類が進んだ魚類

現地調査でも確認したスナゴカマツカは、2019年に新種とされた魚です。Tominaga and Kawase (2019)の研究により、これまでカマツカとされていたものが、遺伝的な解析や形態の精査を行った結果、カマツカ、ナガレカマツカ、スナゴカマツカの3種に分けられました。

スナゴカマツカは、フォッサマグナよりも東側の本州に分布しているとされています。スナゴの名前は、体に多くの小黑斑があり、それらの間にある鱗が金や銀に光って見えることから名づけられました。



ホトケドジョウ



スナヤツメ類



スナゴカマツカ

7 昆虫類



■ レッドリスト改訂の概要（昆虫類）

カテゴリーに変更があった昆虫類は45種、新規追加は61種で、昆虫類のレッドリスト種は計304種になりました。表3-11にカテゴリーごとの種数・概要を示します。

カテゴリーが上昇した種、新規追加した種には草地性の種が多く、特にチョウ類やガ類に多い傾向が見られました。絶滅種は9種増加しました。このうち、市内に2亜種の記録があるアサマシジミについては、それらを区別して掲載することとし、それぞれの生息状況を整理したところ、中部低地帯亜種は過去50年以上記録がないことが分かったため絶滅種に選定しました。

全体では、全てのカテゴリーで種数が増加し、絶滅のおそれの高い種が増加した結果となりました。

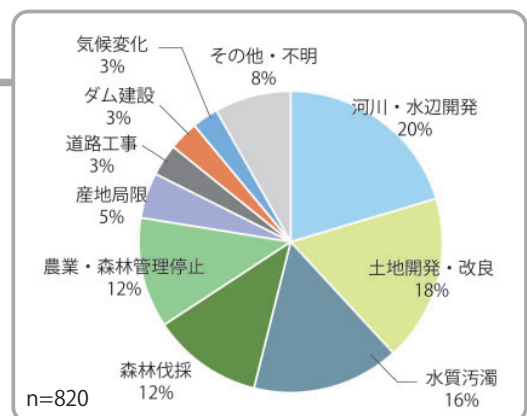
表 3-11 昆虫類レッドリスト種の概要

カテゴリー	種数		改訂内容
	2014	2024	
絶滅 (EX)	7	16	ハッチョウトンボ、ホシチャバネセセリ、アサマシジミ中部低地帯亜種など新たに9種を選定しました。
野生絶滅 (EW)	0	0	野生絶滅に該当する種は選定されませんでした。
絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	31	32	草地に生育するアカセセリやヒョウモンチョウといったチョウ類を中心に、11種の昆虫がカテゴリー上昇・新規追加されました。
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	61	71	ゲンゴロウなどの水生昆虫やミヤマシジミなどのチョウ類を中心に19種をカテゴリー上昇・新規追加しました。クロゲンゴロウなどの3種は記録が増えたため、CR + ENからカテゴリーを下げて選定しました。
準絶滅危惧 (NT)	140	144	ヒメアカネやアイヌテントウなどの23種を新規追加しました。アオサナエとキマダラセセリはVUからカテゴリーを下げて選定しました。
情報不足 (DD)	13	41	タケウチエダシャクやオオクロバヤガなどのガ類を中心に27種を新規追加しました。また、記録の信頼度が低いシジミガムシなど3種をカテゴリー変更して選定しました。

■ 危惧される減少要因

レッドリスト種に選定された昆虫類の主な減少要因としては、開発に伴う生息環境の喪失と並んで、里山の手入れ不足が挙げられます。

今回の改訂では草地や雑木林に生育する種でカテゴリーの上昇や新規追加が多く、里山環境の変化が進行していると考えられます。



昆虫類レッドリスト種の減少要因の割合

■ 今回の改訂作業で分かったこと（昆虫類）

今回の改訂では、新規の追加種として61種が選定されました。これらの種の中には、2014年以降の調査等によって、市内での生息が新たに確認された昆虫が含まれています。また、28種の昆虫が絶滅の危険が高まったとしてカテゴリーが上昇しました。絶滅リスクが高まった直接的な要因は種によって様々ですが、把握できる要因以外にも気候変動のような長期的かつ広域に及ぶ影響があると推察されます。

●これまで分布が確認されていなかった昆虫

新規追加種にはマルタンヤンマやマダラバッタ、ホソバセセリのように、既知の生息域からかなり離れて記録された種があります。いずれも市内では1か所のみの記録ですが、定着している可能性があります。このうち、マダラバッタは犀川沿いの草地でまとまった発生地が見つかりました。安曇野市だけでなく県内でも初記録の種であり、近隣にも生息地が無いことから、人間の活動によって運ばれてきた可能性も考えられます。また、ホソバセセリは県南部に分布している種ですが、安曇野市でも明科の山地で発見されました。温暖化で分布が北上した可能性もありますが、人間活動で運ばれた可能性も捨てきれません。

このような生物の分布の最先端では、自然に分布が拡大したのか、人為的な影響があるのか判断できない場合があります。その答えを知るためには、近隣地域も含めた今後の分布の移り変わりを追跡することが必要です。



マダラバッタ



ホソバセセリ

●把握が難しい気候変動の影響

昆虫類のカテゴリー上昇の背景としては、開発に伴う生息環境の喪失や、里山の手入れの縮小が大きな割合を占めています。しかし、それ以外に「因果関係がはっきりしないが、影響が推定される要素」として挙げられるのが猛暑や降雨量減少などの気候変動です。フィールドで観察を続けている多くの昆虫の専門家が、レッドリスト種に限らず、昆虫類全般が明らかに少なくなっているという印象を抱いており、その要因として気候変動が関係しているのではないかとされています。気候変動の影響は、一種一種の減少要因として目に見える形では現れずとも、安曇野市の生態系全体へ大きな影響を及ぼしているのかもしれない。昆虫類の減少が一時的なものなのか、今後も続くのか、継続して観察することで気候変動の影響を明らかにする必要があります。



気候変動の影響が懸念される高山帯

新規追加種の解説

新規追加種以外の説明は、2014年版の229～312ページを参照してください。

シマシマクビボソジョウカイ (コウチュウ目 ジョウカイボン科) *Asiopodabrus shimashimanus*

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

長野県：

—

CR+EN

環境省：

—



●**特徴**：体長約7mm前後。ホタル科に近い仲間では体は柔らかいです。頭部背面が黒くて前半が黄褐色となります。前胸背板の模様には個体差があります。上翅と触覚、脚は黄褐色です。正確な種の同定にはオス交尾器の確認が必要です。

●**生育環境**：本種の生態はよく分かっていませんが、クビボソジョウカイ類の成虫は長野県内では5月中旬～6月中旬に、湿った林床の草本上や溪流周辺の花上で観察されます。幼虫期は不明ですが、湿った林床の落ち葉や石の下で他の昆虫などを捕食していると推測されます。

●**国内の分布**：本州中部に分布しており、長野県、岐阜県、京都府、奈良県、三重県、滋賀県、京都府、兵庫県などで記録があります。松本市の島々谷で発見されたことが名前の由来です。県内ではそのほかに木曽町での記録があります。

●**市内の分布**：2020年に黒沢川中流域で複数の個体が確認されています。

●**減少要因**：幼虫の生息環境と考えられる湿った林床のある林が、開発や森林伐採によって減少していることが挙げられます。

参考文献 No. 183

生息環境



▶ 森林



マルタンヤンマ (トンボ目 ヤンマ科) *Anaciaeschna martini*

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

長野県：準絶滅危惧

NT

VU

環境省：

—



福本匡志

●**特徴**：体長65～84mm。成熟すると雄はコバルトブルー、雌は緑色の複眼と斑紋をもちます。翅も成熟するにつれて褐色みを増します。成虫は6～9月に出現します。雌は単独で水辺の抽水植物の組織内に産卵します。

●**生育環境**：山麓部・平野部から山地帯の、樹林に囲まれた抽水植物の豊富な池沼や湿地、放棄水田に生息します。

●**国内の分布**：本州から九州、その他離島に分布します。

●**市内の分布**：2020年代に三郷の山地帯で記録があります。もともと安曇野市に生息していたかどうかは不明です。今後の分布の動向に注目する必要があります。

●**減少要因**：湖沼などの生息環境の悪化が考えられます。

参考文献 No. 189

生息環境



▶ 湿地



▶ 池沼

マダラヤンマ (トンボ目 ヤンマ科) *Aeshna soneharai*

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

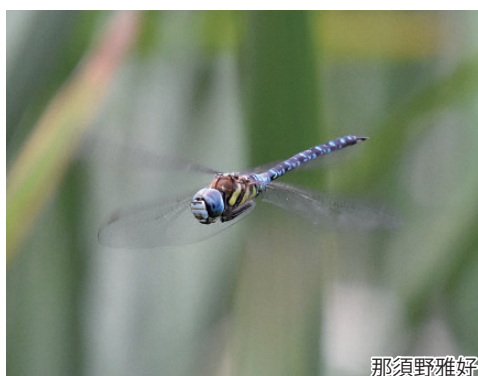
長野県：準絶滅危惧

NT

VU

環境省：準絶滅危惧

NT



那須野雅好

●**特徴**：体長63～74mm。雄は成熟すると複眼と斑紋が青色になります。雌の複眼と斑紋は緑色と青色の二型があり、中間的な個体もいます。雌雄共に翅胸前面が淡褐色です。成虫は7～10月ごろに出現します。雌は単独で水面に浮いた枯死植物などに産卵します。

●**生育環境**：山麓部・平野部の背丈の高い抽水植物の繁茂する池沼や河川敷に生息します。

●**国内の分布**：北海道から本州（中部地方以北）に分布します。

●**市内の分布**：1980年代に豊科で記録があります。

●**減少要因**：湖沼などの生息環境の悪化が考えられます。

参考文献 No. 19

生息環境



▶ 湿地



▶ 池沼

マイコアカネ (トンボ目 トンボ科)
Sympetrum kunkeli



生息環境



▶ 湿地
▶ 耕作地



▶ 河川
▶ 池沼

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●**特徴**：体長29～40mm。胸部に小黑斑があり、雄の顔面は青白くなります。成虫は7～11月に出現します。連結態のままで打水産卵を行います。雌単独でも産卵します。

●**生育環境**：山麓部・平野部の抽水植物の繁茂する池沼や湿地、河川敷のよどみ、水田などに生息します。

●**国内の分布**：北海道から九州に分布します。

●**市内の分布**：豊科や三郷で記録があります。

●**減少要因**：湖沼、水田環境などの生息環境の悪化が考えられます。

参考文献 No. 18, 19, 22, 36, 52

ハヤシオオカスミカメ (カメムシ目 カスミカメムシ科)
Pantilius hayashii



生息環境



▶ 森林



▶ 川河・水辺

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●**特徴**：体長約10mmと非常に大きな赤褐色のカスミカメムシです。背面は赤褐色で光沢は弱く、前胸背は褐色の小点刻が多く、後角部は突出します。前翅の縁がやや黄色く、楔状部はやや透けています。腹面は明るい黄色で、腹部の気門が黒く目立ちます。生時は触覚3節と4節の基部側が黄色でよく目立ちます。詳しい生態はよく分かっていませんが、成虫は9月～10月下旬に記録されており、成虫越冬すると考えられます。

●**生育環境**：山地帯の樹林に生息しています。偶然スニーピングの網に入ったり、ライトトラップに飛来したりして記録されているのみで、寄主樹木や幼生期の情報は分かっていません。

●**国内の分布**：本州（関東地方、中部地方）に分布します。

●**市内の分布**：烏川流域で記録された雄が唯一の記録です。

●**減少要因**：産地が局限され、極めて個体数が少ないと考えられます。

参考文献 No. -

マルガタゲンゴロウ (コウチュウ目 ゲンゴロウ科)
Graphoderus adamsii



生息環境



▶ 湿地



▶ 河川

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

VU

長野県：絶滅危惧Ⅱ類

VU

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

●**特徴**：体長12～15mm。上翅は黒色の小斑点に密におおわれ、黄褐色の縁取りがあります。頭部と前胸背の後縁は黒色です。水中を泳ぎ、水生生物を捕食します。

●**生育環境**：山麓部・平野部の植物が豊富な池沼や水田、水たまりに生息します。

●**国内の分布**：北海道から九州に分布します。

●**市内の分布**：明科で少数が確認されています。

●**減少要因**：池沼、水田環境の悪化が考えられます。

参考文献 No. -

トウカイクビボソジョウカイ (コウチュウ目 ジョウカイボン科)

Asiopodabrus tokaiensis

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

長野県：

—

—

VU

環境省：

—

—



雄の交尾器の
拡大図

腹側

背側

小野寺宏文

生息環境



▶ 森林



●**特徴**：体長約7mm。ホタル科に近い仲間では体は柔らかいです。背面は黒色と黄褐色の2色タイプですが個体差があります。頭部の前半、前胸背板の縁部、上翅の基部から会合部にかけて黄褐色となります。正確な種の同定にはオス交尾器の確認が必要です。

●**生育環境**：本種の生態はよく分かっていませんが、クビボソジョウカイ類の成虫は長野県内では5月中旬～6月中旬に、湿った林床の草本上や溪流周辺の花上で観察されます。幼虫期は不明ですが、湿った林床の落ち葉や石の下で他の昆虫などを捕食していると推測されます。

●**国内の分布**：本州に広く分布しており、三重県、長野県、愛知県、岐阜県、滋賀県、奈良県、和歌山県などで記録があります。長野県内では松本市の白骨温泉と安曇野市内の記録があります。

●**市内の分布**：2020年に黒沢川中流域で複数の個体が確認されています。

●**減少要因**：幼虫の生息環境と考えられる湿った林床のある林が、開発や森林伐採によって減少していることが挙げられます。

参考文献 No. 183

ニッポンハナダカバチ (ハチ目 ギンゲチバチ科)

Bembix niponica

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

長野県：情報不足

DD

VU

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU



中田信好

生息環境



▶ 耕作地
▶ 裸地



▶ 河川

●**特徴**：体長20～23mm。体は黒色で黄白色の斑紋を持ちます。成虫は6～9月に出現し、砂地に好んで営巣します。成虫は幼虫に餌を運搬します。幼虫の食糧としてアブ類やハエ類が狩られます。

●**生育環境**：山麓部・平野部の河川敷や農地などに生息します。

●**国内の分布**：北海道から九州に分布します。

●**市内の分布**：2014年に堀金、2023年に穂高の公園の砂場で発見されています。

●**減少要因**：本来の生息地である河川などの砂地の減少が考えられます。

参考文献 No. -

コキマダラセセリ (チョウ目 セセリチョウ科)

Ochlodes venatus venatus

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

長野県：

—

—

VU

環境省：

—

—



中田信好

生息環境



▶ 草原



●**特徴**：開長30～34mm。雄は翅が表裏共に橙色で前翅の縁が褐色、雌は翅表面が褐色で前翅に黄色の三角斑が見られます。年1回の発生で7～8月に出現します。幼虫はススキやヒカゲスゲなどを食べます。

●**生育環境**：山地帯の日当たりの良い草原に生息します。

●**国内の分布**：北海道から本州に分布します。

●**市内の分布**：東山では減少傾向が顕著です。西山の山地帯上部には安定した生息地があります。

●**減少要因**：里山の衰退や山地の森林化による草原環境の悪化が考えられます。

参考文献 No. 12, 19, 33, 52, 69

ヒラノコブガ (チョウ目 コブガ科)
Nola hiranoi

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

長野県：準絶滅危惧

NT

VU

環境省：

—

—



イラスト

●特徴：開長16～18mm。前翅は黄褐色で外側が茶褐色です。近縁な種に似たものはいませんが、コヤガ類に似て見えるので注意が必要です。年1化で成虫は6～8月に見られています。食草はカシワで記録があります。記録や知見が少ない種です。

●生育環境：丘陵地、山地に生息します。

●国内の分布：本州に分布します。

●市内の分布：1981年に豊科の記録があります。

●減少要因：情報が乏しく減少要因はよく分かっていませんが、寄主であるカシワの自生する森林の開発、遷移の進行が考えられます。

参考文献 No. 154

生息環境



森林



ニセタバコガ (チョウ目 ヤガ科)
Heliocheilus fervens

安曇野市：絶滅危惧Ⅱ類

長野県：情報不足

DD

VU

環境省：

—

—



田島尚

●特徴：開長30～32mm。外見が似た種はおらず、識別は容易です。オスは前翅に大きな発音器官を持ち、特異的な外見をしています。年2化と推測され、成虫は6月から9月に見られます。主に草原で見られ灯火採集で得られますが、ほかのタバコガ類と同様に日中も活動します。

●生育環境：草原、河川敷などの草地に生息します。

●国内の分布：北海道、本州、四国、九州に分布します。

●市内の分布：2015年、2017年に明科で確認されています。

●減少要因：荒地や草原などの生息地が開発や遷移の進行で減少したことが考えられます。

参考文献 No. 168

生息環境



草原



河川

ヒメアカネ (トンボ目 トンボ科)
Sympetrum parvulum

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：

—

—

NT

環境省：

—

—



中田信好

●特徴：体長28～38mm。翅胸前面に「ハ」字状の斑紋があります。成熟雄は顔面が白く、腹部が赤化し、成熟雌の腹部は赤褐色です。成虫は7～11月に出現します。連結態や雌単独で打泥産卵を行います。

●生育環境：山麓部・平野部の植物の密生した湿地や放棄水田に生息します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。

●市内の分布：豊科、穂高、三郷、明科で記録があります。

●減少要因：ため池や水田などの生息地が開発などにより減少したことや、農薬などによる水質の悪化が考えられます。

参考文献 No. 7, 15, 19

生息環境



湿地



キノコゴミムシ (コウチュウ目 オサムシ科)
Lioptera erytroides

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：絶滅危惧Ⅱ類

VU

NT

環境省：

—

—



降旗進一郎

●特徴：体長約12mm。体は光沢の鈍い黒色で、上翅に黄赤色の斑紋が2対あります。上翅の条溝は浅いです。倒木に生えるキノコ類や、クヌギなどの樹液に集まります。

●生育環境：山麓部・平野部の二次林などに生息します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。

●市内の分布：2023年に明科の山麓部で記録があります。

●減少要因：森林の遷移の進行や、農地での過度な農業使用の影響を受けると考えられます。

参考文献 No.

-

生息環境



▶ 森林



ダイミョウアトキリゴミムシ (コウチュウ目 オサムシ科)
Cymindis daimio

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：準絶滅危惧

NT

NT

環境省：

—

—



岡島尚

●特徴：体長8～9mm。頭と胸は黒く、脚と触覚は赤褐色です。赤褐色の上翅は中央後半から「U」字に青藍色の紋が入ります。

●生育環境：山麓部・平野部の河原のヨシ原や乾燥した林、荒地などに生息します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。

●市内の分布：堀金の山麓部で記録があります。

●減少要因：河川開発や土地の造成、農業による影響が考えられます。

参考文献 No.

36

生息環境



▶ 森林

▶ 草原



▶ 河川

オオヒメゲンゴロウ (コウチュウ目 ゲンゴロウ科)
Rhantus erraticus

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：準絶滅危惧

NT

NT

環境省：

—

—



那須野雅好

●特徴：体長13～14mm。体は暗褐色で、眼間に黒色模様、前胸背中央には細長い黒色斑が存在します。上翅は細かい顆粒状斑に覆われ、体形は扁平です。主に水生生物を捕食します。

●生育環境：山麓部・平野部から山地帯の池沼や水田、水たまりに生息します。

●国内の分布：北海道から本州（山陽地方以北）に分布します。

●市内の分布：市内のため池などに見られます。

●減少要因：ため池などの生息環境の減少や悪化が考えられます。

参考文献 No.

-

生息環境



▶ 湿地



▶ 池沼

カバイロヒラタシデムシ (コウチュウ目 ハネカクシ科)
Oiceoptoma subrufum

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：準絶滅危惧

NT

NT

環境省：

—

—



降旗進一郎

●特徴：体長10～15mm。上翅は褐色から黒色まで変異が多いです。クロボシヒラタシデムシと似ますが、前胸上面に光沢のある黒斑がありません。成虫は6～8月に出現し、集まって腐肉を食べます。

●生育環境：山地帯から亜高山帯の林床に生息します。

●国内の分布：北海道から本州に分布します。

●市内の分布：北アルプスの亜高山帯を中心に生息しています。

●減少要因：森林伐採などによる生息環境の悪化が考えられます。

生息環境



▶ 森林



参考文献 No. 36

ベッコウヒラタシデムシ (コウチュウ目 ハネカクシ科)
Necrophila brunnicollis

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：準絶滅危惧

NT

NT

環境省：

—

—



中村寛志

●特徴：体長17～22mm。頭は黒く、前胸背は橙赤色で光沢があり、雄の方が濃い色をしています。上翅は黒褐色で、3条の縦隆が存在します。成虫は5～7月に出現し、集まって腐肉を食べます。

●生育環境：山麓部・平野部の林床に生息します。

●国内の分布：本州と四国に分布します。

●市内の分布：三郷や堀金の記録があります。近年では、2020年に三郷で記録されています。

●減少要因：動物の死体に集まりますが、シデムシの中では少ない種です。詳しい生態などは不明です。

生息環境



▶ 森林



参考文献 No. 35, 38, 40, 45, 52, 183

コカブトムシ (コウチュウ目 コガネムシ科)
Eophileurus chinensis chinensis

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：準絶滅危惧

NT

NT

環境省：

—

—



矢花沙織

●特徴：体長18～26mm。体は黒色で、上翅には点刻列があります。雄には角が1本あり、前胸背の中央が凹みます。成虫は6～7月に出現し、朽ち木や樹洞の中にいます。

●生育環境：山麓部・平野部から山地帯の樹林に生息します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。

●市内の分布：明科、三郷、豊科で確認されています。

●減少要因：幼虫の発生源である雑木の腐朽木の減少が考えられます。市役所の建物内で見つかったこともあり、生態上、不明なことが多い種でもあります。

生息環境



▶ 森林



参考文献 No. 44

ズミチビタマムシ (コウチュウ目 タマムシ科)
Trachys toringoi

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：準絶滅危惧

NT

NT

環境省：

—

—



降旗進一郎

●**特徴**：体長3.5～3.7mm。体形はくさび型です。頭胸部には疎に金色の毛が生え、上翅は黒地に波打つような白い模様が入ります。頭盾の幅は長さの約1.35倍です。潜葉虫で、ズミなどの植物を食べます。

●**生育環境**：山地帯の食草のある林に生息します。

●**国内の分布**：本州と九州に分布します。

●**市内の分布**：市内の山麓部から山地帯の森林に生息しています。

●**減少要因**：産地が局所的であり、森林伐採や農薬の影響を受けると考えられます。

参考文献 No. 36

生息環境



▶ 森林



ミヤジマコガネコメツキ (コウチュウ目 コメツキシ科)
Selatosomus miyajimanus

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：

—

—

NT

環境省：

—

—



降旗進一郎

●**特徴**：体長12～13mm。体は光沢のある黒色で、上翅は縦筋があります。コガネコメツキと比べて前胸背の点刻がきわめて小型疎です。成虫は4～6月に出現します。

●**生育環境**：山麓部・平野部のアカマツ林に生息します。

●**国内の分布**：本州に分布します。

●**市内の分布**：明科や豊科の山地帯で確認されています。

●**減少要因**：マツ枯れによるアカマツ林の衰退が挙げられます。

参考文献 No. 6

生息環境



▶ 森林



サドクビボソジョウカイ (コウチュウ目 ジョウカイボン科)
Asiopodabrus bilineatus bilineatus

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：

—

—

NT

環境省：

—

—



雄の交尾器の拡大図

腹側

背側

小野寺宏文

●**特徴**：体長約7mm。ホタル科に近い仲間では体は柔らかいです。頭部背面が黒くて前半が黄褐色となります。前胸背板は黒くて側縁が黄褐色となる個体や、黄褐色部が広くなり1対の黒帯状となるものまで個体差があります。上翅と触覚、脚は黄褐色です。正確な種の同定にはオス交尾器の確認が必要です。

●**生育環境**：本種の生態はよく分かっていませんが、クビボソジョウカイ類の成虫は長野県内では5月中旬～6月中旬に、湿った林床の草本上や溪流周辺の花上で観察されます。幼虫期は不明ですが、湿った林床の落ち葉や石の下で他の昆虫などを捕食していると推測されます。

●**国内の分布**：本州に広く分布しています。佐渡島で発見され、中部地方、近畿地方などで記録があります。

●**市内の分布**：2020年に黒沢川中流域で複数の個体が確認されています。

●**減少要因**：幼虫の生息環境と考えられる湿った林床のある林が、開発や森林伐採によって減少していることが挙げられます。

参考文献 No. 183

生息環境



▶ 森林



アイヌテントウ (コウチュウ目 テントウムシ科)
Coccinella ainu

安曇野市：準絶滅危惧	長野県：準絶滅危惧	NT
NT	環境省：—	—



●特徴：体長4～6mm。頭部は黒く、上翅は暗赤色の地色に円い黒色紋が11個あります。成虫は6～10月に出現し、アブラムシ類を捕食します。

●生育環境：山麓部・平野部の河原や林内に生息します。

●国内の分布：北海道と本州に分布します。

●市内の分布：堀金、豊科、穂高で記録があるほか、2023年には明科で発見されています。

●減少要因：開けた河川環境を好むため、護岸の森林化などの影響が考えられます。

参考文献 No. 35, 58, 167

生息環境



▶河川

ホンドヒメシラオビカミキリ (コウチュウ目 カミキリムシ科)
Pogonocherus fasciculatus hondoensis

安曇野市：準絶滅危惧	長野県：—	—
NT	環境省：—	—



●特徴：体長5.5～6.5mm。体色は赤褐色で、上翅には白い斑紋があり、奇主植物であるアカマツの樹皮によく溶け込みます。

●生育環境：山麓部・平野部から山地の松林に生息します。

●国内の分布：本州と四国に分布します。

●市内の分布：穂高のアカマツ林などに生息しています。

●減少要因：マツ枯れによるアカマツ林の衰退が挙げられます。

参考文献 No. -

生息環境



▶森林



ヨツボシアカツツハムシ (コウチュウ目 ハムシ科)
Coptocephala orientalis

安曇野市：準絶滅危惧	長野県：情報不足	DD
NT	環境省：—	—



●特徴：体長4～6mm。前胸と上翅などは橙赤色で、頭部や腹部、足は黒色です。上翅には2対の黒紋があります。成虫は6～8月に出現し、主にカワラヨモギを食べます。

●生育環境：山麓部・平野部の河原に生息します。

●国内の分布：本州から九州に分布します。

●市内の分布：2000年と2005年、2023年に犀川沿いの記録があります。

●減少要因：カワラヨモギの自生する河川環境の減少が考えられます。

参考文献 No. 44, 58

生息環境



▶河川

ウラキンシジミ (チョウ目 シジミチョウ科)
Ussuriana stygiana

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：

—

—

NT

環境省：

—

—



●**特徴**：開長32～34mm。翅表面は黒色～黒褐色、翅裏面は橙黄色～黄色で、後翅裏面の縁に橙色の斑があります。年1回の発生で6～7月に出現します。幼虫はモクセイ科の樹木の葉を食べます。

●**生育環境**：河畔林や溪谷沿いの斜面などの落葉広葉樹林に生息します。

●**国内の分布**：北海道から本州に分布します。

●**市内の分布**：2000年代以前に、三郷、豊科で記録があります。

●**減少要因**：里山の荒廃、二次林の高木化などによる生息環境の悪化が考えられます。

参考文献 No. 12, 33, 52

生息環境



森林



ハヤシミドリシジミ (チョウ目 シジミチョウ科)
Favonius ultramarinus

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：

—

—

NT

環境省：

—

—



●**特徴**：開長約34mm。翅表面は、雄は青みを帯びた金緑色で、雌は褐色で前翅に灰色斑があります。類似種とは翅裏面の中央の白条が太く、縁取りが不明瞭な点などから識別されます。年1回の発生で、7～9月に出現します。幼虫はカシワを食べます。

●**生育環境**：高原のカシワ疎林に多く生息します。

●**国内の分布**：北海道、本州、九州に生息します。

●**市内の分布**：東山のカシワ林に生息しています。

●**減少要因**：里山の荒廃、二次林の高木化などによる生息環境の悪化が考えられます。

参考文献 No. 12, 19, 33, 59

生息環境



森林



カラスシジミ (チョウ目 シジミチョウ科)
Fixsenia w-album fentoni

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：

—

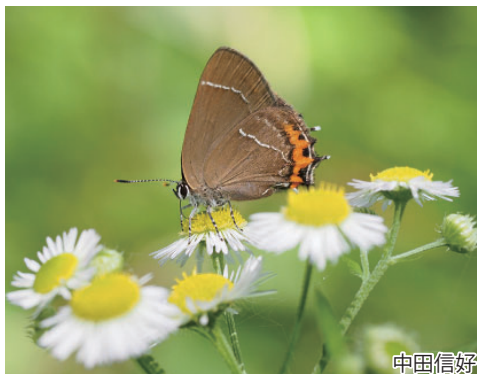
—

NT

環境省：

—

—



●**特徴**：開長約29mm。翅表面は黒褐色、裏面は茶褐色で後翅の肛角部付近に橙斑があります。後翅裏面の白線が「m」字状になる点などで類似種と識別されます。年1回の発生で、6～7月に出現します。幼虫はハルニレなどを食べます。

●**生育環境**：川沿いの樹林や山間の溪谷に生息します。

●**国内の分布**：北海道から九州に分布します。

●**市内の分布**：2000年代以前に、三郷、明科で記録があります。

●**減少要因**：里山の荒廃、二次林の高木化などにより、ハルニレの自生する森林が暗くなるなどの生息環境の悪化が考えられます。

参考文献 No. 18, 33, 52, 59

生息環境



森林



ヒメシジミ (チョウ目 シジミチョウ科)
Plebejus argus micrargus

安曇野市：準絶滅危惧

長野県：留意種

N

NT

環境省：準絶滅危惧

NT



中田信好

●特徴：開長22～28mm。翅表面は雄が淡青色、雌が淡褐色です。年1回の発生で、6～7月に出現します。幼虫はキセルアザミやオオイタドリなど、多くの科の植物を食べます。

●生育環境：林縁や農地周辺、河川敷、湿地などに生息します。

●国内の分布：北海道、本州、九州に分布します。市内に生息するものは本州・九州亜種になります。

●市内の分布：西山の山地帯や山麓の草原環境に生息しています。近年、急速に個体数を減らしています。

●減少要因：森林化による草原の減少などが考えられます。

参考文献 No. 12, 18, 33, 35, 36, 52, 63, 69

生息環境



河川

コヒョウモン (チョウ目 タテハチョウ科)
Brenthis ino tigroides

安曇野市：準絶滅危惧

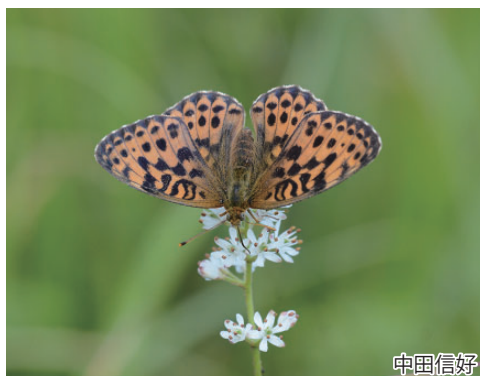
長野県：—

—

NT

環境省：—

—



中田信好

●特徴：開長約55mm。翅表面は橙色に黒斑がありますが、雌の方が橙色が淡いです。ヒョウモンチョウと酷似しています。年1回の発生で7～8月に出現します。幼虫はオニシモツケなどを食べます。

●生育環境：山地帯溪流沿いや林縁、山間の湿地などに生息します。

●国内の分布：北海道と本州（中部地方以北）に分布します。

●市内の分布：西山の山地帯から亜高山帯の溪流沿いに生息しています。

●減少要因：砂防事業などにより護岸の植生遷移が進んで河川環境が暗くなったことにより、オニシモツケが減少したことが考えられます。

参考文献 No. 12, 15, 18, 33, 36, 52, 69, 164, 175

生息環境



ギンボシヒョウモン (チョウ目 タテハチョウ科)
Speyeria aglaja fortuna

安曇野市：準絶滅危惧

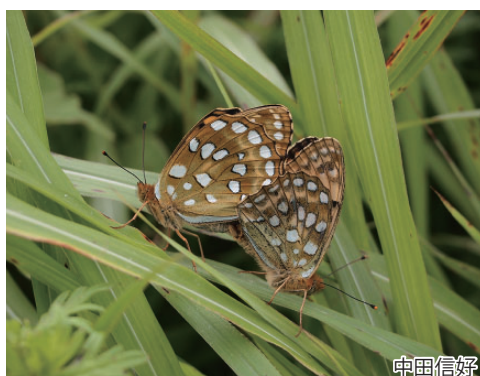
長野県：—

—

NT

環境省：—

—



中田信好

●特徴：開長59～63mm。翅表面は橙色に黒斑があり、裏面は後翅に銀白色の斑紋が散らばっています。類似種とは黒斑や銀白色の斑紋から識別されます。年1回の発生で、7～9月に出現します。幼虫はイブキトラノオなどを食べます。

●生育環境：山地の草原に生息します。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。市内に生息するものは本州亜種になります。

●市内の分布：旧町村全てで記録がありますが、現在、確実な生息地は見当たりません。

●減少要因：里山の荒廃などによる良好な草原環境の減少が考えられます。

参考文献 No. 12, 15, 18, 19, 33, 52, 59, 175

生息環境



オオムラサキ (チョウ目 タテハチョウ科)
Sasakia charonda charonda



那須野雅好

生息環境



森林



安曇野市：準絶滅危惧

NT

長野県：留意種

N

環境省：準絶滅危惧

NT

●特徴：開長約90mm。翅表面は黒褐色で中央に白斑があり、雄では基半部が青色に輝きます。成虫は日中、クヌギやコナラの樹液によく集まります。年1回の発生で、7～8月に出現します。幼虫はエノキを食べます。

●生育環境：里山の雑木林や河畔林、山地のブナ林などに生息しています。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。

●市内の分布：東山の雑木林に生息しています。西山でも少数の発生が見られます。

●減少要因：里山の荒廃、二次林の高木化などによる生息環境の悪化が考えられます。

参考文献 No. 11, 19, 21, 33, 35, 38, 52, 59, 63, 67, 169, 170 など

トビスジャエナミシャク (チョウ目 シャクガ科)
Philereme transversata japanaria



安西稔

生息環境



森林



安曇野市：準絶滅危惧

NT

長野県：情報不足

DD

環境省：—

—

●特徴：開長31～34mm。クモオビナミシャクに似ますが、前翅頂からの黒色の車線が無い点で区別できます。成虫は7～8月に山地で稀に得られます。近縁種と同様にクロウメモドキ科を食草としています。

●生育環境：山地に生息します。

●国内の分布：本州に分布します。

●市内の分布：2017年に明科で確認されています。

●減少要因：寄主であるクロウメモドキが自生する森林の開発、遷移の進行が考えられます。

参考文献 No. 59, 168

ホシヒメセダカモクメ (チョウ目 ヤガ科)
Cucullia fraudatrix



岡島尚

生息環境



草原



河川

安曇野市：準絶滅危惧

NT

長野県：留意種

N

環境省：準絶滅危惧

NT

●特徴：開長33～38mm。内横線は明瞭で、外縁付近に黒条があります。年1化で成虫は8～9月に見られます。ヨモギ類を食草とし、草原で得られます。

●生育環境：草原、河川敷などの草地に生息します。

●国内の分布：北海道、本州、九州に分布します。

●市内の分布：2015年、2022年三郷で確認されています。

●減少要因：荒れ地や草原などの生息地が開発や遷移の進行で減少したことが考えられます。

参考文献 No. 22, 52

ミスジキリガ (チョウ目 ヤガ科)
Jodia sericea



岡島尚

生息環境



▶ 森林



安曇野市：準絶滅危惧

NT

長野県：留意種

N

環境省：準絶滅危惧

NT

●特徴：開長32～35mm。特徴的な見た目で識別は容易です。年1化で成虫で越冬し、10～4月ごろまで見られます。食草はカシワ、クヌギ、アラカシで記録があり、雑木林に生息しますが産地はやや局地的です。灯火採集ではほとんど得られず、主に糖蜜採集で得られます。

●生育環境：雑木林などの二次林に生息します。

●国内の分布：北海道、本州、四国、九州に分布します。

●市内の分布：2010年頃、豊科で確認されています。

●減少要因：生息地である雑木林や二次林の開発、植生遷移の進行が考えられます。

参考文献 No.

-

キトンボ (トンボ目 トンボ科)
Sympetrum croceolum



中田信好

生息環境



▶ 湿地



▶ 池沼

安曇野市：情報不足

DD

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：体長37～47mm。体に明瞭な斑紋はなく全体が褐色で、翅も大部分が橙黄色です。成虫は7～12月に出現します。連結態のまま一度打水し、卵を含んだ水滴を泥などに打ち付けます。雄の警護飛翔を伴って雌単独で産卵することもあります。

●生育環境：山麓部・平野部の透明度の高い池沼で、岸辺が露出した環境を好みます。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。

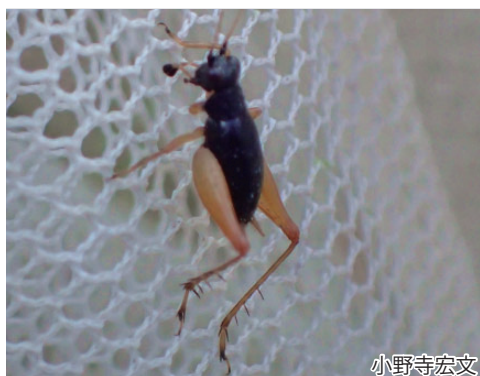
●市内の分布：2016年に明科で確認されているほか、2000年代以前に豊科での記録があります。

●減少要因：湖沼などの生息環境の悪化が考えられます。

参考文献 No.

15, 19

キアシヒバリモドキ (バッタ目 ヒバリモドキ科)
Trigonidium japonicum



小野寺宏文

生息環境



▶ 草原



安曇野市：情報不足

DD

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：体長5.4～6.1mm。体は黒く、脚は明るい黄褐色でよく目立ちます。翅には発音器がないので鳴かないとされていましたが、体の振動を止まっている草などに伝えて信号を送っていることが分かりました。幼虫で越冬し、初夏に成虫になります。

●生育環境：山麓部・平野部の草地などに生息します。草丈の低い草地にも生息しますが、ススキ原の根ざわに止まっていることも多いです。

●国内の分布：北海道から九州に分布します。長野県内では広い範囲で記録されていますが、いずれも個体数が少ないです。

●市内の分布：2020年に黒沢川中流域で確認されています。市内に広く分布している可能性がありますが、生息情報が不足しています。

●減少要因：情報が少ないため生息地や個体数の状況について詳しいことは分かっていません。

参考文献 No.

183

マダラバッタ (バッタ目 バッタ科)
Aiolopus thalassinus tamulus



那須野雅好

生息環境



▶ 草原
▶ 裸地



▶ 河川

安曇野市：情報不足

長野県：

—

—

DD

環境省：

—

—

●特徴：体長24～36mm。体は緑色～褐色とさまざまな色彩変異があります。後脛節は赤、青、黒のまだら模様で、前翅は細く後翅は暗褐色です。成虫は8～11月に出現します。

●生育環境：山麓部・平野部の河原や裸地に生息します。

●国内の分布：本州から九州、その他離島に分布します。

●市内の分布：2023年に明科の犀川河川敷で発見されました。

●減少要因：県内での記録が少ないため生息地や個体数の状況について詳しいことは分かっていません。全国では増えるケースもあるため、今後の動向を注視する必要があります。

参考文献 No. 52

クロズジュウジアトキリゴミシ (コウチュウ目 オサムシ科)
Lebia cruxminor cruxminor



矢花沙織

生息環境



▶ 森林
▶ 草原



▶ 川河・水辺

安曇野市：情報不足

長野県：準絶滅危惧

NT

DD

環境省：

—

—

●特徴：体長6～7mm。全体に光沢が強く、頭部は黒色です。上翅は赤色で黒色の十文字の模様が入ります。

●生育環境：山地帯の明るい草原に生息します。

●国内の分布：北海道、本州、九州、南西諸島に分布します。

●市内の分布：2023年に明科の山麓部で確認されています。

●減少要因：情報が少なく生息状況や個体数の状況について詳しいことは分かっていません。

参考文献 No. -

クリサキテントウ (コウチュウ目 テントウムシ科)
Harmonia yedoensis



イラスト

生息環境



▶ 森林



▶ 川河・水辺

安曇野市：情報不足

長野県：

—

—

DD

環境省：

—

—

●特徴：体長5～8mm。個体によって様々な模様があり、その模様は近縁なナミテントウと酷似します。ナミテントウとの識別には、顕微鏡を用いて交尾器の形を確認する必要があります。マツ類の樹上に生息し、アブラムシ類を捕食します。

●生育環境：山麓部・平野部から山地の松林に生息します。

●国内の分布：本州、四国、九州、南西諸島に分布します。

●市内の分布：2017年に東山のアカマツ林で発見されました。

●減少要因：アカマツ林などに局所的に生息します。長野県内では各地に記録があるものの正確な分布は不明です。

参考文献 No. 166

ミセンヒメハナカミキリ (コウチュウ目 カミキリムシ科)
Pidonia misenina

安曇野市：情報不足

長野県：

—

—

DD

環境省：

—

—



丸山隆

●**特徴**：体長8.5～11.5mm。オスは前胸の斑紋に特徴があります。ノリウツギやナナカマドなどに訪花することが知られていますが、寄主植物は分かっていません。

●**生育環境**：山地帯から亜高山帯にかけての森林に生息します。

●**国内の分布**：本州（中部地方・近畿地方）の一部の山地に生息します。

●**市内の分布**：三郷の山地帯でのみ生息が確認されています。

●**減少要因**：生息地が極めて限られているため、環境の変化による影響を受けやすいと考えられます。

参考文献 No.

-

生息環境



森林



ナミルリモンハナバチ (ハチ目 ミツバチ科)
Thyreus decorus

安曇野市：情報不足

長野県：情報不足

DD

DD

環境省：情報不足

DD



中田信好

●**特徴**：体長10～14mm。体は全体的に黒色で、羽状毛は鮮やかな青色です。頭眉は高く隆起します。成虫は7～10月に出現します。スジボソフトハナバチなどに労働寄生すると考えられています。

●**生育環境**：山麓部・平野部の林縁や林床などに生息します。

●**国内の分布**：本州から九州、その他離島に分布します。

●**市内の分布**：2021年に堀金で確認されています。

●**減少要因**：他種のハナバチの巣に寄生する特異な生態を持ちます。寄主の生息状況に左右されると考えられます。

参考文献 No.

-

生息環境



森林



ルリハダホソクロバ (チョウ目 マダラガ科)
Rhagades pruni esmeralda

安曇野市：情報不足

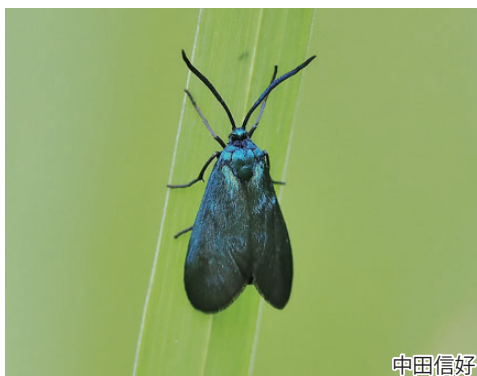
長野県：情報不足

DD

DD

環境省：準絶滅危惧

NT



中田信好

●**特徴**：開長17～22mm。オスの触角は櫛歯状で、メスは糸状。ホソクロバ類の中では翅の青みと光沢が強く、一見して判別しやすい種です。低地では6月、山地では7～8月に成虫が見られます。

●**生育環境**：草原、河川敷などの草地に生息します。

●**国内の分布**：本州、九州に分布します。

●**市内の分布**：2015年、2023年に明科で記録があります。

●**減少要因**：草原や河川敷などの生息地が開発や遷移の進行で減少したことが考えられます。

参考文献 No.

-

生息環境



草原



河川

ホソバセセリ (チョウ目 セセリチョウ科)
Isoteinon lamprospilus lamprospilus



生息環境



▶ 草 原



安曇野市：情報不足

DD

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：開長30～35mm。翅の表は黒褐色で白斑があり、裏は黄土色で黒縁のある白斑があります。幼虫はススキやカリヤスを食草とします。

●生育環境：山麓部・平野部の森林に接した草地に生息します。

●国内の分布：本州、四国、九州に分布します。

●市内の分布：2022年に明科で発見されました。

●減少要因：県の北限生息地から大きく離れているため、今後の動向を注視する必要があります。

参考文献 No.

-

チョウセントガリバ (チョウ目 カギバガ科)
Tethea ocularis tanakai



生息環境



▶ 森 林



▶ 河 川

安曇野市：情報不足

DD

長野県：情報不足

DD

環境省：

—

—

●特徴：開長37～39mm。オオバトガリバなどの近縁種に比べて横線が明瞭で、外横線が外側に大きく湾曲する点で区別できます。成虫は6月と8月に山地の峡谷や盆地の河川敷などで得られます。ヨーロッパではヤマナラシ属を食草としている記録があり、国内でもヤマナラシや野生化したポプラなどを食草としている可能性があります。

●生育環境：山地の峡谷、河川敷に生息します。

●国内の分布：本州に分布します。

●市内の分布：2020年に穂高の河川敷で確認されています。

●減少要因：情報が少ないため生息地や個体数の状況について詳しいことは分かっていません。

参考文献 No.

168

フチグロシロヒメシャク (チョウ目 シャクガ科)
Scopula ornatasubornata



生息環境



▶ 草 原



安曇野市：情報不足

DD

長野県：

—

—

環境省：

—

—

●特徴：開長約22mm。似た種の多い仲間ですが、はっきりした黒の外横線と、純白色の地色が特徴的で比較的識別は容易です。化性は不明ですが、6月と8月に記録があります。シソ科やキク科の草本を食草とし、亜高山帯で得られます。

●生育環境：山地帯上部から亜高山帯の草原に生息します。

●国内の分布：本州、九州に分布します。

●市内の分布：豊科で記録があります。

●減少要因：草原などの生息地が開発や遷移の進行で減少したことが考えられます。

参考文献 No.

153

ムツテンナミシャク (チョウ目 シャクガ科)
Catarhoe yokohamae



田島尚

生息環境



▶ 草原



●**特徴**：開長19～23mm。特徴的な外見で識別は容易です。年1化で成虫は7～8月に見られます。食草は未知ですが、草原環境で得られます。産地は局地的ですが、生息地での個体数は少なくありません。

●**生育環境**：草原に生息します。

●**国内の分布**：北海道、本州に分布します。

●**市内の分布**：豊科、明科で記録があります。

●**減少要因**：草原などの生息地が開発や遷移の進行で減少したことが考えられます。

参考文献 No. 153

安曇野市：情報不足

長野県： —

DD

環境省： —

タケウチエダシャク (チョウ目 シャクガ科)
Biston takeuchii



田島尚

生息環境



▶ 森林



●**特徴**：開長62～80mm。特徴的な見た目で識別は容易です。分布は広いですが、産地は局地的です。成虫は4月に見られます。食草は不明ですが、広食性ではないかと推測されています。

●**生育環境**：丘陵地に生息します。

●**国内の分布**：本州、四国、九州に分布します。

●**市内の分布**：2004年に三郷で記録があります。

●**減少要因**：生息地である森林の開発、遷移の進行が考えられます。

参考文献 No. 52, 155

安曇野市：情報不足

長野県： —

DD

環境省： —

ギンボシシャチホコ (チョウ目 シャチホコガ科)
Rosama cinnamomea



田島尚

生息環境



▶ 森林



●**特徴**：開長28～29mm。トビギンボシシャチホコにやや似ますが、前翅前縁部が暗くなる点などで容易に識別できます。年2化で成虫は6～7月と8～9月に見られます。ヌスビトハギを食草とし雑木林や伐採跡地などで得られますが、稀です。

●**生育環境**：明るい雑木林や伐採跡地に生息します。

●**国内の分布**：北海道、本州、四国、九州に分布します。

●**市内の分布**：明科で記録があります。

●**減少要因**：山間部の草地などの生息地が開発や遷移の進行で減少したことが考えられます。

参考文献 No. 156

安曇野市：情報不足

長野県：準絶滅危惧

NT

DD

環境省： —

スゲドクガ (チョウ目 ドクガ科)
Laelia coenosa sangaica

安曇野市：情報不足

長野県：情報不足

DD

DD

環境省：準絶滅危惧

NT



四方圭一郎

生息環境



▶ 湿地



▶ 河川

●**特徴**：開長31～40mm。スゲオドクガと酷似し本種の方が翅の幅が狭い点で識別が可能ですが、厳密な同定には交尾器の観察が必要です。年2化で、成虫は5～6月と8～9月に見られます。カヤツリグサ科やガマ科、イネ科などの湿地性の草本を食草とし、成虫も湿地周辺の灯火採集などで得られることが多いです。

●**生育環境**：湿地に生息します。

●**国内の分布**：北海道、本州に分布します。

●**市内の分布**：明科で記録があります。

●**減少要因**：湿地や河川敷などの生息地が開発や宅地化で減少したことが考えられます。

参考文献 No. 156, 167

ミカボコブガ (チョウ目 コブガ科)
Meganola mikabo

安曇野市：情報不足

長野県：情報不足

DD

DD

環境省：準絶滅危惧

NT



田島尚

生息環境



▶ 森林



▶ 川河・水辺

●**特徴**：開長19～27mm。外見が似た種が多いため、識別には慎重を期す必要があります。年1化と推測され、成虫は8月に記録があります。カシワを食草とします。

●**生育環境**：丘陵地に生息します。

●**国内の分布**：北海道、本州、九州に分布します。

●**市内の分布**：豊科で記録があります。

●**減少要因**：寄主であるカシワが自生する森林の開発、遷移の進行が考えられます。

参考文献 No. 156

オオクロバヤガ (チョウ目 ヤガ科)
Euxoa adumbrata

安曇野市：情報不足

長野県：

—

—

DD

環境省：

—

—



安西稔

生息環境



▶ 森林
▶ 草原



▶ 川河・水辺

●**特徴**：開長40～45mm。特徴的な外見で識別は容易です。年1化で、成虫は主に5月と9～10月に見られます。低標高域で羽化し、高山に移動し越冬したのち、秋に山地に戻る生態をしていると推測されています。食草はタンポポやタデなどの草本植物です。稀で非常に得難い種です。

●**生育環境**：山地の峡谷、高山帯に分布します。

●**国内の分布**：本州に分布します。

●**市内の分布**：2023年に明科で確認されています。

●**減少要因**：生活史の一部で高山帯を利用することから、気候変動の影響が懸念されます。

参考文献 No. -

ムラサキハガタヨトウ (チョウ目 ヤガ科)

Blepharita amica ussuriensis

安曇野市：情報不足

長野県：情報不足

DD

DD

環境省：

—

—



那須野雅好

●特徴：開長約45mm。特徴的な外見で識別は容易です。年1化で成虫は10～11月に見られます。草原性で灯火採集や糖蜜採集で得られますが、産地は局地的で稀です。

●生育環境：草原に生息します。

●国内の分布：北海道、本州に分布します。

●市内の分布：1963年に豊科、2014年に明科、2016年に穂高の記録があります。

●減少要因：荒れ地や草原などの生息地が開発や遷移の進行で減少したことが考えられます。

参考文献 No. 19, 163

生息環境



▶ 草原



ショウブオオヨトウ (チョウ目 ヤガ科)

Helotropha leucostigma

安曇野市：情報不足

長野県：

—

—

DD

環境省：

—

—



岡島尚

●特徴：開長32～42mm。斑紋の変異が非常に大きく、識別には注意が必要です。前翅の後縁がわずかにくぼむ特徴的な翅型をしています。年1化で、成虫は7～9月に見られます。イネ科やカヤツリグサ科の草本を食草とし、湿地や湿生草地で見られることが多いですが、林内でも得られます。

●生育環境：山地の沢沿い、湿地に生息します。

●国内の分布：北海道、本州、四国に分布します。

●市内の分布：2017年に明科で確認されています。

●減少要因：湿地や河川敷などの生息地が開発や宅地化で減少したことが考えられます。

参考文献 No. 58, 168

生息環境



▶ 森林
▶ 草原
▶ 湿地



▶ 河川

ヒメトガリヨトウ (チョウ目 ヤガ科)

Gortyna basalipunctata

安曇野市：情報不足

長野県：

—

—

DD

環境省：

—

—



岡島尚

●特徴：開長30～38mm。斑紋はゴボウトガリヨトウに似ますが、全体的に濃橙色を帯びることや、外縁が直線的な翅型をしている点で比較的容易に識別できます。年1化で成虫は8～9月に見られます。草原で灯火採集で得られますが、産地はやや局地的です。

●生育環境：草原に生息します。

●国内の分布：北海道、本州、九州に分布します。

●市内の分布：1963年に豊科の記録があります。

●減少要因：草原などの生息地が開発や遷移の進行で減少したことが考えられます。

参考文献 No. 19, 151

生息環境



▶ 草原



オオチャバネヨトウ (チョウ目 ヤガ科)
Nonagria puengeleri



安西稔

生息環境



▶ 草原
▶ 湿地



▶ 河川

安曇野市：情報不足

長野県：情報不足

DD

DD

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

●特徴：開長35～52mm。特徴的な外見で識別は容易です。年1化で成虫は7～8月に見られます。ガマを食草とし、湿地で得られますが産地はやや局地的です。

●生育環境：湿地に生息します。

●国内の分布：北海道、本州、四国、九州に分布します。

●市内の分布：1959年に明科で記録があります。

●減少要因：湿地や河川敷などの生息地が開発や宅地化で減少したことが考えられます。

参考文献 No. 6, 149, 152, 156

キスジウスキヨトウ (チョウ目 ヤガ科)
Capsula sparganii



那須野雅好

生息環境



▶ 湿地



▶ 河川

安曇野市：情報不足

長野県：情報不足

DD

DD

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

●特徴：開長29～44mm。前翅の色合いには変異があります。腎状紋下部が黒で縁取られるのが特徴ですが、ガマヨトウやハガタウスキヨトウなどよく似た種があるので識別には注意が必要です。年1化で成虫は6月下旬～9月に見られます。

●生育環境：湿地に生息します。

●国内の分布：北海道、本州、四国、九州に分布します。

●市内の分布：2015年に三郷で確認されています。

●減少要因：湿地や河川敷などの生息地が開発や宅地化で減少したことが考えられます。

参考文献 No. -

クマソオオヨトウ (チョウ目 ヤガ科)
Kumasia kumaso



四方圭一郎

生息環境



▶ 竹林



▶ 河川

安曇野市：情報不足

長野県：情報不足

DD

DD

環境省：—

—

●特徴：開長44～48mm。前翅は暗赤褐色で、腎状紋の外側が暗赤色になることが特徴です。年1化で成虫は6～8月に見られますが、発生地で成虫が見られる時期は短いと推測されます。ハチクやマダケなどのタケノコを食草とし、害虫としても知られています。

●生育環境：ハチクやマダケなどの竹林に生息します。

●国内の分布：本州、四国、九州に分布します。

●市内の分布：1958年に明科の記録があります。

●減少要因：情報が少ないため生息地や個体数の状況について詳しいことは分かっていません。

参考文献 No. 6, 15, 150

フタホシヨトウ (チョウ目 ヤガ科)
Hoplodrina euryptera



四方圭一郎

生息環境



▶ 森林



安曇野市：情報不足

長野県：

—

—

DD

環境省：

—

—

●特徴：開長32～36mm。特徴的な外見で識別は容易です。年1化で成虫は8～9月に見られます。食草は不明ですが、山地の沢沿いで、灯火採集で得られることが多いです。

●生育環境：山地の沢沿いに生息します。

●国内の分布：本州、四国、九州に分布します。

●市内の分布：堀金で確認されています。

●減少要因：情報が少ないため生息地や個体数の状況について詳しいことは分かっていません。

参考文献 No. 36, 168

トガリヨトウ (チョウ目 ヤガ科)
Virgo datanidia



田島尚

生息環境



▶ 草原



安曇野市：情報不足

長野県：

—

—

DD

環境省：

—

—

●特徴：開長23～27mm。外見はニセトガリヨトウに酷似し、本種は前翅の色が薄い特徴がありますが、同定には交尾器の検鏡が必要です。年1化で成虫は7～9月に見られます。食草は未知ですが、草原環境で得られます。

●生育環境：草原に生息します。

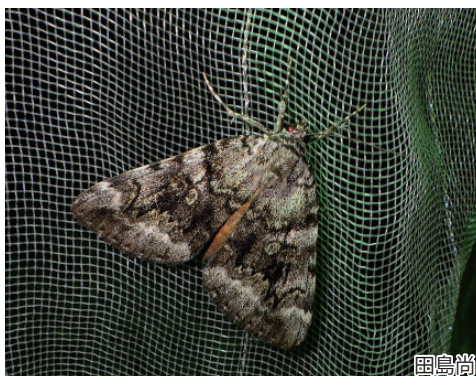
●国内の分布：北海道、本州に分布します。

●市内の分布：2017年に明科で確認されています。

●減少要因：荒地や草原などの生息地が開発や遷移の進行で減少したことが考えられます。

参考文献 No. 168

ミヤマキシタバ (チョウ目 ヤガ科)
Catocala ella ella



田島尚

生息環境



▶ 森林



安曇野市：情報不足

長野県：情報不足

DD

DD

環境省：準絶滅危惧

NT

●特徴：開長51～61mm。前翅は丸みを帯び、また緑がかって見える特徴があります。年1化で成虫は7～9月に見られます。ハンノキを食草とし、山間部の湿地や雑木林で見られます。

●生育環境：雑木林などの二次林に生息します。

●国内の分布：北海道、本州に分布します。

●市内の分布：2000年初頭に三郷で確認されています。

●減少要因：寄主であるハンノキ類が自生する湿性林の開発、遷移の進行が考えられます。

参考文献 No. 6, 36

コシロシタバ (チョウ目 ヤガ科)
Catocala actaea

安曇野市：情報不足

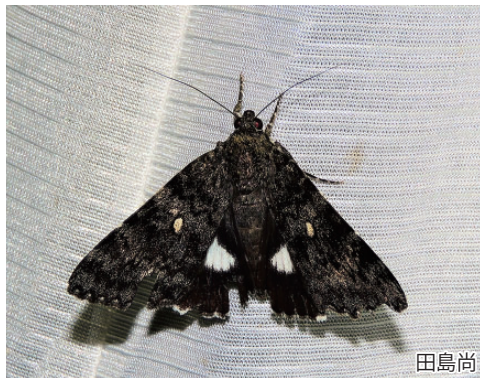
長野県：情報不足

DD

DD

環境省：準絶滅危惧

NT



田島尚

生息環境



▶ 森林



●**特徴**：開長50～60mm。後翅には大きな白紋があり、特徴的な外見から識別は容易です。年1化で成虫は6～10月に見られます。クヌギなどを食草とし、生息地での個体数は多いです。灯火採集では得にくく日中幹に静止する個体を目視で探すほうが見つけやすいです。

●**生育環境**：雑木林などの二次林に生息します。

●**国内の分布**：本州、四国、九州に分布します。

●**市内の分布**：2017年に明科で確認されています。

●**減少要因**：生息地である雑木林や二次林の開発、遷移の進行が考えられます。

参考文献 No. 6, 18, 19



8 その他無脊椎動物



■ レッドリスト改訂の概要（その他無脊椎動物）

カテゴリーに変更があった種はなく、新規追加は3種で、その他無脊椎動物のレッドリスト種は計17種になりました。表3-12にカテゴリーごとの種数・概要を示します。

新規追加した種は、河畔林や河川敷の草地に生息する種が2種、自然度の高い湧水や湿地に生息する種が1種でした。

全体としては、新規追加種によって絶滅危惧Ⅰ類が増加した結果となりました。

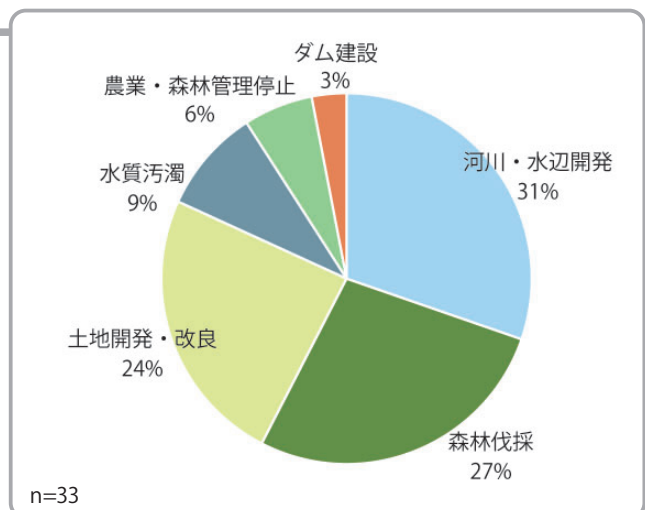
表 3-12 その他無脊椎動物レッドリスト種の概要

カテゴリー	種数		改訂内容
	2014	2024	
絶滅 (EX)	0	0	絶滅に該当する種は選定されませんでした。
野生絶滅 (EW)	0	0	野生絶滅に該当する種は選定されませんでした。
絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	1	3	平野部の河畔林等に生息するカタマメマイマイ、コウフオカモノアラガイを新たに選定しました。
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	1	1	変更の生じた種はありませんでした。
準絶滅危惧 (NT)	11	11	変更の生じた種はありませんでした。
情報不足 (DD)	1	2	河川・水辺に生息するコシダカヒメモノアラガイを新たに選定しました。

■ 危惧される減少要因

レッドリスト種に選定されたその他無脊椎動物の主な減少要因としては、開発や森林伐採に伴う生息環境の喪失が多くを占めています。

今回の改訂ではカテゴリーの上昇はありませんでしたが、新規追加種は河川敷の草地や湧水といった河川環境に生息する種であるため、河川・水辺開発による生息地の減少が懸念されます。



その他無脊椎動物の減少要因の割合

■ 今回の改訂作業で分かったこと（その他無脊椎動物）

『安曇野市版レッドデータブック 2014』では、陸産貝類を中心に14種が選定されていました。今回の改訂では、文献調査で新たに確認された貝類のうち、環境省または長野県のレッドリストに掲載されている3種（コウフオカモノアラガイ、カタマメマイマイ、コシダカヒメモノアラガイ）を、新規追加種として選定しました。

● 市内で新たに記録された種

コウフオカモノアラガイは、湿った草地に生息する小さな貝類で、穂高で確認されました。全国的にも確認されている都道府県が少なく、環境省のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に選定されています。長野県では初記録となる確認のようであり、『長野県陸産・淡水産貝類誌』（飯島國昭著）に発見の経緯が詳しく掲載されています。

カタマメマイマイも穂高で確認されました。河川敷の草地や林に生息する種で、環境省では絶滅危惧Ⅱ類、長野県では絶滅危惧Ⅰ類に選定されています。

これら2種は、県と環境省のレッドリストのカテゴリーや生息環境の特異さを考慮し、絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）としました。

コシダカヒメモノアラガイは、梓川で確認されています。確認地点は松本市ですが、安曇野市と近接していることと、環境を考えると市内にも生息していると想定されることから、情報不足（DD）としました。分類や分布について分からないことが多い貝で、今後の研究が期待されます。

そのほか、市内でこれまで確認がなかった種として、ナガオカモノアラガイ（県RL: CR+EN）の目撃例が寄せられたり、南方系のカタツムリであるコハクオナジマイマイが撮影されたりしています。

貝類をはじめとする無脊椎動物は、十分に調査が進んでいない仲間であることから、今後も未発見の種が見つかるかもしれません。



穂高で確認されたコウフオカモノアラガイ



南方系のコハクオナジマイマイ

新規追加種の解説

新規追加種以外の説明は、2014年版の315～319ページを参照してください。

コウフオカモノアラガイ (マイマイ目 オカモノアラガイ科)

Neosuccinea kofui



飯島國昭

生育環境



▶ 草原
▶ 湿地



▶ 河川

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：

—

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

●特徴：殻長7～8mm程度の小さな巻貝です。外見は近縁種と酷似しており、正確な同定には解剖が必要です。

●生育環境：水辺の草地や湿地に生息しています。

●国内の分布：本州（中部地方・関東地方）の限られた場所で確認されています。

●市内の分布：高瀬川と穂高川の合流部で確認されています。

●減少要因：開発による、草地や湿地の減少が考えられます。

参考文献 No. 167

カタマメマイマイ (マイマイ目 ナンバンマイマイ科)

Lepidopisum conospira



北野聡

生育環境



▶ 草原
▶ 湿地



▶ 河川

安曇野市：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

長野県：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

VU

●特徴：殻長5～6mm、殻径6～7mm程度の小さな巻貝です。殻は中心が高く、厚みのある円錐状になります。

●生育環境：山麓部・平野部の草地に生息します。

●国内の分布：本州、四国、九州に分布します。

●市内の分布：穂高川の河川敷などで確認されています。

●減少要因：開発による、草地や湿地の減少が考えられます。

参考文献 No. 167

コシダカヒメモノアラガイ (モノアラガイ目 モノアラガイ科)

Lymnaea truncatula



飯田市美術館

生育環境



▶ 湿地



▶ 河川
▶ 湧水地

安曇野市：情報不足

DD

長野県：絶滅危惧Ⅰ類

CR+EN

環境省：情報不足

DD

●特徴：殻長10～12mmの小さな巻貝です。自然度の高い場所に生息する在来種と、都市の側溝などで見られる外来種の2種を含んでいると考えられていますが、あまり詳しく分かっていません。

●生育環境：在来種と考えられる個体は、山間の湧水や湿地に生息しています。

●国内の分布：遺伝子から在来種と推定される個体が北海道と宮城県で確認されているほか、青森・富山・長野・岡山県などで在来の可能性が高い個体が確認されています。

●市内の分布：松本市の梓川河川敷で記録があることから、市内にも分布していると考えられます。

●減少要因：開発による、自然度の高い湿地や湧水の減少が考えられます。

参考文献 No. 185

近年の遺伝子解析技術の進歩によって、これまで1種だと思われていた生物に、実は複数の種が含まれると判明することが増えてきました。それらの生物の中には、安曇野市周辺が分布の境界となる種も知られています。レッドリストの改訂にあたって、そのような生物の遺伝子を解析し、市内に生息する種の特定を試みました。その一つとしてヒダサンショウウオ類を紹介します。

●日本の東西で分かれるヒダサンショウウオ類の分布

日本列島の成り立ちはとても複雑であり、生息する生物には、そうした地史の影響を強く受けた種が多く知られています。現在の日本列島の形成に大きく関係しているのが、糸魚川-静岡構造線と中央構造線という、ふたつの大きな断層です。糸魚川-静岡構造線はフォッサマグナと呼ばれる地溝帯の西縁に位置し、日本の東半分と西半分の地質学的な境界となっています。また、中央構造線は主に西南日本を北と南に隔てる境界です。日本の生物には、見た目では区別できなくても、これらの地域を境に遺伝子に違いがみられるものがいます。特に淡水魚、両生類、水生昆虫などで、こうした傾向が顕著です。日本列島が現在の配置となった後も、移動・分散が水のあるところに制限されるため、水系が異なることで、遺伝的にも交流が生じ難く、独立した種が維持されてきたと考えられます。

溪流に生息するヒダサンショウウオ類は、こうした傾向が強くみられる典型的な事例です。近年の研究によって、従来ヒダサンショウウオとされてきた種は、糸魚川-静岡構造線と中央構造線を境に、東側に生息するヒガシヒダサンショウウオと西側に生息するヒダサンショウウオに区分されるようになりました (Okamiya et al. 2018)。糸魚川-静岡構造線が走る安曇野市は、2種の分布の境界に位置します。



本州中部におけるヒダサンショウウオ類の分布 (Okamiya et al. 2018 を元に作成)

●安曇野のヒダサンショウウオ

全国のヒダサンショウウオ類を調べた研究では、松本盆地は2種の分布の空白地帯になっています (Okamiya et al. 2018)。しかし、市内では昔から北アルプス山麓の一部に分布が知られていました。今回、市内のヒダサンショウウオ類の遺伝子を解析し、西側に生息するものと同じヒダサンショウウオであることを確認しました。

生息地が限られることから、安曇野市版レッドリスト2024では準絶滅危惧 (NT) として掲載しました。

(東城幸治)



安曇野市内に生息するヒダサンショウウオ

【引用文献】 Okamiya H, Sugawara H, Nagano M, Poyarkov NA (2018) An integrative taxonomic analysis reveals a new species of lotic *Hynobius* salamander from Japan. PeerJ 6 (6):e5084

(4) 追加種・カテゴリー変更種・除外種とその理由一覧

植物（追加種）

科名	種名	カテゴリー	追加の理由
イワデンド	ウスヒメワラビモドキ	VU	主に亜高山帯に自生し、県内でも生育数が限られるため。
サトイモ	ヒトツバテンナンショウ	VU	県内でも生育数が限られるため。
	カミコウチテンナンショウ	CR+EN	県内でも分布、個体数が限られており、園芸採取の危険性も高いため。
	ヒメウキクサ	DD	県内でも生育数が限られるが、市内でほかに自生している可能性があり、標本も含め調査を要するため。
ヒルムシロ	エビモ	NT	湧水路などの生育環境が変化しており、減少している可能性が高いため。
ラン	ヤマサギソウ	CR+EN	草地性であり、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
	ヤマトキソウ	CR+EN	県内でも生育数が限られるため。
ススキノキ	ユウスゲ	CR+EN	草地性であること、ニホンジカの嗜好植物であることから減少傾向にあると考えられるため。
ガマ	ナガエミクリ	NT	ミクリからの変更。市内に分布しているものが本種であると分かったため。
カヤツリグサ	ホスゲ	DD	県内で標本が採集されていない可能性があり、今後の調査を要するため。
	アズマスゲ	NT	県内における記録が比較的少ないが、標本が採集されていない可能性もあるため。
	ニイタカスゲ	DD	県内で標本が採集されていない可能性があり、今後の調査を要するため。
	ミセンアオスゲ	DD	県内で標本が採集されていない可能性があり、今後の調査を要するため。
	ヒメヒラテンツキ	DD	県内で標本が採集されていない可能性があり、今後の調査を要するため。
	エゾアブラガヤ	CR+EN	県内でも生育地が限られる。湿地性であるため。
イネ	スズメノテッポウ（水田型）	VU	水田型のスズメノテッポウが大きく減少しており、畑地型のノハラスズメノテッポウが増加しているため。
	コウボウ	VU	草地性であり、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
	スズメガヤ	CR+EN	県内でも生育地が限られるため。
	スズメノカタビラ	VU	耕作履歴の長い農耕地に自生し、人為的影響が大きい。外来系統のアオスズメノカタビラ、ツクシスズメノカタビラおよびその雑種が増加しており、大きく減少しているため。
	ヒエガエリ	CR+EN	県内でも生育数が限られるため。
	メガルカヤ	CR+EN	草地性であり、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
	カニツリグサ（在来）	VU	外来系統のカニツリグサ（ナガボカニツリ）が多く、在来系統は古い草地に残る。市内では生育地が極めて限定されているため。
ケシ	ジロボウエンゴサク	DD	県内では人為的移入されたケースもあり、今後調査を要するため。

科名	種名	カテゴリー	追加の理由
マメ	カワラケツメイ	VU	生育環境の変化により、市内では限られた場所に自生するため。
	ツルフジバカマ	VU	草地性であり、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
	クサフジ	DD	開放的な草地に多く、人為的な影響が大きいこと、外来種ナヨクサフジが増加していることにより、減少率が高いと思われる。今後注目して調査を要するため。
	ヨツバハギ	VU	草地性であり、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
	オオバクサフジ	NT	草地性であり、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
カバノキ	チョウセンミネバリ	VU	もともと県内でも個体数が限られると考えられるが、今後調査を要するため。
ニシキギ	オオシラヒゲソウ	NT	シラヒゲソウからの変更。市内でも一定数自生していることが確認された。県内でも多く確認されているが、採取圧等のリスクがあるため。
アカバナ	ウスゲヤナギラン	VU	ニホンジカの嗜好植物であることから、減少傾向にあると考えられるため。
	オオアカバナ	VU	県内でも個体数が限られるため。
タデ	ギシギシ	CR+EN	県内はほぼナガバギシギシ等との雑種であり、市内では生育地が極めて限定されているため。
ナデシコ	ノミノツヅリ (狭義)	VU	外来系統のネバリノミノツヅリが広く分布しており、市内では生育地が極めて限定されているため。
アカネ	ヤエムグラ	DD	人為的な影響が大きい場所に自生し、外来種のシラホシムグラが増加していることにより、減少率が高いと思われる。今後注目して調査を要するため。
リンドウ	ホソバノツルリンドウ	NT	県内でも個体数が限られるため。
オオバコ	アワゴケ	CR+EN	県内でも個体数が限られるため。
	サワトウガラシ	CR+EN	耕作履歴の長い湿田に生育し、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
アゼナ	アゼナ	CR+EN	耕作履歴の長い湿田に生育し、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
ハマウツボ	ケヤマウツボ	VU	県内でも個体数が限られるため。
キク	ヒメヨモギ (在来)	CR+EN	緑化材として持ち込まれた外来系統のヒメヨモギは県内でも多く見られるが、本種は古い草地に生育する。市内では生育地が極めて限定されているため。
	キソアザミ	DD	他種との雑種が多く、市内では生育地が極めて限定されている。標本を含めて今後調査を要するため。
	ヤチアザミ	CR+EN	明るく湿った環境に生育し、市内では生育地が極めて限定されているため。

動物（追加種）

■哺乳類

科名	種名	カテゴリー	追加の理由
キクガシラコウモリ	キクガシラコウモリ	NT	まとまった生息地が少ないため。
ヒナコウモリ	ヒナコウモリ	DD	市内での生息が確認されたが、生息実態が不明であるため。
	ユビナガコウモリ	NT	市内での生息が確認されたため。
	モリアブラコウモリ	DD	近隣地域で捕獲例があり、市内にも分布すると予想されるが現状不明のため。
	クロホオヒゲコウモリ	CR+EN	市内での生息が確認されているが、減少が示唆されるため。

■鳥類

科名	種名	カテゴリー	追加の理由
サギ	コサギ	VU	個体数が減少しているため。
ブッポウソウ	ブッポウソウ	CR+EN	市内での生息が確認され、繁殖している可能性があるため。
モズ	チゴモズ	DD	市内で繁殖例があり、今後の動向に注意が必要であるため。

■爬虫類

科名	種名	カテゴリー	追加の理由
タカチホヘビ	タカチホヘビ	DD	市内での生息が確認されたが、生息実態が不明であるため。

■両生類

科名	種名	カテゴリー	追加の理由
アオガエル	モリアオガエル	DD	市内での生息が確認されたが、周辺地域を含めた分布状況がよく分かっていないため。

■昆虫類

科名	種名	カテゴリー	追加の理由
ヤンマ	マルタンヤンマ	VU	県内では多くない種であり、市内での生息が確認されたため。
	マダラヤンマ	VU	市内で少数の記録がある種であり、県内での減少傾向が顕著であるため。
トンボ	マイコアカネ	VU	市内での近年の記録がないため。
	ヒメアカネ	NT	市内では近年減少傾向にあると考えられるため。
	キトンボ	DD	市内での確認場所が限定的であり、環境の変化次第で減少する可能性があるが、分布について十分把握できていないため情報不足とする。
ヒバリモドキ	キアシヒバリモドキ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
バッタ	マダラバッタ	DD	県内での記録が安曇野市に限られる。記録が少ないため、情報不足とする。
カスミカメムシ	ハヤシオオカスミカメ	VU	県内では多くない種であり、市内での生息が確認されたため。
オサムシ	キノコゴミムシ	NT	県内では多くない種であり、市内での生息が確認されたため。
	ダイミョウアトキリゴミムシ	NT	県内では多くない種であり、市内での近年の記録がないため。
	クロズジュウジアトキリゴミムシ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
ゲンゴロウ	オオヒメゲンゴロウ	NT	市内は多いが、他地域では少なく、環境の変化次第で減少する可能性があるため。
	マルガタゲンゴロウ	VU	中信では少ない種であり、市内での生息が確認されたため。
ハネカクシ	カバイロヒラタシデムシ	NT	他のシデムシ類と同様に個体が減少している可能性があるため。
	ベッコウヒラタシデムシ	NT	近年減少傾向にあると考えられるため。
コガネムシ	コカブトムシ	NT	県内では多くない種であり、市内での記録も少ないため。
タマムシ	ズミチビタマムシ	NT	県内では多くない種であり、市内での記録も少ないため。
コメツキムシ	ミヤジマコガネコメツキ	NT	生息地であるアカマツ林で、マツ枯れに伴う伐採が進行しているため。
ジョウカイボン	シマシマクビボソジョウカイ	CR+EN	市内に分布し、全国的にも限られた分布を示す種であるため。
	トウカイクビボソジョウカイ	VU	市内に分布し、全国的にも少ない種であるため。
	サドクビボシジョウカイ	NT	県内では多くない種であり、市内での生息が確認されたため。
テントウムシ	アイヌテントウ	NT	生息環境が河川敷の草地に限られているため。
	クリサキテントウ	DD	生息地であるアカマツ林ではマツ枯れに伴う伐採が進行しているが、生息の実態が把握されていないため。
カミキリムシ	ミセンヒメハナカミキリ	DD	極めて限られた地域に生息する種である。市内での生息が確認されたが、生息実態が不明であるため。

科名	種名	カテゴリー	追加の理由
カミキリムシ	ホンドヒメシラオビカミキリ	NT	生息地であるアカマツ林で、マツ枯れに伴う伐採が進行しているため。
ハムシ	ヨツボシアカツツハムシ	NT	生息環境が河川敷の草地に限られているため。
ギングチバチ	ニッポンハナダカバチ	VU	生息環境である河川の砂礫地が衰退しているため。
ミツバチ	ナミルリモンハナバチ	DD	生息情報が少なく、個体数が少ない可能性があるため。
マダラガ	ルリハダホソクロバ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
セセリチョウ	ホソバセセリ	DD	近年、市内での分布が確認されたが、自然分布かどうかを含め動向を追う必要があるため。
	コキマダラセセリ	VU	市内での分布がごく一部に限られているため。
シジミチョウ	ウラキンシジミ	NT	近年における市内の記録がなく、減少していると考えられるため。
	ハヤシミドリシジミ	NT	生息環境がカシワ林に限定されており、数が少ないため。
	カラスシジミ	NT	近年における市内の記録がなく、減少していると考えられるため。
	ヒメシジミ	NT	減少傾向にあるため。
タテハチョウ	コヒヨウモン	NT	山地帯の記録が激減しているため。
	ギンボシヒヨウモン	NT	近年における市内の記録が少なく、減少していると考えられるため。
	オオムラサキ	NT	市内では比較的安定していたが、近年の減少傾向が見られるため。
カギバガ	チョウセントガリバ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
シャクガ	フチグロシロヒメシャク	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	トビスジヤエナミシャク	NT	県内では多くない種であり、市内では近年減少している可能性があるため。
	ムツテンナミシャク	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	タケウチエダシャク	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
シャチホコガ	ギンボシシャチホコ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
ドクガ	スゲドクガ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
コブガ	ヒラノコブガ	VU	現在知られている産地は全国的にも非常に限られており、その希少性が高いため。
	ミカボコブガ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
ヤガ	ニセタバコガ	VU	生息地の草地環境の変化が進んでおり、減少が危惧されるため。
	オオクロバヤガ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	ホシヒメセダカモクメ	NT	県内では多くない種であり、市内では近年減少している可能性があるため。

科名	種名	カテゴリー	追加の理由
ヤガ	ミスジキリガ	NT	県内では多くない種であり、市内では近年減少している可能性があるため。
	ムラサキハガタヨトウ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	ショウブオオヨトウ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	ヒメトガリヨトウ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	オオチャバネヨトウ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	キスジウスキヨトウ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	クマソオオヨトウ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	フタホシヨトウ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	トガリヨトウ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	ミヤマキシタバ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。
	コシロシタバ	DD	市内で生息が確認されており、その生息数は少ないと予想されるが、評価できる情報が不足しているため。

■その他無脊椎動物

科名	種名	カテゴリー	追加の理由
モノアラガイ	コシダカヒメモノアラガイ	DD	市内での生息記録があるが、近縁種との種同定に精査が必要なため。
オカモノアラガイ	コウフオカモノアラガイ	CR+EN	市内での生息が確認されたが、生息数が少ないと予想されるため。
ナンバンマイマイ	カタマメマイマイ	CR+EN	市内での生息が確認されたが、生息数が少ないと予想されるため。

植物（変更・除外種）

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
ハナヤスリ	エゾフユノハナワラビ	NT	除外	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	アカハナワラビ	VU	NT	調査の結果、近年増加傾向にあることが確認されたため。
コケシノブ	コウヤコケシノブ	NT	除外	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。
サンショウモ	オオアカウキクサ	VU	CR+EN	以前確認されていた自生地から消失しており、確実な自生地が不明であるため。
オシダ	アズミイノデ	CR+EN	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
イヌガヤ	イヌガヤ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
ウマノスズクサ	ミヤマアオイ	CR+EN	除外	市内には自生していない可能性が高いため。
ショウブ	ショウブ	NT	DD	人為的植栽の可能性があるため、情報不足とする。
サトイモ	ヒロハテンナンショウ	NT	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
	ムラサキコウキクサ	EX	DD	市内で自生している可能性があり、標本も含め調査を要するため。
	ヒメザゼンソウ	CR+EN	NT	調査の結果、西山の山地帯で一定数自生していることが確認されたため。
	ザゼンソウ	CR+EN	VU	市内の生育環境は減少傾向にあるが、県内で多く確認されているため。
オモダカ	ヘラオモダカ	VU	除外	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	アギナシ	NT	DD	もともと市内に分布していない可能性があり、標本も含め調査を要するため。
	オモダカ	NT	除外	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。
トチカガミ	クロモ	VU	DD	もともと市内に分布していない可能性があり、標本も含め調査を要するため。
ヒルムシロ	イトモ	VU	CR+EN	生育環境が減少しており、近年確認されていないため。
	コバノヒルムシロ	CR+EN	DD	標本調査でも存在を確認できず、ホソバミズヒキモの浮葉を有する型である可能性があり、今後調査を要するため。
	ホソバミズヒキモ	NT	CR+EN	今回の調査で以前確認されていた自生地を確認できず、確実な自生地が不明であるため。
	ナガレミズヒキモ	CR+EN	除外	標本調査において過去の標本はホソバミズヒキモであった。現時点ではホソバミズヒキモに統合することが妥当と考えられるため。
	ヤナギモ	NT	VU	湧水路などの生育環境が悪化しており、減少している可能性が高いため。
イヌサフラン	ホウチャクソウ	NT	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
ラン	ギンラン	CR+EN	NT	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
ラン	イチヨウラン	NT	VU	亜高山帯に生育するが、採取圧の可能性が高いため。
	ノヤマトンボ (2014 版：オオバトンボソウ)	EX	CR+EN	三郷の山麓部の森林で確認されたため。
アヤメ	ノハナショウブ	NT	CR+EN	湿地性であり、市内では生育地が極めて限定されているため。
キジカクシ	クサスギカズラ	DD	除外	市内には分布していないと考えられるため。
	ヒメヤブラン	CR+EN	DD	誤同定が多い種であり、市内では生育地が極めて限定されているため。
	ワニグチソウ	NT	DD	標本調査の結果、コウライワニグチソウ（ヒメイズイ×ワニグチソウ）が確認された。自生について今後調査を要するため。
	コワニグチソウ	NT	DD	ワニグチソウとともに今後調査を要するため。
ガマ	ミクリ	NT	除外	ナガエミクリの誤同定。ナガエミクリ（NT）に変更のため除外。
カヤツリグサ	コジュズスゲ	VU	除外	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	シラコスゲ	CR+EN	除外	市内において減少傾向にあるとはいえ、周辺地域での確認も多いため。
	オオカワズスゲ	VU	NT	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	ヒナガヤツリ	CR+EN	VU	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	ヌマガヤツリ	NT	CR+EN	県内でも生育数が限られる。湿地性であり、市内では生育地が極めて限定されているため。
	アオガヤツリ	CR+EN	NT	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	イガガヤツリ	CR+EN	除外	西日本からの移入と考えられるため。
	ヒンジガヤツリ	EX	CR+EN	穂高の平野部の湿田で確認されたため。
イネ	オガルカヤ	NT	CR+EN	草地性であり、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
	ドジョウツナギ	NT	除外	市内において減少傾向にあるとはいえ、周辺地域での確認も多いため。
	ヒロハノドジョウツナギ	NT	除外	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	エゾノサヤヌカゲサ	EX	CR+EN	穂高の水田で確認されたため。
	ヌメリグサ	CR+EN	DD	ハイヌメリグサは県内に自生しており、ハイヌメリグサと誤同定している可能性がある。現在はハイヌメリグサと分けないとの見解もあり、分類学上の課題もあるため情報不足とする。
ケシ	フウロケマン	CR+EN	除外	市内には分布していないと考えられるため。
ツヅラフジ	コウモリカズラ	CR+EN	除外	市内において減少傾向にあるとはいえ、周辺地域での確認も多いため。
メギ	メギ	NT	除外	調査の結果、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	キバナイカリソウ	EX	DD	分布について、標本を含めて今後調査を要するため。

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
キンポウゲ	キクザキイチゲ	VU	NT	県内では多く確認されており、市内でも一定数自生していることが確認されたため。
	センニンソウ	VU	NT	県内では多く確認されており、市内でも一定数自生していることが確認されたため。
	オウレン	CR+EN	除外	市内に自生しているのはウスギオウレンであり、一定数自生しているため。
	バイカオウレン	DD	除外	市内で一定数自生していることが確認されたため。
マンサク	マルバマンサク	EX	除外	市内において減少傾向にあるとはいえ、周辺地域での確認も多いため。
ユズリハ	エゾユズリハ	CR+EN	除外	市内において減少傾向にあるとはいえ、周辺地域での確認も多いため。
スグリ	ヤブサンザシ	VU	除外	市内において減少傾向にあるとはいえ、周辺地域での確認も多いため。
	スグリ	CR+EN	DD	以前、確認されていた自生地が消失し、現在は確認されていないため。
ユキノシタ	ボタンネコノメソウ	CR+EN	VU	今回の調査で一定数自生していることが確認されたため。市内のものは品種キンシベボタンネコノメと思われる。
ベンケイソウ	ホソバノキリンソウ	EX	DD	市内で自生している可能性があり、標本も含め調査を要するため。
	マルバマンネングサ	VU	DD	今回の調査では確認されなかった。コモチマンネングサとの誤同定が多く、今後調査を要するため。
アリノトウグサ	ホザキノフサモ	NT	CR+EN	生育環境の変化により減少していると考えられ、市内では生育地が極めて限定されているため。
マメ	モメンヅル	VU	CR+EN	生育環境の変化により減少していると考えられ、市内では生育地が極めて限定されているため。
	フジカンゾウ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	ヤハズソウ	VU	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	イヌハギ	NT	VU	生育環境の変化により減少していると考えられ、市内では生育地が極めて限定されているため。
	ミヤコグサ	NT	CR+EN	生育環境の変化により減少していると考えられ、市内では生育地が極めて限定されているため。
バラ	ヒメキンミズヒキ	VU	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	オクチョウジザクラ	NT	除外	市内において減少傾向にあるとはいえ、周辺地域での確認も多いため。
	カシオザクラ	CR+EN	DD	伐採され、現在は生育が確認されていないため。
	ノウゴウイチゴ	EX	DD	もともと市内に分布していない可能性があり、標本も含め調査を要するため。
	サナギイチゴ	VU	DD	県内では一定数確認されており、市内での調査を要するため。
クロウメモドキ	クマヤナギ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
イラクサ	ホソバイラクサ	VU	除外	市内では分布していない可能性が高いため。
	コバノイラクサ	NT	DD	もともと市内に分布していない可能性があり、標本も含め調査を要するため。

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
ブナ	イヌブナ	VU	NT	市内では明科でのみ確認されているが、県内では多く確認されているため。
ウリ	アマチャヅル	CR+EN	除外	市内において減少傾向にあるとはいえ、周辺地域での確認も多いため。
	スズメウリ	EX	DD	市内で自生している可能性があり、標本も含め調査を要するため。
ニシキギ	ヒロハノツリバナ (2014 版：ヒロハツリバナ)	VU	除外	市内において減少傾向にあるとはいえ、周辺地域での確認も多いため。
	オオツリバナ	VU	DD	分類学上の見解が統一されておらず、標本を含めて今後の調査を要するため。
	シラヒゲソウ	EX	除外	オオシラヒゲソウの誤同定のため除外。オオシラヒゲソウ (NT) に変更のため除外。
トウダイグサ	ノウルシ	CR+EN	除外	市内には分布しないと考えられるため。
ヤナギ	シロヤナギ	CR+EN	DD	分類学上の見解が統一されておらず、標本を含めて今後の調査を要するため。
	オオタチヤナギ	EX	VU	市内各地の平野部の河川敷で自生が確認されたため。
スマレ	オオタチツボスマレ	NT	除外	市内において減少傾向にあるとはいえ、周辺地域での確認も多いため。
	アイヌタチツボスマレ	EX	DD	市内で自生している可能性があり、標本も含め調査を要するため。
アマ	マツバニンジン	EX	DD	市内で自生している可能性があり、標本も含め調査を要するため。
オトギリソウ	タコアシオトギリ	NT	DD	標本調査では、一部はオトギリソウと同定された。本種は雑種であるとの見解もあり、今後改めて検討を要するため。
	シナノヤマオトギリ	EX	DD	市内で自生している可能性があり、標本も含め調査を要するため。
	コケオトギリ	VU	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	オオシナノオトギリ	EX	DD	分類学上の見解が統一されておらず、標本を含めて今後の調査を要するため。
	ミズオトギリ	NT	VU	安定した湿地に生育し、生育環境が減少しているため。
ミソハギ	ヒシ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
ムクロジ	ミツデカエデ	VU	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	オオイタヤメイゲツ	VU	NT	市内で一定数自生していることが確認されたため。
ムクロジ	ヒナウチワカエデ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
ミカン	キハダ	VU	DD	市内で一定数自生していると考えられるが、今後の調査を要するため。
アオイ	カラスノゴマ	NT	VU	土地改良等により生育環境が変化し、減少傾向にあると考えられるため。市内では生育地が極めて限定されている。
アブラナ	マルバコンロンソウ	VU	NT	市内で一定数自生していることが確認されたため。
	キバナハタザオ	NT	VU	ニホンジカの嗜好植物であることから、減少傾向にあると考えられるため。

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
タデ	ノダイオウ	VU	CR+EN	県内でも個体数が限られており、減少しているため。
	マダイオウ	CR+EN	除外	市内には分布しないと考えられるため。
モウセンゴケ	モウセンゴケ	EX	CR+EN	穂高の亜高山帯に生育していることが確認されたため。
ナデシコ	ワチガイソウ	CR+EN	DD	もともと市内に分布していない可能性があり、標本も含め調査を要するため。
	ヒゲネワチガイソウ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	フシグロセンノウ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
ツツジ	バイカツツジ	CR+EN	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
リンドウ	ハナイカリ	NT	VU	ニホンジカの嗜好植物であることから、減少傾向にあると考えられるため。
キョウチクトウ	スズサイコ	NT	VU	草地性であり、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
ムラサキ	オニルリソウ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	タチカメバソウ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
オオバコ	ヒヨクソウ	NT	CR+EN	ニホンジカに喫食されており、減少傾向にあると考えられるため。
アゼナ	ウリクサ	CR+EN	DD	もともと市内に分布していない可能性があり、標本も含め調査を要するため。
シソ	ツルカコソウ	EX	DD	市内で自生している可能性があり、標本も含め調査を要するため。
	ニシキゴロモ	CR+EN	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
	ジャコウソウ	EX	DD	市内で自生している可能性があり、標本も含め調査を要するため。
	セキヤノアキチョウジ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	クロバナヒキオコシ	NT	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
	タイリンヤマハッカ	VU	除外	もともと市内には分布しないと考えられるため。
	カメバヒキオコシ	VU	除外	市内に分布するのはハクサンカメバヒキオコシである。県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	テンニンソウ	VU	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
	ヤマジソ	EX	DD	市内に自生している可能性があり、標本も含め調査を要するため。
	ミゾコウジュ	CR+EN	除外	偶産の可能性が高いため。
キツネノマゴ	ハグロソウ	VU	CR+EN	生育地が植林地であり、人為的影響が大きい。県内でも個体数が限られており、市内では生育地が極めて限定されているため。
クマツヅラ	クマツヅラ	CR+EN	除外	外来種ホソクマツヅラであることが判明したため。
キキョウ	フクシマシャジン	VU	CR+EN	県内でも個体数が限られており、市内では生育地が極めて限定されているため。

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
キキョウ	サワギキョウ	NT	VU	湿地性であり、市内では生育地が極めて限定されているため。
	キキョウ	VU	CR+EN	草地性であり、人為的影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
ミツガシワ	アサザ	EX	DD	市内で自生している可能性があり、さらなる調査を要するため。
キク	ミヤマヨメナ	CR+EN	除外	もともと市内には分布せず、ミヤコワスレと誤同定の可能性、もしくは人為的移入の可能性が高いため。
	カントウヨメナ	CR+EN	DD	カントウヨメナではなく、同属内での交雑に由来するものを本種と認識している可能性があり、今後の調査を要するため。
	キクタニギク	NT	除外	もともと市内には分布しないと考えられる。人為的移入の可能性が高いため。
	サワアザミ	NT	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
	ヤナギタンポポ	NT	CR+EN	草地性であり、人為的影響およびニホンジカの影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
	モミジガサ	CR+EN	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
	キクアザミ	EX	CR+EN	明科の山地帯の草地で生育していることが確認されたため。
	ヤブレガサ	VU	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
	ウスギタンポポ	CR+EN	DD	今回の調査で以前確認されていた自生地で確認できず、確実な自生地が不明であるため。
	オナモミ	VU	DD	他種との混同の可能性を含んでおり、標本を含めて今後調査を要するため。
スイカズラ	マツムシソウ	VU	CR+EN	草地性であり、人為的影響およびニホンジカの影響が大きい。市内では生育地が極めて限定されているため。
ウコギ	トチバニンジン	VU	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
セリ	ノダケ	NT	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	シャク	NT	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
	セントウソウ	CR+EN	DD	もともと市内の分布は少ないと考えられ、標本を含めて今後調査を要するため。
	セリモドキ	CR+EN	除外	県内では多く確認されており、市内で一定数自生していることが確認されたため。
	オオハナウド	CR+EN	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
	ハナウド	NT	DD	豊科で人為的移入による生育地が確認された。市内の分布について標本を含めて今後調査を要するため。
	イワセントウソウ	NT	除外	市内において減少傾向にあるとはいえず、周辺地域での確認も多いため。
	ムカゴニンジン	VU	CR+EN	湿地性であり、市内では生育地が極めて限定されているため。

動物（変更・除外種）

■哺乳類

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
ヒナコウモリ	ヤマコウモリ	NT	CR+EN	市内のねぐらの数が減少しているため。
	ヒメホオヒゲコウモリ (2014 版：シナノホオヒゲコウモリ)	DD	NT	山地に広く分布しているため。
	テングコウモリ (2014 版：ニホンテングコウモリ)	DD	CR+EN	生息地の減少が確認されたため。

■鳥類

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
サギ	ササゴイ	VU	CR+EN	個体数が減少しているため。
タカ	ハイタカ	NT	VU	営巣環境が減少している可能性があるため。
フクロウ	コノハズク	DD	CR+EN	調査の結果、個体数が少ないことが明らかになったため。
	アオバズク	DD	CR+EN	調査の結果、個体数が少ないことが明らかになったため。
カワセミ	ヤマセミ	VU	CR+EN	個体数が減少しているため。
サンショウクイ	サンショウクイ	NT	除外	市内の山地には普通に生息し、全国的にも個体数が回復しているため。

■両生類

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
アカガエル	トウキョウダルマガエル	NT	VU	トノサマガエルとの交雑が進行しているため。

■魚類

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
ヤツメウナギ	スナヤツメ北方種※	(NT)	NT	近年の分類に従い、従来のスナヤツメを 2 種に分けて掲載したため。
	スナヤツメ南方種※	(NT)	NT	近年の分類に従い、従来のスナヤツメを 2 種に分けて掲載したため。

※ 2014 年版では「スナヤツメ」として掲載

■昆虫

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
ガガンボカゲロウ	ガガンボカゲロウ	DD	除外	記録が限定的で誤同定の可能性があるため。
サナエトンボ	アオサナエ	VU	NT	市内での確認例が増加しているため。
ヤンマ	カトリヤンマ	VU	CR+EN	近年の記録がないため。
エゾトンボ	トラフトンボ	CR+EN	DD	オオトラフトンボとの誤同定が考えられるため。
トンボ	ハッチョウトンボ	CR+EN	EX	市内唯一の生息地における記録が 30 年以上ないため。
カマドウマ	ヒラタクチキウマ	DD	除外	確実な記録が確認できないため。
バッタ	タカネヒナバッタ	NT	除外	周辺市町村を含め確認例が多いため。
	ハネナガイナゴ	NT	VU	近年の記録がないため。
トビナナフシ	シラキトビナナフシ	NT	除外	周辺市町村を含め確認例が増えているため。
コオイムシ	コオイムシ	NT	除外	どこの水域でも普通に見られ個体数も多いため。
	オオコオイムシ	NT	除外	確実な記録が確認できないため。
クヌギカメムシ	ヨツモンカメムシ	NT	除外	個体数が多く、減少が見られないため。
オサムシ	ミヤマハンミョウ	NT	除外	個体数が多く、減少が見られないため。
オサムシ	チビアオゴミムシ	VU	CR+EN	長野県での記録は明科での一例のみであり、個体数が少ないことが推測されるため。
ゲンゴロウ	ケシゲンゴロウ	NT	VU	1990 年代は多かったが、現在ではほとんど見られないため。
	クロゲンゴロウ	CR+EN	VU	県北部・南部では比較的多い種であり、安曇野地域でも複数年確認されているため。
	ゲンゴロウ	NT	VU	減少傾向が著しいため。
ミズスマシ	オオミズスマシ	NT	VU	減少傾向が著しいため。
ガムシ	シジミガムシ	VU	DD	市内の記録が近縁種との誤同定の可能性があるため。
	ガムシ	NT	除外	近年は増加傾向に転じており多く見られるため。
オオキスイムシ	ミドリオオキスイ	NT	除外	個体数が多く、減少が見られないため。
カミキリムシ	ケブカマルクビカミキリ	NT	VU	マツ枯れに伴いホストのネズミサシと一緒に伐採され減少が著しいため。
	シナノエゾハイイロハナカミキリ	VU	CR+EN	市内では、近年全く確認されていないため。
	オニホソコバネカミキリ	NT	VU	分布が極めて局所的であるため。
	トラフカミキリ	NT	VU	減少傾向が著しいため。
	ムモンベニカミキリ	NT	CR+EN	近年、全く確認されていないため。
マダラガ	ベニモンマダラ	NT	VU	市内全域でほとんど見られなくなっているため。
セセリチョウ	ホシチャバネセセリ	CR+EN	EX	市内における記録が 50 年以上ないため。
	アカセセリ	VU	CR+EN	市内ではほとんど見られないため。

科名	種名	カテゴリー		カテゴリー変更・除外の理由
		2014 版	2024 版	
セセリチョウ	キマダラセセリ	VU	NT	やや増加傾向が認められ、新たな生息域も確認されているため。
シジミチョウ	オオゴマシジミ	VU	CR+EN	確認数が減少しているため。
	ミヤマシジミ	NT	VU	減少傾向が著しいため。
	アサマシジミ中部低地帯亜種	CR+EN	EX	アサマシジミの2亜種を区別し、それぞれ別のカテゴリーに分けた。中部低地帯亜種については、市内における記録が50年以上ないため。
タテハチョウ	ヒョウモンチョウ	VU	CR+EN	減少傾向が著しいため。
	フタスジチョウ	VU	CR+EN	近年の記録がないため。
	コヒオドシ	NT	VU	減少傾向が著しいため。
	オオヒカゲ	VU	CR+EN	減少傾向が著しいため。
	キマダラモドキ	VU	CR+EN	減少傾向が著しいため。
カレハガ	ヒロバカレハ	CR+EN	EX	市内における記録が50年以上ないため。
ドクガ	ウスジロドクガ	CR+EN	EX	市内における記録が50年以上ないため。
ヒトリガ	ゴマベニシタヒトリ	CR+EN	EX	市内における記録が50年以上ないため。
	ヒメキシタヒトリ	NT	DD	亜高山帯に生息しており、情報が不足しているため。
ヤガ	マダラムラサキヨトウ	CR+EN	EX	市内における記録が50年以上ないため。
	ヘリグロヒメヨトウ	CR+EN	EX	市内における記録が50年以上ないため。
	ハイマダラクチバ	CR+EN	EX	市内における記録が50年以上ないため。

両生類の中には、安曇野市付近が分布の境界となっているような生物が知られています（コラム3 p.138参照）。池沼や水田などの身近な環境にも生息しているツチガエル類もその一つです。近年の研究によって、ツチガエルとされていたものが「ツチガエル」と「ムカシツチガエル」の2種に分けられており、安曇野市はその境界付近に位置しています。

●分類の研究が進むツチガエル類

かつて、ツチガエルは日本やその周辺の島々、朝鮮半島やロシア南部まで広く分布するとされていました。しかし遺伝子の研究が進み、大陸のものはチョウセンツチガエル、佐渡島のはサドガエルという別種として区別されるなど、分類の見直しが進んできました。近年の研究により、関東甲信地域や東北地方の一部に分布するツチガエルも、その他の地域のものとは遺伝的に大きく分化しているとして、新種ムカシツチガエルとして記載されました（Shimada et al. 2022）。ツチガエルとムカシツチガエルの見分けは難しく、オタマジャクシの腹の模様には違いがあるとされていますが、確実な同定には遺伝子解析が必要です。安曇野市が位置する松本盆地では、ツチガエルとムカシツチガエルの両種が確認され、分布域の境界となっています。



本州中部におけるツチガエル類の分布
(shimada et al. 2022 を元に作成)

●安曇野市内でも見つけた新種ムカシツチガエル

安曇野市近隣の大町市ではツチガエル、松本市や塩尻市ではムカシツチガエルの遺伝子をもった個体が見つっています（Shimada et al. 2022）。しかし、安曇野市内に生息するのがどちらの種なのか、または両種が生息するのかといったことは分かっていませんでした。レッドリストの改訂にあたり、明科の水田で捕獲したツチガエル類の遺伝子を解析したところ、ムカシツチガエルのものであることが分かりました。安曇野市には少なくともムカシツチガエルは生息しているようです。市内のツチガエル類がこの1種だけなのか、もう一方の種も生息しているのかは今後の調査・研究が待たれます。そのため、安曇野市版レッドリスト2024では両種をまとめてツチガエル類（絶滅危惧Ⅱ類：VU）として扱っています。

（東城幸治）



明科で見つかったムカシツチガエル

【引用文献】 Shimada T, Matsui M, Ogata M, Miura I, Tange M, Min M, Eto K (2022) Genetic and morphological variation analyses of *Glandirana rugosa* with description of a new species (Anura, Ranidae) . Zootaxa 5174:25–45

4

注意すべき生物



4.1 注意すべき生物とは

安曇野市の自然環境は、長い期間をかけて形成されてきました。現在の安曇野市の自然環境が形成される過程では、地域外に生育・生息していた生物の分布拡大は当然あったことでしょう。しかし、それらは人間活動にはよらない、気候や気象、地殻変動などの自然現象や生物自体の活動に基づいており、その結果として安曇野市の自然環境は絶妙なバランスを保ちながら形成されてきたと考えられます。

こうして形成された自然環境に、人の活動によって域外から生物が持ち込まれると、自然環境だけでなく、人間の身体や財産、農林水産業などにも大きな影響を及ぼす場合があります。また、もともと域内に生息・生育していた生物でも、周辺環境の変化などを通じて爆発的に増えると自然環境等に大きな影響を及ぼすようになる場合もあります。

そこで本書では、次の掲載基準を設けて、安曇野市の自然環境に大きな影響を及ぼす可能性がある生物を取り上げます。このように、本書で取り上げる「注意すべき生物」とは、安曇野市の自然環境にとって注意すべき生物という意味で、その生物自体に何か問題があるということではありません。

【注意すべき生物の掲載基準】

安曇野市における絶滅のおそれのある野生生物についての基礎資料であるという本書の趣旨を考慮して、次のように注意すべき生物の掲載基準を設けました。また、掲載に際しては「生態系被害防止外来種リスト」（環境省・農林水産省）などを参考にしました。

安曇野市の自然環境（特にレッドリスト掲載種）に対して次のA～Cの影響のある生物種（在来種、外来種を含む）のうち、特に本書で取り上げて注意したいもの

主要な影響として考慮するもの

A 生態系への影響が大きい、または今後懸念される

例：在来生物を捕食する、在来種と競合する（在来種の生息・生育環境を奪ったり、餌の奪い合いをしたりする）、交雑による遺伝的かく乱がある（近縁の在来種と交雑して雑種を作る）、在来種に影響の大きい病原菌・寄生生物等を媒介する、在来種の生息・生育環境を大きく改変するなど

副次的な影響として考慮するもの

B 人の生命・身体への影響が大きい、または今後懸念される

例：有毒である、人の感染症を媒介する、人を噛んだり刺したりするなど

C 農林水産業への影響が大きい、または今後懸念される

例：農作物・水産物等を食べる、農地等を踏み荒らす、樹木を枯らすなど

外来種

外来種とは、本来は対象となる地域に生息しておらず、人間の活動によって他地域から入ってきた生物のことを指します。このため、渡り鳥や海流にのって移動してくる魚や植物の種子などは、自然の力で移動するもので外来種には当たらないとされています。

外来種は、人間活動によって海外から持ち込まれた生物（国外由来の外来種）と、日本国内のある地域から、もともといなかった地域に持ち込まれた生物（国内由来の外来種）に分けて考えられています。これらの生物は、本来の生息・生育地ではごく普通の生物として自然環境になじんでいた生物です。これらが、環境の異なる地域に持ち込まれると、偶然に移入先の自然環境に大きな影響を引き起こしてしまうことがあります。

外来種のうち特定外来生物※は「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」で取り扱いが厳しく定められています。

また、外来種対策の一層の進展を図ることを目的として、生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種を幅広く選定した「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」（生態系被害防止外来種リスト）が環境省と農林水産省によって2015年3月に公表されています。生態系被害防止外来種リストでは、対策の検討・実施に当たって参考となるよう、掲載種にカテゴリーの区分がなされています（図 4-1）。

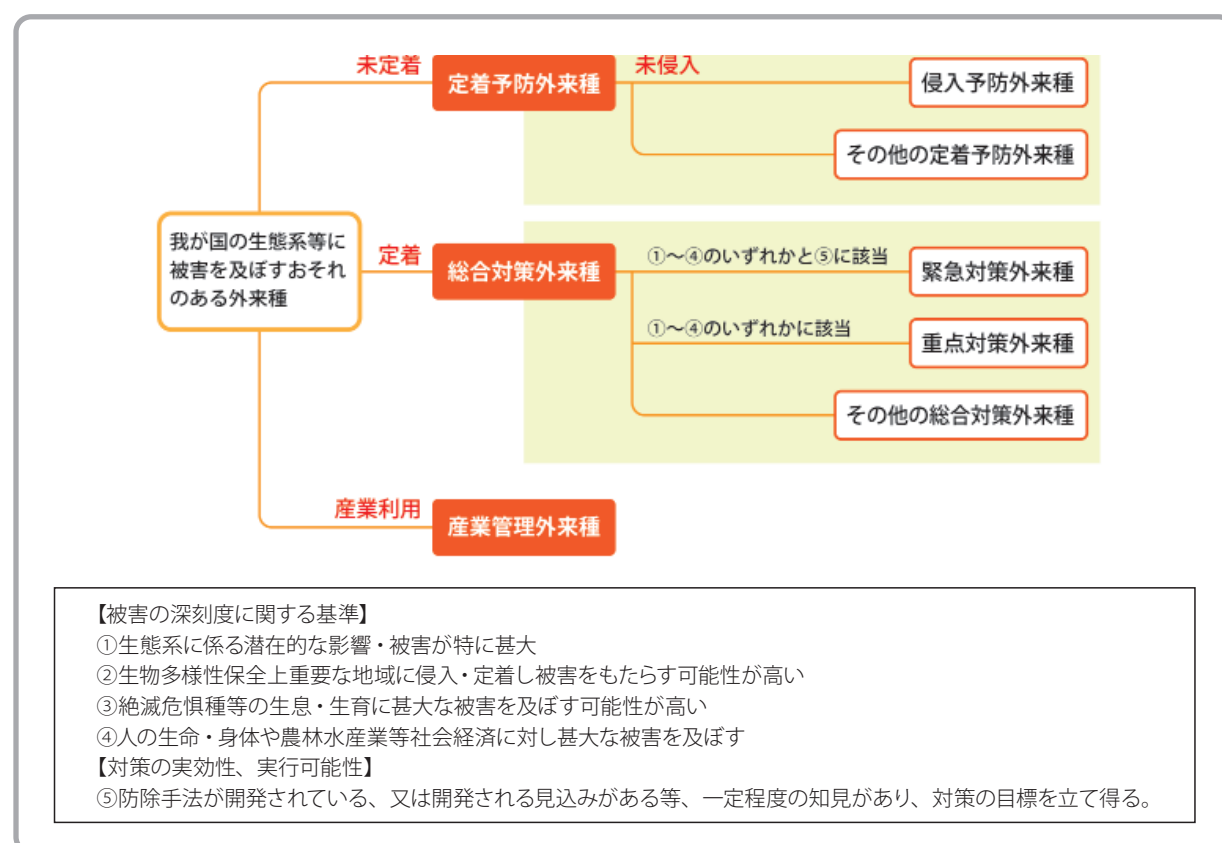


図 4-1 生態系被害防止外来種リストのカテゴリー概要

（農林水産省ホームページを参考に作成）

※特定外来生物

特定外来生物とは、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」で指定されている外来種です。生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすものとして、国外起源の種から指定されています。原則として、生体の輸入、放出、飼養等、譲渡等が原則として禁止されています。ただし、アカミミガメとアメリカザリガニは「条件付特定外来生物」に指定されており、家庭等での飼育や捕獲は認められています。ただしこの場合も野に放つことは違法です。

4.2 注意すべき生物

(1) 注意すべき生物の現状

安曇野市に生息・生育している野生生物のうち、安曇野市の自然環境に影響を与える可能性がある生物（注意すべき生物）として、植物22種、動物38種を掲載しました。

改訂作業では、外来生物法の改正や位置付けの見直しなども反映してリストを整理しました。

情報収集を進めるなかで、特定外来生物のアライグマや外来アゾラ類、アカボシゴマダラの生息・生育が確認されています。近年、市内で分布が広がっているオオハンゴンソウも追加記載しました。

また、現在はまだ生息していないものの、今後、市内に進入してくる可能性があるセアカゴケグモ、クビアカツヤカミキリ、ツヤハダゴマダラカミキリもリストに加えています。

今回の改訂による掲載種の概要は、植物について163ページ、動物について168ページに示し、それぞれ新規に追加された種の説明を掲載しています。新規追加種以外の種の説明は『安曇野市版レッドデータブック2014』をご覧ください。

表 4-1 注意すべき生物

分類群	在来種	外来種 ※（ ）内は特定外来生物		合計
		生態系被害防止外来種	その他	
植物	0	18 (6)	4 (0)	22
動物	8	22 (13)	8 (1)	38
哺乳類	2	2 (1)	0 (0)	4
鳥類	0	2 (2)	1 (0)	3
爬虫類	0	1 (1)	0 (0)	1
両生類	0	1 (1)	0 (0)	1
魚類	0	7 (3)	0 (0)	7
昆虫類	6	4 (2)	4 (1)	14
その他無脊椎動物	0	5 (3)	3 (0)	8
合計	8	40 (19)	12 (1)	60

(2) 注意すべき生物リスト

1 植物

科名	種名	在来種	特定 外来生物	生態系被害防止 外来種	新規追加	掲載ページ	
						2014	2024
アカウキクサ	外来アブラ類		●	緊急対策	●		164
タデ	エゾノギシギシ			その他の総合対策		359	
ヤマゴボウ	ヨウシュヤマゴボウ					359	
ヒユ	ホソアオゲイトウ					360	
マメ	ハリエンジュ			産業管理		360	
	イタチハギ			重点対策	●		164
	ナヨクサフジ			産業管理	●		164
ニガキ	ニワウルシ（シンジュ）			重点対策		360	
ウリ	アレチウリ		●	緊急対策		361	
ゴマノハグサ	ビロードモウズイカ					361	
	オオカワヂシャ		●	緊急対策		361	
キク	オオブタクサ			重点対策		362	
	オオキンケイギク		●	緊急対策		362	
	オオハンゴンソウ		●	緊急対策	●		165
	セイタカアワダチソウ			重点対策		363	
	外来性タンポポ種群※1			重点対策		363	
イネ	カモガヤ			産業管理		363	
	シナダレスズメガヤ			重点対策	●		165
	オニウシノケグサ			その他の総合対策	●		165
アカネ	シラホシムグラ				●		166
サボテン	ハイウチワ			重点対策※2	●		166
トチカガミ	コカナダモ		●	重点対策	●		166

※1 2014年版ではセイヨウタンポポとして記載

※2 ウチワサボテン属として選定

2 動物

■哺乳類

科名	種名	在来種	特定 外来生物	生態系被害防止 外来種	新規追加	掲載ページ	
						2014	2024
アライグマ	アライグマ		●	緊急対策		366	
ジャコウネコ	ハクビシン			重点対策		366	
イノシシ	イノシシ	●				366	
シカ	ニホンジカ	●				367	

■鳥類

科名	種名	在来種	特定 外来生物	生態系被害防止 外来種	新規追加	掲載ページ	
						2014	2024
ナンベイウズラ	コリンウズラ					367	
チメドリ	ガビチョウ		●	重点対策		367	
	ソウシチョウ		●	重点対策		368	

■爬虫類

科名	種名	在来種	特定 外来生物	生態系被害防止 外来種	新規追加	掲載ページ	
						2014	2024
ヌマガメ	アカミミガメ		●※	緊急対策	●		169

※条件付き特定外来生物

■両生類

科名	種名	在来種	特定 外来生物	生態系被害防止 外来種	新規追加	掲載ページ	
						2014	2024
アカガエル	ウシガエル		●	重点対策		368	

■魚類

科名	種名	在来種	特定 外来生物	生態系被害防止 外来種	新規追加	掲載ページ	
						2014	2024
ドジョウ	カラドジョウ			その他の総合対策	●		169
サケ	ブラウントラウト			産業管理		368	
	カワマス			その他の総合対策		369	
	ニジマス			産業管理		369	
サンフィッシュ	ブルーギル		●	重点対策		369	
	オオクチバス		●	重点対策		370	
	コクチバス		●	重点対策		370	

■昆虫

科名	種名	在来種	特定 外来生物	生態系被害防止 外来種	新規追加	掲載ページ	
						2014	2024
コオロギ	アオマツムシ				●		169
ナナフシ	ナナフシモドキ	●			●		170
サシガメ	ヨコヅナサシガメ					370	
クワガタムシ	オオクワガタ (本土亜種を除く国外産)			その他の定着予防		371	
	ヒラタクワガタ (本土亜種を除く国内 の別地域と国外産)			その他の定着予防		371	
タマムシ	ヤノナミガタチビタマムシ	●				371	
カミキリムシ	ビャクシンカミキリ	●				372	
	スギカミキリ	●				372	
	マツノマダラカミキリ	●				372	
	クビアカツヤカミキリ		●	その他の総合対策	●		170
	ツヤハダゴマダラカミ キリ		●		●		170
ナガキクイムシ	カシノナガキクイムシ	●				373	
ミツバチ	タイワンタケケマバチ				●		171
タテハチョウ	アカボシゴマダラ		●	重点対策	●		171

■その他無脊椎動物

科名	種名	在来種	特定 外来生物	生態系被害防止 外来種	新規追加	掲載ページ	
						2014	2024
ヒメゲモ	セアカゴケゲモ		●	重点対策	●		171
ザリガニ	ウチダザリガニ		●	重点対策		374	
アメリカザリガニ	アメリカザリガニ		●※	重点対策		374	
ヌマエビ	シナヌマエビ				●		172
マミズヨコエビ	フロリダマミズヨコエビ			その他の総合対策		373	
ミズツボ	コモチカワツボ			その他の総合対策		373	
サンカクアタマウ ズムシ	アメリカツノウズムシ				●		172
	アメリカナミウズムシ				●		172

※条件付き特定外来生物

本書には生息環境の変化や気候変動などで減少の顕著な種がリストアップされていますが、他方、外来種や南方種の進出は顕著で、毎年のように新顔が発見されています。最近の傾向として、外来種や園芸の植物、輸入品に紛れてこの地に侵入し、その後定着する種も見られます。ここに代表的なものを紹介します。

● タイワンタケクマバチ

2006 年、愛知県で発見されたのを皮切りに関東から中部地方へと生息域を広げている大型のハナバチ。もともとは中国南部からインドにかけて分布する種ですが、中国から輸入される竹製品に紛れて侵入したと見られています。松本市で 2011 年に発見され、安曇野市でも 2022 年に長峰山で確認されました。公園や民家の竹垣などで発生していると考えられ、在来のカマバチとの競合などが懸念されています。



那須野雅好

● アメリカピンクノメイガ

北米を中心に分布する 15mm ほどの蛾で、幼虫はサルビア類を食草としています。2019 年に岐阜県で発見されて以降、関東から近畿にかけて広い範囲で発見されています。安曇野市でも 2022 年に明南小学校で発見され 2023 年には堀金でも見つかっています。発生場所は学校や公園の花壇です。幼虫がサルビア類を食草としているため、卵や幼虫が付いた苗の流通により拡散されていると考えられます。寒さの厳しい安曇野で越冬できるのかは分かっていません。



那須野雅好

● プラタナスグンバイ

北米原産の体長 4 ～ 5mm ほどのグンバイムシです。2001 年に国内で発見、長野県でも 2008 年に発見されて以降、寄主植物のプラタナスを足掛かりに生息域が広がっています。安曇野市でも小中学校の校庭に植えられたプラタナスで発見されています。寄生された葉は吸汁されて黄白色に変色します。写真は三郷中学校校庭のプラタナスの樹皮下で集団越冬しているところです。ちなみに種名のグンバイは戦国武将や相撲の行司が持つ「軍配団扇」に因んでいます。



那須野雅好

(那須野 雅好)

(3) 改定内容と追加種の解説

1 植物

■ 注意すべき生物（植物）の概要

新しく注意すべき種として掲載する植物は9種、除外した種は2種でした。全体では22種になりました。表4-2に種数・概要を示します。

『安曇野市版レッドデータブック 2014』刊行以降に、河川敷への外来植物の進入や特定外来生物のオオハングンソウの分布拡大が見られています。改訂作業では、市内に生育し、「生態系被害防止外来種リスト」に指定されている種類などを追加記載しました。

表 4-2 注意すべき生物（植物）の概要

分類群	種 数		概 要
	2014	2024	
植物	15	22	- 追加した植物は、すべて国外から持ち込まれた外来生物です。そのうち「生態系被害防止外来種リスト」に掲載されているのは8種、特定外来生物に指定されているのはオオハングンソウなど3種になります。 2014年版に引き続き、山麓部・平野部の農地や住宅地、あるいは河川・水辺など開けた環境に生育する種が多く含まれました。 2014年版で選定していたアレチギシギシ、ブタクサの2種は、特に生息数が多くないため、注意すべき生物から除外しました。

■ 危惧される自然環境への影響

注意すべき生物（植物）による自然環境への影響は、在来植物群落の駆逐、生育場所をめぐる競争、近縁な在来植物と外来植物との交雑などが挙げられます。

在来植物群落への影響の一例としては、オオハングンソウによる在来植物の駆逐が挙げられます。この植物は種子が多く生育も早いため大群落を形成し、様々な在来植物の生育域を縮小させます。安曇野市でも、この10年で分布を拡大しており、今後の動向に十分注意する必要があります。また、河川敷に侵入したシナダレスズメガヤは、カワラヨモギやコマツナギなどの在来植物と競合し、それらの在来植物を食草とするヨツボシアカツツハムシやミヤマシジミなどのレッドリスト種の昆虫にまで影響を及ぼしています。

在来のヤエムグラと競合する外来の近縁種シラホシムグラのように、在来種と置き換わりが懸念される植物もあります。このように注意すべき生物（植物）が多く生育するようになると、本来その地域に生育する植物の種構成が変わることになり、その場所を基盤としている動物の減少を引き起こすなど、その地域の生態系に悪影響をもたらします。

注意すべき生物として掲載した植物のほとんどは、山麓部・平野部の農地や住宅地、河川・水辺のような開けた環境や人の生活圏と重なる地域に生育する種です。普段から身近な自然に関心を持ち、新たに侵入した植物にいち早く気付くことや、衣服に付いた種子を無意識のうちに持ち運んでしまわないよう気を付けることが、地域の生態系を守ることに繋がります。

外来アゾラ類

Azolla spp.

アカウキクサ科

特定外来生物

緊急対策外来種



高山裕司

●**特徴**：約3cmの植物体になる浮遊性シダ植物。夏～秋にかけて植物体が紅色になります。特に夏、栄養繁殖が旺盛ですが、5～6月には孢子嚢をつける系統もあります。特定外来生物に指定されている *Azolla cristata* は、世界各地に分布します。

●**生育環境**：日当たりの良い浅い水面を好み、湖沼や水田、水路などに生育します。

●**懸念される影響**：水面を被うように繁茂するため、水面下の水生生物を被陰することによる影響が懸念されます。また、水の富栄養化、近縁種との競合、交雑も懸念されます。

●**市内の生育状況**：明科の湧水が見られる水路に生育しています。

イタチハギ

Amorpha fruticosa

マメ科

重点対策外来種



EAC

●**特徴**：高さ1～4mの夏緑低木。幹は褐色、葉は互生し、6～12対の小葉からなる奇数羽状複葉です。茎頂に黒紫色の花序をつけます。花期は7～8月です。本来の分布域は、北アメリカです。

●**生育環境**：河原や堤防などに生育します。

●**懸念される影響**：生育環境をめぐる在来植物と競合します。また、窒素固定能力があるため、土壌を富栄養化させて、周辺の植生を改変してしまう可能性があります。

●**市内の生育状況**：市内各地に生育しています。特に河川敷や道路法面に多く見られます。

ナヨクサフジ

Vicia villosa

マメ科

産業管理外来種



EAC

●**特徴**：高さ60～100cmの一年草または越年草。葉は狭楕円形の小葉が、14～20枚まばらにつく羽状複葉です。10～30個の紫色の花が総状花序になります。本来の分布域は、ヨーロッパです。

●**生育環境**：道端や河川敷などに生育します。

●**懸念される影響**：生育環境をめぐる在来植物との競合が懸念されます。窒素固定能力があるため、土壌を富栄養化させて、周辺の植生を改変してしまう可能性があります。

●**市内の生育状況**：市内各地に分布します。特に河川の堤防や農地のまわりで多く見られます。

オオハンゴンソウ

Rudbeckia laciniata

キク科

特定外来生物

緊急対策外来種



●特徴：高さ約3mの多年草。根株から茎を叢生し、上部で分岐します。花は直径約6cmで、黄緑色の筒状花と黄色の舌状花をつけます。花期は7～10月です。本来の分布域は、北アメリカです。

●生育環境：草地や道端、河川敷などに生育します。

●懸念される影響：生育環境をめぐって在来植物と競合し、生息域を縮小させたり、数を減少させたりなどの影響を及ぼします。

●市内の生育状況：穂高、堀金、三郷の山地帯の林道沿いに生育しています。

EAC

シナダレスズメガヤ

Eragrostis curvula

イネ科

重点対策外来種



●特徴：高さ60～120cmの多年草。幅1.5～2mmの葉は垂れ下がりが、冬でも枯れずに残ります。茎頂に円錐状の花序をつけ、やや紫色を帯びた小穂は扁平で7～11小花からなります。花期は8～10月です。本来の分布域は、南アフリカです。

●生育環境：荒地や路傍、堤防などに生育します。道路の法面の緑化に利用されることがあります。

●懸念される影響：河川の礫河原に侵入することで、河原固有の在来植物と競合することが懸念されます。

●市内の生育状況：市内各地に生育しています。特に河川敷や道路法面に多く見られます。

井浦和子

オニウシノケグサ

Schedonorus phoenix

イネ科

その他の総合対策外来種



●特徴：高さ50～200cmの多年草。葉身は線形で幅5～12mmです。茎頂に緑色～紫色を帯びた円錐状の花序をつけ、小穂は楕円形で3～10小花からなり、1～4mmの芒が出ます。花期は6～8月です。本来の分布域は、ヨーロッパです。

●生育環境：荒地や路傍などに生育します。道路法面の緑化に利用されることがあります。

●懸念される影響：草原へ侵入することで、草原性の在来植物と競合することが影響が懸念されます。

●市内の生育状況：市内各地に生育しています。特に道路法面に多く見られます。

松田貴子

シラホシムグラ

Galium aparine

アカネ科



松田貴子

●**特徴**：つる状になる越年草。茎は断面が四角形で、6～8枚の葉が輪生します。在来のヤエムグラと比べて白い花と輪生葉上の白毛が目立ちます。花期は4～6月です。本来の分布域は、ヨーロッパです。

●**生育環境**：人家近くのやぶや荒地に生育します。

●**懸念される影響**：近縁な在来植物であるヤエムグラとの競合が懸念されます。

●**市内の生育状況**：市内各地に生育しています。特に河川敷や農耕地周辺に多く見られます。

ハイウチワ

Opuntia spp.

サボテン科

重点対策外来種



松田貴子

●**特徴**：多肉植物。うちわ型の葉を持ち、鋭いトゲがあります。繁殖力が強く、鳥による種子散布の他、植物体の一部からでも増えます。また、耐寒性が高く冬でも枯死しません。本来の分布域は、アメリカです。

●**生育環境**：荒地や河川敷などに生育します。

●**懸念される影響**：生育環境をめぐる在来植物との競合が懸念されます。

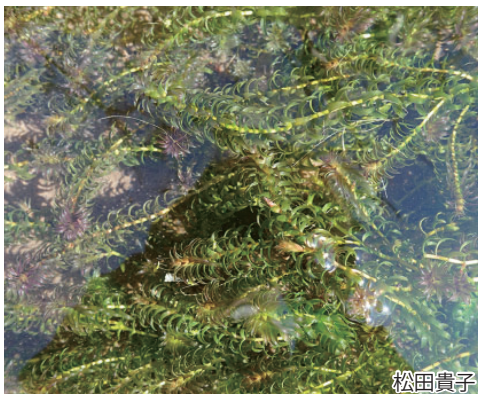
●**市内の生育状況**：明科の堤防法面に生育しています。

コカナダモ

Elodea nuttallii

トチカガミ科

重点対策外来種



松田貴子

●**特徴**：長さ50～100cmの常緑の沈水植物。葉が3輪生で細かい鋸歯があります。雌雄異株で日本には雄株のみが帰化しています。葉腋に白い小さな花を1個つけ、親株から離れて水面で開花します。花期は5～9月です。本来の分布域は、北アメリカです。

●**生育環境**：湖沼、河川、水路に生育します。

●**懸念される影響**：在来水草と競合することや、群生することによって水路の水流を阻害することが懸念されています。

●**市内の生育状況**：三川合流部の湧水路に生育しています。

2 動物

■ 注意すべき生物（動物）の概要

新しく注意すべき種として掲載した動物は12種で、全体では38種になりました。表4-3に種数・概要を示します。

今回の改訂作業では、新たに条件付き特定外来生物に指定されたアカミミガメや、市内への侵入が確認されたアカボシゴマダラを追加するとともに、今後侵入が危惧される特定外来生物などを追加しています。

特に昆虫類は、近年の温暖化に伴い、南方系の外来種も生息できる状況になってきており、街路樹や果樹への被害が危惧されるクビアカツヤカミキリやツヤハダゴマダラカミキリなどの侵入についても注意が必要な状況です。

表 4-3 注意すべき生物（動物）の概要

分類群	種数		概要
	2014	2024	
哺乳類	4	4	・ 新たに追加された種はありませんでした。
鳥類	3	3	・ 新たに追加された種はありませんでした。
爬虫類	0	1	・ 河川・水辺に生息する条件付き特定外来生物のアカミミガメを追加しました。
両生類	1	1	・ 新たに追加された種はありませんでした。
魚類	6	7	・ 河川や水田に生息する外来種のカラドジョウを追加しました。
昆虫類	8	14	・ 追加した6種は、在来生物が1種、外来生物が5種でした。 ・ 在来種では、大量発生による樹木や農作物への被害が報告されたナナフシモドキが選定されました。 ・ 外来生物のうち、特定外来生物に指定されているのはアカボシゴマダラなど3種です。
その他無脊椎動物	4	8	・ 追加した生物は、すべて国外から持ち込まれた外来生物です。 ・ 特定外来生物のセアカゴケグモを追加しました。そのほかの追加種は河川・水辺に生息する種でした。
合計	26	38	—

■ 危惧される自然環境への影響

注意すべき生物（動物）による自然環境への影響は、在来種の捕食・採食、生息場所をめぐる競争、近縁な在来種と外来種との交雑などが挙げられます。

捕食・採食による影響の代表例としては、ニホンジカの増加による在来植生の衰退が挙げられます。安曇野市でもこの10年で分布が拡大しているほか、植物に依存している他の動物への影響も懸念されます。このようなニホンジカの生息地拡大の背景には気候変動の影響も指摘されています。また、100年以上前に輸入木材に混じって上陸したマツノザイセンチュウによる「マツ枯れ」は、安曇野市でも東山を中心に甚大な被害を出しています。このように、寄主植物に大きな被害をもたらす昆虫類としては、カシノナガキクイムシ（ナラ枯れ）や、新たに掲載した外来種のクビアカツヤカミキリ、ツヤハダゴマダラカミキリ（街路樹・果樹）があります。これらの種は安曇野市への侵入は確認されていませんが、今後の侵入に十分注意する必要があります。

従来はペットとして親しまれてきたアカミミガメやアメリカザリガニも、捕食・採食によって自然環境に大きな影響を及ぼすことが分かってきた種です。また、新たに選定されたカラドジョウ、シナヌマエビも観賞用、産業用として持ち込まれたものが野外へ逸出し増えている種です。外来ウズムシ類（アメリカツノウズムシ、アメリカナミウズムシ）は、それらの移動に付随する形で国内に侵入したと考えられています。これらの水生生物は、近縁な在来生物との競争や交雑を通して在来生物との置き換えが進んでいます。

外来種の持ち込みや気候変動による生物の分布域や生息環境の変化は、自然環境に大きな変化をもたらす、私たちの生活にも少なからぬ影響を与えることがあります。普段から身近な野生生物に関心を持ち、飼育している生物を野に放たないことが大切です。

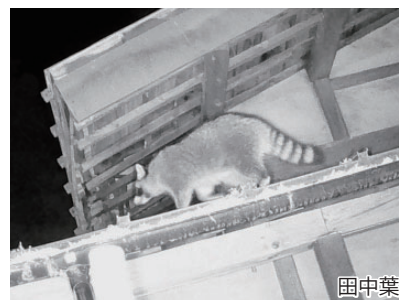
市内への定着が危惧されるアライグマ

『安曇野市版レッドデータブック 2014』で注意すべき種として掲載していたものの、10年前は生息に関する情報は少なかったアライグマですが、今回の改訂作業のなかで、確認情報が2件集まり、今後の動向に注意が必要な状況が分かりました。

アライグマは、農作物などへの被害に加え、家屋の屋根裏や軒下などに侵入して、家屋への糞尿などによる被害を出してしまいます。また、在来の昆虫や両生類、鳥類などを捕食し、生態系への影響も大きな生物であるため、市内の分布状況の詳細把握や捕獲作業、空き家の管理など早期の対策が必要な状況です。



三郷で撮影されたアライグマ（2023年11月）



堀金で撮影されたアライグマ（2023年12月）

アカミミガメ

Trachemys scripta

カメ目 ヌマガメ科

条件付き特定外来生物

緊急対策外来種



●特徴：背高長20～28cm。背面は深緑色を基調に黄色と黒色の模様が入り、腹面は黄色で褐色斑が入ります。目の後方の斑は赤くなります。成長した雄は背面や目後方の斑が消失して黒化し、在来種との見分けが難しいですが、前脚の爪が細長く伸びます。本来の分布域はアメリカです。

●生育環境：池沼や河川などに生息します。

●懸念される影響：雑食性で水草から水生昆虫まで様々なものを採食するため、在来水生生物への影響が懸念されます。

●市内の生育状況：市内の池や河川などに少数が生息しています。

カラドジョウ

Misgurnus dabryanus

コイ目 ドジョウ科

その他の総合対策外来種



●特徴：最大で全長約15cm。ドジョウと酷似しますが、口ひげが長く、尾柄高が高いです。雑食性で、主に初夏に水路を遡上します。国内には食用として移入されました。本来の分布域は中国や朝鮮半島です。

●生育環境：河川や水田とその周辺の水路などに生息します。

●懸念される影響：在来ドジョウとの競合、交雑が懸念されます。

●市内の生育状況：犀川の高瀬川合流部やわさび田の湧水池などで確認されています。

アオマツムシ

Trujalia hibinonis

バッタ目 コオロギ科



●特徴：体長21～23mm。成虫は鮮やかな緑色で若齢幼虫は茶褐色です。成虫は秋に出現し、日没直後にチリー・チリーと高く大きな声で鳴きます。明治時代に渡来したとされています。本来の分布域は中国です。

●生育環境：山麓部・平野部の林内に生息します。

●懸念される影響：大きな声で鳴くことから、在来の鳴く虫への影響が懸念されます。

●市内の生育状況：市内の平地に生息しています。近年、生息する地域が広がっていると考えられます。

ナナフシモドキ

Ramulus mikado

ナナフシ目 ナナフシ科



●**特徴**：体長74～100mm。体は緑色または褐色で、細長い体形をしています。触覚は短い。基本的に雌の単為生殖で増え、雄は非常に珍しいです。樹木などの葉を食べます。成虫は7～11月に出現します。在来種です。

●**生育環境**：山麓部・平野部の林内に生息します。

●**懸念される影響**：普段は大きな影響はありませんが、大発生した場合には、樹木や農作物を食べることによる被害や、人間の生活環境の悪化が懸念されます。

●**市内の生育状況**：2017年に明科で大発生がありました。その後、穂高、三郷、豊科でも確認されており、分布が拡大しています。

クビアカツヤカミキリ

Aromia bungii

コウチュウ目 カミキリ科

特定外来生物

その他の総合対策外来種



丸山隆

●**特徴**：体長25～40mm。全体的に黒色で光沢があり、胸部のみ赤色です。成虫は6～8月に出現します。幼虫はバラ科の生木を食べ、2～3年で成虫になります。本来の分布域は、中国大陸や朝鮮半島です。

●**生育環境**：公園や市街地のサクラなどの街路樹周辺の他、モモなどの果樹園に生息します。

●**懸念される影響**：幼虫がサクラ、ウメ、モモなどの街路樹や果樹を食べることによって、それらの樹木が枯死することが懸念されます。

●**市内の生育状況**：現時点では確認されていません。長野県の他地域でも確認例はありませんが、隣接する群馬県などでは被害が報告されており、今後は分布が拡大する可能性があります。

ツヤハダゴマダラカミキリ

Anoplophora glabripennis

コウチュウ目 カミキリ科

特定外来生物



降旗進一郎

●**特徴**：体長20～35mm。体は全体的に光沢のある黒色で、前翅に多数の白斑が入ります。在来のゴマダラカミキリと比べて、前翅の付け根に細かい突起がなく滑らかで、小盾板に白斑がありません。成虫は5～10月に出現し、幼虫はニレ類やカエデ類などを食害します。本来の分布域は中国大陸や朝鮮半島です。

●**生育環境**：公園や市街地の様々な街路樹周辺に生息します。

●**懸念される影響**：幼虫が街路樹や公園樹木を食べることによって、それらの樹木が枯死することが懸念されます。

●**市内の生育状況**：現時点では確認されていません。県内では東信地方で確認されており、今後は市内でも見つかる可能性があります。

タイワンタケクマバチ

Xylocopa tranquebarorum

ハチ目 ミツバチ科



美馬純一

●**特徴**：体長20～28mm。全身が黒毛で覆われ、翅と共に鈍い青色の金属光沢を呈します。直径2～3cmの細長い竹に穴を開け、その中に花粉を運び込んで幼虫を育てます。本来の分布域は中国やインドです。

●**生育環境**：里山や市街地の竹林に生息します。農作物の支柱の細長い竹も利用します。

●**懸念される影響**：攻撃性は高くありませんが、竹垣などに巣をつくるため、その手入れの際に刺される可能性があります。また、在来のクマバチと競合する可能性もあります。

●**市内の生育状況**：明科や豊科で確認されています。

アカボシゴマダラ

Hestina assimilis assimilis

チョウ目 タテハチョウ科

特定外来生物

重点対策外来種



那須野雅好

●**特徴**：開長62～70mm。翅は黒地に白斑があり、夏型では後翅亜外縁に赤斑がありますが、春型ではほぼ消失して翅全体が著しく白化します。年3回程度発生し、5～10月に出現します。幼虫はエノキの葉を食べます。本州に定着しているものは大陸亜種で、本来の分布域は中国、朝鮮半島、済州島、台湾です。

●**生育環境**：山麓部・平野部の樹林や、市街地にも生息します。

●**懸念される影響**：近縁の在来種であるゴマダラチョウとの競合が懸念されます。

●**市内の生育状況**：長峰山山頂付近では、2022年に越冬幼虫と成虫が確認されており、すでに定着していると考えられます。2023年には堀金でも成虫が確認されています。

セアカゴケグモ

Latrodectus hasseltii

クモ目 ヒメグモ科

特定外来生物

重点対策外来種



酒井孝明

●**特徴**：体長は雄3～4mm、雌12～15mm。腹部は球形で背面に赤い模様があります。本来の分布域はオーストラリアです。

●**生育環境**：人の生活圏に適応し、建物の隙間や側溝などに生息します。

●**懸念される影響**：攻撃性は高くありませんが、毒をもっているため、側溝の掃除や庭の手入れを行う際に咬傷被害が起こることが懸念されます。

●**市内の生育状況**：現時点では確認されていません。県内での確認例が増加しており、今後は市内でも見つかる可能性があります。

シナヌマエビ

Neocaridina davidi

エビ目 ヌマエビ科



●特徴：体長3cm。観賞用に輸入されたエビの仲間です。体色は個体によって様々です。本来の分布域は中国です。

●生育環境：流れの緩い川や池の水草が多い場所に生息します。

●懸念される影響：在来ヌマエビとの交雑、餌や空間をめぐる競合が懸念されます。

●市内の生育状況：犀川流域で確認されています。

アメリカツノウズムシ

Girardia dorocephala

ウズムシ目 サンカクアタマウズムシ科



●特徴：体長10～20mm。頭部は正三角形に近く、耳葉が長く尖っていることが特徴です。本来の分布域は北アメリカです。

●生育環境：河川、水路に生育します。在来のウズムシ類より水質の悪い場所でも生息できます。

●懸念される影響：在来のウズムシ類との競合が懸念されます。

●市内の生育状況：犀川流域で確認されています。

アメリカナミウズムシ

Girardia tigrina

ウズムシ目 サンカクアタマウズムシ科



●特徴：体長10～20mm。在来のナミウズムシに似ていますが、体表に細かい色素斑があるのが特徴です。本来の分布域は北アメリカです。

●生育環境：河川、水路に生育します。在来のウズムシ類より水質の悪い場所でも生息できます。

●懸念される影響：在来のウズムシ類との競合が懸念されます。

●市内の生育状況：犀川流域で確認されています。

5

自然豊かな安曇野市を 次世代に引き継ぐために



5.1 絶滅のおそれのある野生生物の現状

(1) 安曇野市版レッドリスト種の減少要因

今回の改訂では、安曇野市において絶滅が危惧される生物（レッドリスト種）として植物320種、動物397種の計717種を選定しました。

選定したレッドリスト種の絶滅のおそれが高まった要因（減少要因 p.48参照）としては、土地開発・改良が22%と最も多く、次いで、河川・水辺開発、農業・森林管理停止、森林伐採などが多い結果でした。この他、外来生物や気候変化なども要因として挙げられました。

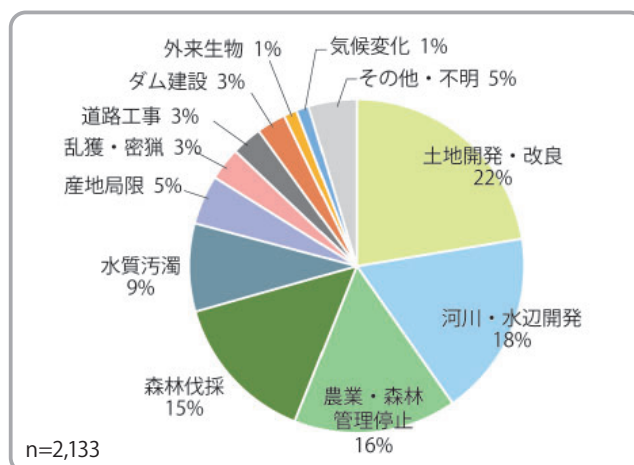


図 5-1 レッドリスト種の減少要因

(2) 人為的要因などによる自然環境への影響

本書「2.2 土地利用の変遷」では、これまで安曇野市において、森林や農地、河川の自然環境が人間活動によって影響を受けてきた様子が明らかとなりました。

なお、地球的規模での温暖化も、生物に大きな影響を与える人為的な要因の一つです。

表 5-1 近代以降の人為的要因などによる自然環境への影響

区分	人為的要因	自然環境への影響
林業関連	入会山の利用減少、燃料革命	人手の入らない森林の拡大
	拡大造林、輸入材増加	天然林の面積縮小、カラマツ林面積拡大、生物多様性の喪失、生態系の連続性分断
農業関連	堰開削・開墾・開田・圃場整備、用水路のコンクリート化	原野、長期間維持・管理された畔や土手の消失、農耕地の在来生物の減少、外来生物等の侵入
	農業生産方法の変化（機械化、乾田化）	
	肥料の質の変化と農薬使用	
	耕作放棄地の増加	
河川関連	ダム開発（大規模砂防ダム含む）	魚類等の移動を遮断、かく乱の減少、砂礫供給の減少、河川流量減少
	河川改修	野生生物の生息・生育場所の縮小・消失
	水質汚濁・汚染	野生生物の生息・生育場所の悪化
大面積土地利用の変化	有明演習地の造成	大面積クヌギ林の消失と裸地・原野の出現による生態系の変化
各種開発	ゴルフ場・別荘地・リゾート開発	森林面積の縮小 野生生物の生息・生育場所の分断
交通網整備	道路・鉄道網の整備 高速道路の開通	短期間での移入種の侵入を可能にする、野生生物の生息・生育場所の分断
気候変動	地球温暖化	生態系の変化 野生生物の生息・生育場所の縮小・消失

(3) 安曇野市の自然環境の現状と課題

本書「2.4 植生の変化」で述べたように、マツ枯れに伴い安曇野市の東山地域ではアカマツの枯死が進行し、西山地域では伐採によりアカマツ林が減少しています。アカマツ林だったところはやがて別の樹種による森林が生育していくと思われます。アカマツ林から別の樹種の森林に替わったとき、どのような生態系がつくられるのか今の時点では予測できません。

また、ニホンジカの生息域拡大による北アルプス地域の高山帯植生への影響が心配されています。現時点で多数のニホンジカが高山帯へ侵入している状況にはないと思われますが、少なくとも北アルプスの東山麓（松本盆地側）の標高1,300～1,800m付近では、ニホンジカの生息を示す痕跡が増えている、植生への影響がないか継続的な調査が必要です。

イノシシは地面を掘り起こしてしまうため、掘り起こされた付近一帯の植生が破壊されています。ニホンジカと同様に対策の検討が求められます。

2023年7月27日、国連のグテーレス事務総長は「地球温暖化の時代が終わり、地球沸騰の時代が来た」と警告しました。気象庁のデータによれば、確かに近年の夏季の気温上昇は加速度的に上昇し始めている傾向が見られます。身近な例として、高温によるリンゴや農作物への悪影響が出ています。農業にとどまらず、地球温暖化は既存生態系や脆弱な高山帯生態系などへの影響が懸念されており、温室効果ガス削減へ向けて実効性のある取組みが求められます。



増加するニホンジカ

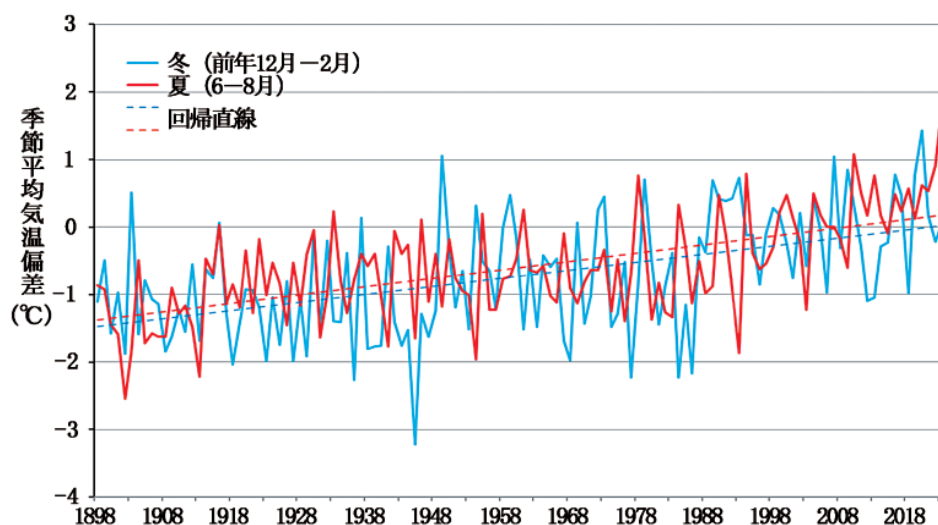


図 5-2 日本の季節平均気温偏差 (1898～2023 年)

基準値は 1991～2020 年の 30 年平均値

[気象庁のデータを元に作成]

穂高牧地区の川窪沢川北側に「流田」と呼ばれる水田耕作地があります。この地区は狭いが故に構造改善事業は行われず、堰（用水路）もコンクリート三面張りへの改修事業は行われませんでした。唯一、南側を流れる川窪沢川の改修事業で、流田南側の縁が直線上に削り取られた状況になりました。

アメリカ空軍が 1948 年 11 月 22 日撮影した空中写真と現況を比較すると、畦の形状や農道に変化は見られません。1987 年長野県地名研究所出版の明治初期長野県町村字地名大鑑（滝沢主税 編）によれば、牧村に「流田」の記載があります。したがって流田は明治期より前の江戸時代にその起源を遡れると推測できます。そうすると 100 年以上の長期間、この地区は大きな改変が行われず畦や堰が維持管理されてきたことになります。

豊科郷土博物館の調査によれば、田の畦や堰沿い等に多くのレッドリスト種該当植物が分布していて、生物多様性が極めて高いことが明らかになりました。このようなところは安曇野市では希少になっています。地元では関係住民が農林水産省の「農業の有する多面的機能発揮促進事業」に参加し、水田や堰の維持管理を行ってきましたが、担い手の高齢化に伴い事業への参加継続が困難な状況になりました。土地利用の変遷の所で述べたように、農業の担い手の高齢化は耕作放棄地の増加を招き、生物多様性保全という農業の有する多面的機能の喪失という取り返しのつかない結果をもたらします。また、この事業は農地の維持が主目的で、生物多様性の保護という観点から見ると心許ない状況にあります。

現状では、この環境を今までと同じ方法で残すことは極めて困難な状況にあると言わざるを得ません。数少ない生物多様性の宝庫を将来に引き継ぐためには、関係する住民の頑張りに任せるのではなく、地域を挙げて担い手の確保や保全体制の構築に取り組むことが求められます。

（浅川 行雄）



耕作地の風景 年ごとに耕作地は減っている



昔ながらの堰

5.2 安曇野市の重要な自然環境

『安曇野市版レッドデータブック 2014』では、安曇野市に見られる環境区分ごとに、安曇野市の固有な生態系を形作る上で重要な自然環境を選定しました。選定にあたっては、人の手の入っていない自然環境に加え、長い年月をかけて人との関わりのある中で維持されてきた自然環境も対象としています。

安曇野市の重要な自然環境が見られる代表的な地域として、高山帯 5 か所、亜高山帯 5 か所、山地帯 12 か所、山麓部・平野部 10 か所、河川・水辺 11 か所が選定されています。

次ページからは、選定されている場所と一部の箇所の様子を紹介します。場所ごとの環境の様子や生息・生育する動植物の説明は、『安曇野市版レッドデータブック 2014』をご覧ください。

表 5-2 環境区分と特徴

環境区分	特徴
高山帯	①燕岳とその周辺、②大天井岳とその周辺、③常念乗越とその周辺、④蝶ヶ岳とその周辺、⑤大滝山とその周辺
亜高山帯	①合戦尾根、②有明山、③胸突き八丁周辺、④前常念岳下部、⑤豆打平上部
山地帯	①中房温泉周辺、②信濃坂、③宮の平周辺、④満願寺周辺、⑤県営烏川溪谷地緑地森林エリア、⑥三股周辺、⑦三郷スカイライン周辺、⑧馬口入、⑨室山周辺、⑩黒沢洞合自然公園、⑪岩州公園周辺、⑫光城山・長峰山周辺
山麓部・平野部	①天蚕センター周辺、②穂高神社、③穂高牧地区、④平野部の屋敷林、⑤堀金岩原地区、⑥住吉神社、⑦けやきの森公園、⑧潮神明宮、⑨押野山周辺、⑩田沢神明宮
河川・水辺	①中房川源流域、②樽沢の滝・三段の滝周辺、③牧の堤、④延命水周辺、⑤烏川源流域、⑥黒沢の滝周辺、⑦中房川・乳川合流付近、⑧三川合流周辺、⑨御法田周辺、⑩安曇野湧水群、⑪梓川・奈良井川合流付近



1) 高山帯

安曇野市の高山帯は、北は東沢岳から南は大滝山までの標高2,400mより上の地域です。寒冷で風が強い環境のため、高木林は見られなくなり、ハイマツなどの低木や、草丈の低い草原（低茎草原）、あるいは植物がまばらに生える裸地（風衝地・岩場）が中心の植生となっています。

高山帯には、高山植物、ライチョウ、高山チョウなど、氷期に北から移動してきて、間氷期に高山に留まった特有の種（固有種）が多く生息・生育しています。

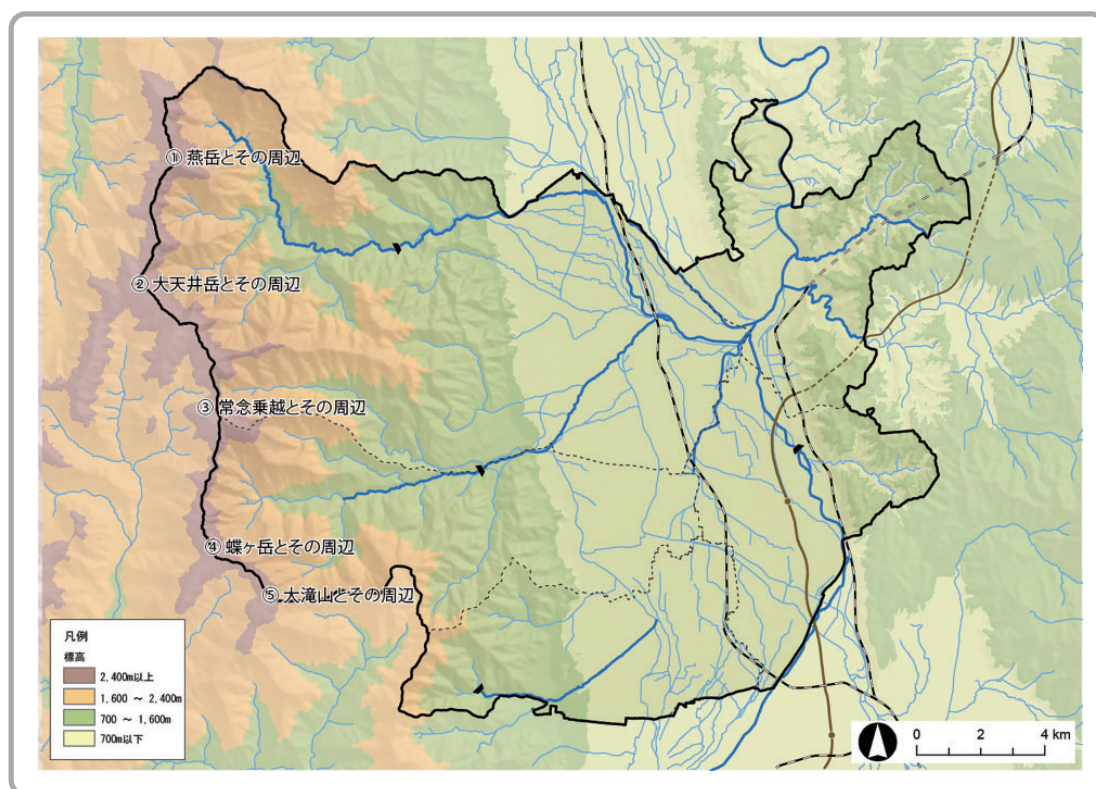
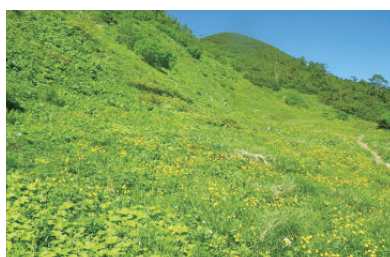


図 5-3 重要な自然環境の見られる代表的な地域（高山帯）

[主な地域の例]



②大天井岳とその周辺
礫質の風化花こう岩で、西側斜面にはコマクサの群落があります。東側斜面は単調な急斜面で、崩壊地とハイマツ群落が分布し、所々にお花畑があります。



④蝶ヶ岳とその周辺
安曇野から見て蝶の雪形が現れる場所は、雪田が溶けるとお花畑に変わり、高山植物が一面に咲きます。



⑤大滝山とその周辺
大滝山周辺の稜線部には、安曇野市では数少ない湿地が見られます。湿地の規模は小さいものの、湿性植物が生育しています。

2) 亜高山帯

亜高山帯は、北アルプスの前山である有明山、鍋冠山など標高1,600～2,400mの地域です。ほとんどの地域は、コメツガが優勢する常緑針葉樹林に覆われています。標高が高くなるにつれて多雪と雪崩の影響でダケカンバ群落が目立つようになります。

亜高山帯は、多様性に富んでいて、野生生物の生育・生息地として重要な環境となっています。

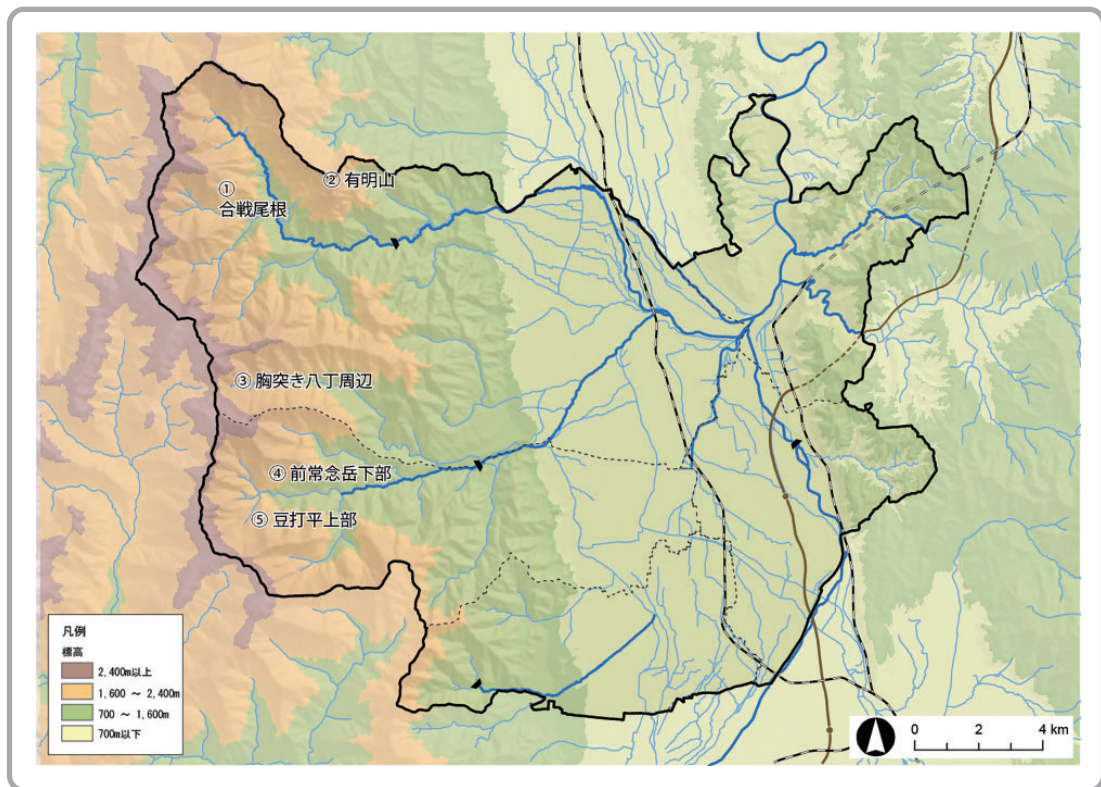
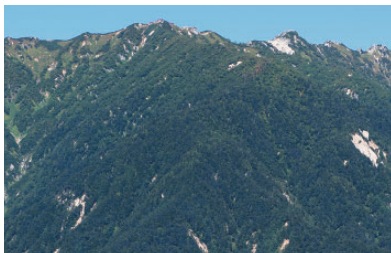


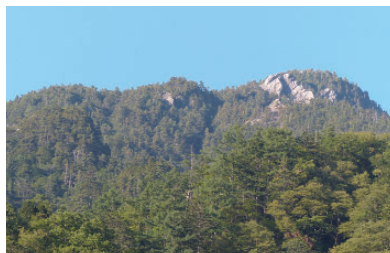
図 5-4 重要な自然環境の見られる代表的な地域 (亜高山帯)

[主な地域の例]



①合戦尾根

標高約2,380mの合戦小屋より下部はコメツガを主体とする針葉樹林帯です。コメツガ林の中にトウヒ、チョウセンゴヨウなどがわずかにあります。



②有明山

有明山 (2,268m) の中腹から頂上にかけては常緑針葉樹林に覆われており、山頂にはハイマツ群落があります。急峻で表土に乏しいためコメツガ林の中にサワラ、ヒノキなどが混じります。



③胸突き八丁周辺

一ノ沢上流、常念登山道の標高2,100m付近の急斜面には、お花畑があります。夏季には、ニッコウキスゲ、クルマユリ、テガタチドリなど、多くの高山植物が花を咲かせています。

3) 山地帯

山地帯は、北アルプスの前山と長峰山、光城山などの東山一帯の標高700～1,600mの地域で広く森林となっています。天然林は中房川や烏川の流域などに点在するのみで、その多くは人の手が加わった植林地を含む二次林です。植林地はスギ、ヒノキ、アカマツ、カラマツが中心ですが、明科ではケヤキ林があります。二次林はクリ、コナラ、クヌギなどの落葉広葉樹林が中心となっています。

山地帯の森林は人の手が定期的に加わることにより、伐採後の草原から森林まで様々な遷移段階の環境が形成され、それぞれの環境に適応した野生生物が生息・生育しています。

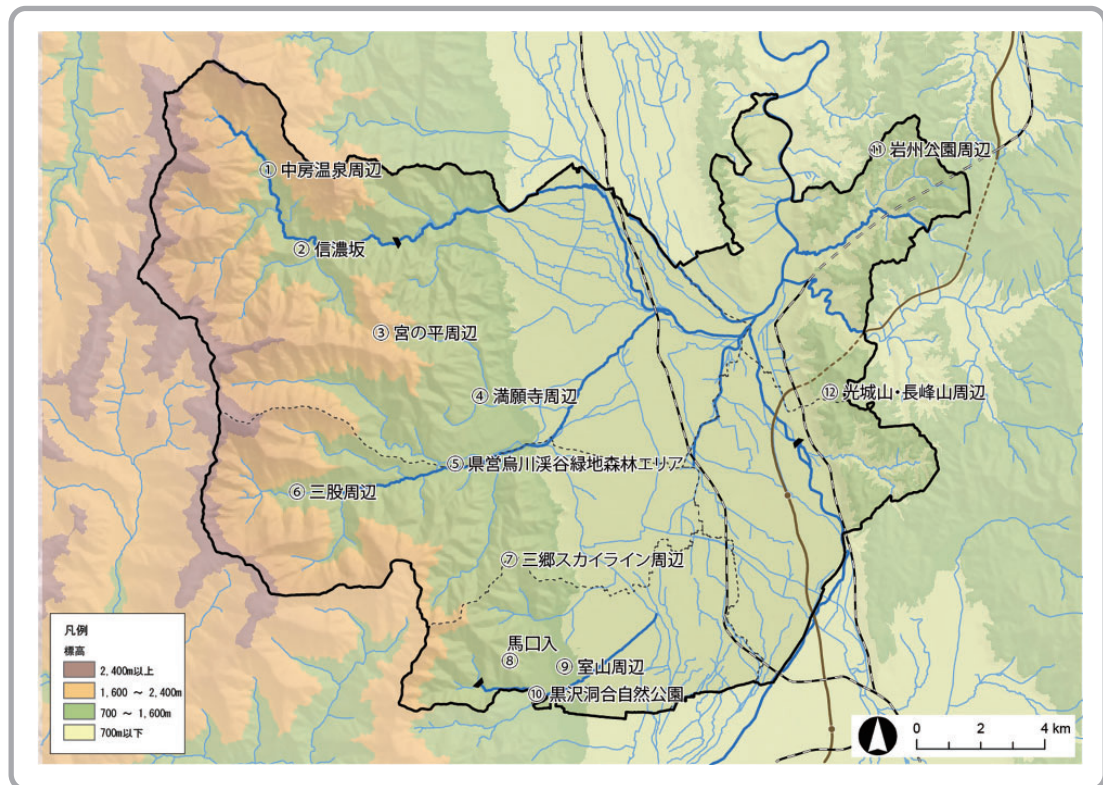
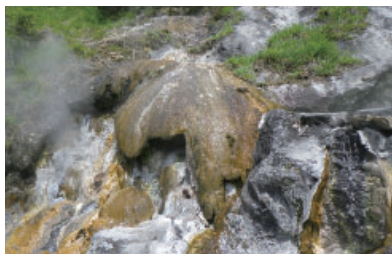


図 5-5 重要な自然環境の見られる代表的な地域（山地帯）

[主な地域の例]



①中房温泉周辺

中房温泉には、国の天然記念物の「中房温泉の膠状珪酸および珪華」があります。周辺は地温が高く、標高約1,450mにもかかわらず南方系のミズスギが生育しています。



③宮の平周辺

宮の平は、浅川山北方の標高約1,500mにある平坦地です。バイケイソウ、シシウドなどを中心とした湿性植物からなる草原が広がっています。



④満願寺周辺

満願寺本堂及びその周辺は、1986年に長野県の郷土環境保全地域に指定されました。本堂周辺にはスギの大径木が林立しています。

4) 山麓部・平野部

山麓部・平野部は、標高700mより低い地域を指します。

山麓部は、山地帯へ続く森林と農耕地や住宅地との境界にあたり、人の手が加わった環境ですが、雑木林、水田・畑地の周囲は、野生生物の重要な生息・生育地となっています。社寺林内の樹洞がある大木は、ムササビやフクロウなどが巣やねぐらとして利用しています。

平野部は、住宅地や工場地、農耕地などが広がっています。そこにある社寺林や屋敷林は、平野部では少ない森林環境であり、野生生物の貴重な生息・生育地となっています。

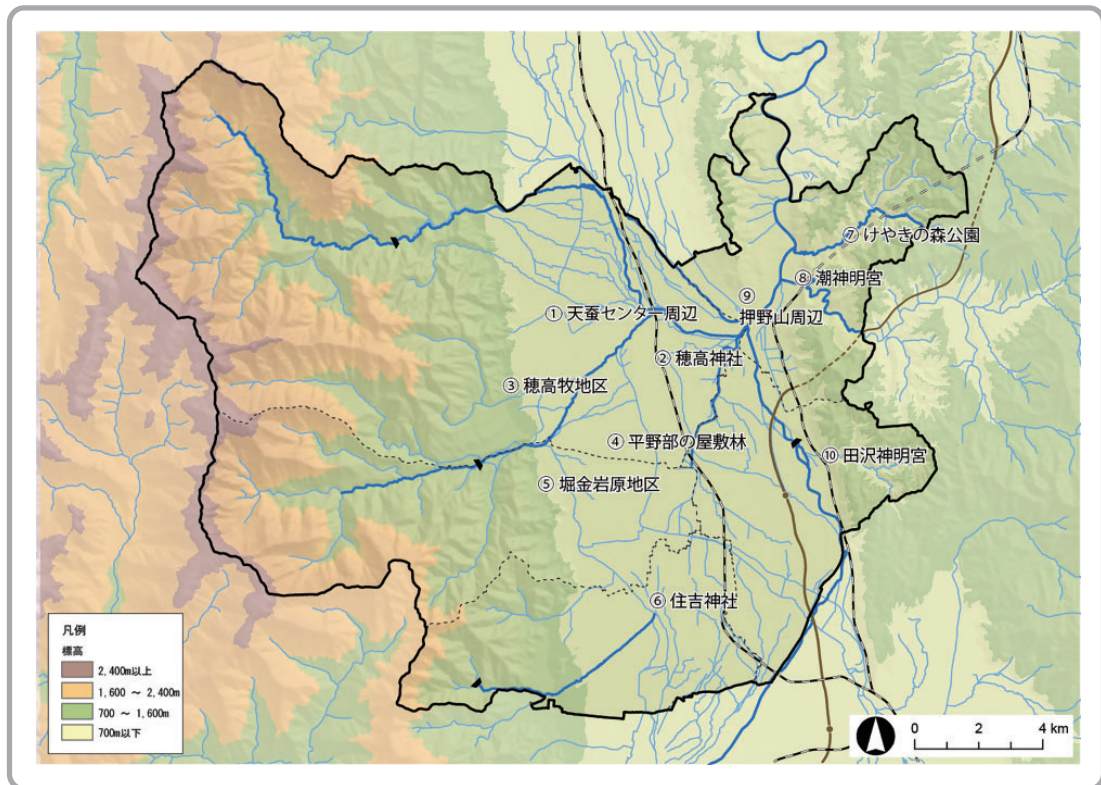
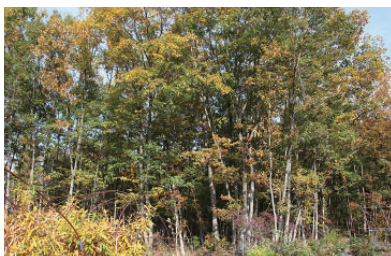


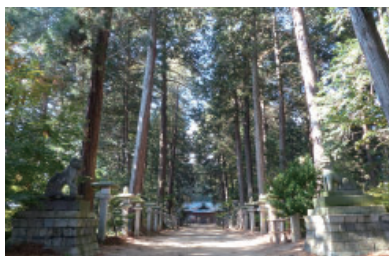
図 5-6 重要な自然環境の見られる代表的な地域（山麓部・平野部）

[主な地域の例]



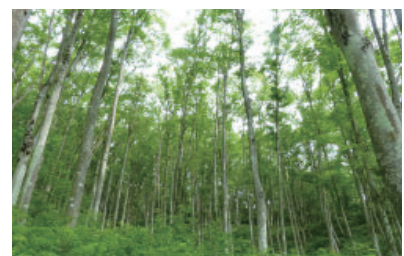
①天蚕センター周辺

穂高有明地区では、江戸時代からヤマユガ（天蚕）を用いた養蚕が行われてきました。ヤマユガはクヌギの葉を餌とすることから、飼料用のクヌギ林が維持されてきました。



⑥住吉神社

黒沢川最下流の流れが伏流する場所にあり、スギ、ヒノキを中心とした社寺林です。かつては黒沢川を通して黒沢山と繋がっていました。社叢は市天然記念物に指定されています。



⑦けやきの森公園

旧篠ノ井線沿いの急斜面にあるケヤキ林です。落葉広葉樹林としては規模の大きい植林地（約15,000本）で、砂防を目的としています。

5) 河川・水辺

安曇野市の河川は、高瀬川、中房川、穂高川、烏川、黒沢川、梓川などの北アルプス方面から流れる河川と、潮沢川、会田川、濁沢などの筑摩山地方面から流れる河川があります。全ての河川は、犀川に合流します。これらの河川の上流域にあたる溪流は、ムカシヤンマやニッコウイワナなどの水生生物の重要な生息地となっています。

平野部の湧水地帯は、カワデシヤやホトケドジョウをはじめとする多くの水生生物の生息・生育環境となっています。池沼は農業用のため池が少数あるだけですが、豊科の菖蒲池、穂高牧の堤は、湿性や水生の植物の貴重な生育場所となっています。

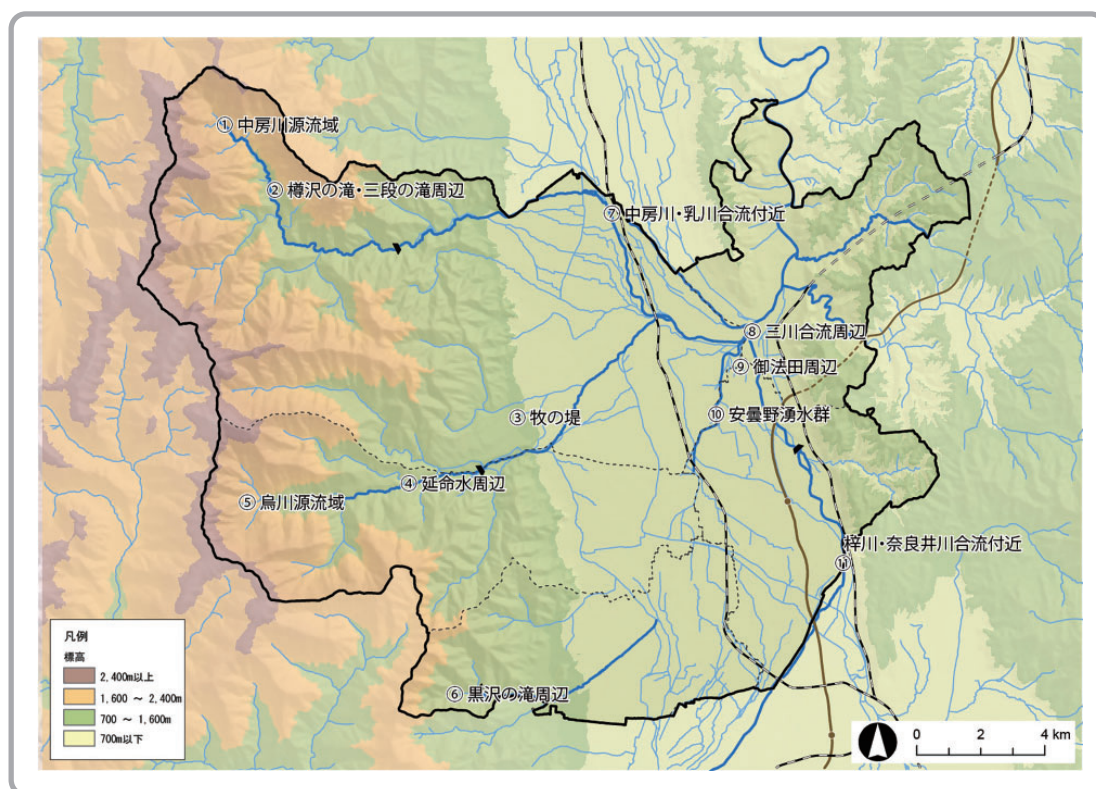


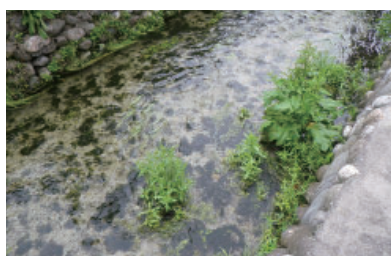
図 5-7 重要な自然環境の見られる代表的な地域（河川・水辺）

[主な地域の例]



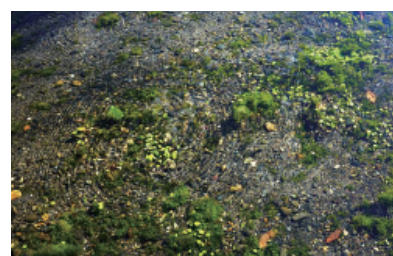
③牧の堤

牧の堤（標高約700m）はため池ですが、上の堤は大半が土砂で埋まり湿地になっています。多くの湿性の植物が生育しています。



⑦中房川・乳川合流付近

乳川と中房川は、穂高土場地区で合流しています。すぐ東側には高瀬川も流れており、地面を少し掘り下げると伏流水が湧き出てきます。



⑩安曇野湧水群

豊科重柳地区では、万水川の右岸側の標高530m 付近から地下水が豊富に湧き出ています。

5.3 自然環境を守り、回復させるための方策

(1) 自然環境を守るための考え方

私たちは日々の生活の中で、周りの自然環境から様々な恩恵を受けているという実感はあまりありません。自然環境が少しずつ劣化しているという実感もないでしょう。しかし、今の自然環境は私たちだけのものではありません。将来の世代や地球上の様々な生きもののためにも、良好な自然環境を引き継いでいかなければなりません。そのために、私たちは日頃から自然の変化を見る目を養っていくことが大切になります。それは難しいことではなく、季節の移り変わりの中で様々な生きものを眺めることから始められます。そうすることで、無意識のうちに自然環境の変化を感じられるようになるはずです。

さらに、市民・各種団体・事業者・行政などが能動的に自然環境に関する情報を共有するネットワークを構築していくことで、自然環境を守る気運を高めていくことができるでしょう。

また、自然環境は行政区画で区切られているわけではありません。野生生物は行政区画に関係なく移動したり、侵入したりします。そのため市は、県や周辺市町村などとも連携して、野生生物に対する広域的な情報を共有し、定期的なモニタリングや対策を講じることが重要となるでしょう。

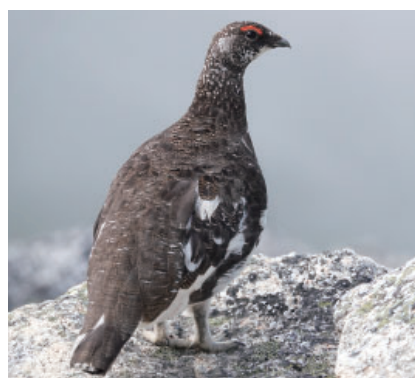
(2) 安曇野市の自然環境に対する基本方針

1) レッドリスト種

安曇野市版レッドリストの掲載種のうち、特に絶滅危惧Ⅰ類とⅡ類の種については、現在残されている生息・生育地を保全するとともに、生息・生育数が回復するように減少要因を減らすことが重要になります。

準絶滅危惧の生物は、現在のところ絶滅の危険性は低いと考えられます。ただし、これ以上絶滅の危険性を高めないよう生息・生育状況に留意していくことが大切です。

また、レッドリスト種には、種の保存法や長野県希少野生動植物保護条例、国・県・市の天然記念物に指定されている種もあり、生息・生育地が自然公園法や長野県自然環境保全条例で指定された区域、本書に掲載した安曇野市の重要な自然環境の範囲にあたる場合もあります。これらの法令指定等種や保全区域等では、希少な動植物や自然観協の保護・保全について、行政と市民が協力して積極的な対策を講じていくことも大切です。



温暖化の影響が危惧されるライチョウ

表 5-3 レッドリスト種を守るための基本方針

カテゴリー	取り組みの基本方針
野生絶滅 (EW)	・再定着可能な環境を整える。 (他地域から自然に分布拡大し、再び定着する可能性があるため)
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	・現在残されている生息・生育地を保護・回復させる。 ・個体数の減少を可能な限り防ぐ。
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	・現在残されている生息・生育地を保全する。 ・個体数の減少を最小限にとどめる。
準絶滅危惧 (NT)	・個体数の減少を可能な限り生じさせない。

2) 注意すべき生物

「注意すべき生物」については、駆除や飼育個体の野外への放逐を禁止することが、生態系への影響を抑制することにつながります。

一度定着した注意すべき生物を根絶することは、かなり困難です。駆除には長期的な計画が必要となります。また、注意すべき生物のほとんどは市内だけでなく、広範囲に生息・生育していることから、国や県、周辺の市町村と連携した対策が重要となります。



市内で確認が増えているアライグマ

3) 重要な自然環境

「重要な自然環境」は、高山帯をはじめとした人の手がほとんど加わっていない自然環境と、農耕地や屋敷林などの人の手により維持されてきた環境の2つに分けられます。

重要な自然環境を保全していくためには、開発等による環境の改変や減少、過剰な利用による環境の変化を避ける、または低減することが重要です。

一方、人の手により維持されてきた環境については、適切な維持管理をして、環境の荒廃や植生の遷移を進めないことが、野生生物の生息・生育環境の維持につながります。



安曇野市の特徴的な環境である湧水

(3) 自然環境を守るための方策

安曇野市における自然環境を守っていくためには、前述した考え方のもと、以下の様な方策を進めていく事が大切になります。

1) 開発行為を行う際の環境配慮

人間による開発事業は自然環境を改変し、レッドリスト種をはじめとした野生生物の生息・生育場所の悪化、減少を引き起こす場合があります。

開発事業を行う際には、事前にその場所の自然環境や野生生物の情報を収集し、開発事業における影響を予測することが大切になります。市内における今後の大規模な開発事業として、松本から糸魚川に至る高規格道路の建設なども予定されており、自然にも配慮した事業の実施が求められています。

また、自然環境に関わる法令等により、開発する地域に土地や野生生物の保護のための規制がかかっているかどうかを確認する必要があります。2023年には、太陽光発電施設の設置に関わる市の条例もできています。

予測結果を活用して自然環境や野生生物への影響が少ない計画を立案することや開発行為の方法を工夫することにより、自然環境や野生生物への影響を低減できます。

野生生物の情報を収集する際には、本書を活用するとともに、有識者へのヒアリングを行うことが効率的です。その上で現地調査や必要な対策を行うことが望まれます。

【求められる取り組み事例】

- ・ 開発事業前における自然環境や野生生物の情報収集や現地調査
- ・ 自然環境・野生生物への影響低減のための計画検討
- ・ 自然環境・野生生物に配慮した開発事業の実施
- ・ 開発事業後の自然環境・野生生物モニタリング

2) レッドリスト種の保全活動

本書に掲載したレッドリスト種のうち、特に絶滅の危険性が高い種類については、その減少要因を取り除くための保全活動が求められます。

市内ではこれまでに、オオルリシジミやアカモズ、アズミノヘラオモダカなどの保全活動が行われてきています。特にオオルリシジミは、保全団体である安曇野オオルリシジミ保護対策会議が中心となり、保護区を管理するアルプスあづみの公園や地元の岩原区と協力して保全活動を行っています。

【求められる取り組み事例】

- ・ 好適な生息・生育環境の創出（草刈り、森林の間伐など）
- ・ 違法採取の禁止及び監視活動
- ・ 系統保存（栽培・飼育による地域固有の遺伝子をもつ種の保存）
- ・ 競合する外来生物の駆除
- ・ 関係団体との協力体制の構築

3) 里地里山の荒廃を防ぐ取り組み

レッドリスト種をはじめとした野生生物の中には、人の手により維持されてきた環境に生息・生育する生物が数多く見られます。

耕作放棄された農地や管理されていない植林地や二次林などの手入れをし、里地里山の荒廃を防ぐことで、野生生物の減少要因を取り除くことができます。長峰山では、定期的に草を刈るなど草原の維持管理が行われています。



長峰山における草刈りの様子

【求められる取り組み事例】

- ・地域住民や行政が協働で取り組む里地里山の維持管理（下草刈り、間伐、更新伐等）
- ・農業の担い手や新規就農希望者への農地の貸し出しによる耕作放棄地の有効活用
- ・農産物や林産物の利用や地産・地消の推進

4) 注意すべき生物に対する取り組み

本書に掲載した注意すべき生物をはじめとした自然環境に悪影響を与える可能性がある生物については、その生息・生育状況を継続して把握し、場合によっては駆除や分布拡大防止の措置を検討する必要があります。

市内では、アレチウリやオオハンゴンソウなどの駆除活動が継続して行われています。



オオハンゴンソウの駆除活動

【求められる取り組み事例】

- ・特定外来生物や注意すべき生物など、自然環境への影響が大きい種の駆除
- ・外来生物の新規移入の防止
- ・注意すべき生物に関する普及啓発活動
- ・注意すべき生物の生息・生育に関する情報収集と整理

5) 気候変動に対する取り組み

レッドリスト種の中には、気候変動による環境の変化が減少要因とされる種がいます。

安曇野市では2022年度に、2050年のCO₂排出量実質ゼロを目指す「ゼロカーボンシティ宣言」を表明しました。この目標に向けて、市では「第2次地球温暖化対策実行計画」を策定し重点施策を定めており、生物多様性保全の観点からも地域として脱炭素社会の実現に向けた取り組みを推進することが望まれています。

【求められる取り組み事例】

- ・自然資源を活用したエネルギー自給自足化の取組
- ・省エネルギー対策への取組強化と意識向上に向けた普及啓発
- ・脱炭素に向けた交通手段の転換とごみを出さない暮らしの推進
- ・温室効果ガス吸収量向上を目指した森林・農地・水辺環境の整備と保全

6) 普及啓発活動

安曇野市の豊かな自然環境を今後も守っていくためには、市民一人ひとりが、自然環境について自ら学び、考え、行動することが大切です。

一人でも多くの人々が自然に親しみながら、その理解を深めることができるよう、環境について学び体験する機会を充実させることが、自然と共生した社会の実現につながります。

また、普及啓発活動は、地域の自然環境に詳しく、自然環境保全に対して意識の高い人材を育てていくことにもなります。この目的のために市は、国営アルプスあづみの公園や長野県烏川溪谷緑地と連携して野生生物の情報共有や展示・講座を推進していきます。



市で開催している自然観察会

【求められる取り組み事例】

- ・ 自然環境に関する社会教育や学校教育の推進
- ・ 自然観察会の機会創出と市民参加
- ・ 里地里山の保全活動や注意すべき生物の駆除活動への市民や企業の参加
- ・ 観光客、登山者などへの啓発活動

7) 調査・研究

今回の安曇野市版レッドリスト改訂にあたり、既往資料の整理や現地調査により、市内の野生生物の生息・生育状況を整理しました。しかしながら、情報が不足している種も多く、今後継続して情報を蓄積していく必要があります。

また、レッドリスト種として選定された希少な野生生物については、今後もその生息・生育状況について継続してモニタリングしていくことが大切になります。



ライチョウの生息状況調査

【求められる取り組み事例】

- ・ 豊科郷土博物館や大学等の研究機関、NPO、市民によるレッドリスト種に関する調査・研究の充実
- ・ 市民参加の自然環境調査（安曇野市生きものの調査など）
- ・ 生物情報データベースの構築
- ・ 生物情報を活用するための体制の構築

【市民による自然環境を守る取り組み】

～官民協働による希少種オオルリシジミの保全～

オオルリシジミ本州亜種は、青森、岩手、福島、東北地方と、長野県を中心とする中部・関東地方に分布していましたが、東北地方は1970年代までに、中部地方も安曇野を含む長野県内3か所を除いて絶滅したとされています。オオルリシジミが絶滅寸前まで追い込まれた背景には、幼虫の食草となるクララの減少と草原環境の荒廃があります。農耕が牛馬の力に頼っていた時代は、飼料を確保するための草地があちらこちらにあり、クララは「ウジゴロシ」の別称が残るように殺虫効果のある植物として人の暮らしに欠かせない有毒植物でした。人々はクララを水田や堰の周りに植えて利用してきましたが、このことがオオルリシジミの生息に繋がったと考えられます。オオルリシジミは人間の生活と共に生きてきたチョウといえるでしょう。

一度は絶えたと思われた安曇野のオオルリシジミですが、1994年に旧堀金村の一角で再発見され、翌年には関係者が「安曇野オオルリシジミ保護対策会議（以下、対策会議）」を設立し、保護活動が開始されました。対策会議では人工飼育の技術を取り入れ、たくさんのチョウを育てることに成功し、保護区へ放蝶したところ多くのチョウが乱舞する光景がよみがえりました。ところが順調だったのは交尾、産卵までで、その後幼虫のほとんどがいなくなりました。信州大学の協力を得て減少要因を特定する研究が進められた結果、メアカタマゴバチによる卵への寄生率が高いことが判明しました。最善策と思われた放蝶には天敵を引き寄せてしまうという思わぬ副作用があったのです。その後野焼きが天敵に対して有効であるという研究成果によって、保護区で継続した野焼きが行われるようになり、安定した自然発生に繋がっています。

安曇野市は2022年3月に、動物としては初めて「安曇野のオオルリシジミ」を天然記念物に指定しました。オオルリシジミのことを学んでいくと、先人の暮らしや安曇野の原風景にたどり着きます。現在では市民との協働によるクララの苗の配布やパトロール、啓発活動などの活動が活発に行われています。近年は保護区の外でも発生が確認されるなど、市民との協働活動の成果が出てきています。これからもオオルリシジミが安曇野の草原に舞い続けることを願ってやみません。

（那須野 雅好）



那須野雅好

安曇野のオオルリシジミ



市民団体によるクララの苗の配布

(4) 自然環境を守るための体制づくり

1) それぞれの主体の役割

安曇野市の自然環境を守るためには、行政（国・県・市）、市民・市民団体、有識者、事業者が自然環境に関する認識と情報を共有し、意見交換できる体制づくりが必要です。

特に、市民・市民団体及び事業者が、それぞれの役割にもとづいて自然環境保護活動を行う際に、有識者及び自然環境保護行政は機会・情報や活動の場を提供できるよう努めることが大切です。



図 5-8 体制づくりのイメージ

2) 生物多様性アドバイザー

自然環境を守るための体制づくりの一環として、安曇野市は『安曇野市版レッドデータブック2014』の発行をきっかけに、希少生物等の保護及び重要な自然環境の保全に関する専門的な意見聴取のために安曇野市生物多様性アドバイザー制度を設け運用しています。

この制度は、安曇野市版レッドデータブックに記載されたレッドリスト掲載種の保護及び重要な自然環境の保全にとどまらず、下記に示すような安曇野市の自然環境に関する事項を幅広く対象としています。

特に、自然環境に影響を与える可能性のある工事等に際しては、この制度を利用し、生物多様性アドバイザーの助言を得て、事業者と安曇野市で影響低減策の協議を実施しています。本書に記載しているとおり安曇野市の自然環境は多様で、市内に生息・生育する動植物の状況も常に変化しているため、それぞれの工事等に際しては基本的に現地での確認調査を行い、その結果をもとに協議を実施しています。



生物多様性アドバイザー連絡会議の様子

【生物多様性アドバイザー連絡会議にて協議の対象としている事項】

- ・ 公共・民間開発事業における影響低減のための対策
- ・ レッドリスト種等の希少生物の保全活動
- ・ 特定外来生物をはじめとする注意すべき生物への対策
- ・ 自然環境保全のための普及啓発活動
- ・ 調査・研究(レッドデータブック以降の継続調査)の手法に関すること。
- ・ 自然環境保護の体制づくり(市民・有識者・事業者・行政)

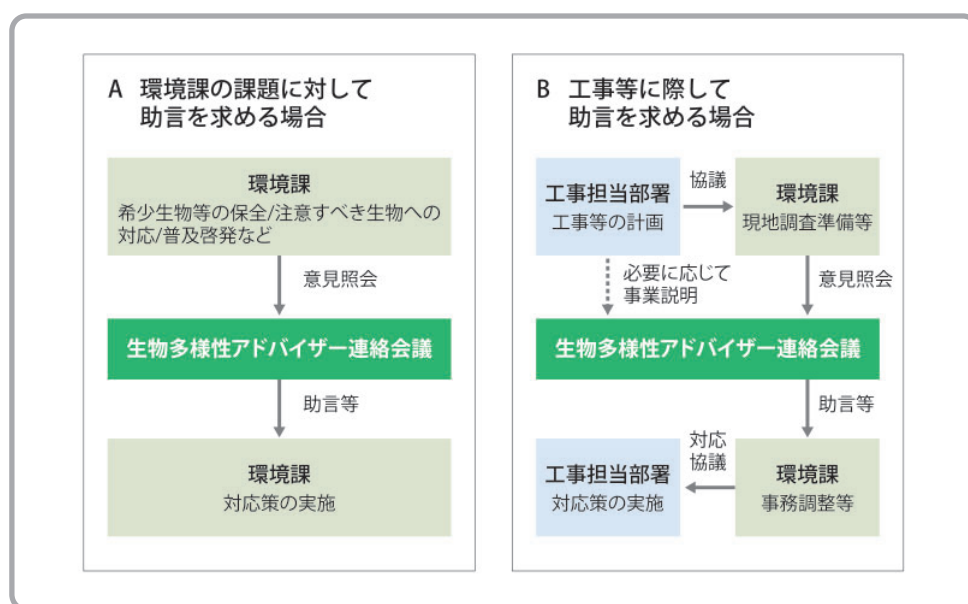


図 5-9 アドバイザー会議における協議の流れ

(5) 安曇野市の自然環境に関わる法令

国や県、市町村では自然環境の保全を目的とした様々な法令や条例等が整備されています。

これらの法令等は、野生生物の生息・生育地に関わるものと野生生物の種に関わるものの大きく2つに分けられ、それぞれ改変行為に対する規制内容や生物の取扱いについて定められています。

ここでは、それらの法令等（略称）の概要と対象となる地域や生物について示します。

1) 野生生物の生息・生息地の保全に関わる法令等

安曇野市内で野生生物の生息・生育地の保全に関わる法令等として、自然公園法、長野県自然環境保全条例、鳥獣保護管理法が挙げられます。

安曇野市内では自然公園法では中部山岳国立公園、長野県自然環境保全条例では満願寺郷土環境保全地域、鳥獣保護管理法では国指定の鳥獣保護区として北アルプス鳥獣保護区、狩猟鳥獣捕獲禁止区域として、中房、烏川、有明、黒沢山林の4区域が指定されています。

2) 野生生物の種の保護や管理に関わる法令等

野生生物の種の保全に関わる法令等は、哺乳類と鳥類全般を対象としたものとして鳥獣保護管理法があります。また、絶滅のおそれがあり特に保護が必要な種を守るための法令等としては、種の保存法や長野県希少野生動植物保護条例があります。

文化財保護法及び文化財保護条例は、野生生物では学術上価値が高い種（天然記念物）が対象となりますが、天然記念物の指定種の多くは希少な生物でもあります。

2022年には、希少なチョウ類であるオオルリシジミが新たに市の天然記念物として指定されました。本種については、長年、有識者、地域住民等の協力のもと保全活動が続けられてきています。

表 5-4 安曇野市における野生生物の生息・生育地や種の保全に関わる法令等 (1/2)

名称	管轄機関 (問い合わせ先)	概要	市内において該当する地域や生物等
自然公園法	環境省 (中部山岳国立公園管理事務所)	国立公園、国定公園、都道府県立自然公園に関する法律です。公園内は特別保護区、特別地域、普通地域などの地区に分かれ、地区により開発等の行為や野生生物の採取や捕獲に条件が課せられています。	【地域】 中部山岳国立公園 【生物】 公園ごとに指定された野生生物
長野県自然環境保全条例	長野県 (松本地域振興局 環境・廃棄物対策課)	県自然環境保全地域及び郷土環境保全地域に関する条例です。県自然環境保全地域は、特別地区、野生動植物保護地区、普通地域などの地区に分かれ、地区により開発等の行為や野生生物の採取や捕獲に条件が課せられています。 郷土環境保全地域では、開発等の行為に届出が必要となる場合があります。	【地域】 満願寺郷土環境保全地域

表 5-4 安曇野市における野生生物の生息・生育地や種の保全に関わる法令等 (2/2)

名称	管轄機関 (問い合わせ先)	概要	市内において該当 する地域や生物等
鳥獣保護管理法	長野県 (松本地域振興局 林務課)	哺乳類と鳥類の適正な保護管理を目的とした法律です。鳥獣の保護繁殖にとって重要な地域を鳥獣保護区に指定するなど、捕獲の制限や鳥類の飼養・販売の制限などを規定しています。	【地域】 狩猟鳥獣捕獲禁止区域 【生物】 狩猟鳥獣以外の哺乳類、鳥類
種の保存法	環境省 (信越自然環境事務所)	絶滅のおそれのある動植物の保存に関する法律です。指定された動植物について採取や捕獲の規制や生息地の保護、保護増殖計画などを規定しています。	ライチョウ、アカモズ、コヒヨウモンモドキなど ※資料編参照
長野県希少野生動植物保護条例	長野県 (松本地域振興局 環境・廃棄物対策課)	長野県において希少な動植物の保護に関する条例です。指定された動植物について採取や捕獲の規制や生育・生息地等の保護、保護回復計画を規定しています。	ササユリ、オオルリシジミなど ※資料編参照
文化財保護法	文化庁 (安曇野市教育委員会)	我が国の文化財の保存と活用に関する法律です。学術上の価値が高い動植物（生息・生育地を含む）や地質鉱物を天然記念物として指定し、その保護管理について規定しています。	【地域】 中房温泉の膠状珪酸および珪華 【生物】 3 種 ※資料編参照
文化財保護条例	長野県 (文化振興課)	文化財保護法をもとに長野県が指定する文化財に関する条例です。県の天然記念物を指定するとともに、その保存及び活用について規定しています。	【生物】 11 種 ※資料編参照
安曇野市文化財保護条例	安曇野市教育委員会	文化財保護法をもとに安曇野市が指定する文化財に関する条例です。市の天然記念物を指定するとともに、その保存及び活用について規定しています。	【地質・生物】 26 件 ※資料編参照
外来生物法	環境省 (信越自然環境事務所)	外来種の飼養や輸入品への措置を規制し、防除を推進する法律です。指定された特定外来生物は、飼養、栽培、運搬、輸入が規制されています。	アレチウリ、オオカワヂシャ、アライグマ、ウシガエルなど
安曇野市太陽光発電設備の設置等に関する条例	安曇野市 (環境課環境政策担当)	太陽光発電事業と地域との共生、良好な自然環境や景観などの保全、市民の生命と財産の保護のための条例です。太陽光発電設備の設置に制限が設けられています。	条例で指定された禁止区域、抑制区域 ※資料編参照

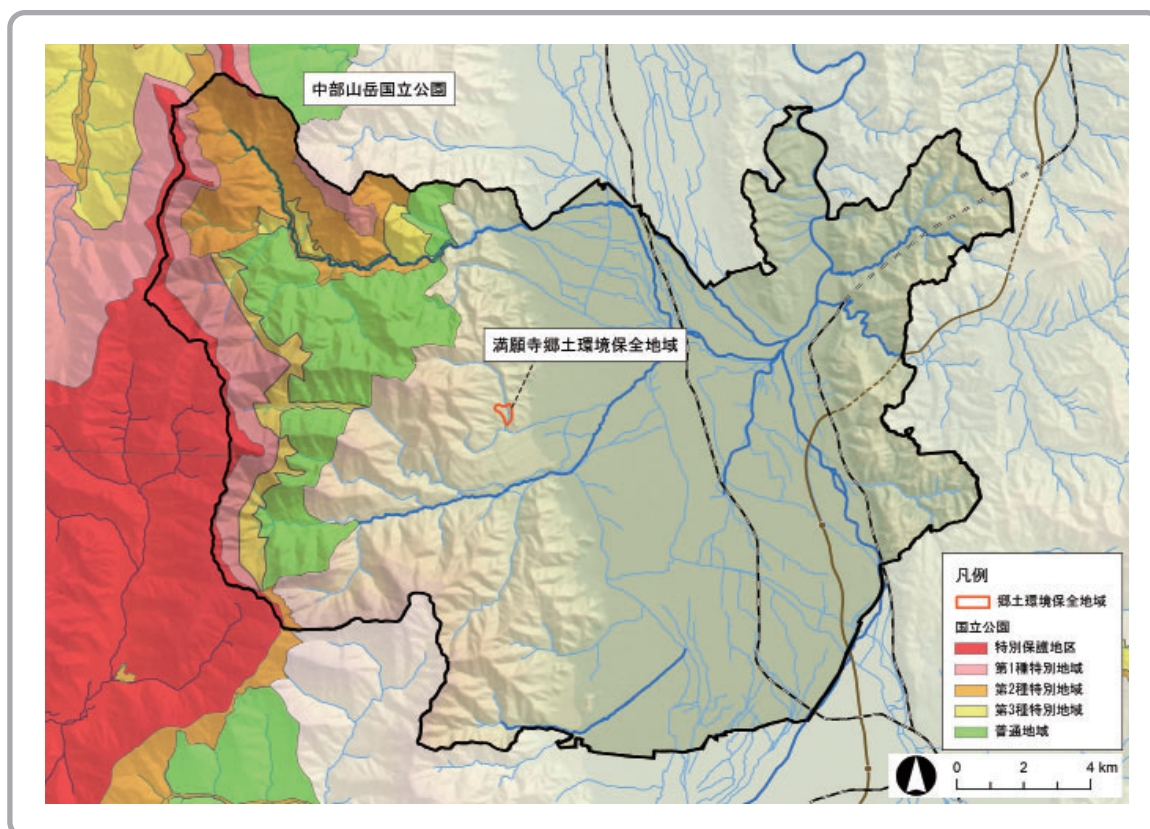


図 5-10 安曇野市における国立公園及び郷土環境保全地域位置図

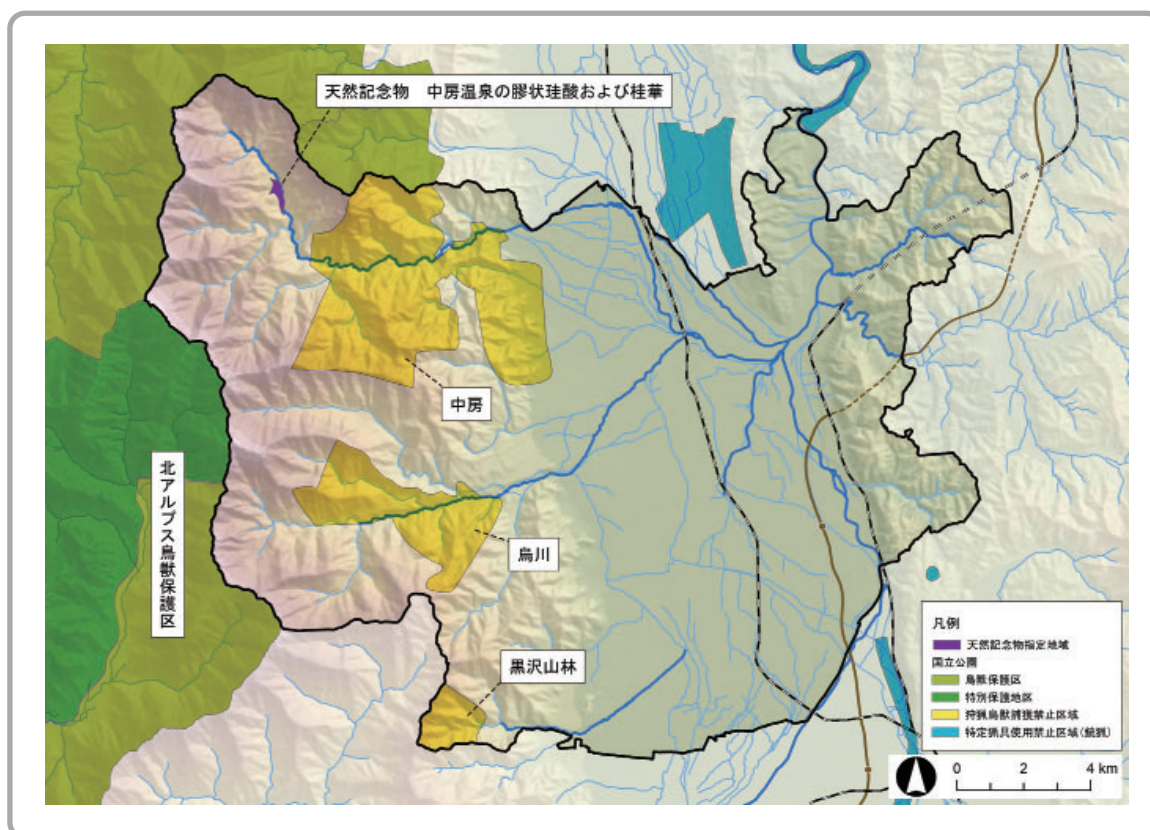
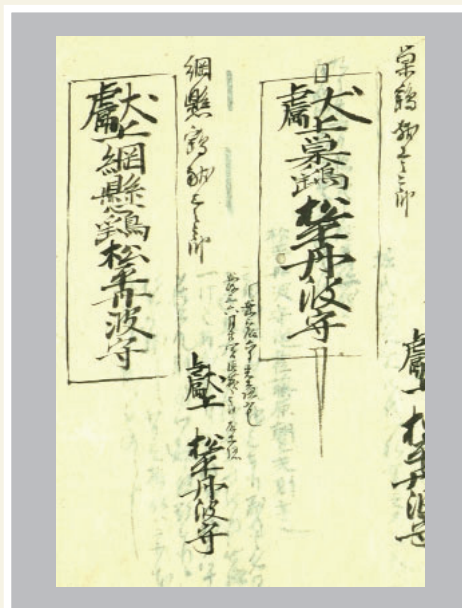


図 5-11 安曇野市における鳥獣保護区等及び国指定天然記念物位置図

江戸時代、将軍を始め多くの大名は好んで鷹狩りを行いました。タカは武家社会において権威や権力を維持するための重要な贈答品でもあり、松本藩にとっては、将軍や大名への重要な献上品のひとつでした。安曇野市三郷の東小倉から室町一帯は「御林」と呼ばれた松本藩直轄の森林で、出入りは厳しく制限されていました。室山は当時「御巢鷹山」と呼ばれ、御林と共に献上鷹の育成・管理が行われていた場所でした。松本藩右筆（文書などを担当した家臣）が残した古文書からは「鷯（ハイタカ）」の雛や若鳥を将軍家へ献上したことがうかがえます。鷹狩り＝オオタカのイメージが強いのですが、一回り小ぶりな、ハトほどの大きさのハイタカも珍重されていたのです。

ハイタカは他のタカと一線を画した狩りを行います。樹間を縫うように低く高速で飛び、獲物を追いかけます。将軍や大名たちがこの鳥を欲した理由がわかる気がします。

（那須野 雅好）



於松本当用書式

献上時の様式集から「鷯（はいたか）」
の名が記されている（日比野宏夫家文書）



ハイタカ 雌幼鳥

おわりに

『安曇野市版レッドデータブック2014』の刊行から10年が経過しました。この10年の間、安曇野市内の平野部から山麓部にかけては、草地や農耕地の減少、河川敷や住宅地での外来生物の増加など、私たちの身近にある自然環境の変化が続いています。

安曇野市の西側にそびえる常念岳や燕岳などの北アルプスの峰々は、四季を通じて変わらず雄大な姿を見せていますが、雪解けは年々早くなっており、気候変動の影響を感じます。また、東側の長峰山や光城山では、マツ枯れで景観が様変わりしており、生態系への影響が気になります。

今回のレッドデータブック改訂では、私たちにとって身近な存在である動植物の減少が進んでいることが明らかになり、新たにレッドリストに加わった種、あるいは絶滅の危険性が増した種が多くなりました。その一方で、市内では絶滅したと考えられていた種が再確認されるなど、うれしい発見もありました。

安曇野市の自然環境は私たちの生活に大きな恵みと潤いをもたらしてくれています。美しい景観や様々な動植物など、かけがえのない自然環境を後世に伝えていくためには、私たち一人ひとりが身の周りの環境に興味を持ち、守っていくためにできることを考え、行動していくことが大切です。

市内には、動植物を観察している団体や自然環境の保全に携わる団体などが多く、それぞれ熱意を持って活動しています。また、市内で行われている自然観察会には、毎回多くの参加者があり、市民の自然環境に対する意識も高まりつつあります。

『安曇野市版レッドデータブック改訂版2024』を多くの市民が手に取り、地域の自然環境への理解や守り伝えていく行動の指針となることを願っています。

安曇野市生物多様性アドバイザー 一同



資料編

- 資料 1：安曇野市生物多様性アドバイザー設置要綱
- 資料 2：レッドリスト及び注意すべき生物の文献
- 資料 3：本書の引用・参考文献、ウェブサイト
- 資料 4：環境省及び長野県のレッドリスト該当種
- 資料 5：安曇野市内の天然記念物・希少野生動植物
- 資料 6：協力者

資料 1 安曇野市生物多様性アドバイザー設置要綱

(趣旨)

第1条 この要綱は、安曇野市の豊かな自然環境や動植物種の多様性を将来にわたり維持していくことを目的に、安曇野市版レッドデータブック等で著された希少生物の保護及び重要な自然環境の保全等に関し、専門家の意見を聴くため、安曇野市生物多様性アドバイザー（以下「アドバイザー」という。）の設置及び運営について必要な事項を定めるものとする。

(役割)

第2条 アドバイザーは、次の事項について専門的立場から情報の提供、助言等を行うものとする。

- (1) 安曇野市版レッドデータブック等に記載された希少生物の保護に関すること。
- (2) 安曇野市版レッドデータブック等に記載された重要な自然環境の保全に関すること。
- (3) その他専門的な知識が必要とされる自然環境の保全に関すること。

(委嘱)

第3条 アドバイザーは、次のいずれかに該当する者のうちから市長が委嘱する。

- (1) 植物、哺乳類、鳥類、爬（は）虫類、両生類及び魚類並びに昆虫類その他無脊椎動物のいずれかの専門的な知識を有する者
- (2) 市の自然環境に関して専門的な知識を有する者

(定数)

第4条 アドバイザーの定数は、8人以内とする。

(任期)

第5条 アドバイザーの任期は、委嘱の日の属する年度の翌年度の末日までとし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じ、補充により委嘱した場合の任期は、前任者の残任期間とする。

(守秘義務)

第6条 アドバイザーは、業務の遂行上知り得た秘密を漏らしてはならない。アドバイザーを退いた後も同様とする。

(庶務)

第7条 アドバイザーに関する庶務は、市民生活部環境課で行う。

(その他)

第8条 この要綱の施行に関し必要な事項は、市長が定める。

附 則

この告示は、平成29年4月1日から施行する。

資料 2 レッドリスト及び注意すべき生物の文献

- 1) 1927 小泉秀雄, 飛騨山系南半部植物分布論.
- 2) 1935 上野益三・宮地傳三郎, 上高地及び梓川水系の水棲動物 (附信州の魚類).
- 3) 1952 横内 齋, 信州に於ける高山植物の分布.
- 4) 1956 南安曇郡誌改訂編纂会, 南安曇郡誌 第一巻, 南安曇郡誌改訂編纂会.
- 5) 1961 横内 齋, 中房温泉附近の植物, 長野営林局.
- 6) 1968-1995 松本むしの会, まつむしNo. 29- No. 86.
- 7) 1977 信州昆虫学会, 長野県のトンボ, 信濃教育会出版部.
- 8) 1977 信州鳥類生態研究グループ, 長野県の野鳥－繁殖期の鳥類群集について－, 長野県林務部林政課.
- 9) 1979 日本野鳥の会長野支部, 長野県鳥類目録－1972～1978年の記録－, 日本野鳥の会長野支部.
- 10) 1981 小林正明, 信州の秋に鳴く虫とそのなかま, 信濃教育会出版部.
- 11) 1981 環境庁, 第2回自然環境保全基礎調査 (緑の国勢調査) 動物分布調査 (昆虫類) 報告書日本の重要な昆虫類 甲信越版.
- 12) 1982 松本むしの会, 信州の昆虫, 松本むしの会.
- 13) 1984 横内文人, 長野県植物ハンドブック, 銀河書房.
- 14) 1987 犀川鳥類研究グループ, 調査報告書 犀川周辺における鳥類の生息状況とその周辺への影響, 長野県林務部.
- 15) 1991 穂高町誌編纂委員会, 穂高町誌自然編, 穂高町誌刊行会.
- 16) 1991 堀金村誌編纂委員会, 堀金村誌上巻 自然歴史編, 堀金村誌刊行会.
- 17) 1991 日本野鳥の会長野支部, 長野県鳥類目録－100年の記録－.
- 18) 1992 長野県, 平成4年度県単公園事業に伴う動植物調査報告書.
- 19) 1995 豊科町誌編纂委員会, 豊科町誌 自然編, 豊科町誌刊行会.
- 20) 1995 千曲川工事事務所, 河川水辺の国勢調査 植物 1994年度.
- 21) 1996 長野県, 平成8年度県単県営烏川溪谷緑地事業に伴う周辺現況補足確認調査業務委託報告書.
- 22) 1996 千曲川工事事務所, 河川水辺の国勢調査 陸上昆虫類 1995年度.
- 23) 1997 長野県自然教育研究会, 信州の希少生物と絶滅危惧種, 信濃毎日新聞社.
- 24) 1997 長野県植物誌編纂委員会, 長野県植物誌, 信濃毎日新聞社.
- 25) 1997 長野県, 平成9年度県単県営烏川溪谷緑地事業に伴う現地確認調査業務委託報告書.
- 26) 1997 長野県, 平成9年度県単県営烏川溪谷緑地事業に伴う設計業務委託 (一般鳥類調査) 報告書.
- 27) 1997 千曲川工事事務所, 河川水辺の国勢調査 両生類・爬虫類・哺乳類 1996年度.
- 28) 1998 長野県, 平成9年度県単県営烏川溪谷緑地事業に伴う周辺現況補足確認調査業務委託 (一般鳥類調査) 報告書.
- 29) 1998 財団法人日本緑化センター, 生物資源利活用調査業務報告書.

- 30) 1998 千曲川工事事務所．河川水辺の国勢調査 魚介類 1997 年度．
- 31) 1998 千曲川工事事務所．河川水辺の国勢調査 底生動物 1997 年度．
- 32) 1999 日本野鳥の会長野支部．長野県鳥類目録 3－繁殖鳥類分布図－．日本野鳥の会長野支部．
- 33) 1999 信州昆虫学会．長野県産チョウ類動態図鑑．文一総合出版．
- 34) 1999 千曲川工事事務所．河川水辺の国勢調査 鳥類 1998 年度．
- 35) 2000 長野県．平成 11 年度県単県営烏川溪谷緑地事業に伴う追跡調査業務委託報告書．
- 36) 2000 長野県．平成 11 年度県単都市公園事業に伴う周辺現況補足確認調査業務委託（既存調査とりまとめ）報告書．
- 37) 2000 財団法人長野県廃棄物処理事業団．豊科町東山地区廃棄物処理施設整備事業に係る環境影響評価書．
- 38) 2000 財団法人長野県廃棄物処理事業団．豊科町東山地区廃棄物処理施設整備事業に係る環境影響評価書資料編．
- 39) 2000 千曲川工事事務所．河川水辺の国勢調査 植物 1999 年度．
- 40) 2001 長野県．平成 12 年度県単都市公園事業に伴う追跡調査業務委託報告書．
- 41) 2000-2008 日本野鳥の会長野支部．野鳥ながの No. 359- No. 455.
- 42) 2000-2008 信州野鳥の会．信州野鳥の会会報はばたき No. 194 号 - No. 297 号．
- 43) 2001 堀田昌伸．安曇野地域におけるサギ類の分布について．長野県自然保護研究所紀要第 4 巻別冊 1 プロジェクト研究長野県の多様な自然環境とそれに関わる社会環境の現状把握．長野県自然保護研究所．
- 44) 2001 千曲川河川事務所．河川水辺の国勢調査 陸上昆虫類 2000 年度．千曲川工事事務所．
- 45) 2002 長野県．平成 13 年度県単都市公園事業に伴う周辺現況補足確認調査業務委託報告書（第 1 次整備区域モニタリング調査）．
- 46) 2002 財団法人日本緑化センター．平成 13 年度生物資源利活用調査業務報告書．
- 47) 2002 千曲川河川事務所．平成 13 年度河川水辺の国勢調査（両生類・爬虫類・哺乳類）報告書．
- 48) 2003 長野県．平成 14 年度県単都市公園事業に伴う追跡調査業務委託報告書（第 1 次整備区域植物モニタリング調査）．
- 49) 2003 関東農政局西関東土地改良調査管理事務所．平成 14 年度国営土地改良事業地区調査あずさ地区 生物生息状況調査業務報告書．
- 50) 2003 関東農政局西関東土地改良調査管理事務所．平成 15 年度国営土地改良事業全体実施設計 あずさ地区 生物生息状況調査その 2 業務報告書．
- 51) 2003 千曲川河川事務所．平成 14 年度河川水辺の国勢調査（魚介類・底生動物調査）報告書．
- 52) 2004 三郷村誌編纂会．三郷村誌Ⅱ 第一巻 自然編．三郷村誌刊行会．
- 53) 2004 関東農政局西関東土地改良調査管理事務所．平成 15 年度国営土地改良事業全体実施設計 あずさ地区 生物生息状況調査その 3 業務報告書．
- 54) 2004 千曲川河川事務所．平成 15 年度河川水辺の国勢調査（鳥類調査）報告書．
- 55) 2005 千曲川河川事務所．管内環境調査業務報告書．
- 56) 2005 千曲川河川事務所．平成 16 年度河川水辺の国勢調査（植物・河川調査）．
- 57) 2005 長野県植物誌編纂委員会．長野県植物誌資料集 CDROM.

- 58) 2006 千曲川河川事務所．河川水辺の国勢調査（陸上昆虫等）業務報告書 平成 17 年度千曲川河川水辺の国勢調査（陸上昆虫類等）．
- 59) 2007 明科町史編纂委員会．明科町史 自然編．安曇野市教育委員会．
- 60) 2007 長野県．平成 19 年度国補広域基幹河川改修事業に伴う調査業務委託（一）万水川安曇野市 南穂高 その 1．
- 61) 2007 千曲川河川事務所．平成 18 年度河川水辺の国勢調査（底生動物）業務報告書．
- 62) 2008 長野国道事務所．平成 19 年度大型哺乳類調査業務報告書．
- 63) 2008 長野国道事務所．平成 19 年度国営アルプスあづみの公園環境調査業務報告書（概要版）．
- 64) 2008 長野国道事務所．平成 19 年度補足確認追跡業務報告書．
- 65) 2008 長野国道事務所．平成 19 年度外来種（植物）他調査業務報告書．
- 66) 2008 拾ヶ堰応援隊．平成 19 年度拾ヶ堰生物調査報告書．
- 67) 2008 長野県．平成 20 年度国補通常砂防事業に伴う溪流環境調査業務委託上手木戸沢 安曇野市上押野（3）中間報告．
- 68) 2008 千曲川河川事務所．平成 19 年度河川水辺の国勢調査（魚類）業務報告書．
- 69) 2011 中房温泉天然記念物保存管理計画策定委員会．天然記念物中房温泉の膠状珪酸および珪華保存管理計画．長野県安曇野市教育委員会．
- 70) 2011 環境省自然環境局生物多様性センター．平成 22 年度モニタリングサイト 1000 高山帯調査報告書．
- 71) 1983 加藤碩一・佐藤岱生．信濃池田地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）．
- 72) 1990 原山 智．上高地地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）．
- 73) 2009 原山 智・ほか．松本地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）．
- 74) 1991 原山 智・ほか．槍ヶ岳地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）．
- 75) 2011 青木周栄・山崎隆義．安曇野の魚と人のかかわり．川の自然と文化研究所研究報告第 2 号．川と自然の文化研究所．
- 76) 2013 石田益雄・吉田利男．安曇野の水をめぐる歴史文化と自然．川の自然と文化研究所研究報告第 3 号．川と自然の文化研究所．
- 77) 2013 増田今雄．増える変わる生態系の行方．信濃毎日新聞社．
- 78) 2013 笹本正治．水で結ばれたふるさと 安曇野風土記 I．安曇野市．
- 79) 2007 金田彰二・ほか．日本における外来種フロリダマミズヨコエビ（*Crangonyx floridanus* Bousfield）の分布と現状．陸水学雑誌 Vol.68 No.3：449-460. 日本陸水学会．
- 80) 2004 長野県．長野県版レッドデータブック～長野県の絶滅のおそれのある野生生物～動物編．長野県生物多様性研究会・長野県自然保護研究所・長野県生活環境部環境自然保護課．
- 81) 2002 長野県．長野県版レッドデータブック～長野県の絶滅のおそれのある野生生物 維管束植物編．長野県自然保護研究所・長野県生活環境部環境自然保護課．
- 82) 1997 Hayashi F, Suda S. A New Species of *Sialis* (Megaloptera, Sialidae) from Japan. Japanese Journal of Entomology, 65 (4) : 813-85.
- 83) 2010 増田今雄．希少種は今．信濃毎日新聞社．
- 84) 1989 平嶋義宏（監修）．日本産昆虫総目録（Ⅰ・Ⅱ・索引）．九州大学農学部昆虫学教室．
- 85) 1990 平嶋義宏（監修）．日本産昆虫総目録（追加・訂正）．九州大学農学部昆虫学教室．

- 86) 1995 環境庁自然保護局野生生物課（編）．日本産野生生物目録（無脊椎動物編Ⅱ）．自然環境研究センター．
- 87) 2006 環境庁自然保護局野生生物課（編）．改訂 日本の絶滅のおそれのある野生生物5（昆虫類）．自然環境研究センター．
- 88) 2006 川上洋一．絶滅危惧の昆虫事典．東京堂出版．
- 89) 2012 近藤繁生・他．わが家の虫図鑑．トンボ出版．
- 90) 2002 日本生態学会．外来種ハンドブック．地人書館．
- 91) 2006 池田清彦．外来生物事典．東京書籍．
- 92) 2012 梅谷献二（編）．原色図鑑・外来害虫と移入天敵．全国農村教育協会．
- 93) 2005 石綿進一・ほか．日本産幼虫図鑑．学習研究社．
- 94) 2013 丸山宗利・ほか．アリの巣の生きもの図鑑．東海大学出版会．
- 95) 2008 平嶋義宏・ほか．新訂・原色昆虫大図鑑Ⅲ（蜻蛉・直翅・半翅・膜翅他編）．北隆館．
- 96) 2006 日本直翅類学会（編）．バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑．北海道大学出版会．
- 97) 2011 日本直翅類学会（監修）．バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑．北海道大学出版会．
- 98) 2001 岡田正哉．昆虫ハンター カマキリのすべて．トンボ出版．
- 99) 1999 岡田正哉．ナナフシのすべて．トンボ出版．
- 100) 1994 宮武頼夫（監修）．タガメのすべて．トンボ出版．
- 101) 1993 友国雅章（監修）．日本原色カメムシ図鑑．全国農村教育協会．
- 102) 2001 安永智秀・ほか．日本原色カメムシ図鑑（第2巻）．全国農村教育協会．
- 103) 2012 石川 忠・ほか．日本原色カメムシ図鑑（第3巻）．全国農村教育協会．
- 104) 2011 林 正美・ほか．日本産セミ科図鑑．誠文堂新光社．
- 105) 2008 松本嘉幸．アブラムシ入門図鑑．全国農村教育協会．
- 106) 1995 Tsukaguchi Shigeru. Chrysopidae of Japan. Yutaka Insatsu.
- 107) 2007 森本 桂・ほか．新訂・原色昆虫大図鑑Ⅱ（甲虫編）．北隆館．
- 108) 1985 上野俊一・ほか．原色日本甲虫図鑑（Ⅱ）．保育社．
- 109) 1985 黒澤良彦・ほか．原色日本甲虫図鑑（Ⅲ）．保育社．
- 110) 1984 林 匡夫・ほか．原色日本甲虫図鑑（Ⅳ）．保育社．
- 111) 2002 森 正人・ほか．改訂版 図説 日本のゲンゴロウ．文一総合出版．
- 112) 2012 岡島秀治・ほか．日本産コガネムシ上科標準図鑑．学研教育出版．
- 113) 2013 大桃定洋・ほか．日本産タマムシ大図鑑．月刊むし社．
- 114) 1969 Chujo Michio. Fauna Japonica, Erotylidae. Academic Press of Japan.
- 115) 1971 Sasaji Hiroyuki. Fauna Japonica, Coccinellidae. Academic Press of Japan.
- 116) 2009 日本環境動物昆虫学会．テントウムシの調べ方．文教出版．
- 117) 2007 大林延夫・ほか．日本産カミキリムシ．東海大学出版会．
- 118) 2003 今井弘民・ほか．日本産アリ類全種図鑑．学習研究社．
- 119) 2005 高見澤今朝雄．日本の真社会性ハチ 全種・全亜種生態図鑑．信濃毎日新聞社．

- 120) 2013 木野田君公・ほか, 日本産マルハナバチ図鑑, 北海道大学出版会.
- 121) 1979 林 晃史・ほか, ハエー生態と防除ー, 文永堂.
- 122) 2002 双翅目談話会, 日本のハナアブ (Ver.1), 双翅目談話会.
- 123) 2009 竹内正人, 写真集 ハナアブ 300, 双翅目談話会.
- 124) 1968 Kano R *et al.* Fauna Japonica, Calliphoridae. Biogeographical Society of Japan.
- 125) 1967 Kano R *et al.* Fauna Japonica, Sarcophagidae. Biogeographical Society of Japan.
- 126) 2003 篠永 哲, 日本のイエバエ, 東海大学出版会.
- 127) 1983 中根猛彦, 新シリーズ日本の甲虫 (64), 昆虫と自然, 18 (10): 20-23, 北隆館.
- 128) 1990 Watanabe Y. A Revision of the Japanese Species of the Genus *Velleius* (Coleoptera, Carabidae), *Elytra*, 18 (1): 59-72.
- 129) 1997 Morita S. The Group of *Trichotichnus leptopus* (Coleoptera, Carabidae) of Japan. *Elytra*, 25 (2): 521-585.
- 130) 2003 Takahashi K. A Revision of the Japanese Genus *Yukikoa* (Coleoptera, Cantharidae), *Jpn. J. syst. Ent.*, 9 (1): 81-100.
- 131) 2007 Morita S. The Group of *Pterostichus (Epinialoe) cristatoides* STRANEO (Coleoptera, Carabidae) of Japan. *Jpn. J. syst. Ent.*, 13 (1): 141-169.
- 132) 2009 田村克徳・ほか, 福島県いわき市でナガサキアオジョウカイモドキを採集, 月刊むし, (463): 45-46, むし社.
- 133) 2010 Okushima Y *et al.* A New Cantharid Species of the Genus *Yukikoa* from Western Honshu, Japan, with Additional Records of Five Congeneric Species (Coleoptera, Cantharidae), *Elytra*, 38 (2): 213-221.
- 134) 2002 武内和彦・ほか, 里山の環境学, 東京大学出版会
- 135) 2012 Komaki S *et al.* Distributional Change and Epidemic Introgression in Overlapping Areas of Japanese Pond Frog Species Over 30 Years. *Zool. Sci.* 29:351-358.
- 136) 2012 東城幸治・小巻翔平, 携帯電話のカメラ機能を利用した市民参加型: 生物調査の試みー松本盆地・伊那盆地におけるトノサマガエル種群の分布調査ー, 塩尻市自然博物館紀要 14: 59-68, 塩尻市自然博物館.
- 137) 1954 素木得一, 昆虫の分類: 1-961, 北隆館.
- 138) 1982 安江敬昌・ほか, 信州高地のカミキリムシの記録, まつむし, (66): 21-23, 松本むしの会.
- 139) 1991 降旗剛寛, 清澤先生に献名された昆虫の原記載論文, まつむし, (80): 15-19, 松本むしの会.
- 140) 2012 山中康如, 長野県北アルプス大滝山調査報告, はなあぶ 34: 70-71, 双翅目談話会.
- 141) 1981 清沢晴親・ほか, 図説長野県のカミキリムシ, 東京法令出版.
- 142) 2014 上村 清・ほか, 北アルプス常念岳において腐肉トラップで捕獲された甲虫類の垂直分布と季節的消長 (1960 年の調査結果), 地域甲虫自然史 (7): 1-50, 日本甲虫学会.
- 143) 2012 安曇野市, 平成 23 年度安曇野市版レッドデータブック作成 (基礎調査) 業務報告書.
- 144) 2013 安曇野市, 平成 24 年度安曇野市版レッドデータブック作成基礎調査業務委託報告書.
- 145) 2014 安曇野市, 平成 25 年度安曇野市版レッドデータブック作成業務委託報告書.
- 146) 2013 安曇野市, 安曇野市環境行動計画に基づく「身近な生き物調査」業務報告書.
- 147) 2012 飯島國昭, 長野県安曇野市産陸淡水産貝類目録, 個人資料.

- 148) 2014 竹内正人・ほか, 北アルプス大滝山周辺の双翅類・第1報, はなあぶ (37): 68-83. 双翅目談話会.
- 149) 1959 朝比奈正二郎・ほか, 原色昆虫大図鑑 I (蝶蛾篇), 北隆館
- 150) 1963 Sugi S. Four new species and one new subspecies of genus *Apamea* Ochs. from Japan, with notes on some related species (Lepidoptera, Noctuidae, Amphipyrrinae). Tinea 6 (1/2): 9-19.
- 151) 1964 藤本宗行, 長野県中信地方の蛾数種(II), 蛾類通信 No.35: 272-273.
- 152) 1970 宮田 渡・小山長雄, 長野県産蛾類総目録第3部ヤガ科・セセリモドキガ科, 信州昆虫学会, 上田.
- 153) 1980 宮田 渡・小山長雄, 長野県産蛾類総目録第6部シャクガ科, 信州昆虫学会, 上田.
- 154) 1991 Hiroshi I. Notes on the Nolinae (Lepidoptera, Noctuidae): Four New Species from Japan and Two species Described by STAUDINGER from southeast Siberia. 蝶と蛾, 42 (2): 63-73.
- 155) 2009 丸山 潔, タケウチエダシャクの安曇野市における記録, まつむし No.98:51.
- 156) 2015 長野県, 長野県版レッドリスト〜長野県の絶滅のおそれのある野生生物〜動物編 2015. 長野県環境部自然保護課・長野県環境保全研究所自然環境部.
- 157) 2014-2022 長野県植物研究会, 長野県植物研究会誌 第47-55号.
- 158) 2014 長野県環境保全研究所, 長野県環境保全研究所研究報告第10号.
- 159) 2015 千曲川河川事務所, 平成26年度千曲川・犀川水辺現地調査(植物)他業務報告書.
- 160) 2015-2021 松本むしの会, まつむし No.104-No.109.
- 161) 2016 信州ライチョウ研究会, 平成27年度ライチョウ緊急保全対策事業生息実態調査 中部山岳国立公園常念岳周辺報告書.
- 162) 2016 安曇野市市民生活部環境課, 安曇野市内の公共事業に伴う環境調査(平成27年度).
- 163) 2016 小林秀紀, 日本の冬夜蛾, 有限会社むし社.
- 164) 2018 長野国道事務所, H29 あづみの公園環境調査業務報告書.
- 165) 2018 千曲川河川事務所, 平成29年度千曲川・犀川水辺現地調査(魚類)他業務報告書.
- 166) 2018 安曇野市, 平成29年度薬剤散布に伴う環境影響調査等業務委託報告書.
- 167) 2018 穂高広域施設組合, 穂高広域施設組合新ごみ処理施設整備・運営事業に係る環境影響評価書, 穂高広域施設組合.
- 168) 2018 田島 尚, 長峰山山頂草原の蛾類(2017年), 安曇野市郷土博物館紀要 第5号: 62-71.
- 169) 2019 長野国道事務所, H30 あづみの公園環境調査業務報告書.
- 170) 2019 安曇野市市民生活部環境課, 第3回 安曇野生きもの調査業務委託報告書(平成30年度).
- 171) 2019 安曇野市市民生活部環境課, 安曇野市内の公共事業に伴う環境調査(平成30・令和元年度).
- 172) 2020 横内 正, 松本盆地西縁の扇状地帯におけるヤナギ科植物の分布, 塩尻市立自然博物館紀要 第18号: 21-26.
- 173) 2020 安曇野市市民生活部環境課, 安曇野市内の公共事業に伴う環境調査(令和2年度).
- 174) 2020 千曲川河川事務所, 平成31年度千曲川・犀川水辺現地調査(両生類・爬虫類・哺乳類等)他業務報告書.

- 175) 2020 環境省自然環境局生物多様性センター．環境省モニタリングサイト 1000 高山帯調査 2008-2017 年度とりまとめ報告書．環境省自然環境局生物多様性センター．
- 176) 2020 Tomita K, Suzuki T, Yano K and Tojo K (2020) Community Structure of Aquatic Insects Adapted to Lentic Water Environments, and Fine-Scale Analyses of Local Population Structures and the Genetic Structures of an Endangered Giant Water Bug *Appasus japonicus*. Insects 11 (6) : 389.
- 177) 2021 横内文人．松本平の植物 2021. クラフト舎，松本．
- 178) 2021 安曇野建設事務所．令和 2 年度 防災・安全交付金（総合流域防災）緊急改築（砂防）（緊急対策事業）_（重点）事業に伴う環境調査業務（砂）烏川 安曇野市 堀金烏川（1）報告書．
- 179) 2021 安曇野建設事務所．令和 2 年度 防災・安全交付金（総合流域防災）緊急改築（砂防）（緊急対策事業）_（重点）事業に伴う環境調査業務（砂）中房川 安曇野市 穂高有明（1）報告書．
- 180) 2021 鳥類繁殖分布調査会．自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．鳥類繁殖分布調査会．
- 181) 2021 安曇野市市民生活部環境課．安曇野市内の公共事業に伴う環境調査（令和 3 年度）
- 182) 2021 千曲川河川事務所．令和 2 年度千曲川・犀川水辺現地調査（鳥類）他業務報告書．
- 183) 2021 安曇野建設事務所．令和元年度防災・安全交付金流域治水対策河川（緊急対策事業）事業に伴う環境調査業務（一）黒沢川 安曇野市黒沢（4）報告書．
- 184) 2022 安曇野市市民生活部環境課．安曇野市内の公共事業に伴う環境調査（令和 4 年度）．
- 185) 2022 千曲川河川事務所．令和 3 年度千曲川・犀川水辺現地調査（底生動物）他業務報告書．
- 186) 2013-2023 信州野鳥の会．信州野鳥の会会報はばたき No.361 号 -No.481 号．信州野鳥の会．
- 187) 2018 飯島國昭．長野県陸産・淡水産貝類誌．
- 188) 2023 田下昌志・ほか．The むし 昆虫図鑑 4200 種．信濃毎日新聞社．
- 189) 2023 森田倫太郎．長野県安曇野市でマルタンヤンマを確認．月刊むし．(634): 26-27. むし社．
- 190) 2024 安曇野市市民生活部環境課．安曇野市版レッドデータブック改訂業務委託報告書．
- 191) 2010 長野県松本地方事務所．平成 21 年度 経営体育成基盤整備事業 烏川地区環境調査業務委託．

■第 2 章

- 2014 安曇野市市民生活部環境課．安曇野市版レッドデータブック 2014. 安曇野市．
- 1991-2020 気象庁 過去の気象データ（穂高気象観測所）．<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/index.php>．2023 年 12 月 1 日参照．
- 2020 欧州宇宙機関（European Space Agency : ESA）．<https://sentinel.esa.int/web/sentinel/home>. Sentinel 衛星データ. 2020 年 12 月 1 日参照．
- 2020 農林業センサス 2020 年データ．<https://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/>. 2023 年 12 月 1 日参照．
- 2002 佐藤晃一．俯瞰する行動．農業土木学会誌，第 70 巻，第 1 号．
- 2022 安曇野市農政課農業政策係．第 3 次安曇野市農業・農村振興基本計画．<https://www.city.azumino.nagano.jp/uploaded/attachment/50575.pdf>．9p. 安曇野市．
- 2005 Lisiecki, L.E., and M. E. Raymo (2005) . A Pliocene-Pleistocene stack of 57 globally distributed benthic $\delta^{18}O$ records, *Paleoceanography* 20 (1).
- 2023 Antarctic Ice Cores Revised 800KYr CO₂ Data. <https://www.ncei.noaa.gov/access/metadata/landing-page/bin/iso?id=noaa-icecore-17975>. 2023 年 12 月 1 日参照．
- 2023 World Data Center for Paleoclimatology, Boulder and NOAA Paleoclimatology Program
- 1985-2023 気象庁 大気中二酸化炭素濃度の観測結果．https://www.data.jma.go.jp/ghg/kanshi/obs/co2_monthave_ryo.html. 2023 年 12 月 1 日参照．
- 1985-2023 気象庁 大気中メタン濃度の観測結果．https://www.data.jma.go.jp/ghg/kanshi/obs/ch4_monthave_ryo.html. 2023 年 12 月 1 日参照．
- 2022 気象庁 気候変動監視レポート 2021. https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/monitor/2021/pdf/ccmr2021_all.pdf. 気象庁．
- 1980-2022 気象庁 白馬村アメダスデータ 月間降雪量合計．https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/annually_a.php?prec_no=48&block_no=0396&year=&month=&day=&view=a4. 2023 年 12 月 1 日参照．
- 2020 環境省．気候変動影響評価報告書総説．<https://www.env.go.jp/content/900516663.pdf>. 環境省．
- 2022 北原 曜 (2022). ミヤマモンキチョウ浅間連山亜種 (*Colias palaeno aias* Fruhstorfer) に及ぼすモンキチョウ (*Colias erate poliographus* Motschulsky) の交尾干渉. *Lepidoptera Science* 73:53-66.
- 1982 福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健・高橋 昭・高橋真弓・田中 蕃・田中 洋・若林守男・渡辺康之 (1982) . 原色日本蝶類生態図鑑 I. 277 p. 保育社, 大阪.
- 2023 長野県林務部森林づくり推進課 https://www.pref.nagano.lg.jp/koho/kensei/koho/townmeeting/data/h30_2018/documents/siryou.pdf. 2023 年 12 月 1 日参照．
安曇野市耕地林務課「令和 3 年度の松くい虫被害と対策の実施状況について」
- 2021 長野県森林づくり推進課．長野県第二種特定鳥獣管理計画（第 5 期ニホンジカ管理）概要．https://www.pref.nagano.lg.jp/yasei/sangyo/ringyo/choju/hogo/documents/gaiyo_nihonjika_5ki.pdf. 長野県．
- 1988 田中 蕃．蝶による環境評価の一方法 蝶類学の進歩．日本鱗翅学会．

■第3章

- 2012 環境省自然環境局野生生物課．環境省版第4次レッドリスト．環境省．
- 2014 長野県環境部自然保護課．長野県版レッドリスト 植物編 2014 年．長野県．
- 2015 長野県環境部自然保護課．長野県版レッドリスト 動物編 2015 年．長野県．
- 2020 名古屋市環境企画部環境企画課．名古屋市版レッドリスト 2020 調査の概要及び植物の概況．名古屋市．
- 2019 Tominaga K, Kawase S (2019). Two new species of *Pseudogobio* pike gudgeon (Cypriniformes: Cyprinidae: Gobioninae) from Japan, and redescription of *P. esocinus* (Temminck and Schlegel 1846). Ichthyological Research 66 : 488-508.
- 2018 Okamiya H, Sugawara H, Nagano M, Poyarkov NA (2018) An integrative taxonomic analysis reveals a new species of lotic *Hynobius* salamander from Japan. PeerJ 6 (6) :e5084
- 2022 Shimada T, Matsui M, Ogata M, Miura I, Tange M, Min M, Eto K (2022) Genetic and morphological variation analyses of *Glandirana rugosa* with description of a new species (Anura, Ranidae). Zootaxa 5174:25-45

■第4章

- 2015 環境省自然環境局野生生物課外来生物対策室．我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト概要．<https://www.env.go.jp/press/100775.html>. 環境省．

■第5章

- 1898-2023 気象庁 過去の気象データ(穂高気象観測所)．<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/index.php>．2023 年 12 月 1 日参照．
- 2023 安曇野市環境課．第2次地球温暖化対策実行計画．<https://www.city.azumino.nagano.jp/uploaded/attachment/58129.pdf>. 安曇野市．

資料 4 環境省及び長野県のレッドリスト該当種

現地調査、資料収集により安曇野市において生息・生育を確認した野生生物のうち、今回の安曇野市版レッドリスト種に選定されなかったが、環境省レッドリスト(2020年)、長野県レッドリスト(植物編 2014年、動物編 2015年)に該当した種を示します。

【植物】

科名	種名	長野県 RL 2014	環境省 RL 2020
ミズニラ	ミズニラ	EN	NT
ハナヤスリ	オオハナワラビ	NT	
コケシノブ	チチブホラゴケ	EN	
オシダ	オクヤマシダ	EN	
ヒノキ	ミヤマビャクシン	VU	
ウマノスズクサ	マルバウマノスズクサ	VU	VU
オモダカ	サジオモダカ	CR	
トチカガミ	ミズオオバコ	VU	VU
ヒルムシロ	ササバモ	EN	
ユリ	ホトトギス	NT	
ラン	ミスズラン	CR	CR
	ヒメフタバラン	NT	
	ミヤマフタバラン	VU	
	タカネトンボ	EN	VU
	シロウマチドリ	EN	VU
	ヒトツボクロ	NT	
	キバナノショウキラン		EN
アヤメ	カキツバタ	NT	NT
ミズアオイ	ミズアオイ	CR	NT
ガマ	オオミクリ	CR	VU
ホシクサ	ホシクサ	VU	
イグサ	ミヤマイ	NT	NT
	ミクリゼキショウ	VU	
	ミヤマズメノヒエ	VU	
	オカズメノヒエ	EN	
	クモマスズメノヒエ		NT
カヤツリグサ	クロボスゲ	EN	
	ウマスゲ	CR	
	タチスゲ	CR	
	ヌカスゲ	CR	
	アシボソスゲ	NT	NT
	オノエスゲ	EN	VU

科名	種名	長野県 RL 2014	環境省 RL 2020
カヤツリグサ	ヌイオスゲ	N	VU
	クゲガヤツリ	NT	
	シロガヤツリ	EN	
イネ	コウヤザサ	NT	
	イヌカモジグサ	VU	EN
	タカネウシノケグサ	EN	
	ムツオレグサ	CR	
	アシカキ	NT	
	シナノカリヤスモドキ	EN	
	イトイチゴツナギ	EN	
	リシリカニツリ	NT	VU
ケシ	オトメエンゴサク	NT	
	ナガミノツルケマン		NT
キンボウゲ	イチリンソウ	NT	
	シラネアオイ	VU	
	ヒキノカサ	VU	VU
	ヒメカラマツ	VU	
マンサク	キリシマミズキ	NT	NT
ユキノシタ	ヨゴレネコノメ	NT	
タコノアシ	タコノアシ	VU	NT
マメ	ミヤマタニワタシ	NT	
	ヤマフジ	EN	
バラ	アオナシ	N	VU
	タテヤマキンバイ	NT	
ブナ	フモトミズナラ	NT	
カバノキ	カワラハンノキ	VU	
ウリ	カラスウリ	DD	
ニシキギ	ムラサキマユミ	NT	
イラクサ	トキホコリ		VU
オトギリソウ	オクヤマオトギリ	DD	
	コオトギリ	DD	NT
ミソハギ	ミズマツバ	VU	VU
アカバナ	シロウマアカバナ	NT	
	ウスゲチョウジタデ		NT
アブラナ	クモマナズナ	NT	VU
	ミチバタガラシ	DD	
ナデシコ	タカネミミナグサ	EN	VU
サクラソウ	ノジトラノオ	VU	VU
	サクラソウ	VU	NT

科名	種名	長野県 RL 2014	環境省 RL 2020
ツツジ	サツキ	NT	
	アカヤシオ	NT	
アカネ	ハナムグラ	CR	VU
	フタバムグラ	CR	
リンドウ	ハルリンドウ	NT	
	テングノコヅチ	NT	NT
キョウチクトウ	コカモメヅル	NT	
ムラサキ	サワリリソウ	NT	
	イヌムラサキ	CR	
ヒルガオ	マメダオシ	CR	CR
オオバコ	アブノメ	CR	
	ゲンバイヅル	NT	VU
シソ	コムラサキ	EN	
	アキチョウジ	VU	
シソ	ナツノタムラソウ	DD	
	ミゾコウジュ	CR	NT
ハマウツボ	ナンバンギセル	EX	
	オニク	NT	
	タカネママコナ	NT	VU
	ハマウツボ	CR	VU
タヌキモ	イヌタヌキモ	NT	NT
キク	イワヨモギ		VU
	シオン		VU
	フジバカマ		NT
	ダイニチアザミ	VU	
	ミヤマイワニガナ	EN	
	オオニガナ	NT	
	アキノハハコグサ	NT	EN
	ヤマボクチ	VU	
スイカズラ	チシマヒヨウタンボク	CR	VU
	オニヒヨウタンボク	NT	VU
セリ	ミヤマニンジン	VU	
	ヌマゼリ		VU

【動物】

分類群	目名	科名	種名	長野県 RL 2015	境省環 RL 2020
哺乳類	該当種なし				
鳥類	カモ	カモ	ヒシクイ		VU
			オオヒシクイ		NT
			マガン		NT
			コクガン		VU
			アカツクシガモ		DD
			オシドリ	N	DD
			トモエガモ	EN	VU
			アカハジロ		DD
			ホオジロガモ	VU	
	カイツブリ	カイツブリ	カンムリカイツブリ	NT	
			ハジロカイツブリ	NT	
	ペリカン	トキ	トキ	EW	CR
			クロツラヘラサギ		EN
	ツル	ツル	マナヅル		VU
	アマツバメ	アマツバメ	ハリオアマツバメ	NT	
	チドリ	シギ	オオジシギ	CR	NT
			シベリアオオハシシギ		DD
			ホウロクシギ		VU
			ツルシギ		VU
			アカアシシギ		VU
			アオアシシギ	VU	
			タカブシギ	VU	VU
			キアシシギ	NT	
			ハマシギ	NT	NT
	チドリ	カモメ	オオセグロカモメ		NT
	タカ	ミサゴ	ミサゴ	EN	NT
		タカ	オジロワシ	EN	VU
			オオワシ	CR	VU
			ツミ	DD	
			サシバ	EN	VU
	ブッポウソウ	カワセミ	アカショウビン	VU	
	キツツキ	キツツキ	オオアカゲラ	NT	
	ハヤブサ	ハヤブサ	チゴハヤブサ	EN	
	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	N	VU
		センニュウ	マキノセンニュウ		NT
		ヨシキリ	コヨシキリ	EN	
		ヒタキ	マミジロ	NT	
			ノビタキ	NT	

分類群	目名	科名	種名	長野県 RL 2015	境省環 RL 2020
鳥類	スズメ	ホオジロ	コジュリン	CR	VU
爬虫類	カメ	スッポン	ニホンスッポン		DD
両生類	該当種なし				
魚類	サケ	サケ	アマゴ	NT	NT
	コイ	コイ	キンブナ	DD	VU
			ゲンゴロウブナ		EN
	ダツ	メダカ	キタノメダカ		VU
昆虫類	トンボ	アオイトトンボ	コバネアオイトトンボ	CR	EN
	ナナフシ	トビナナフシ	シラキトビナナフシ	NT	
	ハサミムシ	クギヌキハサミムシ	クギヌキハサミムシ	NT	
	カメムシ	ハネナガウンカ	アヤヘリハネナガウンカ	DD	
		グンバイウンカ	ヒシウンカモドキ	DD	
		カスミカメムシ	キタカタグロミドリカスミカメ	DD	
			タカネアオカスミカメ	VU	
		マキバサシガメ	ベニモンマキバサシガメ	DD	
		サシガメ	フタオビマダラカモドキサシガメ		DD
		クヌギカメムシ	ヨツモンカメムシ	NT	
		コオイムシ	コオイムシ		NT
	コウチュウ	ガムシ	ガムシ	NT	NT
			コガムシ	N	DD
		コガネムシ	タケムラスジコガネ	DD	
		コメツキムシ	ミヤマホソチャバネコメツキ	NT	
		カミキリムシ	ヒラヤマコブハナカミキリ	NT	
	ハチ	ヒメバチ	ミズバチ	N	DD
		アリ	エゾアカヤマアリ	NT	VU
			タカネクロヤマアリ	DD	
			ケブカツヤオオアリ	DD	DD
		ハキリバチ	オオツツハナバチ	DD	
		ミツバチ	ニッポンヤドリマルハナバチ	DD	
		ハバチ	ルリコシアカハバチ		DD
		クモバチ	フタモンクモバチ	DD	NT
		ヤドリキバチ	トサヤドリキバチ		DD
	チョウ	ヤママユガ	オナガミズアオ	N	NT
		ヤガ	ヒメシロシタバ	N	NT

分類群	目名	科名	種名	長野県 RL 2015	境省環 RL 2020
その他無脊椎動物	クモ	コガネグモ	ニシキオニグモ	NT	
		オナジマイマイ	カドコオオベソマイマイ		NT
		ベッコウマイマイ	カントウベッコウ	N	DD
		シタラ	キヌツヤベッコウ		DD
			クリイロベッコウ	N	DD
			ハクサンベッコウ		DD
		ナンバンマイマイ	ケハダビロウドマイマイ	NT	NT

資料5 安曇野市内の天然記念物・希少野生動植物

【国指定特別天然記念物・天然記念物】

文化財名称	種別内容	所在地	指定年月日	員数	単位
中房温泉の膠状珪酸および珪華	地質鉱物	中房温泉	1928年10月4日	35,493	m ²
ライチョウ	動物	-	1955年2月15日	-	-
カモシカ	動物	-	1955年2月15日	-	-
ヤマネ	動物	-	1975年6月26日	-	-

【長野県指定天然記念物】

文化財名称	種別内容	所在地	指定年月日	員数	単位
ヤリガタケシジミ	動物	-	1975年2月24日	-	-
タカネヒカゲ	動物	-	1975年2月24日	-	-
クモマベニヒカゲ	動物	-	1975年2月24日	-	-
コヒオドシ	動物	-	1975年2月24日	-	-
オオイチモンジ	動物	-	1975年2月24日	-	-
ベニヒカゲ	動物	-	1975年2月24日	-	-
クモマツマキチョウ	動物	-	1975年2月24日	-	-
タカネキマダラセセリ	動物	-	1975年2月24日	-	-
ミヤマモンキチョウ	動物	-	1975年2月24日	-	-
ホンシュウモモンガ	動物	-	1975年11月4日	-	-
ホンドオコジョ	動物	-	1975年11月4日	-	-

【安曇野市指定天然記念物】

文化財名称	種別内容	所在地	指定年月日	員数	単位
吉野熊野権現神社のビャクシン並びにツルマサキ	植物	吉野	2008年10月29日	2	本
吉野荒井堂の大銀杏	植物	吉野	2008年10月29日	1	本
本村の大シダレザクラ	植物	本村	2008年10月29日	1	本
吉野神社のシダレヒノキ	植物	吉野	2008年10月29日	1	本
寺所の山桑の古木	植物	寺所	2008年10月29日	1	本
田沢神明宮社叢	植物	小瀬幅	2008年10月29日	1	区画

文化財名称	種別内容	所在地	指定年月日	員数	単位
田沢山の巨大礫	地質鉱物	新田	2008年10月29日	1	個
正福寺の杉	植物	宮城	2008年10月29日	1	本
穂高神社大門の櫟	植物	穂高区	2008年10月29日	1	本
等々力家のジャクシン	植物	等々力	2008年10月29日	1	本
穂高神社若宮西の櫟	植物	穂高神社	2008年10月29日	1	本
南小倉のシダレヒガンの巨木	植物	南小倉	2008年10月29日	1	本
大室のシダレヒガンの巨木	植物	南小倉	2008年10月29日	1	本
一日市場東の桑の大樹	植物	一日市場	2008年10月29日	1	本
一日市場西の桑の大樹	植物	一日市場	2008年10月29日	1	本
旧浄心寺跡のクロマツ・カヤ・イチヨウ	植物	北小倉	2008年10月29日	3	本
南小倉古原のカシミザクラ	植物	南小倉	2008年10月29日	1	本
住吉神社の杜叢	植物	楡	2008年10月29日	1	区画
旧温明小学校跡のヒマラヤスギ・ユリノキ	植物	二木	2008年10月29日	3	本
住吉神社御神木「ヒノキ」	植物	楡	2008年10月29日	1	本
小芹荒神社のケヤキ	植物	潮沢	2008年10月29日	1	本
小泉金井氏氏神のコノテガシワ	植物	南陸郷	2008年10月29日	1	本
塩川原天狗社のケヤキ	植物	塩川原	2008年10月29日	1	本
小日向のクヌギ	植物	潮沢	2008年10月29日	1	本
矢原社宮地のマユミ	植物	矢原	2009年9月25日	1	本
安曇野のオオルリシジミ	動物	-	2022年3月30日	1	件

■安曇野市に生息する国内希少野生動植物種（種の保存法）

国内希少野生動植物種は、種の保存法によって捕獲等、譲渡し等（いわゆる取引。あげる、売る、貸す、もらう、買う、借りる）、輸出入等が規制されています。その中で、「特定第一種国内希少野生動植物種」は届出事業者が販売・譲渡することができます。「特定第二種国内希少野生動植物種」は販売・頒布を目的とした捕獲や譲渡しのみ規制されます。

国内希少野生動植物種に指定されている種のうち、その個体の繁殖の促進、生息地等の整備等の事業の推進をする必要がある場合は、保護増殖事業計画が策定され、保護増殖事業が実施されています。

【国内希少野生動植物種】

種名	施行年月	特定第一種	特定第二種	保護回復事業計画 (策定年)
イヌワシ	1993年4月			○ (1996年)
クマタカ	1993年4月			
ハヤブサ	1993年4月			
ライチョウ	1993年4月			○ (2012年)
アカモズ	2021年1月			
ゲンゴロウ	2023年1月		○ (2023年1月)	
マルガタゲンゴロウ	2023年1月		○ (2023年1月)	
タガメ	2020年2月		○ (2020年2月)	
コヒヨウモンモドキ	2023年1月			
ヒヨウモンモドキ	2011年4月			
アカハネバツタ	2016年3月			
イナヒロハテンナンショウ	2018年2月	○ (2018年3月)		

※2024年3月現在

■安曇野市に生息する希少野生動植物（長野県希少野生動植物保護条例）

長野県では、保護回復のために一定の規制が必要な種を希少野生動植物に指定しています。

希少野生動植物のうち、「指定希少野生動植物」は、特に保護を図る必要があるとして、捕獲・採取等に届出が必要です。「特別指定希少野生動植物」は特に緊急に保護を図る必要があるとして、捕獲・採取等が原則として禁止されています。

そのうち、県民主体の保護活動が期待される種及び特に緊急に保護が必要な種については、保護回復事業計画が策定されています。

【希少野生動植物（長野県）】

種名	指定	特別指定	保護増殖事業計画 (策定年度)
ササユリ	○		○ (2010年度)
ミズチドリ	○		
トキソウ	○		
イヌワシ	○	○	○ (2006年度)
ブッポウソウ	○	○	○ (2012年度)
クマタカ	○		
ライチョウ	○		○ (2008年度)
タカネキマダラセセリ北アルプス亜種	○		
オオルリシジミ	○		○ (2007年度)
アカハネバツタ	○	○	
タカネヒカゲ北アルプス亜種	○		
アサマシジミ 中部高地帯亜種	○		
アサマシジミ 中部低地帯亜種	○		
クモマツマキチョウ北アルプス・戸隠亜種	○		
ミヤマモンキチョウ北アルプス亜種	○		

※2024年3月現在

資料 6 協力者

本書を作成するにあたり、第1章「1.3 レッドリスト改訂体制と作業内容」(p.10 表 1-3)にある協力者のほかにも、多くの協力者の皆様に調査協力、情報提供、写真提供、助言などをいただきました。

※五十音順、所属及び敬称略

【調査協力・情報提供】

◆植物

井浦 和子、奥原 聡、国営アルプスあづみの公園、長野県烏川溪谷緑地、丸山 武志
豊科郷土博物館友の会植物調査部：阿賀 千夏、浅井 文人、浅川 五子、遠藤 美佳、岡村 佳代子、尾曾 清博、城戸 敦子、木下 悟誌、清沢 るり子、坂巻 佳代子、楯石 明雄、楯石 典子、中島 清隆、新倉 美智子、東本 博之、廣瀬 洋子、二木 典子、細萱 恵美、矢口 一男、矢島 悦子、山下 裕子、吉富 政宣、吉富 千代美、米澤 安子

◆動物

・哺乳類

大館 智志、橋本 肇

・鳥類

信州野鳥の会

・爬虫類

梶 愛

・両生類

唐澤 良英

・昆虫類

磯部 俊昭、各務 寿、腰原 正己、花岡 敏道、松本むしの会、矢花 沙織、矢花 順一

◆全般

株式会社燕山荘（燕山荘・大天荘）、有限会社蝶ヶ岳ヒュッテ（蝶ヶ岳ヒュッテ、大滝山荘）、中房温泉株式会社、長野県安曇野建設事務所、長野県環境保全研究所、有限会社日本アルプス常念小屋、日比野 宏夫

【写真提供】

◆植物

浅川 行雄、井浦 和子、(株)環境アセスメントセンター (EAC)、高山 裕司、豊科郷土博物館、橋渡 勝也、藤田 淳一、松田 貴子

◆動物

・哺乳類

奥谷 洋子、田中 葉、橋本 肇、松宮 裕秋

・鳥類

植松 永至、大関 豊、原 星一、那須野 雅好、松宮 裕秋

・両生類

(株)環境アセスメントセンター (EAC)、松宮 裕秋

・爬虫類

(株)環境アセスメントセンター (EAC)、濱田 竜輔

・魚類

(株)環境アセスメントセンター (EAC)

・昆虫類

安西 稔、小野寺 宏文、(株)環境アセスメントセンター (EAC)、齊藤 雄太、四方 圭一郎、
田島 尚、中田 信好、中村 寛志、那須野 雅好、福本 匡志、降旗 進一郎、丸山 隆、美馬 純一、
矢花 沙織

・その他無脊椎動物

飯島 國昭、飯田市美術博物館、北野 聡、(株)環境アセスメントセンター (EAC)、酒井 孝明、
中田 信好

◆景観・生活風景等

浅川 行雄、(株)環境アセスメントセンター (EAC)、那須野 雅好、松田 貴子

和名索引（レッドリスト種）

【植物】

	和名	学名	カテゴリー		ページ番号	
			2014	2024	2014	2024
ア	アイスタチツボスミレ	<i>Viola sacchalinensis</i>	EX	DD	81	
	アオガヤツリ	<i>Cyperus nipponicus</i> var. <i>nipponicus</i>	CR+EN	NT	115	
	アカハナワラビ	<i>Botrychium nipponicum</i> var. <i>nipponicum</i>	VU	NT	120	
	アギナシ	<i>Sagittaria aginashi</i>	NT	DD	171	
	アケボノシュスラン	<i>Goodyera foliosa</i> var. <i>laevis</i>	CR+EN	CR+EN	117	
	アケボノスミレ	<i>Viola rossii</i>	VU	VU	135	
	アケボノソウ	<i>Swertia bimaculata</i>	VU	VU	136	
	アサザ	<i>Nymphoides peltata</i>	EX	DD	83	
	アズマイチゲ	<i>Anemone raddeana</i>	NT	NT	154	
	アズマスゲ	<i>Carex lasiolepis</i>		NT		91
	アズミトリカブト	<i>Aconitum azumiense</i>	CR+EN	CR+EN	90	
	アズミノヘラオモダカ	<i>Alisma canaliculatum</i> var. <i>azuminoense</i>	CR+EN	CR+EN	107	
	アゼテンツキ	<i>Fimbristylis squarrosa</i>	NT	NT	181	
	アゼトウガラシ	<i>Lindernia micrantha</i>	VU	VU	141	
	アゼナ	<i>Lindernia procumbens</i>		CR+EN		84
	アゼナルコ	<i>Carex dimorpholepis</i>	CR+EN	CR+EN	114	
	アブラシバ	<i>Carex satsumensis</i>	CR+EN	CR+EN	115	
	アマナ	<i>Amana edulis</i>	NT	NT	174	
	アヤメ	<i>Iris sanguinea</i>	NT	NT	174	
	アリドオシラン	<i>Myrmechis japonica</i>	EX	EX	87	
	アリノトウグサ	<i>Haloragis micrantha</i>	CR+EN	CR+EN	99	
	アワガエリ	<i>Phleum paniculatum</i>	NT	NT	177	
	アワゴケ	<i>Callitriche japonica</i>		CR+EN		84
イ	イチヨウラン	<i>Dactyloctenium aegyptium</i>	NT	VU	183	
	イトイ	<i>Juncus maximowiczii</i>	NT	NT	175	
	イトイヌノハナヒゲ	<i>Rhynchospora faberi</i>	CR+EN	CR+EN	116	
	イトイヌノヒゲ	<i>Eriocaulon decemflorum</i>	CR+EN	CR+EN	110	
	イトモ	<i>Potamogeton berchtoldii</i>	VU	CR+EN	147	
	イナヒロハテンナンショウ	<i>Arisaema inaense</i>	CR+EN	CR+EN	112	
	イヌスギナ	<i>Equisetum palustre</i>	VU	VU	119	
	イヌセンブリ	<i>Swertia tosaensis</i>	EX	EX	83	
	イヌノフグリ	<i>Veronica polita</i> var. <i>lilacina</i>	CR+EN	CR+EN	104	
	イヌハギ	<i>Lespedeza tomentosa</i>	NT	VU	158	
	イヌブナ	<i>Fagus japonica</i>	VU	NT	122	
	イブキゼリ	<i>Tilingia holopetala</i>	EX	EX	82	
	イブキボウフウ	<i>Libanotis ugoensis</i> var. <i>japonica</i>	EX	EX	82	
	イボクサ	<i>Murdannia keisak</i>	NT	NT	175	
	イワオウギ	<i>Hedysarum vicioides</i> subsp. <i>japonicum</i> var. <i>japonicum</i>	CR+EN	CR+EN	96	

	和 名	学 名	カテゴリー		ページ番号	
			2014	2024	2014	2024
	イワキンバイ	<i>Potentilla ancistrifolia</i> var. <i>dickinsii</i>	CR+EN	CR+EN	96	
	イワショウブ	<i>Triantha japonica</i>	NT	NT	173	
	イワタケソウ	<i>Hystrix duthiei</i> subsp. <i>Japonica</i>	DD	DD	187	
ウ	ウキヤガラ	<i>Bolboschoenus fluviatilis</i> subsp. <i>yagara</i>	NT	NT	182	
	ウシクサ	<i>Schizachyrium brevifolium</i>	CR+EN	CR+EN	112	
	ウスギタンポポ	<i>Taraxacum denudatum</i>	CR+EN	DD	107	
	ウスゲヤナギラン	<i>Chamerion angustifolium</i> subsp. <i>circumvagum</i>		VU		89
	ウスヒメワラビモドキ	<i>Acystopteris taiwaniana</i>		VU		85
	ウマノズクサ	<i>Aristolochia debilis</i>	VU	VU	125	
	ウメモドキ	<i>Ilex serrata</i>	NT	NT	160	
	ウリカワ	<i>Sagittaria pygmaea</i>	VU	VU	146	
	ウリクサ	<i>Lindernia crustacea</i>	CR+EN	DD	103	
エ	エゾアブラガヤ	<i>Scirpus asiaticus</i>		CR+EN		82
	エゾカモシグサ	<i>Elymus pendulinus</i> var. <i>yezoense</i>	DD	DD	186	
	エゾシロネ	<i>Lycopus uniflorus</i>	VU	VU	139	
	エゾスグリ	<i>Ribes latifolium</i>	CR+EN	CR+EN	95	
	エゾスズラン	<i>Epipactis papillosa</i>	NT	NT	183	
	エゾデンダ	<i>Polypodium sibiricum</i>	VU	VU	121	
	エゾノサヤヌカグサ	<i>Leersia oryzoides</i>	EX	CR+EN	85	
	エゾハタザオ	<i>Catolobus pendula</i>	VU	VU	125	
	エゾムラサキ	<i>Myosotis sylvatica</i>	NT	NT	166	
	エゾヤナギ	<i>Salix rorida</i>	CR+EN	CR+EN	89	
	エビモ	<i>Potamogeton crispus</i>		NT		90
オ	オオアカウキクサ	<i>Azolla japonica</i>	VU	CR+EN	122	
	オオアカネ	<i>Rubia hexaphylla</i>	CR+EN	CR+EN	101	
	オオアカバナ	<i>Epilobium hirsutum</i>		VU		89
	オオイタヤメイゲツ	<i>Acer shirasawanum</i>	VU	NT	132	
	オオイチゴツナギ	<i>Poa nipponica</i>	DD	DD	187	
	オオカワズスゲ	<i>Carex stipata</i>	VU	NT	149	
	オオクボシダ	<i>Micropolypodium okuboi</i>	CR+EN	CR+EN	88	
	オオシナノオトギリ	<i>Hypericum ovalifolium</i>	EX	DD	78	
	オオシラヒゲソウ	<i>Parnassia foliosa</i> var. <i>japonica</i>		NT		91
	オオタチヤナギ	<i>Salix pierotii</i>	EX	VU	77	
	オオツリバナ	<i>Euonymus planipes</i>	VU	DD	133	
	オオバクサフジ	<i>Vicia pseudo-orobus</i>		NT		91
	オオヒゲナガカリヤスモドキ	<i>Miscanthus intermedius</i>	CR+EN	CR+EN	111	
	オオヒナノウスツボ	<i>Scrophularia kakudensis</i>	CR+EN	CR+EN	103	
	オオヒメワラビ	<i>Deparia okuboana</i>	VU	VU	121	
	オオヤマカタバミ	<i>Oxalis obtriangulata</i>	VU	VU	130	
	オカウツボ	<i>Orobanche coerulescens</i>	CR+EN	CR+EN	104	
	オガルカヤ	<i>Cymbopogon tortilis</i> var. <i>goeringii</i>	NT	CR+EN	175	
	オキナグサ	<i>Pulsatilla cernua</i>	CR+EN	CR+EN	92	

	和 名	学 名	カテゴリー		ページ番号	
			2014	2024	2014	2024
	オタルスゲ	<i>Carex otaruensis</i>	NT	NT	180	
	オナモミ	<i>Xanthium strumarium</i> subsp. <i>sibiricum</i>	VU	DD	146	
	オニスゲ	<i>Carex dickinsii</i>	CR+EN	CR+EN	113	
	オミナエシ	<i>Patrinia scabiosifolia</i>	VU	VU	142	
	オヤマノエンドウ	<i>Oxytropis japonica</i>	VU	VU	130	
カ	カキラン	<i>Epipactis thunbergii</i>	DD	DD	188	
	カザグルマ	<i>Clematis patens</i>	DD	DD	185	
	カシオザクラ	<i>Cerasus leveilleana</i> f. <i>kashioensis</i>	CR+EN	DD	96	
	カズノコグサ	<i>Beckmannia syzigachne</i>	VU	VU	148	
	カセンソウ	<i>Inula salicina</i> var. <i>asiatica</i>	CR+EN	CR+EN	106	
	カタクリ	<i>Erythronium japonicum</i>	NT	NT	172	
	ガッサンチドリ	<i>Platanthera takedae</i> subsp. <i>uzenensis</i>	DD	DD	190	
	カニツリグサ (在来)	<i>Trisetum bifidum</i>		VU		87
	カミコウチテンナンショウ	<i>Arisaema nikoense</i> subsp. <i>brevicollum</i>		CR+EN		81
	カモメラン	<i>Galearis cyclochila</i>	VU	VU	149	
	カラクサシダ	<i>Pleurosoriopsis makinoi</i>	VU	VU	121	
	カラスノゴマ	<i>Corchoropsis crenata</i>	NT	VU	161	
	カラフトドジョウツナギ	<i>Glyceria lithuanica</i>	NT	NT	176	
	カワヂシャ	<i>Veronica undulata</i>	CR+EN	CR+EN	104	
	カワラアカザ	<i>Chenopodium acuminatum</i> var. <i>vachelii</i>	NT	NT	154	
	カワラケツメイ	<i>Chamaecrista nomame</i>		VU		87
	カワラニガナ	<i>Ixeris tamagawaensis</i>	VU	VU	144	
	カントウヨメナ	<i>Aster yomena</i> var. <i>dentatus</i>	CR+EN	DD	105	
キ	キキョウ	<i>Platycodon grandiflorus</i>	VU	CR+EN	143	
	キクアザミ	<i>Saussurea ussuriensis</i>	EX	CR+EN	85	
	キクザキイチゲ	<i>Anemone pseudoaltaica</i>	VU	NT	124	
	ギンギシ	<i>Rumex japonicus</i>		CR+EN		83
	キセワタ	<i>Leonurus macranthus</i>	VU	VU	138	
	キソアザミ	<i>Cirsium fauriei</i>		DD		95
	キハダ	<i>Phellodendron amurense</i> var. <i>amurense</i>	VU	DD	131	
	キバナアキギリ	<i>Salvia nipponica</i> var. <i>nipponica</i>	VU	VU	140	
	キバナイカリソウ	<i>Epimedium koreanum</i>	EX	DD	77	
	キバナハタザオ	<i>Sisymbrium luteum</i>	NT	VU	157	
	キンバイソウ	<i>Trollius hondoensis</i>	CR+EN	CR+EN	92	
	ギンラン	<i>Cephalanthera erecta</i> var. <i>erecta</i>	CR+EN	NT	117	
ク	クサネム	<i>Aeschynomene indica</i>	VU	VU	128	
	クサフジ	<i>Vicia cracca</i>		DD		94
	クロアブラガヤ	<i>Scirpus sylvaticus</i> var. <i>maximowiczii</i>	NT	NT	182	
	クロカンバ	<i>Rhamnus costata</i>	CR+EN	CR+EN	98	
	クロモ	<i>Hydrilla verticillata</i>	VU	DD	147	
ケ	ケショウヤナギ	<i>Salix arbutifolia</i>	NT	NT	152	
	ケヤマウツボ	<i>Lathraea japonica</i> var. <i>miqueliana</i>		VU		90

	和 名	学 名	カテゴリー		ページ番号	
			2014	2024	2014	2024
	ケンボナシ	<i>Hovenia dulcis</i>	NT	NT	161	
コ	コイヌノハナヒゲ	<i>Rhynchospora fujiiiana</i>	CR+EN	CR+EN	117	
	コウボウ	<i>Anthoxanthum nitens</i> var. <i>sachalinense</i>		VU		86
	コウリンカ	<i>Tephrosia flammea</i> subsp. <i>glabrifolia</i>	VU	VU	145	
	コガマ	<i>Typha orientalis</i>	NT	NT	178	
	ゴキヅル	<i>Actinostemma tenerum</i>	VU	VU	135	
	コケイラン	<i>Oreorchis patens</i>	CR+EN	CR+EN	118	
	コシロネ	<i>Lycopus cavaleriei</i>	NT	NT	167	
	コスギラン	<i>Huperzia selago</i>	NT	NT	150	
	コスミレ	<i>Viola japonica</i>	VU	VU	134	
	コタヌキラン	<i>Carex doenitzii</i>	NT	NT	180	
	コバノイラクサ	<i>Urtica laetevirens</i>	NT	DD	152	
	コバノヒルムシロ	<i>Potamogeton cristatus</i>	CR+EN	DD	108	
	コヤブタバコ	<i>Carpesium cernuum</i>	NT	NT	169	
	コワニグチソウ	<i>Polygonatum miserum</i>	NT	DD	173	
サ	サイカチ	<i>Gleditsia japonica</i>	NT	NT	158	
	サクラスミレ	<i>Viola hirtipes</i>	VU	VU	133	
	ササバギンラン	<i>Cephalanthera longibracteata</i>	NT	NT	182	
	ササユリ	<i>Lilium japonicum</i>	CR+EN	CR+EN	109	
	ザゼンソウ	<i>Symplocarpus renifolius</i>	CR+EN	VU	113	
	サナギイチゴ	<i>Rubus pungens</i> var. <i>oldhamii</i>	VU	DD	128	
	ザリコミ	<i>Ribes maximowiczianum</i>	VU	VU	127	
	サワギキョウ	<i>Lobelia sessilifolia</i>	NT	VU	169	
	サワトウガラシ	<i>Deinostema violaceum</i>		CR+EN		84
	サワヒヨドリ	<i>Eupatorium lindleyanum</i>	VU	VU	144	
	サンリンソウ	<i>Anemone stolonifera</i>	DD	DD	184	
シ	シカクイ	<i>Eleocharis wichurae</i>	DD	DD	188	
	シコタンソウ	<i>Saxifraga bronchialis</i> subsp. <i>funstonii</i> var. <i>rebunshirensis</i>	CR+EN	CR+EN	95	
	シズイ	<i>Schoenoplectus nipponicus</i>	VU	VU	149	
	シデシヤジン	<i>Asyneuma japonicum</i>	NT	NT	169	
	シナノナデシコ	<i>Dianthus shinanensis</i>	VU	VU	123	
	シナノヤマオトギリ	<i>Hypericum gracillimum</i>	EX	DD	78	
	ジムカデ	<i>Harrimanella stelleriana</i>	CR+EN	CR+EN	101	
	ジャコウソウ	<i>Chelonopsis moschata</i>	EX	DD	84	
	ショウキラン	<i>Yuania japonica</i>	NT	NT	184	
	ショウブ	<i>Acorus calamus</i>	NT	DD	177	
	シラネアザミ	<i>Saussurea nikoensis</i>	VU	VU	144	
	シロイヌノヒゲ	<i>Eriocaulon miquelianum</i>	CR+EN	CR+EN	110	
	シロウマレイジンソウ	<i>Aconitum pterocaulum</i> var. <i>siroumense</i>	CR+EN	CR+EN	91	
	シロネ	<i>Lycopus lucidus</i>	VU	VU	138	
	ジロボウエンゴサク	<i>Corydalis decumbens</i>		DD		94

	和 名	学 名	カテゴリー		ページ番号	
			2014	2024	2014	2024
	シロヤナギ	<i>Salix dolichostyla</i> subsp. <i>dolichostyla</i>	CR+EN	DD	89	
	ジンバイソウ	<i>Platanthera florentii</i>	NT	NT	183	
ス	スグリ	<i>Ribes sinanense</i>	CR+EN	DD	95	
	スズサイコ	<i>Vincetoxicum pycnostelma</i>	NT	VU	165	
	スズメウリ	<i>Zehneria japonica</i>	EX	DD	81	
	スズメガヤ	<i>Eragrostis cilianensis</i>		CR+EN		82
	スズメノカタビラ	<i>Poa annua</i> subsp.		VU		87
	スズメノテッポウ	<i>Alopecurus aequalis</i> var. <i>amurensis</i>		VU		86
セ	セキショウモ	<i>Vallisneria natans</i>	CR+EN	CR+EN	108	
	セツブンソウ	<i>Eranthis pinnatifida</i>	CR+EN	CR+EN	92	
	セトガヤ	<i>Alopecurus japonicus</i>	EX	EX	85	
	セントウソウ	<i>Chamaele decumbens</i>	CR+EN	DD	100	
	センニンソウ	<i>Clematis terniflora</i>	VU	NT	124	
	センブリ	<i>Swertia japonica</i>	VU	VU	137	
タ	タカサゴソウ	<i>Ixeris chinensis</i> subsp. <i>strigosa</i>	CR+EN	CR+EN	106	
	タガソデソウ	<i>Cerastium pauciflorum</i> var. <i>amurense</i>	NT	NT	152	
	タカネサギソウ	<i>Platanthera mandarinorum</i> subsp. <i>maximowicziana</i>	CR+EN	CR+EN	119	
	タカネナデシコ	<i>Dianthus superbus</i> var. <i>speciosus</i>	NT	NT	153	
	タカネマスクサ	<i>Carex planata</i>	NT	NT	180	
	タコアシオトギリ	<i>Hypericum erectum</i>	NT	DD	155	
	タチコゴメグサ	<i>Euphrasia maximowiczii</i> var. <i>maximowiczii</i>	NT	NT	168	
	タムラソウ	<i>Serratula coronata</i> subsp. <i>insularis</i>	VU	VU	145	
チ	チシマネコノメソウ	<i>Chrysosplenium kamtschaticum</i> var. <i>kamtschaticum</i>	NT	NT	157	
	チャセンシダ	<i>Asplenium trichomanes</i>	NT	NT	151	
	チョウセンミネバリ	<i>Betula costata</i>		VU		88
ツ	ツメレンゲ	<i>Orostachys japonica</i>	VU	VU	126	
	ツルカコソウ	<i>Ajuga shikotanensis</i>	EX	DD	83	
	ツルケマン	<i>Corydalis ochotensis</i>	NT	NT	156	
	ツルニガクサ	<i>Teucrium viscidum</i> var. <i>miquelianum</i>	NT	NT	168	
	ツルフジバカマ	<i>Vicia amoena</i>		VU		88
テ	テバコワラビ	<i>Athyrium atkinsonii</i>	NT	NT	151	
ト	トキソウ	<i>Pogonia japonica</i>	DD	DD	190	
	ドクウツギ	<i>Coriaria japonica</i>	VU	VU	131	
	トチカガミ	<i>Hydrocharis dubia</i>	CR+EN	CR+EN	108	
ナ	ナガエミクリ	<i>Sparganium japonicum</i>		NT		90
	ナベナ	<i>Dipsacus japonicus</i>	VU	VU	142	
ニ	ニイタカスゲ	<i>Carex leucochlora</i> var. <i>aphanandra</i>		DD		93
	ニガキ	<i>Picrasma quassioides</i>	NT	NT	159	
	ニガクサ	<i>Teucrium japonicum</i>	VU	VU	140	
	ニシキソウ	<i>Chamaesyce humifusa</i>	VU	VU	131	
ヌ	ヌマガヤ	<i>Moliniopsis japonica</i>	NT	NT	177	

	和 名	学 名	カテゴリー		ページ番号	
			2014	2024	2014	2024
	ヌマガヤツリ	<i>Cyperus glomeratus</i>	NT	CR+EN	181	
	ヌマハリイ	<i>Eleocharis mamillata</i> var. <i>cyclocarpa</i>	CR+EN	CR+EN	116	
	ヌメリグサ	<i>Sacciolepis spicata</i> var. <i>oryztorum</i>	CR+EN	DD	112	
ネ	ネジバナ	<i>Spiranthes sinensis</i> var. <i>amoena</i>	NT	NT	184	
ノ	ノウゴウイチゴ	<i>Fragaria iinumae</i>	EX	DD	80	
	ノカラマツ	<i>Thalictrum simplex</i> var. <i>brevipes</i>	EX	EX	77	
	ノダイオウ	<i>Rumex longifolius</i>	VU	CR+EN	123	
	ノハナショウブ	<i>Iris ensata</i> var. <i>spontanea</i>	NT	CR+EN	174	
	ノミノツヅリ (狭義)	<i>Arenaria serpyllifolia</i> var. <i>serpyllifolia</i>		VU		89
	ノヤマトンボ (オオバノトンボソウ)	<i>Platanthera minor</i>	EX	CR+EN	87	
ハ	バイカモ	<i>Ranunculus nipponicus</i> var. <i>submersus</i>	NT	NT	155	
	ハグロソウ	<i>Peristrophe japonica</i>	VU	CR+EN	141	
	ハダカシヤクジョウバナ	<i>Monotropa hypopithys</i> var. <i>glaberrima</i>	NT	NT	164	
	ハナイカリ	<i>Halenia corniculata</i>	NT	VU	165	
	ハナウド	<i>Heracleum sphondylium</i> var. <i>nipponicum</i>	NT	DD	163	
	ハナネコノメ	<i>Chrysosplenium album</i> var. <i>stamineum</i>	VU	VU	127	
	ハナハタザオ	<i>Dontostemon dentatus</i>	EX	EX	79	
	ハリイ	<i>Eleocharis congesta</i>	NT	NT	181	
	ハリガネスゲ	<i>Carex capillacea</i>	NT	NT	179	
	ハリコウガイゼキショウ	<i>Juncus wallichianus</i>	DD	DD	186	
ヒ	ヒエガエリ	<i>Polypogon fugax</i>		CR+EN		83
	ヒカゲツツジ	<i>Rhododendron keiskei</i>	NT	NT	165	
	ヒキヨモギ	<i>Siphonostegia chinensis</i>	VU	VU	141	
	ヒトツバテンナンショウ	<i>Arisaema monophyllum</i>		VU		86
	ヒナガヤツリ	<i>Cyperus flaccidus</i>	CR+EN	VU	115	
	ヒメアカバナ	<i>Epilobium fauriei</i>	VU	VU	135	
	ヒメウキクサ	<i>Landoltia punctata</i>		DD		92
	ヒメゴウソ	<i>Carex phacota</i>	DD	DD	187	
	ヒメザゼンソウ	<i>Symplocarpus nipponicus</i>	CR+EN	NT	113	
	ヒメシロネ	<i>Lycopus maackianus</i>	VU	VU	139	
	ヒメスギラン	<i>Huperzia miyoshiana</i>	VU	VU	119	
	ヒメヒラテンツキ	<i>Fimbristylis autumnalis</i>		DD		93
	ヒメミソハギ	<i>Ammannia multiflora</i>	CR+EN	CR+EN	99	
	ヒメミヤマウズラ	<i>Goodyera repens</i>	CR+EN	CR+EN	118	
	ヒメヤブラン	<i>Liriope minor</i>	CR+EN	DD	110	
	ヒメヨツバムグラ	<i>Galium gracilens</i>	VU	VU	137	
	ヒメヨモギ (在来)	<i>Artemisia lancea</i>		CR+EN		85
	ヒメワラビ	<i>Thelypteris torresiana</i> var. <i>calvata</i>	CR+EN	CR+EN	88	
	ヒヨクソウ	<i>Veronica laxa</i>	NT	CR+EN	168	
	ヒルムシロ	<i>Potamogeton distinctus</i>	VU	VU	147	
	ビロードシダ	<i>Pyrrosia linearifolia</i>	VU	VU	122	
	ヒロハノコウガイゼキショウ	<i>Juncus diastrophanthus</i>	VU	VU	148	

	和 名	学 名	カテゴリー		ページ番号	
			2014	2024	2014	2024
	ヒロハノコスカグサ	<i>Aniselytron treutleri</i> var. <i>japonicum</i>	CR+EN	CR+EN	111	
	ヒンジガヤツリ	<i>Lipocarpa microcephala</i>	EX	CR+EN	86	
	ヒンジモ	<i>Lemna trisulca</i>	EX	EX	86	
フ	フウリンウメモドキ	<i>Ilex geniculata</i> var. <i>geniculata</i>	CR+EN	CR+EN	98	
	フクシマシャジン	<i>Adenophora divaricata</i>	VU	CR+EN	143	
	フクジュソウ	<i>Adonis ramosa</i>	CR+EN	CR+EN	91	
	フサモ	<i>Myriophyllum verticillatum</i>	EX	EX	81	
	フジシダ	<i>Monachosorum maximowiczii</i>	VU	VU	120	
	フトヒルムシロ	<i>Potamogeton fryeri</i>	CR+EN	CR+EN	109	
ホ	ホザキイチヨウラン	<i>Malaxis monophyllos</i>	CR+EN	CR+EN	118	
	ホザキノフサモ	<i>Myriophyllum spicatum</i>	NT	CR+EN	162	
	ホザキノミミカキグサ	<i>Utricularia caerulea</i>	EX	EX	84	
	ホスゲ	<i>Carex deweyana</i> subsp. <i>senanensis</i>		DD		92
	ホソエカエデ	<i>Acer capillipes</i>	NT	NT	159	
	ホソバノキリンソウ	<i>Phedimus aizoon</i> var. <i>aizoon</i>	EX	DD	79	
	ホソバノツルリンドウ	<i>Pterygocalyx volubilis</i>		NT		92
	ホソバミズヒキモ	<i>Potamogeton octandrus</i> var. <i>octandrus</i>	NT	CR+EN	171	
	ボタンネコノメソウ	<i>Chrysosplenium kiotoense</i>	CR+EN	VU	94	
	ホドイモ	<i>Apios fortunei</i>	VU	VU	129	
	ホンシャクナゲ	<i>Rhododendron japonoheptamerum</i> var. <i>hondoense</i>	NT	NT	164	
マ	マキエハギ	<i>Lespedeza virgata</i>	CR+EN	CR+EN	97	
	マキノスミレ	<i>Viola violacea</i> var. <i>makinoi</i>	VU	VU	134	
	マツバスケ	<i>Carex biwensis</i>	NT	NT	179	
	マツバニンジン	<i>Linum stelleroides</i>	EX	DD	80	
	マツムシソウ	<i>Scabiosa japonica</i> var. <i>japonica</i>	VU	CR+EN	142	
	マツラン	<i>Gastrochilus matsuran</i>	DD	DD	190	
	マメザクラ	<i>Cerasus incisa</i> var. <i>incisa</i>	DD	DD	185	
	マルバコンロンソウ	<i>Cardamine tanakae</i>	VU	NT	126	
	マルバスマレ	<i>Viola keiskei</i>	VU	VU	134	
	マルバノキ	<i>Disanthus cercidifolius</i>	CR+EN	CR+EN	94	
	マルバマンネングサ	<i>Sedum makinoi</i>	VU	DD	126	
	マンシュウヤマサギソウ	<i>Platanthera mandarinorum</i> subsp. <i>maximowicziana</i> var. <i>cornu-bovis</i>	DD	DD	189	
ミ	ミサヤマチャヒキ	<i>Helictotrichon hideoi</i>	CR+EN	CR+EN	111	
	ミズオトギリ	<i>Triadenum japonicum</i>	NT	VU	156	
	ミズキカシグサ	<i>Rotala rosea</i>	CR+EN	CR+EN	99	
	ミズスギ	<i>Lycopodium cernuum</i>	CR+EN	CR+EN	87	
	ミズチドリ	<i>Platanthera hologlottis</i>	DD	DD	189	
	ミズトンボ	<i>Habenaria sagittifera</i>	DD	DD	188	
	ミセンアオスゲ	<i>Carex leucochlora</i> var. <i>horikawae</i>		DD		93
	ミゾカクシ	<i>Lobelia chinensis</i>	CR+EN	CR+EN	105	
	ミソハギ	<i>Lythrum anceps</i>	NT	NT	162	

	和 名	学 名	カテゴリー		ページ番号	
			2014	2024	2014	2024
	ミミカキグサ	<i>Utricularia bifida</i>	CR+EN	CR+EN	105	
	ミヤコグサ	<i>Lotus corniculatus</i> var. <i>japonicus</i>	NT	CR+EN	159	
	ミヤマジュズスゲ	<i>Carex dissitiflora</i>	NT	NT	179	
	ミヤマチドリ	<i>Platanthera takedae</i> subsp. <i>takedae</i>	DD	DD	189	
ム	ムカゴニンジン	<i>Sium ninsi</i>	VU	CR+EN	136	
	ムカシヨモギ	<i>Erigeron acris</i> var. <i>kamtschaticus</i>	VU	VU	143	
	ムシャリンドウ	<i>Dracocephalum argunense</i>	CR+EN	CR+EN	102	
	ムラサキコウキクサ	<i>Lemna japonica</i>	EX	DD	86	
メ	メガルカヤ	<i>Themeda triandra</i> var. <i>japonica</i>		CR+EN		83
	メグスリノキ	<i>Acer maximowiczianum</i>	VU	VU	132	
	メハジキ	<i>Leonurus japonicus</i>	VU	VU	137	
モ	モウセンゴケ	<i>Drosera rotundifolia</i>	EX	CR+EN	78	
	モメンヅル	<i>Astragalus reflexistipulus</i>	VU	CR+EN	129	
ヤ	ヤエムグラ	<i>Galium spurium</i> var. <i>echinospermon</i>		DD		94
	ヤチアザミ	<i>Cirsium shinanense</i>		CR+EN		85
	ヤチカワズスゲ	<i>Carex omiana</i> var. <i>omiana</i>	CR+EN	CR+EN	114	
	ヤナギタンポポ	<i>Hieracium umbellatum</i>	NT	CR+EN	170	
	ヤナギモ	<i>Potamogeton oxyphyllus</i>	NT	VU	172	
	ヤブツルアズキ	<i>Vigna angularis</i> var. <i>nipponensis</i>	VU	VU	130	
	ヤマキケマン	<i>Corydalis ophiocarpa</i>	NT	NT	156	
	ヤマグルマ	<i>Trochodendron aralioides</i>	VU	VU	124	
	ヤマサギソウ	<i>Platanthera mandarinorum</i> subsp. <i>mandarinorum</i> var. <i>oreades</i>		CR+EN		81
	ヤマジソ	<i>Mosla japonica</i>	EX	DD	84	
	ヤマシャクヤク	<i>Paeonia japonica</i>	CR+EN	CR+EN	93	
	ヤマトキシソウ	<i>Pogonia minor</i>		CR+EN		81
	ヤマトキホコリ	<i>Elatostema laetevirens</i>	CR+EN	CR+EN	89	
	ヤマハナワラビ	<i>Botrychium multifidum</i> var. <i>multifidum</i>	VU	VU	120	
ユ	ユウスゲ	<i>Hemerocallis citrina</i> var. <i>vespertina</i>		CR+EN		82
	ユキワリソウ	<i>Primula farinosa</i> subsp. <i>modesta</i>	EX	EX	82	
ヨ	ヨツバハギ	<i>Vicia nipponica</i> var. <i>nipponica</i>		VU		88
ワ	ワダソウ	<i>Pseudostellaria heterophylla</i>	NT	NT	153	
	ワチガイソウ	<i>Pseudostellaria heterantha</i>	CR+EN	DD	90	
	ワニグチソウ	<i>Polygonatum involucratum</i>	NT	DD	173	

【動物】

	和 名	学 名	分 類 群	カテゴリー		ページ番号	
				2014	2024	2014	2024
ア	アイヌテントウ	<i>Coccinella ainu</i>	昆虫類		NT		120
	アオアシナガハナムグリ	<i>Gnorimus subopacus</i>	昆虫類	NT	NT	286	
	アオカミキリ	<i>Schwarzerium quadricollis quadricollis</i>	昆虫類	NT	NT	294	
	アオサナエ	<i>Nihonogomphus viridis</i>	昆虫類	VU	NT	242	
	アオバズク	<i>Ninox scutulata</i>	鳥類	DD	CR+EN	211	
	アオハダトンボ	<i>Calopteryx japonica</i>	昆虫類	NT	NT	263	
	アカアシオオアオカミキリ	<i>Chloridolum japonicum</i>	昆虫類	NT	NT	294	
	アカガネオサムシ	<i>Carabus granulatus telluris</i>	昆虫類	VU	VU	244	
	アカザ	<i>Liobagrus reinii</i>	魚類	VU	VU	224	
	アカセセリ	<i>Hesperia florinda florinda</i>	昆虫類	VU	CR+EN	257	
	アカハネバッタ	<i>Celes akitanus</i>	昆虫類	EX	EX	229	
	アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i>	両生類	NT	NT	220	
	アカマダラハナムグリ	<i>Anthracophora rusticola</i>	昆虫類	NT	NT	286	
	アカモズ	<i>Lanius cristatus</i>	鳥類	CR+EN	CR+EN	203	
	アサマシジミ中部高地帯亜種	<i>Plebejus subsolanus yarigadakeanus</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	238	
	アサマシジミ中部低地帯亜種	<i>Plebejus subsolanus yaginus</i>	昆虫類		EX	238	
	アズミトガリネズミ	<i>Sorex hosonoi</i>	哺乳類	VU	VU	193	
	アユ	<i>Plecoglossus altivelis altivelis</i>	魚類	EW	EW	223	
	アラメハナカミキリ	<i>Sachalinobia koltzei</i>	昆虫類	NT	NT	293	
イ	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	鳥類	NT	NT	206	
	イナゴモドキ	<i>Mecostethus parapleurus</i>	昆虫類	VU	VU	243	
	イヌワシ	<i>Aquila chrysaetos</i>	鳥類	CR+EN	CR+EN	202	
	イボバッタ	<i>Trilophidia japonica</i>	昆虫類	NT	NT	268	
ウ	ウエダエンマコガネ	<i>Onthophagus olsoufieffi</i>	昆虫類	VU	VU	248	
	ウスイロオナガシジミ	<i>Antigius butleri</i>	昆虫類	NT	NT	304	
	ウスジロドクガ	<i>Calliteara virginea</i>	昆虫類	CR+EN	EX	240	
	ウスズミケンモン	<i>Acronicta carbonaria</i>	昆虫類	DD	DD	312	
	ウスバカマキリ	<i>Mantis religiosa sinica</i>	昆虫類	NT	NT	265	
	ウズラ	<i>Coturnix japonica</i>	鳥類	CR+EN	CR+EN	201	
	ウチワヤンマ	<i>Sinictinogomphus clavatus</i>	昆虫類	NT	NT	263	
	ウマノオバチ	<i>Euurobracon yokahamae</i>	昆虫類	VU	VU	255	
	ウラキンシジミ	<i>Ussuriana stygiana</i>	昆虫類		NT		121
	ウラギンスジヒョウモン	<i>Argyronome laodice japonica</i>	昆虫類	NT	NT	306	
	ウラジロミドリシジミ	<i>Favonius saphirinus</i>	昆虫類	VU	VU	258	
	ウラナミアカシジミ	<i>Japonica saepestriata saepestriata</i>	昆虫類	NT	NT	305	
エ	エサキニセヒメガガンボ	<i>Protanyderus esakii</i>	昆虫類	NT	NT	299	
	エゾエンマコオロギ	<i>Teleogryllus yezoemma kawara</i>	昆虫類	VU	VU	243	
	エゾカタビロオサムシ	<i>Campalita chinense</i>	昆虫類	NT	NT	276	
	エリザハンミョウ	<i>Cylindera elisae</i>	昆虫類	NT	NT	275	
	エンマムシモドキ	<i>Syntelia histeroides</i>	昆虫類	NT	NT	281	
オ	オオイチモンジ	<i>Limenitis populi jezoensis</i>	昆虫類	VU	VU	259	

和名	学名	分類群	カテゴリー		ページ番号	
			2014	2024	2014	2024
オオウエキビ	<i>Trochochlamys fraterna</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	318	
オオウラギンヒョウモン	<i>Fabriciana nerippe</i>	昆虫類	EX	EX	230	
オオガロアムシ	<i>Galloisiana kiyosawai</i>	昆虫類	DD	DD	310	
オオキノコムシ	<i>Encaustes cruenta prae nobilis</i>	昆虫類	NT	NT	290	
オオクシヒゲコメツキ	<i>Tetrigus lewisi</i>	昆虫類	NT	NT	286	
オオクロツヤマグソコガネ	<i>Aphodius japonicus</i>	昆虫類	VU	VU	249	
オオクロバヤガ	<i>Euxoa adumbrata</i>	昆虫類		DD		129
オオクワガタ	<i>Dorcus hopei binodulosus</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	234	
オオコシボソハナアブ	<i>Doros profuges</i>	昆虫類	NT	NT	301	
オオコノハズク	<i>Otus lempiji</i>	鳥類	DD	DD	210	
オオゴマシジミ	<i>Phengaris arionides takamukui</i>	昆虫類	VU	CR+EN	259	
オオシンシュウナガゴミムシ	<i>Pterostichus cristatoides</i>	昆虫類	NT	NT	277	
オオセイボウ	<i>Stilbum cyanurum</i>	昆虫類	NT	NT	295	
オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	鳥類	NT	NT	207	
オオチャイロハナムグリ	<i>Osmoderma opicum</i>	昆虫類	VU	VU	250	
オオチャバネヨトウ	<i>Nonagria puengeleri</i>	昆虫類		DD		131
オオツチハンミョウ	<i>Meloe proscarabaeus sapporensis</i>	昆虫類	VU	VU	253	
オオナガレトビケラ	<i>Himalopsyche japonica</i>	昆虫類	NT	NT	302	
オオハサミシリアゲ	<i>Panorpa bicornuta</i>	昆虫類	NT	NT	298	
オオヒカゲ	<i>Ninguta schrenckii schrenckii</i>	昆虫類	VU	CR+EN	261	
オオヒメゲンゴロウ	<i>Rhantus erraticus</i>	昆虫類		NT		117
オオヒラタハナムグリ	<i>Neovalgus fumosus</i>	昆虫類	NT	NT	285	
オオフトヒゲクサカゲロウ	<i>Italochrysa nigrovenosa</i>	昆虫類	NT	NT	274	
オオホソクビゴミムシ	<i>Brachinus scotomedes</i>	昆虫類	NT	NT	278	
オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i>	昆虫類	NT	VU	280	
オオムラサキ	<i>Sasakia charonda charonda</i>	昆虫類		NT		123
オオルリシジミ	<i>Shijimiaeoides divinus barine</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	238	
オコジョ	<i>Mustela erminea</i>	哺乳類	NT	NT	196	
オサムシモドキ	<i>Craspedonotus tibialis</i>	昆虫類	NT	NT	277	
オゼイトトンボ	<i>Coenagrion terue</i>	昆虫類	VU	VU	242	
オトメクビアカハナカミキリ	<i>Gaurotus otome</i>	昆虫類	VU	VU	253	
オナガサナエ	<i>Melligomphus viridicostus</i>	昆虫類	DD	DD	309	
オニグルミクチナガオオア ブラムシ	<i>Stomaphis matsumotoi</i>	昆虫類	VU	VU	244	
オニヒラタシデムシ	<i>Thanatophilus rugosus</i>	昆虫類	NT	NT	283	
オニホソコバネカミキリ	<i>Necydalis gigantea gigantea</i>	昆虫類	NT	VU	293	
オビカゲロウ	<i>Bleptus fasciatus</i>	昆虫類	NT	NT	262	
カ カジカ	<i>Cottus pollux</i>	魚類	NT	NT	226	
カタマメマイマイ	<i>Lepidopisum conospira</i>	その他無脊椎動物		CR+EN		137
カトリヤンマ	<i>Gynacantha japonica</i>	昆虫類	VU	CR+EN	243	
カバイロヒラタシデムシ	<i>Oiceoptoma subrufum</i>	昆虫類		NT		118
カヤコオロギ	<i>Euscyrus japonicus</i>	昆虫類	DD	DD	310	

	和 名	学 名	分 類 群	カテゴリー		ページ番号	
				2014	2024	2014	2024
	カラスシジミ	<i>Fixsenia w-album fentoni</i>	昆虫類		NT		121
	カワナビロウドマイマイ	<i>Nipponochloritis kawanai</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	318	
	カワネズミ	<i>Chimarrogale platycephalus</i>	哺乳類	NT	NT	194	
	カワラゴミムシ	<i>Omophron aequalis aequalis</i>	昆虫類	NT	NT	275	
	カワラバッタ	<i>Eusphingonotus japonicus</i>	昆虫類	NT	NT	268	
	カワラハンミョウ	<i>Chaetodera laetescrpta</i>	昆虫類	EX	EX	230	
キ	キアシヒバリモドキ	<i>Trigonidium japonicum</i>	昆虫類		DD		124
	キイトトンボ	<i>Ceriagrion melanurum</i>	昆虫類	VU	VU	241	
	キオビクロスズメバチ	<i>Vespula vulgaris</i>	昆虫類	DD	DD	311	
	キオビツノカメムシ	<i>Cyphostethus japonicus</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	233	
	キオビホオナガスズメバチ	<i>Dolichovespula media sugare</i>	昆虫類	NT	NT	296	
	キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i>	哺乳類		NT		99
	キスジウスキヨトウ	<i>Capsula sparganii</i>	昆虫類		DD		131
	キスジラクダムシ	<i>Mongoloraphidia harmandi</i>	昆虫類	NT	NT	274	
	キタガミトビケラ	<i>Limnocentropus insolitus</i>	昆虫類	DD	DD	311	
	キトンボ	<i>Sympetrum croceolum</i>	昆虫類		DD		124
	キノコゴミムシ	<i>Lioptera erotyloides</i>	昆虫類		NT		117
	キベリマメゲンゴロウ	<i>Platambus fimbriatus</i>	昆虫類	NT	NT	279	
	キベリマルクビゴミムシ	<i>Nebria livida angulata</i>	昆虫類	VU	VU	245	
	キマダラセセリ	<i>Potanthus flavus flavus</i>	昆虫類	VU	NT	257	
	キマダラモドキ	<i>Kirinia fentoni</i>	昆虫類	VU	CR+EN	260	
	ギンイチモンジセセリ	<i>Leptalina unicolor</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	236	
	ギンボシシャチホコ	<i>Rosama cinnamomea</i>	昆虫類		DD		128
	ギンボシヒヨウモン	<i>Speyeria aglaja fortuna</i>	昆虫類		NT		122
	キンムネヒメカネコメツキ	<i>Limonijs ignicollis</i>	昆虫類	NT	NT	287	
ク	クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>	鳥類	DD	DD	209	
	クビボソコガシラミズムシ	<i>Haliphus japonicus</i>	昆虫類	NT	NT	278	
	クマコオロギ	<i>Mitius minor</i>	昆虫類	NT	NT	266	
	クマソオオヨトウ	<i>Kumasia kumaso</i>	昆虫類		DD		131
	クマタカ	<i>Nisaetus nipalensis</i>	鳥類	CR+EN	CR+EN	203	
	クモマツマキチョウ	<i>Anthocharis cardamines isshikii</i>	昆虫類	VU	VU	258	
	クモトラフバエ	<i>Xanthotryxus mongol</i>	昆虫類	NT	NT	302	
	クモマヒナバタ	<i>Chorthippus kiyosawai</i>	昆虫類	NT	NT	267	
	クモマベニヒカゲ	<i>Erebia ligea takanonis</i>	昆虫類	NT	NT	307	
	クリサキテントウ	<i>Harmonia yedoensis</i>	昆虫類		DD		125
	クルマバッタ	<i>Gastrimargus marmoratus</i>	昆虫類	NT	NT	268	
	クロイワマイマイ	<i>Euhadra senckenbergiana senckenbergiana</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	319	
	クロオオハナノミ	<i>Metoeus satanus</i>	昆虫類	VU	VU	252	
	クロカタビロオサムシ	<i>Calosoma maximowiczii</i>	昆虫類	NT	NT	276	
	クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i>	昆虫類	CR+EN	VU	234	
	クロサンショウウオ	<i>Hynobius nigrescens</i>	両生類	NT	NT	220	
	クロシジミ	<i>Niphanda fusca</i>	昆虫類	EX	EX	230	

	和 名	学 名	分 類 群	カテゴリー		ページ番号	
				2014	2024	2014	2024
	クロスジヘビトンボ	<i>Parachauliodes continentalis</i>	昆虫類	NT	NT	273	
	クロズジュウジアトキリゴミムシ	<i>Lebia cruxminor cruxminor</i>	昆虫類		DD		125
	クロスズメバチ	<i>Vespula flaviceps lewisii</i>	昆虫類	NT	NT	296	
	クロツバメシジミ	<i>Tongeia fischeri japonica</i>	昆虫類	NT	NT	306	
	クロテングスケバ	<i>Saigona ussuriensis</i>	昆虫類	NT	NT	269	
	クロヒカゲモドキ	<i>Lethe marginalis</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	239	
	クロホオヒゲコウモリ	<i>Myotis pruinus</i>	哺乳類		CR+EN		99
	クロマメゲンゴロウ	<i>Platambus stygius</i>	昆虫類	NT	NT	280	
	クロマルハナバチ	<i>Bombus ignitus</i>	昆虫類	NT	NT	297	
	クロミドリシジミ	<i>Favonius yuasai</i>	昆虫類	NT	NT	304	
	クロモンマグソコガネ	<i>Aphodius variabilis</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	235	
ケ	ケシガイ	<i>Carychium pessimum</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	316	
	ケシゲンゴロウ	<i>Hyphydrus japonicus</i>	昆虫類	NT	VU	279	
	ケブカマルクビカミキリ	<i>Atimia okayamensis</i>	昆虫類	NT	VU	292	
	ケリ	<i>Vanellus cinereus</i>	鳥類	DD	DD	209	
	ゲンゴロウ	<i>Cybister chinensis</i>	昆虫類	NT	VU	280	
	ゲンジボタル	<i>Nipponoluciola cruciata</i>	昆虫類	VU	VU	251	
コ	コアジサシ	<i>Sterna albifrons</i>	鳥類	CR+EN	CR+EN	202	
	コウフオカモノアラガイ	<i>Neosuccinea kofui</i>	その他無脊椎動物		CR+EN		137
	コガシラミズムシ	<i>Peltodytes intermedius</i>	昆虫類	NT	NT	279	
	コカブトムシ	<i>Eophileurus chinensis chinensis</i>	昆虫類		NT		118
	コキマダラセセリ	<i>Ochlodes venatus venatus</i>	昆虫類		VU		115
	コクシヒゲツヤムネハネカクシ	<i>Quedius setosus</i>	昆虫類	NT	NT	284	
	ココノホシテントウ	<i>Coccinella explanata</i>	昆虫類	NT	NT	291	
	コサギ	<i>Egretta garzetta</i>	鳥類		VU		103
	コシタカコベソマイマイ	<i>satuma fusca</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	318	
	コシダカヒメモノアラガイ	<i>Lymnaea truncatula</i>	その他無脊椎動物		DD		137
	コシロシタバ	<i>Catocala actaea</i>	昆虫類		DD		133
	コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	鳥類	NT	NT	206	
	コテングコウモリ	<i>Murina silvatica</i>	哺乳類	DD	DD	197	
	コトラカミキリ	<i>Plagionotus pulcher</i>	昆虫類	NT	NT	294	
	コノハズク	<i>Otus sunia</i>	鳥類	DD	CR+EN	210	
	コハンミョウ	<i>Myriochila speculifera</i>	昆虫類	NT	NT	276	
	コヒオドシ	<i>Aglais urticae esakii</i>	昆虫類	NT	VU	306	
	コヒョウモン	<i>Brenthis ino tigroides</i>	昆虫類		NT		122
	コヒョウモンモドキ	<i>Melitaea ambigua nippona</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	238	
	コブナシコブスジコガネ	<i>Trox nohirai</i>	昆虫類	VU	VU	248	
	ゴマベニシタヒトリ	<i>Rhyparia purpurata bocchi</i>	昆虫類	CR+EN	EX	240	
	ゴミアシナガサシガメ	<i>Myiophanes tipulina</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	232	
	コミズスマシ	<i>Gyrinus curtus</i>	昆虫類	NT	NT	281	
	コミミズク	<i>Asio flammeus</i>	鳥類	DD	DD	211	

	和 名	学 名	分 類 群	カテゴリー		ページ番号	
				2014	2024	2014	2024
サ	サケ	<i>Oncorhynchus keta</i>	魚類	EW	EW	223	
	ササゴイ	<i>Butorides striata</i>	鳥類	VU	CR+EN	204	
	サドクビボシジョウカイ	<i>Asiopodabrus bilineatus bilineatus</i>	昆虫類		NT		119
	サラサヤンマ	<i>Sarasaeschna pryeri</i>	昆虫類	NT	NT	264	
	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>	鳥類	NT	NT	208	
シ	シジミガムシ	<i>Laccobius bedeli</i>	昆虫類	VU	DD	247	
	シナノエゾハイイロハナカミキリ	<i>Rhagium heyrovskyi hayakawai</i>	昆虫類	VU	CR+EN	253	
	シマゲンゴロウ	<i>Hydaticus bowringii</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	234	
	シマシマクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus shimashimanus</i>	昆虫類		CR+EN		113
	ジャコウアゲハ	<i>Atrophaneura alcinous alcinous</i>	昆虫類	NT	NT	303	
	ジウサンホシテントウ	<i>Hippodamia tredecimpunctata</i>	昆虫類	NT	NT	290	
	ジウウロクホシテントウ	<i>Myzia oblongoguttata nipponica</i>	昆虫類	NT	NT	291	
	ショウブオオヨトウ	<i>Helotropha leucostigma</i>	昆虫類		DD		130
	シラホシハナムグリ	<i>Protaetia brevitarsis brevitarsis</i>	昆虫類	VU	VU	250	
	シララカハナカミキリ	<i>Judolia parallelpipeda</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	235	
	シロオビホオナガスズメバチ	<i>Dolichovespula pacifica</i>	昆虫類	NT	NT	296	
	シロヘリツチカメムシ	<i>Canthophorus niveimarginatus</i>	昆虫類	NT	NT	272	
	シロマダラ	<i>Lycodon orientalis</i>	爬虫類	DD	DD	215	
	シンシュウマルガタゴミムシ	<i>Amara shinanensis</i>	昆虫類	VU	VU	246	
	シントウトガリネズミ	<i>Sorex shinto sinto</i>	哺乳類	NT	NT	194	
ス	スカシシリアゲモドキ	<i>Panorpodes paradoxus</i>	昆虫類	NT	NT	299	
	スカシベッコウ	<i>Bekkochlamys serena</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	317	
	スゲドクガ	<i>Laelia coenosa sangaica</i>	昆虫類		DD		129
	スジグロオオハムシ	<i>Galeruca spectabilis spectabili</i>	昆虫類	VU	VU	254	
	スジグロチャバネセセリ	<i>Thymelicus leoninus leoninus</i>	昆虫類	NT	NT	303	
	スズムシ	<i>Meloimorpha japonica japonica</i>	昆虫類	NT	NT	266	
	スナヤツメ南方種	<i>Lethenteron</i> sp. S	魚類		NT	225	
	スナヤツメ北方種	<i>Lethenteron</i> sp. N	魚類		NT	225	
	スミイロハナカミキリ	<i>Nivellia extensa yuzawai</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	235	
	ズミチビタマムシ	<i>Trachys toringoi</i>	昆虫類		NT		119
セ	セアカオサムシ	<i>Carabus tuberculosus</i>	昆虫類	VU	VU	245	
	セグロイナゴ	<i>Shirakiacris shirakii</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	232	
	セッカ	<i>Cisticola juncidis</i>	鳥類	CR+EN	CR+EN	203	
タ	タイコウチ	<i>Laccotrephes japonensis</i>	昆虫類	NT	NT	271	
	ダイミョウアトキリゴミムシ	<i>Cymindis daimio</i>	昆虫類		NT		117
	ダイモンテントウ	<i>Coccinella hasegawai</i>	昆虫類	VU	VU	251	
	タカチホヘビ	<i>Achalinus spinalis</i>	爬虫類		DD		106
	タカネキアシナガレアシナガバエ	<i>Diostracus nakanishii</i>	昆虫類	DD	DD	311	
	タカネキマダラセセリ	<i>Carterocephalus palaemon satakei</i>	昆虫類	VU	VU	257	
	タカネヒカゲ	<i>Oeneis norna asamana</i>	昆虫類	NT	NT	307	
	タカネベッコウハナアブ	<i>Volucella bombylans</i>	昆虫類	NT	NT	301	

	和 名	学 名	分 類 群	カテゴリー		ページ番号	
				2014	2024	2014	2024
	タガメ	<i>Kirkaldyia deyrolli</i>	昆虫類	EX	EX	229	
	タケウチエダシャク	<i>Biston takeuchii</i>	昆虫類		DD		128
	タケウチトゲアワフキ	<i>Machaerota takeuchii</i>	昆虫類	NT	NT	269	
	タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i>	鳥類	DD	DD	210	
チ	チゴモズ	<i>Lanius tigrinus</i>	鳥類		DD		103
	チビアオゴミムシ	<i>Eochlaenius suvorovi</i>	昆虫類	VU	CR+EN	246	
	チャイロスズメバチ	<i>Vespa dybowskii</i>	昆虫類	NT	NT	297	
	チャイロヒメコブハナカミキリ	<i>Pseudosieversia japonica</i>	昆虫類	VU	VU	254	
	チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i>	鳥類	NT	NT	205	
	チョウセントガリバ	<i>Tethea ocularis tanakai</i>	昆虫類		DD		127
	チョウセンマルクビゴミムシ	<i>Nebria coreica</i>	昆虫類	VU	VU	245	
ツ	ツチイロビロウドムシ	<i>Dendroides lesnei</i>	昆虫類	NT	NT	292	
	ツチガエル類	<i>Glandirana spp.</i>	両生類	VU	VU	219	
	ツノグロモンシデムシ	<i>Nicrophorus vespilloides</i>	昆虫類	NT	NT	282	
	ツノヒゲハナアブ	<i>Callicera aurata</i>	昆虫類	NT	NT	301	
	ツマグロキチョウ	<i>Eurema laeta betheseba</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	237	
	ツマグロバタ	<i>Stethophyma magister</i>	昆虫類	VU	VU	244	
	ツマジロウラジャノメ	<i>Lasiommata deidamia interrupta</i>	昆虫類	VU	VU	260	
	ツヤキベリアオゴミムシ	<i>Chlaenius spoliatus motschulskyi</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	233	
テ	テングコウモリ	<i>Murina hilgendorfi</i>	哺乳類	DD	CR+EN	197	
ト	トウカイクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus tokaiensis</i>	昆虫類		VU		115
	トウカイコリクワガタ	<i>Platycerus takakuwai takakuwai</i>	昆虫類	NT	NT	284	
	トウキョウダルマガエル	<i>Pelophylax porosus porosus</i>	両生類	NT	VU	219	
	トガリヨトウ	<i>Virgo datanidia</i>	昆虫類		DD		132
	トゲアリ	<i>Polyrhachis lamellidens</i>	昆虫類	VU	VU	255	
	ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i>	魚類	DD	DD	226	
	トノサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i>	両生類	NT	NT	219	
	トビスジヤエナミシャク	<i>Philereme transversata japanaria</i>	昆虫類		NT		123
	トホシハナカミキリ	<i>Brachyta danilevskyi hanabusa</i>	昆虫類	NT	NT	292	
	トモンハナバチ	<i>Anthidium septemspinorum</i>	昆虫類	NT	NT	297	
	トラハナムグリ	<i>Trichius japonicus</i>	昆虫類	VU	VU	250	
	トラフカミキリ	<i>Xyloclytus chinensis kurosawai</i>	昆虫類	NT	VU	295	
	トラフズク	<i>Asio otus</i>	鳥類	DD	DD	211	
	トラフトンボ	<i>Epithea marginata</i>	昆虫類	CR+EN	DD	231	
ナ	ナガサキアオジョウカイモドキ	<i>Cordylepherus xantholoma</i>	昆虫類	NT	NT	289	
	ナカボシカメムシ	<i>Menida musiva</i>	昆虫類	NT	NT	272	
	ナガマルハナバチ	<i>Bombus consobrinus wittenburgi</i>	昆虫類	NT	NT	298	
	ナミエンマムシ	<i>Merohister jekeli</i>	昆虫類	NT	NT	282	
	ナミルリモンハナバチ	<i>Thyreus decorus</i>	昆虫類		DD		126
ニ	ニセシンシュウナガゴミムシ	<i>Pterostichus himifuriho</i>	昆虫類	NT	NT	277	
	ニセタバコガ	<i>Heliocheilus fervens</i>	昆虫類		VU		116

	和 名	学 名	分 類 群	カテゴリー		ページ番号	
				2014	2024	2014	2024
	ニッコウイワナ	<i>Salvelinus leucomaenis pluvius</i>	魚類	NT	NT	225	
	ニッポンクモガタガガンボ	<i>Chionea niponica</i>	昆虫類	NT	NT	300	
	ニッポンハナダカバチ	<i>Bembix niponica</i>	昆虫類		VU		115
	ニホンアミカモドキ	<i>Deuterophlebia nipponica</i>	昆虫類	NT	NT	300	
	ニホンウサギコウモリ	<i>Plecotus sacrimontis</i>	哺乳類	NT	NT	195	
	ニホンウナギ	<i>Anguilla japonica</i>	魚類	EW	EW	223	
	ニホンオオカミ	<i>Canis lupus hodophilax</i>	哺乳類	EX	EX	193	
	ニホンモモンガ	<i>Pteromys momonga</i>	哺乳類	NT	NT	195	
ネ	ネグロクサアブ	<i>Coenomyia basalis</i>	昆虫類	VU	VU	256	
ノ	ノギカワゲラ	<i>Cryptoperla japonica</i>	昆虫類	NT	NT	265	
	ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i>	鳥類	NT	NT	208	
ハ	ハイトカ	<i>Accipiter nisus</i>	鳥類	NT	VU	207	
	ハイマダラクチバ	<i>Autophila inconspicua inconspicua</i>	昆虫類	CR+EN	EX	241	
	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	鳥類	NT	NT	206	
	ハッチョウトンボ	<i>Nannophya pygmaea</i>	昆虫類	CR+EN	EX	232	
	ハネナガイナゴ	<i>Oxya japonica</i>	昆虫類	NT	VU	267	
	ハネビロエゾトンボ	<i>Somatochlora clavata</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	231	
	ハヤシオオカスミカメ	<i>Pantilius hayashii</i>	昆虫類		VU		114
	ハヤシミドリシジミ	<i>Favonius ultramarinus</i>	昆虫類		NT		121
	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	鳥類	VU	VU	205	
	ハリサシガメ	<i>Acanthaspis cincticrus</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	233	
ヒ	ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i>	鳥類	CR+EN	CR+EN	202	
	ヒゲナガヒナバッタ	<i>Schmidtiacris schmidtii</i>	昆虫類	EX	EX	229	
	ヒゲブトハナムグリ	<i>Amphicoma pectinata</i>	昆虫類	NT	NT	285	
	ヒゼンキビ	<i>Parakaliella hizenensis</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	317	
	ヒダゴマガイ	<i>Diplommata hidaenis</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	315	
	ヒダサンショウウオ	<i>Hynobius kimurae</i>	両生類	NT	NT	220	
	ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i>	哺乳類		DD		100
	ヒバカリ	<i>Hebius vibakari</i>	爬虫類	DD	DD	215	
	ヒメアカネ	<i>Sympetrum parvulum</i>	昆虫類		NT		116
	ヒメアミメカワゲラ	<i>Skwala compacta</i>	昆虫類	DD	DD	309	
	ヒメオオクワガタ	<i>Nipponodorcus montivagus montivagus</i>	昆虫類	NT	NT	284	
	ヒメカメムシ	<i>Rubiconia intermedia</i>	昆虫類	NT	NT	272	
	ヒメカンショコガネ	<i>Apogonia amida</i>	昆虫類	VU	VU	249	
	ヒメキシタヒトリ	<i>Parasemia plantaginis japonica</i>	昆虫類	NT	DD	308	
	ヒメギフチョウ	<i>Luehdorfia puziloi inexpecta</i>	昆虫類	NT	NT	303	
	ヒメシジミ	<i>Plebejus argus micrargus</i>	昆虫類		NT		122
	ヒメシロチョウ	<i>Leptidea amurensis vibilia</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	237	
	ヒメスズメ	<i>Deilephila askoldensis</i>	昆虫類	VU	VU	261	
	ヒメトガリヨトウ	<i>Gortyna basalipunctata</i>	昆虫類		DD		130
	ヒメハリマキビ	<i>Parakaliella pagoduloides</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	317	
	ヒメヒカゲ	<i>Coenonympha oedippus annulifer</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	239	

	和 名	学 名	分 類 群	カテゴリー		ページ番号	
				2014	2024	2014	2024
	ヒメヒラタシデムシ	<i>Thanatophilus sinuatus</i>	昆虫類	NT	NT	283	
	ヒメホオヒゲコウモリ	<i>Myotis ikonnikovi</i>	哺乳類	DD	NT	196	
	ヒメボタル	<i>Luciola parvula</i>	昆虫類	NT	NT	288	
	ヒメミズカマキリ	<i>Ranatra unicolor</i>	昆虫類	NT	VU	271	
	ヒメミズスマシ	<i>Gyrinus gestroi</i>	昆虫類	VU	VU	246	
	ヒョウモンチョウ	<i>Brenthis daphne rabdia</i>	昆虫類	VU	CR+EN	259	
	ヒョウモンモドキ	<i>Melitaea scotosia</i>	昆虫類	EX	EX	231	
	ヒラノコブガ	<i>Nola hiranoi</i>	昆虫類		VU		116
	ヒラマキガイモドキ	<i>Polypylis hemisphaerula</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	316	
	ヒラマキミズマイマイ	<i>Gyraulus chinensis</i>	その他無脊椎動物	DD	DD	319	
	ビロウドヒラタシデムシ	<i>Oiceoptoma thoracicum</i>	昆虫類	NT	NT	283	
	ヒロオビモンシデムシ	<i>Nicrophorus investigator</i>	昆虫類	NT	NT	282	
	ヒロバカレハ	<i>Gastropacha quercifolia cerridifolia</i>	昆虫類	CR+EN	EX	239	
フ	フタオセンブリ	<i>Sialis bifida</i>	昆虫類	DD	DD	310	
	フタオレウスグロエダシヤク	<i>Biston thoracaria</i>	昆虫類	DD	DD	312	
	フタキボシカネコメツキ	<i>Limoniscus kraatzi nihonicus</i>	昆虫類	NT	NT	287	
	フタスジギンエダシヤク	<i>Megaspilates mundataria</i>	昆虫類	VU	VU	261	
	フタスジチョウ	<i>Neptis rivularis insularum</i>	昆虫類	VU	CR+EN	260	
	フタホシヨトウ	<i>Hoplodrina euryptera</i>	昆虫類		DD		132
	フチグロシロヒメシヤク	<i>Scopula ornatasubornata</i>	昆虫類		DD		127
	フチグロトゲエダシヤク	<i>Nyssiodes lefuarius</i>	昆虫類	NT	NT	308	
	ブッポウソウ	<i>Eurystomus orientalis</i>	鳥類		CR+EN		103
	フトハサミツノカメムシ	<i>Acanthosoma crassicaudum</i>	昆虫類	NT	NT	273	
ヘ	ヘイケボタル	<i>Aquatica lateralis</i>	昆虫類	NT	NT	288	
	ベッコウヒラタシデムシ	<i>Necrophila brunnicollis</i>	昆虫類		NT		118
	ベニバハナカミキリ	<i>Paranaspia anaspidoidea</i>	昆虫類	NT	NT	293	
	ベニヒカゲ	<i>Erebia neriene nipponica</i>	昆虫類	NT	NT	307	
	ベニモンマダラ	<i>Zygaena nippona nippona</i>	昆虫類	NT	VU	302	
	ヘリグロチャバネセセリ	<i>Thymelicus sylvaticus sylvaticus</i>	昆虫類	VU	VU	258	
	ヘリグロヒメヨトウ	<i>Condica illustrata</i>	昆虫類	CR+EN	EX	241	
ホ	ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>	鳥類	NT	NT	208	
	ホシチャバネセセリ	<i>Aeromachus inachus inachus</i>	昆虫類	CR+EN	EX	236	
	ホシヒメセダカモクメ	<i>Cucullia fraudatrix</i>	昆虫類		NT		123
	ホソツヤゴモクムシ	<i>Trichotichnus furihatai</i>	昆虫類	NT	NT	278	
	ホソバセセリ	<i>Isoteinon lamprospilus lamprospilus</i>	昆虫類		DD		127
	ホトケドジョウ	<i>Lefua echigonia</i>	魚類	VU	VU	224	
	ホンシュウハイイロマルハナバチ	<i>Bombus deuteronymus maruhanabachi</i>	昆虫類	NT	NT	298	
	ホンドヒメシラオビカミキリ	<i>Pogonocherus fasciculatus hondoensis</i>	昆虫類		NT		120
マ	マイコアカネ	<i>Sympetrum kunkeli</i>	昆虫類		VU		114
	マサタカシリブトジョウカイ	<i>Yukikoa masatakai</i>	昆虫類	NT	NT	288	
	マダラバツタ	<i>Aiolopus thalassinus tamulus</i>	昆虫類		DD		125

	和 名	学 名	分 類 群	カテゴリー		ページ番号	
				2014	2024	2014	2024
	マダラムラサキヨトウ	<i>Eucarta amethystina</i>	昆虫類	CR+EN	EX	240	
	マダラヤンマ	<i>Aeshna soneharai</i>	昆虫類		VU		113
	マメハンミョウ	<i>Epicauta gorhami</i>	昆虫類	VU	VU	252	
	マルエンマコガネ	<i>Onthophagus viduus</i>	昆虫類	VU	VU	249	
	マルガタゲンゴロウ	<i>Graphoderus adamsii</i>	昆虫類		VU		114
	マルクビツチハンミョウ	<i>Eurymeloe corvinus</i>	昆虫類	VU	VU	252	
	マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i>	その他無脊椎動物	VU	VU	315	
	マルタンヤンマ	<i>Anaciaeschna martini</i>	昆虫類		VU		113
ミ	ミカドガガンボ	<i>Holorusia mikado</i>	昆虫類	NT	NT	299	
	ミカボコブガ	<i>Meganola mikabo</i>	昆虫類		DD		129
	ミズカメムシ	<i>Mesovelis vittigera</i>	昆虫類	NT	NT	270	
	ミスジキリガ	<i>Jodia sericea</i>	昆虫類		NT		124
	ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i>	昆虫類	VU	VU	247	
	ミズラモグラ	<i>Euroscaptor mizura</i>	哺乳類	VU	VU	193	
	ミセンヒメハナカミキリ	<i>Pidonia misenina</i>	昆虫類		DD		126
	ミゾゴイ	<i>Gorsachius goisagi</i>	鳥類	VU	VU	204	
	ミナミメダカ	<i>Oryzias latipes</i>	魚類	CR+EN	CR+EN	224	
	ミネットワダカワゲラ	<i>Scopura montana</i>	昆虫類	NT	NT	264	
	ミヤジマコガネコメツキ	<i>Selatosomus miyajimanus</i>	昆虫類		NT		119
	ミヤマカワトンボ	<i>Calopteryx cornelia</i>	昆虫類	NT	NT	262	
	ミヤマキシタバ	<i>Catocala ella ella</i>	昆虫類		DD		132
	ミヤマコマドアミカ	<i>Agathon montanus</i>	昆虫類	NT	NT	300	
	ミヤマシジミ	<i>Plebejus argyrognomon praeterinsularis</i>	昆虫類	NT	VU	305	
	ミヤマダイコクコガネ	<i>Copris pecuarius</i>	昆虫類	VU	VU	248	
	ミヤマチャバネセセリ	<i>Pelopidas jansonis</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	236	
	ミヤマノギカワゲラ	<i>Yoraperla uenoi</i>	昆虫類	NT	NT	265	
	ミヤマヒサゴコメツキ	<i>Hypolithus motschulskyi</i>	昆虫類	NT	NT	287	
	ミヤマモンキチョウ	<i>Colias palaeno sugitanii</i>	昆虫類	NT	NT	304	
	ミルンヤンマ	<i>Planaeschna milnei milnei</i>	昆虫類	NT	NT	264	
ム	ムカシトンボ	<i>Epiophlebia superstes</i>	昆虫類	NT	NT	263	
	ムカシヤンマ	<i>Tanypteryx pryeri</i>	昆虫類	VU	VU	242	
	ムツテンナミシヤク	<i>Catarhoe yokohamae</i>	昆虫類		DD		128
	ムネアカセンチコガネ	<i>Bolbocerosoma nigroplagiatum</i>	昆虫類	NT	NT	285	
	ムネクリイロボタル	<i>Cyphonocerus ruficollis</i>	昆虫類	NT	NT	289	
	ムモンアカシジミ	<i>Shirozua jonasi</i>	昆虫類	NT	NT	305	
	ムモンベニカミキリ	<i>Amarysius sanguinipennis adachii</i>	昆虫類	NT	CR+EN	295	
	ムラサキハガタヨトウ	<i>Blepharita amica ussuriensis</i>	昆虫類		DD		130
メ	メスアカフキバッタ	<i>Parapodisma tenryuensis</i>	昆虫類	NT	NT	266	
	メンガタスズメ	<i>Acherontia styx medusa</i>	昆虫類	DD	DD	312	
モ	モートンイトトンボ	<i>Mortonagrion selenion</i>	昆虫類	NT	NT	262	
	モクズガニ	<i>Eriocheir japonicus</i>	その他無脊椎動物	CR+EN	CR+EN	315	
	モノアラガイ	<i>Radix auricularia japonica</i>	その他無脊椎動物	NT	NT	316	

	和 名	学 名	分 類 群	カテゴリー		ページ番号	
				2014	2024	2014	2024
	モモジロコウモリ	<i>Myotis macrodactylus</i>	哺乳類	NT	NT	194	
	モリアオガエル	<i>Zhangixalus arboreus</i>	両生類		DD		108
	モリアブラコウモリ	<i>Pipistrellus endoi</i>	哺乳類		DD		100
	モンスズメバチ	<i>Vespa crabro</i>	昆虫類	VU	VU	256	
ヤ	ヤクハナノミ	<i>Yakuhananomia yakui</i>	昆虫類	VU	VU	251	
	ヤドリホオナガスズメバチ	<i>Dolichovespula adulterina montivaga</i>	昆虫類	VU	VU	255	
	ヤマキチョウ	<i>Gonepteryx rhamni maxima</i>	昆虫類	CR+EN	CR+EN	237	
	ヤマコウモリ	<i>Nyctalus aviator</i>	哺乳類	NT	CR+EN	195	
	ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	鳥類	DD	DD	209	
	ヤマセミ	<i>Megaceryle lugubris</i>	鳥類	VU	CR+EN	205	
	ヤマトアザミテントウ	<i>Henosepilachna niponica</i>	昆虫類	NT	NT	291	
	ヤマトアシナガバチ	<i>Polistes japonicus</i>	昆虫類	VU	VU	256	
	ヤマトクロスジヘビトンボ	<i>Parachauliodes japonicus</i>	昆虫類	NT	NT	273	
	ヤマトモンシデムシ	<i>Nicrophorus japonicus</i>	昆虫類	VU	VU	247	
	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i>	哺乳類	NT	NT	196	
	ヤマメ	<i>Oncorhynchus masou masou</i>	魚類	NT	NT	225	
ユ	ユビナガコウモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i>	哺乳類		NT		99
ヨ	ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis</i>	鳥類	CR+EN	CR+EN	201	
	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	鳥類	VU	VU	204	
	ヨツボシアカツツハムシ	<i>Coptocephala orientalis</i>	昆虫類		NT		120
	ヨツボシカミキリ	<i>Stenygrinum quadrinotatum</i>	昆虫類	VU	VU	254	
ラ	ライチョウ	<i>Lagopus muta</i>	鳥類	CR+EN	CR+EN	201	
	ラクダムシ	<i>Inocellia japonica</i>	昆虫類	NT	NT	274	
ル	ルリハダホソクロバ	<i>Rhagades pruni esmeralda</i>	昆虫類		DD		126
	ルリヒラタムシ	<i>Cucujus mnischechi</i>	昆虫類	NT	NT	289	

和名索引 (注意すべき種)

【植物】

	和 名	学 名	ページ番号	
			2014	2024
ア	アレチウリ	<i>Sicyos angulatus</i>	361	
イ	イタチハギ	<i>Amorpha fruticosa</i>		164
エ	エゾノギシギシ	<i>Rumex obtusifolius</i> var. <i>agrestis</i>	359	
オ	オオカワヂシャ	<i>Veronica anagallis-aquatica</i>	361	
	オオキンケイギク	<i>Coreopsis lanceolata</i>	362	
	オオハンゴンソウ	<i>Rudbeckia laciniata</i>		165
	オオブタクサ	<i>Ambrosia trifida</i>	362	
	オニウシノケグサ	<i>Schedonorus phoenix</i>		165
カ	外来アゾラ類	<i>Azolla</i> spp.		164
	外来性タンポポ種群	<i>Taraxacum officinale</i> / <i>T. spp.</i>	363	
	カモガヤ	<i>Dactylis glomerata</i>	363	
コ	コカナダモ	<i>Elodea nuttallii</i>		166
シ	シナダレスズメガヤ	<i>Eragrostis curvula</i>		165
	シラホシムグラ	<i>Galium aparine</i>		166
セ	セイタカアワダチソウ	<i>Solidago altissima</i>	363	
ナ	ナヨクサフジ	<i>Vicia villosa</i>		164
ニ	ニワウルシ	<i>Ailanthus altissima</i>	360	
ハ	ハイウチワ	<i>Opuntia</i> spp.		166
	ハリエンジュ	<i>Robinia pseudoacacia</i>	360	
ヒ	ビロードモウズイカ	<i>Verbascum thapsus</i>	361	
ホ	ホソアオゲイトウ	<i>Amaranthus hybridus</i>	360	
ヨ	ヨウシュヤマゴボウ	<i>Phytolacca americana</i>	359	

【動物】

	和名	学名	分類群	ページ番号	
				2014	2024
ア	アオマツムシ	<i>Truljalia hibernonis</i>	昆虫類		169
	アカボシゴマダラ	<i>Hestina assimilis assimilis</i>	昆虫類		171
	アカミミガメ	<i>Trachemys scripta</i>	爬虫類		169
	アメリカザリガニ	<i>Procambarus clarkii</i>	その他無脊椎動物	374	
	アメリカツノウズムシ	<i>Girardia dorotocephala</i>	その他無脊椎動物		172
	アメリカナミウズムシ	<i>Girardia tigrina</i>	その他無脊椎動物		172
	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	哺乳類	366	
イ	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>	哺乳類	366	
ウ	ウシガエル	<i>Lithobates catesbeianus</i>	両生類	368	
	ウチダザリガニ	<i>Pacifastacus trowbridgii</i>	その他無脊椎動物	374	
オ	オオクチバス	<i>Micropterus salmoides</i>	魚類	370	
	オオクワガタ	<i>Dorcus hopei</i> (except for ssp. <i>binodulosus</i>)	昆虫類	371	
カ	カシノナガキクイムシ	<i>Platypus quercivorus</i>	昆虫類	373	
	ガビチョウ	<i>Garrulax canorus</i>	鳥類	367	
	カラドジョウ	<i>Misgurnus dabryanus</i>	魚類		169
	カワマス	<i>Salvelinus fontinalis</i>	魚類	369	
ク	クビアカツヤカミキリ	<i>Aromia bungii</i>	昆虫類		170
コ	コクチバス	<i>Micropterus dolomieu dolomieu</i>	魚類	370	
	コモチカワツボ	<i>Potamopyrgus antipodarum</i>	その他無脊椎動物	373	
	コリンウズラ	<i>Colinus virginianus</i>	鳥類	367	
シ	シナヌマエビ	<i>Neocaridina davidi</i>	その他無脊椎動物		172
ス	スギカミキリ	<i>Semanotus japonicus</i>	昆虫類	372	
セ	セアカゴケグモ	<i>Latrodectus hasseltii</i>	その他無脊椎動物		171
ソ	ソウシチョウ	<i>Leiothrix lutea</i>	鳥類	368	
タ	タイワンタケクマバチ	<i>Xylocopa tranquebarorum</i>	昆虫類		171
ツ	ツヤハダゴマダラカミキリ	<i>Anoplophora glabripennis</i>	昆虫類		170
ナ	ナナフシモドキ	<i>Ramulus mikado</i>	昆虫類		170
ニ	ニジマス	<i>Oncorhynchus mykiss</i>	魚類	369	
	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>	哺乳類	367	
ハ	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>	哺乳類	366	
ヒ	ビャクシンカミキリ	<i>Semanotus bifasciatus</i>	昆虫類	372	
	ヒラタクワガタ	<i>Dorcus titanus</i> (except for ssp. <i>pilifer</i>)	昆虫類	371	
フ	ブラウントラウト	<i>Salmo trutta</i>	魚類	368	
	ブルーギル	<i>Lepomis macrochirus macrochirus</i>	魚類	369	
	フロリダマミズヨコエビ	<i>Crangonyx floridanus</i>	その他無脊椎動物	373	
マ	マツノマダラカミキリ	<i>Monochamus alternatus</i>	昆虫類	372	
ヤ	ヤノナミガタチビタマムシ	<i>Trachys yanoi</i>	昆虫類	371	
ヨ	ヨコヅナサシガメ	<i>Agriosphodrus dohrni</i>	昆虫類	370	

■裏表紙のイラスト



春の芽吹きころ、
明るい日差しが届く森のなかに
ひっそりと咲くカタクリ
そこに集まるヒメギフチョウ

そんな、豊かな安曇野の里山の自然と
触れあう子供たちの様子を描きました。

イラスト 高橋瑞穂

安曇野市版レッドデータブック改訂版2024

2024年（令和6年）3月29日発行

発行：安曇野市

編集：安曇野市 市民生活部 環境課
〒399-8281 長野県安曇野市豊科 6000 番地
電話 0263-71-2000（代表）
【業務委託】
（株）環境アセスメントセンター北信越支社

監修：安曇野市生物多様性アドバイザー



未来へつなぐ自然豊かな安曇野

We will continue to preserve the rich and varied natural environment of Azumino in the future.